

The music of mind for
twintail .

紅鮭

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

チエックメイトファイブ『クイーン』の称号を持つファンガイア

——テナー・オランジュス

彼女はとある指令のため異邦の世界から人間界へとやってきた。その世界を調査している最中にエレミアンと名乗る怪人と交戦し、その際人間の少年・紅くれない響きょうすけ輔を巻き込み、殺害してしまう。人間には持ち得ない魔法の技術を使い、響輔の体は修復されることとなるが修復には時間が必要であり、その間の措置として響輔の意識はテナーの体に移されテナーと響輔は1つの体に2人の意識が存在する「二心同体」となる。

しかしその翌日、アルティメギルを名乗る異世界の怪人が人間界のツインテール属性

を奪おうと侵略作戦を開始する。テナーはファンガイア一族に伝わる秘宝「キバの鎧」を着用し、『テイルファンング』としてツインテイルズと共にアルティメギルに戦いを挑むのであった。

目次

1章／運命のツイントール

プロローグ／テナー・オランジュス

1

プロローグ／紅 響輔 ————— 7

イントロダクション／入学 ————— 23

襲来・エレメリアン／お前は誰だ？

33

TAIL UP!!／運命のツイントールを今結べ

————— 46

オーデイエンス／異邦の世界からの邂逅

————— 66

プレビュー／喝采・ツイントール

98

チューニング／同調のための特訓

117

組曲／意地ある信念 ————— 138

ワイルドブルー／ティルファングVS

ティルブルー（前編） ————— 161

ワイルドブルー／ティルブルーVSテ

イルファング（後編） ————— 180

カコフォニー／ティルファングの支え

————— 196

調律／首無し造型師 ————— 218

オブリガード／テナーの真相 ————— 239

アンサンブル／ブレード・オブ・ウルフ

	登場人物・裏設定・用語解説（1巻までのネタバレあり）	253		
	2章／			
	デイスカッション／動き出す戦いの水面下	292		
315	タチエット・デイズ／うなじと蟹			
	痴女とメイド／ポリフォニー	347		
	ゲネラルパウゼ／一縷の希望	385		
	ゴールデンウィーク／閑話休日			
406	クレッシエンド／禁じられた称賛			
			サブトラック／秘密暴露	426
			ストレッタ／来訪者	465
				454

1章／運命のツインテール

プロローグ／テナー・オレンジユス

【輝見市繁華街】

丈の長い漆黒のロングコート、フード付きのケープを目深く被り、インナーは血のよ
うに赤いタンクトップ、黒のシヨートパンツ、レザー製のフィンガーレスグローブ、編
み上げブーツのヒールをカッカツと鳴らし、長身の女性は人混みの中を闊歩する。

目深くかぶったフード、そこにある二つの穴から出た二束の深紅色の髪の毛が風にな
びく。

肩が触れ合う程に混雑した街。

それでも群衆は誰一人として足を止めようとはしない。

こんなに近くにいなながらも、誰も行き交う他人の顔など見ていない。

きつと障害物と同じなのだ。

道行く人はその女性に気付いていないみたいはその横を通り過ぎていく。

いや、気付いてはいるのだが気にも止めていないのだろう。

普通あんな、異様に真つ黒な衣装を身に纏ってれば振り返る者もいるはずなのに。それは溶け込むと言うよりも、むしろ一人だけ存在する世界がずれているようにもあ

る。そんな中その彼女に声がかけられる。

『おーい、妙なのが……あ、もう気付いてるか』

「……そろそろ、聞き出すか」

周囲に気配すらないというのに、彼女は淡々と何者かと言葉を交わしていた。

その『声の主』は彼女が尾行されていることに気付いたのだろう。

しかし教える必要はなかった。

すでに彼女はその尾行者にいち早く気付き、地下鉄の駅へと入っていく。

その尾行者の男も慌てて地下鉄へと入っていく。

ワザと追いつくスピードで地下鉄の人気のない場所に誘い込む。

ターゲットを見失い辺りを見回していると壁の死角に隠れていた彼女が尾行者である男の袖を引っ張り、胸ぐらを締め上げる。

「女の後を付けるのはスリか痴漢か……とりあえず、貴様は何者だ？」

見た目が華奢な女の力とは思えない万力のような握力、大の男を軽々と持ち上げるその腕力。

尾行していた男は僅かに恐怖を掻き立てられながらも弁明する。

「あ、怪しい者じゃない……」

「十分に怪しいぞ。公僕の厄介になるか？」

眉間にしわを寄せ、締め上げる力に一層力が入る。

すると男は懐から一枚の名刺を取り出す。

「き、君。タレントに興味ない？ 凄く魅力的だよ」

そこに書いてあったのは、

「…芸能プロダクション？」

怪訝そうな顔をして、名刺を読む。

『テナー、どうやら勘違いだったみてえだな』

「そのようだな」

どうやらこの男はただのスカウトマンみたいで、取り越し苦労に終わったようだ。

「生憎私は忙しい身だ。暇な人間を当たるが良い」

男を開放すると彼女——テナーは歯牙にもかけずスタスタと行ってしまった。

「お、おーい！ 待ってよ、君！ スターになりたくないのかーっ?! モデルやアイドルも夢じゃないよーっ!!」

後ろからスカウトマンの声が掛かってくるが、一向に構わず地下鉄からでる。



「時間を無駄にしたな」

『ハハツ。まあ、テナーはスゲー美人だからなあ。気持ちも分からなく無い』

「それにしてもこのケープは私の事を目立たせなくする魔道具なのだが、何故あの男に効かなかったのだ？」

テナーの羽織っているケープは人間の目に留まりにくくする効力を持つ。

そう人間の目には――

だから先ほどの男を怪しいと睨んだのだ。

『さっきの喫茶店でケープを外した事が原因だな』

「……あの店で目をつけられたのか。いかんともしがたい道具だ」

あのケープを装着したままでは店員からも目を外され、注文もロクに取れないからしかたなかったのだ。

「そんな事より、どうだ？」

『ん、近い事は近い事は確かなんだけどな。何て言うんだろうか…』

「どうした？お前らしくない。もっと明確に答えろ」

答えを洩らせるその声にテナーは苛立つ。

『まるで見えない力に妨害されてるみたいだな、フィルターをかけられている様な——』
「妨害？ ジャミングの様なものか？」

『いや、ジャミング…なのか？——けどよ。オレ様の感知精度はお前様のお墨付きのハズだ。それを妨害できるとなると——』

「——只者ではないということか」

テナーと声の主に緊張が走る。

「まあいい。ここいらに人間とは違う者が紛れているのは確かだ。そいつを見つけて確保する」

そう言うとテナーは再び歩みを始める。



とつぷりと日が暮れて深夜、テナーはまだ街を彷徨っていた。
目的も行く当てもなく、ただ歩き続ける。

徐々に郊外に向かっているのか、人影はまばら、街灯の光を浴び、住宅街を闊歩する。人混みも辟易して向こうに雑木林が見えてきた。

『テナー、あっちの方から何かいやーな気配がするぜ』

「そうか——ん？」

しばらく歩いていると、遠くに10代中頃のメガネを掛けた男が雑木林へと入って行くのが見えた。

「今の男……」

『こんな夜更けに人気のない雑木林に……怪しいな』

一人歩くテナーはその少年に狙いをつける。

「確かめてみるか」

言い終わるより早く、テナーのコートがはためき、夜の雑木林に吸い込まれるように溶けていく。

プロローグ／紅 響輔

僕の名前は紅 響輔。

この春から陽月学園入学予定の15歳。

メガネがなければとても生活できないほど視力は悪い。

それだけを除けばどこにでもいる普通の男子。

——と、言いたいところだったが、どうやら僕は普通ではないらしい。

物ごころついた頃から『人の心が音楽となつて聴こえ、五線譜と音符が人の周囲を取り巻くのを視認できる』変わった体質なのである。

音楽と言っても人の本心が読める妖怪の様な能力ではない。

その人の内心に抱く感情——愉快、憤怒、悲壮、恐怖、憎悪、信賴、感謝、恋慕、軽蔑、嫌悪、悔恨、尊敬、敬愛、期待、心配など感情の種類、起伏の大きさによつて音楽の音量、音程、音階、音高が大きく異なるを感じる程度。

何故僕にはこんな力があるのか、それは僕にも分からない。

その力は空気を読むことに関しては便利かもしれないけど、正直あまり役に立ってない。

他人にこんな力があるなんて自慢出来る訳がない。馬鹿にされるか、「正気か?」と心配されるか、軽く受け流されるのどれかである。

もちろん、たった一人の家族である母さんにもこの事は秘密である。

中学卒業後、母さんの仕事の都合でこの街「輝見市」に引っ越してきた。明日から陽月学園へ入学する事になっている。花の高校デビュー。新しく購入した学園の制服、筆記用具、教科書、ワクワク気分が止まらない。

——と普通はなるのだが、残念ながら僕にはそうは思えない。

この能力ちからのお陰で僕は人付き合いがすごく苦手だ。

人の心が奏でる音楽は心地よい時もあれば、内心ひどく不愉快な音楽を奏でている時もあり、その人の音楽に嫌悪感を抱いてしまったり、心を覗いてしまったことに罪悪感を覚えてしまったり、その為本音で話せる友達もいなかった。

「よし、明日の準備完了。……って言っても、始業式とHRで終わるんだけどね」
でも高校生活、対人関係が全てじゃない。

何か楽しい事がある。

さて、明日は早いのでからさっさと寝てしまおう。

そう自分に言い聞かせ、すでに風呂に入って寝間着姿になっている僕はメガネを外して布団にもぐりこんだ。

その時である。

~~~~~  
~~~~~♪!!  
~~~~~♪♪♪!!  
~~~~~♪!!

「ツ!!何だ?」

聴いたことのないような重低音が頭の中に入ってきた。

聴いているだけで頭の中身が掻き回されてるみたいになどく不愉快な音楽だ。

この家には一階で眠っているはずの僕の母さんがいるだけ。

だけど、これは母さんの音楽じゃない。

この家にはいない誰か。

泥棒でも入ったかと思っただがそれはない。誰かがこの家に近づけばだんだんと音は

大きくなり、必ず僕が察知する。

だが、これはまるで再生ボタンを押したみたいになど突如として頭の中に響いてきたから

だ。

それにここまで不快な音楽、聴いたことがない。

僕は気になり、着替えてこっそりと家を抜け出した。

この音楽の正体を確かめるために。



本能というのか？

そこにたどり着いたのは殆ど思考などない。

自分の能力を頼りに進んで行き、ある雑木林にたどり着いた。

雑木林の中から五線譜に乗った音符が視認できた。

間違いなくこの雑木林のどこかにこの不快な音楽を奏でる音源がある。

響輔は意を決して雑木林の中へ入っていく。

しばらく進んでいくもこれといって不審な人影はいない。

だが、音楽は確かにこの辺から聞こえる。

ほんの興味本位で入ってしまったが故に、睡眠時間を割いてしまった事に少しばかり後悔を感じて引き返そうとしたその時――

「おこ」

「うぉあ!?!」

声が後ろから声がかかる。

突然のことで驚き、響輔は即座に振り向く。

変な声も出してしまった。

そこにいたのは黒いコートにフード付きのケープを目深くかぶった長身の人物。

背は高いが、細身の体格と声からして恐らく女性だと思う。その女性の顔はフードに覆われて表情を窺うことは出来なかつたが、纏う鋭い雰囲気も響輔の目を引きつけた。フードに隠された視線は正面ではなく、もつと先にある何かを見据えている。

そんな風にも感じられた。

そして、その女性の心から奏でる音楽は不安と高揚を同時に掻きたてられるような音色だった。

意志の強さを感じさせる、異様に研ぎ澄まされた突き刺さるような音楽。

その音色に響輔は思わず心奪われていた。

「な、何でしょうか?」

響輔は萎縮しながら尋ねるもそれを掻き消すように女性が口を開く。

「貴様は何者だ?」

「へ?あのお…」

自分の正体を尋ねてきた相手に『それはこっちのセリフだよ。』と響輔は内心ツッコむ。

「こんな夜分遅く、この雑木林に何の用だ？」

「えつと……その……音楽が聞こえまして……」

「音楽？」

しばらく、女性は響輔の事をまじまじと品定めするみたいに見ていたが、興味を失ったかのように視線を逸らす。

「フンツ……どうやら、また見当違いのようだな」

「なっ!?!」

勝手に呼び止められたのに、その冷めた態度に腹が立ち声を掛けようとしたその時、

く　♪♪♪

「っ!?!」

再び音楽が聞こえた。

その先からは霞かすみがかかった五線譜がなびいている。

響輔はその五線譜の先を目で追っていく。

一方、響輔を見ていた女性も響輔が何かを察知したのに気が付いたのか再び響輔に声をかける。

「おい、どうし——…」

「危ない!!」

「ツ!!?」

響輔は女性を庇うみたいに押し倒す。

突然の事態で何が何だか理解出来なかつた女性は響輔に押し倒され、地面を転がる。

それと同時に響輔が立っていたすぐ後ろの樹木に鞭が当たつたとような空裂音が響いたかと思えば、その樹木がなぎ倒された。

「なっ…」

「アレレエ……?あれえ?外しちまつたかあ?」

聞いているだけで嫌悪感を抱く、その声は響輔達を挟んで倒れた木の反対側の方から聞こえてきた。

「何者だ!!」

「ツヒツヒツヒツヒ。中々上物のツインテールじゃねえかあーあ。冷や汗すらかいてねえのが不満だけどなあ。手土産にはちようどいいかなあ?」

「な、何だよ。あいつ…」

それは——怪人だった。

それしか形容しようのない。

茶色に相撲取りみたくでつぷりとしたふくよかな体。

大きな頭には財布のように真横まで裂けた大きな口と鋭く凶暴な赤い双眸。

聞いているだけで不快になりそうなガラガラ声。

特撮などの敵役に出てくる様なヒキガエルの怪人だった。

舌なめずりをしてこちらに狙いを定めていた事は明白だった。



その時女性——テナーは怪人の正体も気になったが、目の前の少年にある疑問を抱いて、思考を巡らせていた。

——いくら目の前の小僧に気を取られてたといえ、この私がこれ程の距離まで敵が背後に潜んでいる事に気付けなかつただと!?

「——馬鹿か、私は……」

自分のあり得ない失態に腹が立ち、眩く。

だが、それ以上に疑問に思う事がある。

いくら私といえど常に周囲への警戒は怠らないはずだ。

なのにこの男、私よりも一瞬早く、あの怪人に気付いた。

ただのアントローポスなはずなのに、この小僧——何者だ？

いや、そんな事より今は目の前の怪人だ。

「小僧、逃げろ…」

テナーは立ち上がるや否や、傲慢ながらも響輔を逃がそうと下がらせる。

「え、いやでも…」

「いいから逃げろ!!」

「ハッ、ハイッ!!」

正体不明の怪人相手にたった一人で立ち向かおうとしているテナーを響輔は放っておくことができなかつた。

しかしテナーは有無を言わさない大きな声で怒鳴りつけ、響輔は思わず竦んで後ろの木の影へと隠れる。

それを横目で見届けた後、ヒキガエルの怪人へ向き直る。

「私の知る限り、貴様の様な珍妙な生物を見るのは初めてだ。とりあえず訊いておく—

— 貴様は何だ？ 真つ当な生物ではない事は承知済みだが、意思疎通できるならば答えろ」

「俺様が誰かだつて!?! 俺様はアルティメギルの偵察員トードギルデイ様だ」

テナーの問いに偵察員とは思えないくらいに堂々と構え答える。

「アルティメギル？ 何処ぞの誰かは知らぬが、わざわざ律儀に姿を現わすとは—— 偵察員に似合わぬ大した覚悟だ。ならば、こちらは相応な力で応えてやろう」

「到着早々ついてるぜ！ 偵察みたいな雑用あんま乗り気じゃなかつたけどよ。こりゃあ、かなりの上玉だ!! まずはお前のツイントールこちらに寄越してもらおうかなあ？」

ヒキガエルの怪人—— トードギルデイはのったりとした動きから一転、口と思わしき部分から長い舌を一瞬の内に伸ばして、テナーを捕らえようとしてきた。

しかしテナーはそれを紙一重で交わし、トードギルデイ目掛けて跳んだ。

「どうやらただの蝦蟇畜生か。まともな会話は無駄なようだ—— フツ!!」

「ウゲツ!!」

一瞬の内に距離を縮め、トードギルデイの頸椎へローリングソバットを叩き込む。

その巨体が宙を舞い、地面へと叩きつけられた。

「この野郎！ 痛ええじゃねえか!!」

トードギルデイは逆上して拳を振るうも、テナーはそれを屈んでやり過ぎし、背後に

回り込んで振り向きざまにハイキックを食らわせる。

そして間髪いれずに腹に猛烈なフック、ストリート、エルボーなど流れる様に拳を叩き込み、トードギルデイを圧倒する。

「鎧を着るまでもないな」

「グヘエ……アギツ!!オゴオ!!」

トードギルデイは殴られた箇所を押さえて距離を取る。

「(な、なんだあ!?!この人間。いやそもそも人間なのか、こいつ!?!俺らエレメリアン相手に素手で戦うなんてよお……これじゃまるで——)」

初めはただの人間の女だと思い油断したが、この戦闘能力から考えを改める必要があると判断したトードギルデイは身構え、戦闘態勢に入る。

グパアと、トードギルデイはまた口を開き、舌を弾丸の如く射出した。

「む!?!」

先程の捕えようとする様な動きでは無く、銃弾みたいに確実に仕留める為の攻撃。

まさに『舌弾』ぜっだん

しかし正面からの攻撃もあってテナーは咄嗟に躲した。

「グッ!!」

しかし、右上腕部をわずかに掠つてしまったらしく、苦悶の声を漏らす。だが、テナー

は痛みを覚える右腕の傷を一瞥した後、トードギルデイに再び視線を向けると視界がぼやけた。

「ぐっ…これは!？」

『テナー、どうした?』

まるで高熱に冒されたみたい気分が悪い。

トードギルデイはお返しとばかりにテナーに反撃を開始した。

テナーは腕で顔を覆いガードする

「ハツハハハハ、動けねえだろ?」

『おい!テナー!!?』

空烈音を響かせ、テナーをいたぶっていく。

だが、テナーも何時までも防戦一方でいる訳ではない。

「こうなったらキバット!鎧だ」

『よっしやあ!キバって——』

意を決したテナーはもう一人の声の主・キバットに呼びかける。

声の主はテナーの元へ舞い降りようとした。

しかし——

『ぐあっ!?!』

しかし不運にもトードギルデイの舌が当たってしまった。

「アレレ?なんか当たったかあ?」

トードギルデイもそれが見えていなかったのか、意外といった反応をした。

「キバット!?!」

「キエエエ!!」

テナーがキバットの身を案じる。それでも尚、トードギルデイはテナー目掛けて舌弾ぜっだんを放つ。

「くっ!!（——油断し過ぎたか…）」

舌弾に打ちのめされながら、何とか今の状況を打開しようと思いを巡らせる。

しかし次の瞬間、目の前に第三者が割り込んできた。

「なっ!?!」

それは先程逃した少年——響輔だった。

響輔は両手を広げてテナーをつき飛ばし、我が身を盾として彼女を守った。

そして、その舌弾は無情にも響輔の腹部を貫通した。

「ぐふっ!?!」

「——小僧っ!!」

「なっ…何だテメエ!!」

テナーは今一瞬何が起きたか理解できなかつたが、自分を庇い、腹部を貫かれた響輔を再度認識すると声を張り上げた。

致命傷を負いながら響輔は最後の力を振り絞つて、トードギルデイの舌を掴む。

トードギルデイの動きが一瞬止まつた事を確認するとテナーは渾身の攻撃に移る。

バチバチツツと雷のような黒いエネルギーの奔流がテナーの手の平に収束されたかと思ふと、泥のような黒い流動系の物体となり、クレイアニメみたいに形作られる。

「影創造——黒刃刀」

湾曲した脇差程の長さの漆黒の刀身、柄は無く、刀身に空いた楕円形の穴の縁が持ち

手となつた三日月型短剣——黒刃刀を形成。

トードギルデイ目掛けて投擲した。

それは一直線に飛び、標的へ突き刺さる。

「グギヤアアアッ!!」

左目を貫かれてたトードギルデイはその場で悶絶した。トードギルデイは黒刃刀を引き抜くと負傷した左目を押さえながらも空間を切り裂き、虹色に輝く鏡面みたいなゲートを開いた。

「き、今日はこの辺にしといてやる！顔覚えたからなあ teme!!」

と、チンピラのような捨て台詞を吐き、虹色に輝くその中へと飛び込んで行った。

「明日、俺らの作戦が開始するぜえ！その時には目にもものを見せてやる!!」

空間が閉じるまでトードギルデイの遠吠えが雑木林の中へと木霊した。

「退却したか」

『みたいだな』

「あの小僧は？」

あのトードギルデイの事も気になるが先程自分を庇った響輔を見る。

腹は滅茶苦茶にかつ捌さばかれ既に事切れていた。

「死んだか。可哀想にな」

心配する訳でもなくただの状況確認として呟く。

滴る血液を味見するみたいにそつと指で取り舐める。

「ツツ!!??」

しかしその血を舐めた瞬間、テナーの目が驚愕に見開かれた。

「そんな!!まさか……」

『どうした？テナー』

普段のテナーには考えられないその動揺ぶりに声のその声も戸惑いを隠せない。

「この男を助ける」

『ハア!? 正気か! オレらは任務の最中だぞ。何だつてんだ!?』

急に顔色を変えたテナーに声を掛けたソレはテナーの急な対処に驚いたが、テナーは構わず命令を下す。

「ひとまず、この男を連れてキャツスルドランへ帰城する。マルシルとヴェディを呼べ

!!」

『……へいへい、わかりましたよ』

声の主は渋々その命令に従った。

イントロダクション／入学

目を覚ますとそこは見知った部屋の天井——つまり響輔の自室だった。

響輔は起床し、布団から上半身を起こした。

「痛っ！イタタタツ!!」

寝違えたのか？筋肉痛か？響輔は骨や筋肉が軋むような痛覚を覚える。

寝ぼけ眼を擦り起き上がると、眼鏡を掛けてリビングへ向かおうとした。

「!？」

しかし、その視界に映る景色は何時もと違うものだった。眼鏡を取ったり外したりして再度確かめるが、眼鏡を掛けている時より掛けていない時の方が視界がハッキリとみえる。

「目が良くなってる?」

そう、視力が回復していたのだ。

2階の自室からリビングへ下りると母が朝ご飯を用意していた。

「あら響輔、おはよう」

響輔の母・紅くれなゐ・真夜まや。

響輔も認める程の美人妻であり、温厚で奔放、ほわわくんとした軟らかい印象で、つかみ所のない飄々とした態度が特徴な女性である。

ただ、真夜は昔事故で右眼を失明して眼帯を付けている。

「母さん、おはよう。今日は調子いいの？」

「ええ」

響輔は用意された朝食を食べるため席に着く。

「いただきます」

朝食はトースト2枚、ウインナー3本、卵2個分の目玉焼き、特製のスムージー1杯。それをペロリと平らげる。

「？」

「どうしたの？」

「母さん、朝食ってこれだけ？」

「何言っているの、響輔。いつもトースト1枚か2枚ですましているでしょ？」
「食い足りない。」

確かにいつもこのくらいの量だ。

でも、もつと食べたいと腹の虫は鳴っている。

「早く学校行きなさい。高校の入学式でしょう？」

考えても仕方がなかったもので、すぐ顔を洗って、着替えて、持ち物を確認すると家
後にした。



私立陽月学園。

新しく入る新入生がこれから始まる新しい学校生活に期待と不安で胸を膨らませ、入
学式の新入生である響輔は後方の席へ座っていた。

「いい音楽ばかりだなあ。まるでオーケストラみたいだ」

響輔は周りの生徒たちが奏でる心の音楽を聴き入っていた。

心が奏でる音楽は必ずしも嫌というわけではない。

「笑い」や「楽しみ」、人としてプラスに働く音楽はポップで明るく、自分も楽しくなっ
てくるからだ。

程なくして入学式が始まり、響輔は姿勢を直す。

幾人のメイドを侍らしたこの陽月学園の生徒会長が舞台の上に来た。

「皆さん、おはようございます。私立陽月学園、生徒会長を務めさせて頂きます。しんどう 神堂えりな 慧理那です」

小学生と見紛う程の幼い容姿に金髪のツインテールという子供のようないけなさがある出で立ちからは連想できない程、礼儀正しく、力強く、そして安心さえ覚える演説が始まった。

しかし、

「何だ？この音楽は？」

まるで音楽のサビに突入したかのような強い、凄みのある音楽が聞こえてきた。

目の前の生徒会長からではない。

「あの赤い髪の生徒から？」

音符も色濃く流れてくることから間違いないだろう。

彼一人の音楽で周りの音楽を塗りつぶしてしまっている。

「一体何が彼の心をここまで動かしているんだろう？」

入学式が無事終わった後、響輔は教室に戻り席へ座る。

最後に先生から部活動のアンケートを提出して終わりだ。

響輔は正直、吹奏楽部やブラスバンド部等、音楽に関連のある部活動を所望した。

「（これでは帰るだけか：午後からは何しようかな？）」

響輔は校内を見てまわろうかと考えながら、アンケート用紙を前の席へと回した。

「あれ、名前が未記入のものがありませんねえ？」

「あ、すいません。多分俺です。慌ててて」

先生がおつとりとした口調で言うと、一人の赤い髪の男子生徒が反応する。

「（あの人。入学式の時に見た）」

響輔はあの赤毛の生徒に見覚えがあった。

入学式の時、周りの生徒を押し退ける程激しく音楽を奏でていた生徒だった。

「あつ、観東君だったんですか。ツインテール部？ツインテール部なんてありましたっけ？…あ、新設希望ですね」

「えっ?! 違つ…俺は部活を作りたいんじゃないんで、その！」

「そつか。観東君はツインテールが好きなんですな」

「あ、はい！それはもちろん」



この後の続く先生の言葉に赤毛の生徒―観束みつか 総二そうじは自ら墓穴を掘る失態をおかす。
観束総二の三年間に及ぶ学園生活の立ち位置が決まった瞬間だった。

「それでは皆さん、HRを終わります。寄り道せずまっすぐ帰宅しましょうね。最近この近辺で変質者が増えているそうですから注意してくださいね♪」

「それそのタイミングでいうことか!?なあ先生、待ってくれ!俺は本気なんだ!本気でツインテールが大好きなんだ!!あつ……違……その!!」

言い訳無用の大惨事を引き起こし、先生は当てつけとしか思えない言葉を残してHRは終了した。

周りは総二に呆れたり、ドン引きの視線を当てていたが、響輔は違った。

響輔はその光景を見ながら真剣な眼差しで総二を見ていた。

「(今一瞬、聴いた事のない凄まじい旋律が聴こえた。まさか……彼はツインテールに心の音楽を奏でているのか?)」

響輔はこの時、観束総二の名を心に刻んだ。

しかし、彼らはまだ知らない。
これから彼らが立ち向かう運命に。



同時刻、とある部屋。

豪華なシャンデリアの明かりが上質な材木を照らし、中央には三人の男たちがテーブルを囲んでカードゲームに興じていた。

「どう、なった、か、な?」

「さあな? マルシルからは成功していると聞いているが」

トランプを一枚また一枚捨て、ゲームを進めながらいう

「やったー! 革命だー!!」

「む、っ!」

「わからないものだな、運命というのは……」

ジョーカーを含めた同じ数字の札を4枚出す。

「革命返し」



「ツインテールに情熱的で真摯に訴えていた音色。どうしてあんな真っ直ぐな瞳が出るんだろう?」

響輔は帰宅途中で思考していた。

それは入学式やHRで見かけた観束 総二についてだ。

今までたくさんの人の心の音楽を聴いてきた。

だけど、あそこまで情熱的な音楽を僕は聴いたことがなかった。

ウケ狙いじゃない、ふざけて出せる音色じゃない。

本気なんだろうか?

だとしたら凄いい、僕にも彼みたいにな……

~~~~~!!      ~~~~~!!  
~~~~~!!      ~~~~~!!

そこまで思考していると、嫌な音が頭の中に響いてきた。

「何だ？この嫌な音色!？」

聞き覚えのあるような無いような。

そんなデジャヴを感じながら響輔の足は不思議とその視認できる五線譜の先——音源へと向かっていった。

「ここは、マクシーム宙果!？」
そらほて

そこは響輔も足を運ぶコンペンションセンター・マクシーム宙果、その駐車場。

息苦しいほどの焦げ臭さと駐車場に停めてある車が宙へ放られ、その破壊による轟音。

嫌な音は既に消えており、響輔は物陰に隠れて、様子を窺う。

その目に見えたのは黒い霞かすみがかった音符。と——

「な、何だあれっ!？」

響輔が見たのは2体の怪人だった。

「者共、集まれい!」

トカゲの怪人が転倒し、炎上した車の硝煙を背景に銅鑼声で高々と宣言する。

「ふははははは!!この生きとし生ける全てのツインテールを、
——っ!!」
我らの手中に収めるのだ

「……………ハイ?」

シユールな変態発言に一瞬、呆けてしまった響輔であった。

襲来・エレミアン／お前は誰だ？

世迷言を叫んだトカゲ怪人は指を鳴らした。

すると、その合図に呼応するかのようにトカゲ怪人の周りに、黒ずくめの格好をした者が大勢現れた。

「モケケ——！！」

同じ格好で統一された無個性な集団は戦闘員を思わせる。

「諸君！今から我々は先鋒部隊として初めての任務を開始する！隊長殿の面子にかけて、絶対に失敗は許されぬ！！」

怪人は握りしめた拳を天高く突き上げ、戦闘員全員に向けて演説を始めた。

「まずは手始めに、この町にいるツインテールの女子全てをここへと連れてくるのだ！この周辺に極上のツインテール属性が集中しているのは既に調べがついている、草の根分けても探し出せ！」

「モケケ——！！」

怪人の演説に賛同するように戦闘員も次々と手を上げて、掛け声をあげ、そのアルテロイドと呼ばれた戦闘員は何人かの女の子を捕まえはじめた。

女の子は怪人の言ったようにツイントールを結っている子ばかりで、心の音楽は恐怖の音色が聞き取れる。

それはこれがアトラクションや撮影の類じゃないことを意味した。

「何をする気だ？」

響輔は駐車してあるワゴン車の影からその様子をもう少し伺ってみることにした。

「それにしても、ツイントールの少ない世界よ——嘆かわしい！これだけ電気と鋼鉄にまみれながらその実、石器時代で文明が止まっていると見える!! まあよい、それだけ純度の高いツイントールが見つけれられるというもの!!」

やはり聞き間違いじゃない。

怪人は流暢な言葉を発し、響輔は今頭の痛くなるような茶番劇を目の当たりにしている。

僕には関係ないと思いつつながら、響輔は帰ろうかなと踵を返そうとした。

しかし、——

「しかし、トードギルデイよ！昨夜のその話は本当か？」

響輔は咄嗟に振り返り確認する。

「見てくれよお、この左目え。そいつにやられたんだ」

響輔が見たのはトカゲ怪人の仲間らしきヒキガエルの怪人だった。

「あれ？あの怪人どこかで？」

既視感を思わせる怪人の登場に戸惑う響輔。

「我々と互角に戦える者がこの世界にいるだど!?その者は確かにツインテールだったのだな？」

「ああ、間違いねえ…フードの穴から通した二束の髪——ツインテールだ」

「うむ、そうか。そいつこそが究極のツインテール属性を持つ者か!!聞こえたか、諸君!やはり究極のツインテールは実在する!!怪しげな輩は構わず捕らえろ!!ついでにぬいぐるみを持つ幼女もだ!!」

怪人の意味不明なやり取りを見ていた響輔だったが、そうしているうちに戦闘員によつてツインテールの女子たちが駐車場の集められていた。

彼女たちを逃さないよう取り囲むように戦闘員たちは待機している。

「何!?ぬいぐるみを持つている幼女がいない!?ふむ、女がぬいぐるみを持たぬなら、持たすが男の甲斐性よ!構わぬ連れて参れ!」

「離しなさい!」

「ん?」

すると突然、毅然とした声が響いた。

「あれは会長…?」

その声の正体は今日、学園の入学式でスピーチをしていた陽月学園の生徒会長——神堂慧理那だった。

「ほほう、なかなかの幼子！しかもお嬢様のようだな!!お嬢様ツインテール……まさしく完全体に近い！トードギルデイよ！こやつが昨晚貴様が見た究極のツインテールか？」

「いやあ、質はいいけどよお。こんなチビじやねえし……もつと深い赤色のツインテールだったぜえ」

「チ、チビツ!!?——それよりあなた方、何者なんですか!?!人間の言葉が分かりますのね!?!他の子たち解放なさい!!」

「脂汗垂らしながら強がっちゃって……くあわいいなあもう。任務じゃなけりや食っちゃつてもいいかもなあ」

「ひっ、やつ!!」

そんなことを言いながらガマ怪人——トードギルデイは慧理那の頬をその長い舌で舐めた。

当然、会長は嫌悪感を見せながらも強気の状態を崩さない。

響輔もこの光景には胸クソが悪くなった。

「やめろ、トードギルデイ。貴様は下品すぎる。同僚が無礼をはたらいた事は詫びよう。

だが、開放は出来ぬ。まずは、もののついでよ」

トカゲの怪人は彼女に大きな猫のぬいぐるみを差し出した。

「貴様はこの子猫のぬいぐるみを持つがいい！敵意もまた愛らしさと光る。わんぱくな幼女には、子猫のぬいぐるみが似合う。さあ、抱けい!!」

戦闘員たちがどこからもつてきたのか、横幅3メートルほどのピンク色のソファアアを担いできた。ぬいぐるみを持たされた会長は、怪人達に無理矢理ソファアアに座らされる。

「お前たち、この光景をしかと目に焼き付けよ！ツインテール、ぬいぐるみ、そしてソファアアにもたれかかる姿！これこそが、俺の長年の修行の末導き出した黄金比率よ!!」

「『モケケ——!!』」

「ソファアアか…。悪くねえが——まあ、俺なら天蓋付きのベッドを採用するかなあ…」

「うむ！天蓋付きのベッドか!!かあーっ！なぜ思いつかなかった！お前たち天蓋付きのベッドの用意は!!?何?ない!!あれほど持ち物は慎重に厳選しろと言っただろうに…」

「モケモケーツ（リザドギルデイ様ーっ）！」

貴金属を卑金属に変えるような暴言と、それに賛同するかののような甲高い声に響輔はめまいを覚える。

「何だ!?!俺は今素晴らしい愉悦に浸っている最中だぞ!!」

「モケモケモケーツ（ぬいぐるみを抱いたツインテールの幼女を発見しました）!!!」

「何い!?!本当かそれは!!すぐに連れて参れ!!」

戦闘員が連れてきたのはまたしても金髪に黒を基調とした赤いフリルのゴスロリ幼女だった。

しかし、幼女は無防備に、だらしなく熟睡して口からはヨダレを垂らし、手には内蔵が飛び出ている虎のぬいぐるみを握っていた。

「うお!!またしても金髪!!しかもゴスロリ!!無防備に寝入っている姿はまさしく無垢な天使を思わせる!!だが、ひとつ残念なのは——これはツインテールではなくツーサイドアップだ!!たわけ!!」

そのゴスロリ幼女の髪型はツインテールとは似て非なるツーサイドアップという髪型だった。

「まあよい、貴様にはあとで褒美を取らせよう。その幼女をソファーに寝かせよ!!」
響輔は会長とゴスロリ幼女の身を案じていた。

「何だ!?!会長、気分でも悪いのか?それとあのゴスロリ幼女——起きてるよね?」

響輔の能力で会長とゴスロリ幼女を見ていたが、会長はだるさと寒気がみてとれ、ゴスロリ幼女は緊張の音色がみてとれる。

「何をやっとするんだあの阿呆は……——っ?!?」

響輔は驚愕した。

突然、自分の口が勝手に動いたのだ。

「何だ今確かに……——」

「さて、余興は十分に堪能した!!すぐに任務に戻るぞ!!」

「モケツッ!」

首をかしているあいだに怪人どもは次の行動に移っていた。

会長をソファアールから無理矢理立ち上がらせる。

駐車場のど真ん中あたりのスペースに何やらでかい金属のリングが宙に浮いていた。

サーカスで火の輪潜りの時に使われるような人間なら余裕で通り抜けられる程の大きさで、大勢の女子が並ばされていた。

そして、先頭に並ばされていた会長がそのリングの中に通される。

会長はだるそうに戦闘員に両の腕を掴まされていたが、戦闘員は気にする由もなく、会長を無理やりリングの中へ放り込んだ。

すると、ツインテールに束ねていた髪が解け、がっくりと気を失ってしまった。

「なっ!!!」

その光景はただリングにツインテールの少女をくぐらせているぐらいにしかわから

ないだろう。

そして多分、響輔にしかそれは認知できない。

音符が消えていく——

五線譜が無色となっていく——

音色が聴こえなくなっていく——

こんな光景、初めてだった。

そこで響輔は先ほどトカゲ怪人が口走った言葉を思い出す。

『全てのツインテールを我らの手中に収める！』

まさか、彼女たちの心からツインテールの音楽を抜き取っているのか？

戦闘員は次々とツインテールの少女たちをリングへとくぐらせ、音楽を消し去っていく。

響輔は知らず知らずのうちに拳を強く握り締め、歯を食いしばる。

リングをくぐらされた少女たちからは何も聴こえない。

楽しい音色も暗い音色も。

響輔は自分の能力を忌み嫌っていた。

だが人の心の音楽は清濁込めて好きだった。

たとえ、奴らが何者であろうと人の心を踏みにじり、奪うなど許されることではない。

『どうした小僧？怒りに震えておるのか？』

「ああ、そうだよ。多分僕は今、怒っている…!!」

怒りのあまり幻聴が聞こえてきたのか？

だが、僕はそんな事を気にする余裕はない。

意を決して飛び出そうとしたが、足がその場に固定されたように動けなくなっていた。

「クソツ!!何だよ!?僕はビビっているのか!?メチャクチャ頭にきているのに僕は…」

『たわけ！貴様があのトカゲどもに向かつて行ったところで勝負は見えている。お前たちアントローポスが出る幕ではない』

クソ！多分これは僕の本心だろうな。

僕に逃げるための理由を突きつけているんだ。

そして僕を見た。

僕のすぐ目の前、赤毛のツインテールの女の子がトカゲの怪人に襲われそうになつて
いる光景を。

女の子は怯えているのか、その場で立ち尽くしていた。

あのままでは瞬く間に襲われてしまふだろう。

「頼む！動いてくれ僕の足!!」

僕は縫い付けられたみたいに動かない脚を無理矢理動かそうとする。

『まさか、本気で戦おうとしているのではなからうな？お前は無力なアントローポスだぞ？何ができる？』

「確かに僕じゃ、あの怪物たちには敵わないと思う。でも、勝ち目がないからつて逃げるわけにはいかないんだ!!それに、あのツインテールが好きだつて言つていた観東君がここにいたら…」

そう、ツインテールを奪われることで悲しむ人が必ずいるはずだ。

『面白いな、小僧。俄然お前に興味がわいた。凡夫で強欲な男——その物乞い、少しばかり見応えがあつたぞ』

そういえば僕の声はなぜこんなにも他人行儀なのだろうか？
そう考えているうちに僕の視界は暗転し、意識を失った。



観束総二は怯えていた。何にと言えば、目の前にいる怪人にだ。

鼻息を荒くして、「そのツインテールでぺちぺちと俺の頬を叩いてくれ！」などとほざいているそいつに全力で怯えていた

。それは今の総二の姿と密接に関係していた。

今の自分の姿―白黒のボディスーツに、甲冑のような赤色の装甲。

短髪だったはずの髪は総二が愛してやまないツインテールへと変わり、160センチほどあった背も120センチほどに縮んでいた。

低かった声も可愛らしいソプラノボイスに、そして股にいつもぶらさがっていたはずの男の証が綺麗さっぱり消えて、代わりに女性の証である小ぶりの乳房が胸に付いていた。

そう――今の総二はどこからどう見ても完璧なツインテール幼女にしか見えないの

だ。

どうしてこうなった？

それもこれもトウアールという女科学者に渡されたブレスのせいだった。

目の前のツイントール狩りに激怒した総二は、このブレスを使って変身し、意気揚々と怪人の前に飛び出したはいいものの、怪人のリアクションに戸惑った。

男のはずの自分に幼気だの究極のツイントールだのと抜かしたからだ。

…そして、車のフロントガラスにちらりと映ったこの姿に驚いた。

そこには自分とも似ても似つかないツイントールの女の子が呆然とした顔つきでこちらを覗きこんでいたからだ。総二が手を振ると、ガラスの中の女の子も手を振った。首を傾げると、一緒になって首を傾げる。

——そして現在に至る。

現実を受け止めきれずにうろたえる総二を怪人は怪しい笑みを持って近づいてくる。

「むう、自ら我の物になる心づもりか、ありがたい！ さあ、丁重に——」

パアアア——ツ!!!

「「「ツ!!!」」」

突然のクラクションは駐車場全体に響き渡り、その場にいた者は全員音源へと顔を向ける。

そこには黒いコートにケープのフードで顔を隠した長身の女性がワゴン車の窓をブチ抜きクラクションを鳴らしているのが見えた。

「戯れはその辺にしておけよ、畜生ども」

TAIL UP!!／運命のツインテールを今結べ

ワゴン車のクラクションに怪人達がこちらを振り向き、ゆつくりと女性は怪人達に向かつて歩みを始めた。

それに伴い一陣の風が吹くと、彼女のフードの後ろから突き出ている深紅のツインテールがコート裾と共にためく。

「貴様、何者だ…!?!」

「リザドギルデイ!ア、アイツだあ!!俺の左目に傷を付けたのはあ…!?!」
「何イ!?!」

突然の介入者にトカゲ怪人ーリザドギルデイは戸惑うも、トードギルデイの言葉によつて警戒を強め、周りの戦闘員も僅かな畏怖の念を抱き身構える。

彼女——テナーはそんな怪人達に恐る事なく歩みを進める。

すると彼女の周囲を奇妙な生物が飛びまわる。

「キバット」

「よっしゃあ!キバって行くぜ!!」

テナーの呼び答えに対し、その生物——キバットは決めゼリフを口にして、気合をい

れる。

そしてテナーは右手を掲げると、そこにキバットを収め、反対の手首に噛みつかせた。「ガブツ！」

キバットはその声と共に、自らの牙をテナーの左手首に突き刺す。

その途端、彼女の身体に凄まじい量の魔^{アクティブフォース}皇力が駆け巡り、チリチリチリチリとまるで稲妻の様に奔流し、漲る。

するとテナーの首から下顎にかけてステンドグラスを彷彿させる模様が浮かび上がり、腰には鎖が巻き付かれ、深紅のベルトへと変質していく。

キバットを握る右手を勢いよく前方に突きつけると、その言葉を力強く告げた。

「テイルアップ……！」

テナーはキバットをベルトの台座——キバツクルにぶら下げるように取り付ける。

キバットが合身し、バツクルはキバットベルトへと変化。

するとその体は、ベルトからの波動によって生まれた魔^{ルシファームタル}金属で生成されたアーマーに包み込まれた。

双眸の虹彩は瞬くと同時に黄金色に光り輝く。

ワインレッドのツインテールを形成し、様々な情報収集器官を集約、あらゆる衝撃から頭部を守り、周囲の状況をいち早く感知するレーダーの役目を果たすコウモリの耳の

ような二つの髪留め——キバ・ペルソナ。

正体を隠蔽する悪魔の顔を象った呪いの首飾り——ダークネス・チョーカー。

全身を守りながら内蔵する力の暴発をpushさえつけ、赤と黒を基調とした吸血鬼を彷彿させる——ブラッドシングレットに幾重にも枝分かれした筋が通り、胸部を守る真紅色に染まった力の貯蔵庫——ブラッドデイルング。

銀色に輝き、内蔵する力をpushさえつける為に存在する装甲型拘束具——プテラ・プレット。

右脚、両肩の封印の鎖——カテナ。

両手両足首で銀色に輝く、力を調整遮断する枷——シール・ブレスレット。

鋼鉄さえも紙の様に切り裂く爪に超人的な腕力を授ける籠手——デモンズ・ガントレット。

下半身を守り、いかなる極限状態からもテナーを守る漆黒に輝くインナースーツ——ドランスパッツ。

それぞれの膝を守り、足先へと流れる力をコントロールすることが可能な防護具——シルバニア・ニーガード。

どんな不安定な足場でも驚異の安定性を保持し、反重力で壁や天井を駆け上がる事もできるブーツ——デモンズ・ヒール。

カテナに縛られ、銀色に輝くプレートで堅く構成された右脚の拘束具——ヘルズゲート。

そんな異形な姿へと変貌したテナーはだんだんと歩みのペースを上げ、次の一瞬には駐車場のコンクリートの地面を踏み抜き、一息でリザドギルデイの首元を掴み、地面へ勢いよく叩きつけた。

「うぐおあ?」

それだけに留まらず、リザドギルデイはそのまま全力疾走で引きずられ、投げ飛ばされる。

廃車の山へと突っ込み、炎上した廃車はボウリングのピンみたいに弾けとぶ。

「な、何していやがるお前達い! 掛かれ!! とつとと掛かれ!!」

「モケーツ!!」

一瞬の乱入に加えて、リザドギルデイが投げ飛ばされた事に呆気にとられて動けなかったが、トードギルデイの一喝により周りにいた戦闘員—アルテロイドは奇声を発しながらテナーを取り囲む。

アルテロイドはいずれもテナーに対する敵意を全身にみなぎらせていた。

特にトードギルデイはテナーに対して残った右目から憎悪の念を向けているのがわ

かる。

「てんめえ、昨日はよくもやってくれたなあ…!!」

何の事情も知らない常人がいきなりこの状況に放り込まれば、ほんの一瞬で正気を失ったりするだろう。

「ん？ああ、…なんだ昨日の蝦蟇畜生か」

だが敵意をまともに浴びているテナーは取り乱すどころか、眉一つ動かさず、一片のうろたえも見せていなかった。

「昨日の左目の借り今ここで返してやるぜえ!!」

「『モケーツ!!』」

にらみ合いはほんの一瞬で終わり、トードギルデイが率いるアルテロイドは呼吸を合わせてテナーに打ちかかってきた。

アルテロイドは前後左右から襲いかかる。

敵は集団戦に慣れているのか、その動きには調和性があった。

対するテナーは本能に従って敵の攻撃を回避し、すれ違いざまにカウンターの要領で拳を食らわす。

デモンズ・ガントレットがアルテロイドの頭を砕き、その深紅の爪の突き手で腹を穿ち、ヒールをコンクリートに突き刺しそれを軸として絶えず体を回転させ、全方位の相

手に大立ち回りを演ずる。

ほんの僅かでも見切りが誤っていればアーマーを傷つけられ、ダメージを受けてしまう。

いくら鎧の魔皇力で衝撃を防御し、身を守られているからといっても油断は出来ない。

襲いかかる複数の敵は、一寸の狂いがないように見えても僅かながらのズレが存在する。

そこを見分ければ陣形が崩せる。

アルテロイドは一定のダメージを食らうと消滅するらしく。

一体、また一体と破竹の勢いでその数を減らしていく。

「ハッ！いくら人数が多かろうと息を乱しちまったら——意味ないどころかタチが悪いな」

「その通りだ」

バックルのキバットが言う通り、多数を相手取る際、迎えうたず、絶えず自らが動き回り、敵を攪乱させ、反撃の隙を与えずに体制を崩すのが上策である。

駐車場は見晴らしがよく数の有利が活きる場だが、テナーはそんな不利を物ともせずアルテロイドを打ち倒す。

ものの数分も経たないうちに最後の一体を打ち倒し、残るはトードギルデイのみとなった。

「スゲエ……」

置いてけぼりをくらった総二は自分が幼女の姿になった事に悲観していた事も忘れその戦い方に惚れ惚れしていた。

深紅のツインテールが新体操のリボンの如く踊っている様に舞い、それとともに拳や蹴りを繰り出し敵が次々と倒れていく様に心躍っていた。

ここでテナーは総二の方を向く

「そのの娘、早く去れ。棒立ちされたのでは——」

そこまで言つて驚異の瞬発力で総二を抱え、押し倒す。

さつきまでいた場所には空裂音を鳴らし、トードギルデイがしたを伸ばしていた。

「そういうえばまだいたな。蝦蟇が一匹と——」

廃車を跳ねのけて、リザドギルデイがはい出てきた。

「リザドギルデイ、おつせえぞお!!」

「ふははは、見事なツインテールの幼女に加えてまた新たなツインテールの戦士か！一分足らずの内にあれほどのアルテロイドが全滅とは！不覚ながら幼女でなくとも見入ってしまったぞ」

テナーは目を細めて双方の怪人を見やりながら、後ろに立つ総二をどうにか逃がそうと考えていると、いつの間にか剣を手にして前に出てきた。

「何だ？早く去れといったはずだが——」

「悪いけど……！」

テナーの言葉を遮るように総二は言う。

「俺はもう迷わない!!たとえどんな事になろうとも、ツインテールを守れるなら——俺は……幼女でもツインテールでもなんでも構わない!!一緒に戦ってください!!」

「……一つ、問う」

テナーは終始感情を見せなかったが、少し考える素振りを見せたあと総二に問う。

「ツインテールは好きか？」

「大好き!!」

「……そうか」

即答だった。

総二のその言葉に何かを感じとったのか口元を少し上げた。

それは相対していたりザドギルデイにも伝わったのか上機嫌となつて言う。

「フツ……恐るべき奴！久方ぶりに戦士としての昂揚が噴き上がる！我はアルティメギルの斬り込み隊長、リザドギルデイ！少女が人形に抱く姿にこそ、男子は心ときめくとい

うものよ。改めて聞こう、貴様らの名は!!」

そういえばまだ名を名乗っていなかったな。

と、テナーは考えた。

しかし、あまり本名を名乗りたくない。

「——テイルレッド!!」

「貴様は?」

先にとなりに立つ総二——テイルレッドが名乗りを上げ、リザドギルデイはテナーに顔を向ける。

テナーも何かいい偽名はないか考えていると。

「フアングだ!!」

「え!?!」

「コイツの名は——テイルフアング」

バツクルのキバットが叫ぶ。

「おい、キバット!何を勝手に…」

「いいじゃん、カッコイイだろ?」

「下腹部のコウモリが喋ったことにレッドも相手も驚いたが、テナーとキバットは構わず話す。」

テナーは根負けしたのかそれで妥協した。

「まあよい、カツコ悪い呼び名ではないしな。——よし、テイルファング。決定だ」

「…しかと聞いた!!」

「なら、もう開戦でいいなあ!!」

「待て！トードギルデイ!!」

テナー——テイルファングが名乗り、リザドギルデイの返事が終わった刹那、待ちわびたようなトードギルデイの巨体が跳び、不意打ちの体当たり攻撃を両者めがけて繰り出そうとした。

しかし、その攻撃はどちらにも当たらずはなかつた。

「そう焦るな」

テイルファングが片腕一つでトードギルデイの巨体を受け止め、まるで運動会の大玉みたいに蹴り飛ばす。

「テイルレッド、貴様はトカゲの方を任せるぞ。あの蝦蟇は私に用があるみたいだからな」

そう言ってテイルファングの手の平からまたバチバチッと黒い稲妻の様なエネルギー

ギーが迸る。
ほとぼし

「影創造——黒刃刀」
ブラック・ナイフ

その黒いエネルギーの奔流が収まるとテイルファンクの両手に昨晚トードギルデイを切り裂いたふた振りの三日月型短剣——黒刃刀が収まっていた。

トードギルデイが起き上がるとその目の前にテイルファンクが黒刃刀を両手に携えて目の前に立っていた。

「どうやら起き上がるまで待っていたらしい。」

「この野郎……！」

時間が止まったかのような静寂に包まれた空気の中、次の瞬間、テイルファンクのふた振りの黒刃刀がトードギルデイの腹をかつ捌く。

だが、

「ん？」

「ハツハツハツ!!そんな蚊の刺した攻撃なんかじゃあ……俺は倒せねえぞ!!」

「おいおい、かなりデブデブの脂肪だな」

「ああ、これは骨が折れそうだ」

テイルファンクは諦めず黒刃刀で斬り裂き、突き刺し、護手の部分で殴る。

時には順手逆手を使い分け、蹴り技で相手をなぎ倒す。

両手に黒刃刀持つテイルフアングは、流れるような軽やかな動きで敵を翻弄し、短剣ブラック・ナイフの一撃をトードギルデイに浴びせる。

トードギルデイも長い舌の舌弾ぜっだんをテイルフアングに繰り出す中、見え見えの攻撃を躲すことなど造作もない。

テイルフアングがヒットエンドランの攻撃を繰り出す中、その内舌弾ぜっだんの一撃がテイルフアングに命中した。

「ハハハッ!!勝負あつたな!!」

「あん?——うう……」

突然、立ちくらみみたいにならぬままにフアングは足がおぼつかなくなり、座り込んだ。

「何をした……?」

苦しそうにトードギルデイに問うた。

「俺の属性はあ……病弱属性シツクネス。俺は病弱な女に俺は心奪われる。俺の体液には病原菌が充満しているんだ。それに触れてダメエも——」

そこまで言った瞬間、トードギルデイの顔面に強烈な拳がめり込み、またトードギルデイを吹き飛ばした。

「うべあ……」

「貴様……まさか、その体液って——よだれのことか!?!」

フアングは露骨に嫌そうな顔をしてくらった部分を拭き取る。

「馬鹿な!!俺の病原菌をくらって平気なはず——」

「すでにお前の菌に対するワクチンは昨夜の内に完成している」

「な、何い!?!」

「クソツ、こんなことならワザと攻撃をくらって、油断を誘おうとするのではなかった」

テイルフアングはベルトの左右の脇に備えられているスロットホルダーに収納されている7つのフェッスル。そのうち一つ、青い笛——ガルルフエッスルを抜くとそれをキバットの口に押し込む。

「ガルル・セイバーツ!!」

キバットの叫びとホイッスルのような甲高い、その笛の音色とともに蒼い狼を象った彫像がフアングの目の前にきたかと思えば、その彫像は狼のサーベル——ガルルセイバーへとその姿を変え、テイルフアングはその柄を受け止める。

「ムツ!?!」

ガルルセイバーを手にしたテイルフアングは少し驚くも、即座にトードギルデイの懐へ潜り込んでガルルセイバーを振るう。

超高速の刃はトードギルデイの腹へと到達し、一閃——その一撃だけでトードギルデイの分厚い腹をまるで豆腐みたいに切り裂いた。

「うぎゃあ!!」

反撃の隙も与えずテイルファングはまたトードギルデイ目掛けて再び飛び込む。

トードギルデイも舌弾ぜっだんで反撃を試みようとしたが、その勢いを保ったまま刃を返し、ファングは力を込めてガルルセイバーを振るう。

変幻自在に軌道を変える斬撃に、トードギルデイは為すがまま耐えるしかできない。反撃など不可能だった。

息が続くままテイルファングはガルルセイバーを振るい続け、その一撃のために勢いを溜めるように構えると、息とともになぎ払う。

「ハッ!!」

「グギヤアアアッ!!」

渾身の一撃によってトードギルデイは火花を散らして吹き飛び、勢いよくアスファルトの上を転がった。

テイルファングはガルルセイバーを放る。

するとガルルセイバーは彫像に戻ってどこかへと飛んでいってしまった。

それを見届けると今度はスロットホルダーの中の赤い笛——ウエイクアップエツスルを取り出し、キバットの口の中に押し込んだ。

「ウエイク・アップ!!」

キバットが叫ぶと美しい笛の音色が鳴り響く。

それは幻想的で、どこか美麗だった。

青色の大空は漆黒に染まり、巨大な三日月が出た。

「何だ？……夜？」

真夜中のような深い宵闇の中、レッドも驚いて空を見上げる。

フアングは両の腕を交錯させながら低い息を漏らし、右脚に力を込める。

「はあああああああつ……はっ!!」

地面を蹴るようにそれを勢いよく振り上げると、蝙蝠の羽が羽ばたくようにかの様に

拘束具が開錠し、封印^{カテ}の鎖^ナは断ち切られた。

ヘルズゲートの中は深紅の羽に三つの緑の魔皇石が埋め込まれており、それらがただならぬエネルギーを発していることは誰の肌でも感じ取れる。

そしてフアングは残った左脚を利用し、天へと跳躍する。

斬撃から立ちなおったトードギルデイだったがすべてが遅すぎた。

三日月の月光を背に、眼前には急降下するフアングの右脚が迫ってきており、躲すことなど不可能であったからだ。

「ダークネス・ムーンブレイク!!」

矢のような勢いを持った必殺の蹴り——ダークネス・ムーンブレイクがトードギル

デイの心臓部めがけて打ち込まれ、そのまま地面へと叩きつける。

地割れが起こったかのような轟音が響き渡り、地面に蝙蝠のような紋章のクレーターが深く刻み込まれ、その脚の魔皇石から流れ出る膨大なエネルギー——魔皇力が流れ込む。

「う……うああ……」

苦悶の声を漏らすトードギルデイだったが、膨大なエネルギーによりトードギルデイの身体は徐々に崩壊してゆき、ガラスみたいに砕けて、破片は地面に溶け込むように消えていった。

技が決まると夜空は昼の青空へと戻り、右脚のヘルズゲートは閉じ、カテナが再びしっかりとヘルズゲートを封印。

フアングはその場から背を向けてテイルレッドの方向に顔を向ける。

と、爆発が起こりあちらも丁度戦いが終わったみたいだった。

「勝手に妙な幻想を見て消えるなあああああああああ!!」

一体どんな奴が相手だったんだ？



「よつと」

テイルレッドは金属の輪を両断した。

「これを壊せばツインテールは戻るのだな？」

「そうみたいです……ん？」

「どうした？」

レッドは地面に煌く菱形の宝石を手取る。

それは属性エレメンタリー玉というのだがテイルフアングはまだ知らない。

「——あの」

真後ろからかけられた声にふたりは振り向く。

「助けてください……ありがとうございます」

「あ、あはは、何のことやら……。俺、いや私は、たまたま通りすがっただけですよ」

「Oh、これはこれはカワイイツインテールのお嬢さん！お怪我はありませんでしたか？あ、申し遅れました。私はキバット・バット三世と言っています——「やめろ」グえ！」

割つて入るようにキバットがバツクルから飛び出して会長に意気揚々と話しかけるも、フアングが口を無理やり閉ざす。

「体の方は大丈夫か？」

「あのカエルの怪人に舐められてからすごく苦しかったのですが、途中であの捕まった娘の一人に助けられましたの。とても素敵な戦いぶりでしたわ。お二方——」

「悪いがそろそろ城が来る。話はここまでだ」

「城？」

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオンツ
!!!!!!

大気を震わせる巨大な雄叫びが鳴り響いた。

すると向こうからバツサバツサと何かが飛んできた。

それは洋風の城だった。それもただの城じゃない。

「ド、ドラゴン!？」

城から亀みたいに首と手足、翼が生えた全長40メートル以上のドラゴンだった。

そのドラゴンはフアング、レッド、会長の頭上を飛び越えると駐車場に着地する。

「そう・あれがティルフアングが居住する城——グレートワイバーンを改造して造り上げた『キャツスルドラン』だ!!」

周りの廃車が木の葉のように吹き飛ばされるのもお構いなしにトードギルデイが敗れ、紋章のクレーターの上にある属性玉を捕食した。

今度はテイルレッドの持つ属性玉を捕食しようとズシンズシンと地響きを鳴らし、接近する。

会長は少し恐怖に身をすくめレッドも身構えるが、フアングのみ前へ出てキャツスルドランに左手を翳した。

「やめろ——一つでは腹の足しにならぬか？」

フアングの下顎にステンドグラスの模様が浮かび、左手の紋章が輝きを放つ。

キャツスルドランはフアングの威圧にたじろぎ、頭を垂れる。

「では出発する。キバット」

「おう」

「あの——」

再び会長がフアングに声をかけ、尋ねる。

「また逢えるでしょうか？」

「ツインテールは好きか？」

「え？」

「……………私が最も敬愛する人間の言葉を今から言う」

会長は予想外の返しに戸惑っていたが、答える前にフアングが言葉を口にする。

「『一度目偶然、二度奇跡、三度目必然、四運命』。お前と私は今日偶然出会った。次は奇

跡を期待しろ——テイルレッド、お前もな。その時、再び答えを聞かせろ」

ファングはひとつ飛びでキャツスルドランに飛び乗るとキャツスルドランは羽を羽ばたかせて上昇し、数秒も経たずにどこかへと飛翔していった。

オーデイエンス／異邦の世界からの邂逅



そこで響輔は目を覚ました。

見知らぬ天井だった。

「……は……」

辺りを見回すもそこは見慣れぬ場所——薄暗く、無駄に広い木造の部屋。

素人の響輔から見ても豪華と言わしめるような赤い天蓋付きのベッド。

「どこなんだ……は？」

ベッドから起き上がると上半身を起こしたその時何か違和感を感じた。

「つて！何で僕、裸なんだよ!!」

違和感を感じて下を向いてシーツをめくると、一糸纏わぬ自分の裸体がそこにはあった。

それを見た瞬間、思わず叫んでしまった。

なんだこれ？

生まれてこの方女性に縁の無い自分がまさかの既成事実!?!いや、本当に縁がないんだよ。

ラノベでよくあるような可愛い姉妹や幼馴染、クラスメートもないのに:?!ふざけんなよな!!記憶も相手もまっつたく見当つかないじゃん。

ええと、確か高校の入学式の後、マクシーム宙果でトカゲの怪人が現れて、ツインテールを我が物にするとか何とか言っつて、それから…

『ようやく目覚めたか…』

「?!」

突然、誰かの声が頭の中に響いてきた。耳から伝わって来たのではない。頭の中で反響してきたとしか思えないほど鮮明に響いてきたのだ。

『説明しようという矢先に我が城で熟睡とは随分厚顔な小僧だな』

「誰?!」

辺りを見回したが見晴らしのいいがらんどろな部屋には自分以外の人間はいない。僕の能力にもこんな事態は初めてだ。空耳かと思いかけたが、また声が聞こえてくる。

『姿見の前まで来い』

感情を見せないその声に戸惑いを覚えながら、ベッドから立ち上がり、壁に張り付いた姿見の前まで来た。

そこには当然、見慣れた自分の裸体が映し出されている。

「お！何だ何だ？目が覚めたのか？」

と、響輔のすぐ横から剽軽そうな声が聞こえてきた。

「うわっ!!」

響輔は再び驚くことになる。

その声の主は人間ではなかった。

手の平に収まりそうな鳩くらしいの大ききで、赤い爛々とした大きな目に鋭い牙を生やし大きく裂けた口、顔から直接羽や足が生えている。

まさに『蝙蝠の顔が宙に浮いている』そう体現したような生物だったからだ。

「お前はどうか？起きてるか？」

その謎生物は響輔に向かって話かけてきた。

起きているかなんてそんなの見れば分かるじゃん。と、響輔は内心不思議に思っている。

「もうすでに起きている。どう切り出せば良いか考えていただけだ。——つつつ!!?」

自分の口が勝手に動いた!
くれない きょうすけ
『紅 響輔』

なんで僕の名前を…!?

『貴様のことは概ね把握させてもらった』

「誰?! 一体、どこにいるんだ?!?」

見えない相手が自分の頭の中から声を発しているというのは不気味なもので辺りを見回し、声を張り上げる。

『どこにいるとは…。異な事をいうな、お前は』

そこから発せられた言葉はなんとも古風で非常に流麗かつ格調高い言葉だった。

そして上から目線で可笑しそうに言葉を返す声にだんだん腹が立ってきた。

「きつ、君は一体何者なんだ!?!」

『そうだな。まずは見てもらう方が早いか。もう一度姿見を見ろ』

「?」

すると姿見に映っていた僕の身体は幻の様に消え、代わり別の姿がその姿見に映された。

それは全裸のツインテールのお姉さんだった。



『なっ! えっ!?!』

「驚いたか？」

ええ、驚いた。いろいろと。

しかしまず：その女性は一言で言つて――

――美しかった。

俗な言い方をしてしまつたが、ただその一言に尽きる。

特に今にも香り立ちそうなワインレッドの髪を左右に束ねるツインテールに目がいった。

房は背中を超えて腰に差し掛かる長さ。

房同士の中央にあるツインテール独特の分け目は頭頂から項にかけてさながら獣の歯並びみたいに鋭角にジグザグ、鎖で繋がれた枷を象る金属の髪留めで左右の房を結っており、分け目の口を閉ざしているみたいだつた。

一方、房の方は一目見てそれはまるで日本刀の業物が如し、枝毛など一切ないが故に鋭く、癖つ毛すらないが故に地に向かつて直線を描き、髪を取り巻くキューティクルが美しい輝きを放っていた。

いままでツインテールを結いた女性は皆総じて『可愛い』という印象だつた。

だが、目の前の女性は整った目鼻立ちの美貌に加えて、細くて長い腕に指、見事な脚線美から生み出される長身。

長い睫毛に深く澄んだ瞳と眼差しは見るもの全てを虜にしてしまいそうな艶麗さと射殺す様な鋭き眼光が宿っており、薄い桜の花弁のような艶かしい唇の口内から覗く歯は汚れを知らないみたいいな純白、異様に長い犬歯は刃物のように鋭く、まるで吸血鬼を彷彿させた。

落ち着いた大人の雰囲気、そしてどことなく人を惹きつけるカリスマ性を覗かせた威風堂々たる風格をちらほら醸し出しており、美しいと思わない部位がない位にただ美しい女性だった。

それらが直線的なツインテールと見事にマッチし、思わず平伏せざるをえない正に『女王』のような気品溢れる女性だった。

「どうした？ さつきから呆けて……」

彼女は呆けていた響輔に語りかけてきた。

「そりゃあ、テナー様。思春期の男の子が一糸纏わぬテナー様の裸体を目の当たりにされちゃあ……まあ、見惚れるのも無理もないケドねえ」

ニヨニヨとからかうみたいに言う蝙蝠モドキ。

余程彼女のプロポーションに自信があるのだろうが、からかう反面致し方ないという

声色も含まれていた。

まあ、ただ立つて腰に手を当てているそれだけで絵になる芸術的で見事な裸体なのが、僕の場合彼女のツインテールにまず目が行った。

『ああ……いや、素敵なツインテールだなんて……思いました』

それを聞いて彼女は一瞬キョトンと虚を突かれた様な表情になったかと思えば、

「あれえ？まずそっちが気になる系？」

「ほう、このツインテールにまず目が行くのか……」

裸よりもツインテールの事を褒められて得意げにツインテールの房をかき上げる彼女に、少し拍子抜けなキバツト。

『つて！そうじゃなくて!!あんたら、一体何者なんだ!!?』

「自己紹介が遅れた。私の名はテナー・オランジュス。ダイモーンファンガイア族であり、チェックメイトファイブのクイーンだ」

思い出したように混乱する響輔。

しかし彼女——テナーは専門用語のみの紹介をただけであり、響輔を余計に混乱させた。

『え??——……だいまーん??ふあんがいあ??』

「ひと月ほど前、私はある指令を受け……」

「おいおいテナー、お前の話はちよつと急すぎる。アントローポスはオレたちの世界やこの世界の仕組みすら理解できてないんだぞ」

近くを飛んでいた蝙蝠モドキが割って入ってきた。

「お前は少し説明下手だからな。オレが説明する——と、その前に服を着てチェーンジ！ハリー・アップ！」

いつの間にか用意された僕の服を着て、テナーと響輔が入れ替わり、表に出る。

入れ替わった事を確認するとキバットは口を開く。

「よし！えくと…紅…響輔って言ったっけ？オレ様はキバット・バット三世伯爵。まあ、率直に分かりやすく言っておれたちはこことは違う世界からやってきた」

「…違う世界？」

「そう、お前ら人アントローポス間が住むこちらの世界を『ヘリオス』、オレたち魔ダイモーンの者の住む世界を『セレーネ』っていうんだぜ。オレたちはある任務のためここ——ヘリオスへとやって来たんだ」

違う世界となるとやはり思いつくのが漫画やアニメによく登場してくるパラレルワールド——響輔はこことは違う全く別次元の世界を想像した。

「漫画やアニメみたいなのによくある異世界ってやつ？」

「お！何だよ。分かってんじゃない！概ねその通りだ」

「分かってんじゃん、じゃない!!信じられないよ!そんなバカみたいな妄言!!」

キバツトがお気楽そうに説明する手間が省けたと喜ぶのも、僕はキレ気味に怒鳴り返した。

『妄言ではない。お前ら人アントローガス間はその次元を観測する術を持っていないだけだ。先の怪人どもを見ただろ?』

「さっきの怪人?」

響輔は思いつく。

マクシーム宙果で暴れていたトカゲの怪人にヒキガエルの怪人。

あれは確かに現実だった。

『あのアルティメギルと名乗っていた謎の生物は間違いなく異次元の存在だ。あのような生物、このセレーネでもヘリオスでも発見された記録がない。さらに彼奴らの出現に伴い次元震も確認した』

「サイコロの面みたいなものだ。世界っていうのは次元の壁を挟んで複数の世界が存在している。あの怪人達も俺たちの発見していない未知の異次元世界からやってきたんだらうな」

説明を聞いてもいまだに信じられない。

「ま、そのことについては後で詳しく説明しといてやるとして、オレ達の世界——セレー

ネの世界で次元の歪み、次元震を観測してな。ひと月ほど前はこちら側の世界——へりオスにやって来てある調査していたってこった」

「調査？」

「で、そのな…困ったことにな。昨晚、さっきのヒキガエルの怪人との戦いで…。お前の肉体は…その——」

キバットが何か言いくそうに言葉を詰まらせていると、

「死んだ」

「ふーん…——はあ?!!」

新たな声が話に割って入ってきて、今日何度目かわからない驚愕をする響輔。

声のする方に目をやると5人の男女がこちらに歩み寄って来た。

「紅響輔。お前はいま死という状態にあるわけだ」

そこにいたのはタキシードを着た襟髪を一つに纏めた目つきの鋭い男と、

「うーん?ねえねえ、この場合ってなんて声をかけたらいいの?」

セーラー服を着た短髪ショートヘアのあどけない美少年、

「ご愁、傷、様でし、た」

燕尾服を着た額オウルバツク出に片言の筋骨隆々の男、

「大変お悔やみ申し上げます」

8歳くらいでツーサイドの金髪に黒を基調とした赤いフリルのゴスロリ服に三角帽子を被った幼女、

「あんだ達、ちよつと失礼じゃないかな?」

白髪をお嬢様結びした黒いローブの20代前半の女性、

「誰?」

どの人達も只者じゃない雰囲気醸し出しており、咄嗟に身構える。

『案ずるな。私の仲間だ』

どうやらテナーの仲間らしい。

「ちよつど良かった。たった今起きたとこなんだぜ」

キバットが報告すると白髪お嬢様結びの女性が安堵する。

「そう。どうやら、精神融合せず無事成功したみたいなようだね。私の名前はマルシル・

ホウエイトルブ。よろしく」

お嬢様結びの女性——マルシルの自己紹介に続いて、他の者たちも自己紹介する。

「藍沢あいざわ 次狼じろうだ」

目つきの悪い男——次狼はぶつきらぼうに

「ぼくは緑ヶ浜みどりがはま ラモン。よろしくね、おにいちちゃん♡」

美少年——ラモンは手を振るって

「藤咲…力」
ふじさき リキ

ガタイのいい大男——力は片言にリキ

「ヴェディアルイク・イエロード・スフィールズ・モンタルク。呼びづらかったらヴェディでいいわよ」

ツーサイドアップの金髪に三角帽子の少女——ヴェディはこちらを少し警戒するみたいだ。

「ねえねえ、キバット。テナおねえちゃんは大丈夫なの？」

ラモンが心配そうに尋ねてきたのに対し、キバットがなだめるように言う。

「ああ、テナーなら無事だ。今この兄ちゃんに説明してるところだ」

「そっか！よかったー！ねえねえ、テナおねえちゃん！起きてるー？」

「ちよつ…ちよつと!!さつきからなんなんですか!!いきなり。あなた達僕の身体に一体何したんですか!!」

ラモンが響輔の裾を引っ張り、皆が安堵している中、一人取り残された響輔は声を荒げて説明を求めた。

「安心しろ。お前の遺体はマルシルとヴェディの工房で再構成が試みられている」

次狼は落ち着つけと言わんばかりに響輔に返した。

「ちよつ…ちよつとー」

「まあ、今すぐにとはいかないけど。ホムンクルスの技術とフランケン族の細胞を用いれば必ず元に戻るはずだから、ね？」

マルシルが響輔をなだめるみたいに続ける。

「それまでの間、君には少しばかり迷惑をかけるかもしれないけど、決して不自由はさせないから。私生活じゃあ主に君を優先させるし、君は紅 響輔としてこれまで通りの暮らしを営む事を約束——…」

「ちよつと待つて下さい!!いきなり死んだとか、異世界とか、訳わかんないよ!!大体、僕はこの通り生きてるじゃないか!!」

マルシル達の言動がまるで理解出来なかった。

意思疎通は出来ても、その話す内容に頭が追いつかないでいた。

「んだよ…俺らの言ってることが信じられないってか？」

「言ってること以前に…蝙蝠の顔が飛んでいることが信じられないよ!!」

「蝙蝠の顔?!」

響輔の言葉に憤慨するキバツト。

次狼が鼻で笑ったり、ヴェデイが思わず吹き出すのが後ろで聞こえる。

「…テンメエ!それオレ様の事を言ってるのかあつ!!」

「うるさい!!どうせ本当はオモチャか何かだろ!スピーカーはどこだ!」

と、キバットを捕まえ、口を開けたりしてスピーカーを探し出す響輔。

「このガキい！いい加減にしろ！ガブツ！ガブガブツ!!」

ついに怒ったキバットは響輔の指に噛みついてきた。

「痛ってーっ!!」

「ガブガブガブガブ!!」

「何やってんのよ…」

響輔とキバットのやり取りを見てヴェデイや皆は呆れ顔となっていた。

『全く、もう少し肝の座った男かと思えば…ネチネチとせせこましい奴だ』

テナーも呆れ気味に吐き捨てる。

「コイツを追い出して下さい!!誰だか知らないけど自分の中で他人を飼うなんてまっぴらごめんです!!」

頭の中で囁かれるのはあまり気分がいいモンじゃない。

自発的に心の音楽が聴こえるのとは違ってむしろ不快でしかない。

「響輔君、その言い分には少し誤りがあるね。次狼、力、工房から例のものを持ってきてくれるかい？」

「おう」

「わかっ…た」

マルシルが次狼と力にお願いすると部屋を出ていく。

しばらくして次狼と力が持ってきたのは一つの棺桶だった。

開けてみるとそこに入っていたのは――

「うっ……!!」

「これは紛れもなく君の遺体だよ」

水槽みたいにガラスの容器で密閉してあったが、そこに入っていたの紛れもなくホルマリン漬けとなっていた響輔の肉体だった。その顔は生気を帯びておらず、胴体は腹部から胸部にかけて見るも無残に破壊されていた。その惨憺^{さんたん}たる状態に嘔吐感がこみ上げてくる。

「なっ……、なっ……、何だよコレ!?!こんな体じゃ死んじやうじやないか!」

「そうだよ。もつと嘔み碎いて言うなら――君の意識、記憶、人格をテナーに移植したんだ。君の命はテナーによって維持されている。さらに擬態能力を付加させ、君と同じ姿、服になれるようにしたから。あなたの身体が修復されるまでの間だけ君の精神はテナーの中に仮住まいする形になるわけだ」

「っ……つまり僕の中に彼女がいるんじゃないやなくて、彼女の中に僕の人格があるってこと?」

「そうだよ」

信じられない。

今一度自分の肉体を見てみるが何から何まで見慣れた自分の体そのものだった。これが他人の体だと言うのか？

「……………ちなみに、僕の身体が元通りになるのはいつですか？」

とりあえず今一番気になる事を恐る恐る訪ねた。

「そうだねえ…最低でも500日は掛かるかなあ？」

「ハアツ!!?」

つまりなんだ？

一年半もこの訳の分からない状態でいろと!!?

人の気も知らずにサラリと口にするマルシル。

「何だ、それならすぐだな」

「よかつたね♪おにいちゃん」

「ふざけんなああつ!!一年半のどこがすぐだ!!!」

憤る響輔に対し、次狼、ラモンはすぐだという。

彼らの時間感覚はどうなっているのか？

「まあ、気持ちは察するぜ。俺たちもできる限り精一杯フォローするから、そう気をおとすなつて。な？」

キバットが宥めようとするが、落ち着けるわけがない。



「ここがリビングだよ」

響輔の寝ていた場所はキャツスルドランという巨大なドラゴンを改造して作られた城——その天守閣だったらしい。

天守閣は『テナーの間』と『癒しの寝室』があり、マルシルを先頭に一同はキャスルドランを案内され、今いるところはキャツスルドランの大広間のリビングルームである。

「はい起動」

マルシルが指を軽く鳴らすとテナーとは別に広間に響輔が実体化した。

「あ！僕の体がちゃんとある」

テナーがそこにいるにも関わらず、響輔の身体が実体化した。

鏡を覗き込んだり、頬を触ったり、着服しているかどうか、ここに実体があることを確認する。

「キャツスルドランの城内では魂の具現化^{フシユケ}として、君はテナーの身体を離れ実体化することができ。キャツスルドランの城内全てをスクリーンとした『実体のある立体映

『像』とを考えてくれていい。飲食はできないよ」

「つまり今の僕は幽霊ってこと？」

「まあ、囁み砕いて言うかね」

「ヘリオスの原住民であるお前からも直接話が聞きたいからな。何か質問があるだろう。俺たちができる限り答えてやる」

ラモンと力、ヴェデイは席を外し、次狼に促されるままにテナー、マルシル、次狼、響輔は中央のテーブルへ着席し、響輔は色々と質問をした。

「まず、異世界からやって来たあなた達は何者なのでしょうか？」

彼らの説明を自分なりに囁み砕くと、さつきキバットが説明したように『世界』は並行して無数に存在しており、その殆どは互の世界を知りもせずにも生きている。

だがごく稀に突飛つした技術を持つ世界が存在してしまうらしく、そんな世界でエネルギーとして発見されたのが『心の力』——ちなみに『命の色』ライフエナジー、『魂』ソウル、『属性力』エレメンタル等とさまざまな呼び名が存在する。

すべての生物はほかの生物の『心の力』を糧として生きており、その種類は大きく二つに分けられる。

大多数の異世界に存在が確認され、戦う力はなくとも他の種族より強い『心の力』を持つっている種族——

——『アントローボス
人間』

その『心の力』を自分の力として運用し、姿を変えて戦う事の出来る種族——

——『魔の者』

そして魔の者はさらに細かく種族が区分されている。

次狼は『ウルフェン』、ラモンは『マーマン』、力は『フランケン』、マルシルは『エルフィン』、ヴェディは『シーケット』、テナーは魔の者の中で最強と言われる種族『ファンガイア』である。

しかもテナーはファンガイアの世界を担う5人の重鎮のうちの一人『チェツクメイトファイブ』。その中で『クイーン』の称号を持つファンガイアであるらしい。

「どっからどう見ても普通の人間にしか見えないんだけどなあ……」

説明で納得のできない響輔は次狼やマルシルの姿をまじまじと見る。

「魔の者は基本君たちと変わらない姿をして力をセーブしている。けれど、感情が高ぶったり戦う時となればその姿に戻り戦うよ。人間は戦う事より知能や科学が発展し、長い年月をかけて種としての本能よりも感情や精神が繊細なつたから戦う姿を欲しなかつたんだろうね」

「じゃあ、テナーも……?」

マルシルの説明で恐る恐る訊くも、テナーがそれを否定する。

「いや、私は——ファンガイアは例外だ。見た目は人アントローボス間とあまり大差ない。だが、特徴として魂フシユケイが増幅し、体から溢れ出る際に下顎から首にかけてステンドグラスの様な模様が浮かび上がったたり、私を含め一部のファンガイアは影創造シヤドウクラフトという技を使いこなせる。影創造は魂を黒い粘土状に具現化し、それを整形、コントロールする力だ。だが運用は困難を極める。魂を糧フシユケイにそれをコントロールするためにも体力と精神力を大きく削る上に、一度に使用できる影創造シヤドウクラフトの量にも限度がある」

「あ、後どうして僕の身体がテナーの身体に収納される事になったのでしょうか？」

「私の身体では不服か？」

「い、いや…そうじゃなくて」

何となく疑問に思った響輔は質問してみる。

テナーは不満を言われているみたいで少し響輔を睨むも響輔は首を横に振って続ける。

「そのまま見殺しにしちゃわなかったのかなくと、思いまして」

「ただだけお前はテナーを冷酷な奴だと思ってんだ」

さすがのキバットも呆れ気味に言った。

「まあ、任務に支障をきたさないのなら見殺しもやむなしではなかったな」

「ひどいー」

「そもそも貴様が割って入ってきたのだろう。首を突っ込みその首、斬り落とされても文句は言えまいて」

「じゃあ、どうして?」

響輔も疑問に思った。

何故自分の体を貸してまで自分を助けてくれたのか?

「見殺しにするのも寝覚めが悪いと思つたからだ——なに、ただの気位だ」

「それにテナーの身体でなければ君を生かすことは難しかったみたいだしね」

説明によると、全ての生物の存在は『魂』、『生命』、『身体』の3つで構成されている。

今は禁忌とされているが、昔フアンガイアは他の種族——主に人間の魂と生命を喰

らっていたらしく、魔の者は他の生命を自身の身体に取り込みやすい構造となつてい

らしい。

それを応用してフアンガイアであるテナーの肉体に響輔の魂と生命を生きたまま保

管する事に成功したらしい。

「かなりの荒技だったが、流石は一流の呪術研究者だなマルシル」

「お褒めいただき光栄でございます。クイーン」

仰々しくお辞儀をするマルシル。

「えーと、魂と生命って別物なのでしょうか?」

「そうだね。分かりやすく言うならばこのティーカップが生命、この紅茶が魂。つまり、生命が魂を収納する器で、さらにそれらを収納する大きな器が身体だ。今君たちは『一心同体』ではなく一つの体に二つの魂を内蔵した『二心同体』といったところかな？」

マルシルはそう言って飲みかけのティーカップに熱い紅茶を注ぎながら説明した。

響輔は自分も紅茶が飲みたいと思ったが、紅茶の匂いを感じられない。

今の自分は幽霊なので飲食ができないことを思い出し諦めた。

「あのツインテールを欲していた怪物も魔の者なのでしょうか？」

「あいつらはセラールでは記録されていないが、恐らくそうだろうな」

と、次狼はコーヒーを片手に答える。

「実際録画したのを見てみようか？」

マルシルが取り出したのは占いなどでよく使う水晶玉だった。

マルシルが何やらブツブツと日本語ではない言葉で呟くと水晶がまるで電球のよう

に明かりが灯り、水晶の上に昼間の光景が3Dの立体映像として映写した。

まるでフィギュアで作ったジオラマの様に立体的にテイルファングの戦いを観察でき

る様になっている。

リザドギルデイとトードギルデイ、アルテロイドとテイルレッド、テイルファングが

大立ち回りを演じて、必殺技を食らわせるところで映像は切れた。

「すごい！まるで3D映画みたいでした」

「映画の鑑賞会ではないわ、たわけ」

「魔の者だと言つても、こいつらは魔の者だとは断言できないね。これはもつと違う生命体なのだと私は思う」

命体なのだと私は思う」

マルシルも魔の者の一種だとは断言できないらしい。



ばん！と乱暴にテーブルを叩くバクのような姿をした怪物。

「リザドギルデイとトードギルデイが倒されただど!? ただの人間にか!!」

「馬鹿な、ありえぬ!!」

「油断したというだけでは説明がつかんぞ!!」

一面鈍色の大ホール。

あたかも企業の会議場のように丸いテーブルが置かれ、個性豊かな怪物一同が集う。

ここはアルティメギル秘密基地。空と海と大地ともいわず知れぬいずここに存在する、

神秘と科学の結晶。

基地であり、移動母艦。そして、怪物たちの住まうコロニー。

切り込み隊長として意気揚々とこの世界での属性力収集エレメーラに偵察員のトードギルデイを引き連れて出発したりザドギルデイの先鋒部隊が一日足らずで壊滅した。

しかも人間の手によって。

その報道は大きな衝撃となり、同胞たちに波紋を広げた。

「むううう、どういうことだ！この世界の文明レベルは低いが属性レベルはこれまでにないほどの高数値、理想的な環境！そう結論づけたはずではないのか!!」

「そういえば昨晚トードギルデイ殿が左目を人間に潰されたと…」

「何い!!?」

「馬鹿な!!人間相手に!?!」

「寝耳に水だぞ！何故そのことを早く言わん」

「俺も聞いたが、何かの間違いや冗談の類かと…」

あちらからもこちらからも怒号が広がり、收拾がつかなくなっていくた。

「静まれえい!!」

その騒ぎを一体のエレメリアンが一喝する。

その声で、騒乱が水を打ったように静まる。

「ド、ドラッグルデイ隊長」

一人のエレミアンが騒ぎを取めた戦士の名を口にした。

ただ座っているだけで凄まじい闘気を発散させる。

「リザドギルデイの力は師である我がよく知っておる。それを打ち負かすほどの戦士が、密かに存在しているということだ」

「これを見よ瞬殺されたようだが、映像を記録していた戦闘員アルテロイドが転送してきたものだ」

大型モニターに赤いツインテールの幼女——テイルレッドが映し出された。

「リアドギルデイ殿はこの者に……うむむ、あのツインテールならば領ける」

「なんとという美しさ……麗しさ……こ、これがこの世界の守護者か！」

「神が生み出した偶然としか言い様があるまいて。事前に知れる神の文明レベルなどあくまで表層の物。その世界の理、限界を超越した戦士が一人二人存在したとて、何ら不思議はない。これまでも、我らを脅かす戦士とは何度か相見えたであろう」

「ですが今までの強敵はすべからく我々の手で——むおおこれは!」

苦境な戦士たちが興奮のあまり、物々しい音を立てて立ち上がる。

リザドギルデイを悼んでいたはずが、完全なツインテール品評会となっていた。

「して、隊長！リザドギルデイ殿とトードギルデイは二人の人間によって倒されたはず、もう一人は？」

「何ですと!?!」

「もう一人!?!」

一人のエレメリアンの発言にその場にいたエレメリアンすべてが驚愕の声を上げる。

「こころなしがその音量はリザドギルデイが倒された時より大きかった。

「無論、映像はある。だが……——」

隊長のドラグギルデイはどことなく渋った様子を見せる。

如何なる敵にも臆さない百戦錬磨のドラグギルデイには考えられないその様子にその場にいる者は騒然となった

「隊長! 何を躊躇っているのですか?」

「まさか! あまりにも恐ろしき相手だあつたと?」

「我が魂はアルティメギルと共にあり!!」

「戦う戦士としての覚悟は出来ております!!」

「どうか、もう一人の戦士の映像を!!」

ドラグギルデイは止むを得んとなりながら、その映像を流した。

「「「「「こ、これは!?!」」」」」



「この鎧は何なのでしようか？」

響輔は水晶に映写したテナーを指さして質問する。

「アレはファンガイアの中でもごく一部しか知られていない秘宝中の秘宝——『キバの鎧』だ」

「キバの鎧？」

「ファンガイアの魂^{フシユケ}を極限まで高め、さらにそのもう一段階上のエネルギー——^{アクティブフォー}魔皇力へと昇華し、戦闘能力を向上させる鎧だ。着衣するための魂^{フシユケ}が足りないファンガイアは纏うことさえ叶わず、鎧をコントロールするキバットとも心底信頼され、相性が良くなくてはその鎧の力を発揮することができない」

「基本はチェックメイトファイブの5人に鎧が賜はされ、『キバの鎧』はテナーのを含めて5種類と『サガの鎧』が確認されている。——キングには『運命のサガ』、クイーンであるテナーに『黄金のキバ』、ナイトに『白銀のキバ』、ビショップに『赤銅^{せきどう}のキバ』、ルークに『青銅のキバ』、そして現在行方不明の『暗黒のキバ』」

「本来、鎧は貴重品故、本国の守りとして使われる。異世界に持ち出すことなど、余程国に認められ、信頼されていなければ不可能だ」

「キバの鎧はファンガイア以外は着用できないが、もしチェックメイトファイブの一人が他世界の種族と手を組んだりしたら、そのパワーバランスはひっくり返るだろうな。

下手をすればひと世界、壊す事も訳はない」

「そこまで……!?!」

キバットと次狼の説明を聞いて響輔は驚愕した。

「鎧つていうのはそんなもんだ。おいそれと外の世界へ持ち出していいもんじゃねえ」

「そして、何故ファンガイアが魔ダイモーンの者の中でとりわけ最強と言われているのか……」な

ぜだと思う?」

「どうして?」

マルシルの脈絡のない急な質問に答えが思い浮かばず、響輔は逆に質問で返した。

「驚かないで聞いてね。ファンガイアの力の源それは——」

「それは……?」

「ツインテールだ」

「………はい?」

マルシルの回答に響輔は混乱し、気の抜けた声を出す。

「ツインテールだ」

「大丈夫、今のは聞き取れなかったって意味じゃないから」

響輔は頭を抑えた。

ツインテールとは響輔の知る中で女性の髪型の一つだという事しか知らない。

それがなぜファンガイアを最強にさせるのだろうか？

「ファンガイアの女性は太古の昔から髪を二つに結う習慣があったらしい。起源は不明だが、それらはファンガイア特有の牙を象っているとされている。ファンガイアを最強と言わしめられる理由は本能的に愛していたからだろうな——ツインテールを。それがファンガイアの心の力を高めたのだとされている」

「それがどうしてツインテールなのですか？もつと愛とか友情とか夢とか、そういうほうが現実味があるんだけど」

「さあな、ツインテールは魔の者の中で最大のエネルギーと言われる心の力——ライフエナジー命の色ダイモンでな。詳細はあまりわかっていない。無論俺の種族であるウルフェンや他の魔の者もダイモンしつかり命の色の源である属性は持っている」

マルシルと次狼の説明を聞いていく内に一気に現実味がなくなってきた。



キャツスルドランでの話も終えて、響輔は無事帰宅。母・真夜からも入学式くらいの

事位しか聞かれなかった。

その深夜、響輔が疲れ果てて大の字になり寝入っている響輔の部屋の窓が開き、マルシルが入って来た。

「ここから、無断で姿を変えるんじゃないよ。テナー」

「マルシル」

響輔の姿はいつの間にか消え、テナーの姿が現れる。

「任務の最中すまん。早急にこの小僧の体の修復を任せるぞ」

「そうだね。だけどテナー、君はもつと真剣に彼と共存することを考えなきゃ」

「なっ！何故だ!?!」

早く響輔の体を修復し、解放されたいテナーに対し、マルシルは響輔と共存する事を勧める。

「昼間の戦いで、君は自分の能力の低下を感じたはずだ。それは気のせいじゃない。
ブラック・ナイフ
黒刃刀の切れ味がいつもより格段と落ちていた」

本来ならトードギルデイの目玉同様、
ブラック・ナイフ
黒刃刀でトードギルデイの腹をかつ捌く事が出来たはずだった。

「私の中にこの小僧の生命を移植をしたのが原因だろう!」

「いいや違う、そんな事は問題じゃない。君の心には支障をきたさないはずだよ。君と

君の中にいる響輔君との共存がうまくいっていないからだ。このままだと最悪……」

「わかつている!!」

釈迦に説法だった。

テナーが響輔を取り込んだ理由は気位だと言ったが、実は嘘である。

本当の理由は他にある。

強靱な肉体を持つファンガイアのクイーンであるテナーとしても、人間の魂を生きのまま自身に宿すのがどれ程危険な行為かそれはわかっている。

「もし精神融合が起こり、私が消えれば、この身体は小僧にくれてやる」

「テナー……」

「音也おとやだけではなく、その子供を殺してしまったとなつては、私は音也に顔向けができない」

「なんでそんな自虐的な事を言うんだ、テナー。それに音也は君を助けるために——」

「同じだ!!私ほただ…音也に受けた恩と償いを少しばかりでも清算したいと思っただけだ!!他に意味はない」

『音也』という単語が出てきた途端、冷静沈着な普段のテナーからは考えられないくらいにヒステリックとなった。

「テナー……」

「いいから貴様は、修復の方に力を注げ!!私は寝る!!」

テナーは布団を被り、響輔の姿に戻る。

これ以上話したくはないかの様に。

マルシルは先ほどヒステリックとなったテナーの顔がフラツシユバツクする。

「テナー、私は信じているよ。音也と同じ様に、響輔君を信頼できるようになれると。その為に私達も協力を惜しまない」

昼間の戦いの最中、ほんの一瞬のみフアングの魔皇^{アクトエイブフォース}力が向上したのをマルシルは観測した。

「響輔君はきつと、未だに欠けている君の心を埋めてくれる」

プレヴュー／喝采・ツインテール

陽月学園高等部体育館。

一時間目の授業を中止し、全校集会が開かれていた。

後ろに数人のメイドが控え、壇の上には、昨日あの現場にいた生徒会長、神堂慧理那。

その集会の内容は勿論の事、マクシーム空果の件である。

「皆さん。知つての通り昨日、謎の怪物たちが暴れまわり、町は未曾有の危機に直面しました」

まあ、確かに未曾有も未曾有だね。

金とか命や地球侵略ではなく、明確な意思を持つてツインテールを狙う異世界の怪物など前代未聞である。

おまけに響輔の肉体は既に死に、今は異世界からやって来た美女と一体化している他に類を見ない体験を現在進行形でしているのだから。でもまあ、一体化しているのが美女というのは存外悪くないかもしれない。

「実は、このわたくしも現場に居合わせ、そして狙われた一人なのです」

「なっ……!!」

「なんだって!」

慧理那のその告白は多くの生徒に衝撃を与え、それが徐々に騒ぎへと発展し始めた。

「どこのどいつだ許せねえ!!」

「刺し違えてでもぶっ殺してやる!!」

「おい!俺の体にダイナマイトを巻け!黙れ!言う通りにしろ!!」

まるで我が事のように、いや我が事以上に怒りを爆発させる。

生徒たちは暴徒の群れと化し、男女問わず声を荒げて叫ぶ。

響輔の聴く周囲の生徒の心の音色はまさに雷鳴が如く、四方八方から耳を劈き、この体育館を覆い尽くした。

「皆さんのその正しき怒り、とても嬉しく思いますわ。他人のために心を痛められるのは、素晴らしいことです。まして、わたくしのような先導者として未熟者のために」

会長はその小さな体を身振り手振りして、熱く語る。

「しかし、狙われたのはわたくしだけではありません。この中にも何人かいらつしやるでしょう。まして目を学校の外に向ければ、さらに多くの女性が、危うく侵略者の毒牙にかかるところだったのです」

その発言に再び生徒たちはざわめくが、それを遮る様に、しかしと会長は拳を握り、強く言った。

「今こうしてわたくしは無事ここにいます。テレビではまだ情報は少ないですが、ネットなどで知った人も多いでしょう。あの場に、風のように颯爽と現れた……2人の正義の戦士に助けていただいたのです」

途中から少し声が甘くなっていた。それはまるで憧れの君に心を焦がす姫君。嫌な予感を感じて背中を冷や汗が伝う。

「わたくしは、あの少女たちに、心奪われましたわ!!」

うおおおおお！ と喝采が起きる。

「その言葉を待っていたんだ会長!」

「よかった……胸を張って小っちゃい子はあはあと言うのに、正直引け目を感じていたんだ!」

「会長!一生付いていきます!」

「私もあの現場にいたわ。特にテイルフアング様はすべからく尊いよ!」

「私はレッドたん!」

「私は2人共々惚れ惚れしちやったわ」

男子だけでなく女子の方も大騒ぎで、刑事映画のラストシーンで作戦成功の知らせを受け一同大喜びするシーンの様だったが、全く持って感動出来なかった。

もう日本の未来が心配になるような発言が次々と飛び出してくる。

「これをご覧あれ！」

会長の合図でスクリーンが準備される。

そこに映し出されたのは、誰が撮影したか知らない最高画質のテイルレッドの姿だった。

「「ウオオオオオーッ!!」」

「オア——ッ!!」

全校生徒が昨日の戦いの映像に心躍らせ、体育館はスタジアムみたいに歓声に包まれた。

その時、響輔は歓声は上げなかったものの周りの生徒同様、テイルレッドに少しばかり魅入っていた。小さい身体ながら自分の背丈より大きな怪人を相手に立ち回るその姿には目を見張るものがある。そして、テイルレッド以上に楽しんでいるテイルファングの出番はまだかまだかとそわそわしていた。

「テイルファングは!? テイルファングはまだ映らないの!？」

テイルファングの戦う様は昨日マルシルの映像で見させてもらったが、響輔はテイルファングの映像も大きなスクリーンで観れる事に不安半分、期待に胸が大きく高鳴っていた。

そして、テイルファングがついに画面に入ってきた。

「えっ?!!」

そのテイルファンングの映像を見た時、響輔は思わず面食らった。

それは他の生徒達も同じだろう。

「ピンボケしてる!?! って言うか写り悪!!」

『当然だろう』

内にいるテイルファンングご本人——テナーがそれについての説明によると、元々ファンガイアは人間のカメラや鏡には写りにくい性質に加えて、テイルファンングの首飾り・ダークネスチョーカーの効果でその姿が完全に隠蔽されているのである。

テイルファンングの映るシーンのみ偶然画面全体が曇りガラスみたい霞みがかったピンボケをしたり、画面からはみ出したり、逆光線になったり写りが悪くなっているのだ。顔を写した物が一枚もない。

「クソツ!! やっぱりテイルファンングさんの画像は写りが悪いのか!!」

「神よ!! なぜこの様な酷い真似を!!」

「まるで生殺しじゃねえか!!」

「お金! お金が欲しいの!!」

まるでアダルト画像を閲覧していたら『ここから先は会員のみ閲覧可能です』と表示されて激怒しているユーザーみたいだった。

でも響輔は「僕はマルシルに頼めばいつでも見れるだろうなく」と、優越感たっぷり
の余裕の笑みを浮かべていた。

『なに頬を緩ませている?』

「え!!イヤ、別に!？」

『全く、戦いは演舞と違つて見せ物ではない。それなのに此奴らはそんなものに一喜一
憂しおつて、度し難い。そうは思わんか?』

「い、いいじゃないか、せせこましいなあ。それだけ世界が平和なだけだよ。アハハハ」
少し呆れているテナーもこれだけ騒ぐ元氣のある生徒たちにひと安心する響輔な
のであった。



同じ頃、アルティメギル基地

「解析班!! テイルファングの画像解析出来たか?」

「ダメです。あらゆる手段を尽くしましたが、一向に画像を鮮明にする事は出来ません！」

「また物によつてはさらに画像が荒くなってしまうものもありまして！」

「ええい、くそ!!」

「これではテイルファングの対策が進められぬではないか!!」



「テイルファングの映像には多少の不備がありましたが、神堂家はあの方々を全力で支援すると決定しました！皆さんもどうか、わたくしと共に、新世代の救世主を応援しましょう！」

歓声は更に高まった。

誰かが『ツインテール』のコールを始めたかと思えば、それがあつという間に数人に伝染し、ついには大合唱になった。

「「ツインテール！ ツインテール!! ツインテール!!!」」

「……………」

『これが人アントローボス間の日常というものか。些か、未来が不安となるな』

「テナー、人間を語るならこの場面は見なくていいと思うよ。誤解すると思うし。と言うか人間の僕から見てもこの光景に何とコメントしていいのかわからないから」

『確かに絶句するな。この光景を当事者が見れば特に』

嬉しいような悲しいような、なんとも言えない人々の坩堝に苦笑いを浮かべ、響輔はあのツインテール好きの男子生徒——観束総二の方へ顔を向けた。きつと観束君もテイルレッドかテイルファングのツインテールに興奮しているんだろうなと思いつつながら。しかしそこには予想外の反応をした観束君がいた。なぜか顔を青くし、憂鬱とばかりに項垂れる観束君の姿があつた。



昼休み

今日は平常授業の一日目。

まだ新しい友人と昼食というわけにも行かず、弁当派も食堂派も中学の頃からの知り合い同士で食べるのが殆どであり、響輔は自分の席で、昼食である弁当を広げる。

今日のおかずは昨日の夕飯の残りである鳥の照り焼きハンバーグ。

昨日、テナーは自宅へと帰った響輔が手際よくこれを料理しているのを見ていた。

一体となつている故感覚は共有しているので、この照り焼きハンバーグの美味しさはテナーも良くわかつている。

『いつ見ても美味そうだな。昨日見ていたが、料理は得意な方か?』

「うん、うちの母さんは体が弱いからね。僕はよく家事を手伝つてるよ」

『今度、我が城にて夕食を振舞つてはくれまいか?』

「みんなの口に合うかな?」

『時に小僧……』

「ん?」

『貴様の父親はどうした?』

「え? 父さん?」

『うむ』

何故この様な突拍子もない問いを投げかけて来るのか分からなかったが、響輔は気に留めずに答える。

「父さんは僕が生まれた時からいなくて、母さんに訊いても何も話してくれないだ」

『そうか』

何とない様な会話だったが、この時響輔はテナーの声色がかすかに曇っているのに

薄々気付いていた。

「それとテナー、小僧じゃなくてちゃんと名前で読んでよ。あとあんまり人前で話しかけないで。独り言喋ってるみたいでこれじゃあまるで変な人みたいだよ」

『貴様の体裁など些細な事だ。それに私から見れば貴様は小僧だぞ』

「……テナーって年いくつ?」

『さあな、ファンガイアと人アントローボス間は年の周期や寿命が異なるからな』

声を潜めてテナーと会話する響輔は窓際に嬉々としてたむろっている男子たちに視線を向けると、何人かが持っているタブレット端末に皆で釘付けになっているようだ。

「おー!この写真はまだみてないな!!」

「決めた!今日から俺がテイルレッドちゃんのお兄ちゃん!!」

「テイルファンング様♡」

「ああ、お姉様……いつかお会いしたいですわ」

「うへへ、剣持ってて可愛い……斬ってほしいなあ」

「おれはテイルファンング様のヒールで踏んでほしいなあ」

これが私立高校の昼休みの風景とは思えなかった。いや、思いたくなかった。

ううううう!!」

そんな揉め事を横目で見ながら、響輔は昼休みが終わらないうちに食べ終わろうと必死で弁当をかきこむ。



「はあ〜」

「そーじ、元氣だしなつて。人の噂も七十五日だつて言うじゃん」

「2ヶ月以上もこのままなんて、悪夢だよ」

憂鬱な総二の席へ弁当を持って励ますのは総二の幼馴染・津辺愛香。

ふたりは周囲に聞こえないように小声で話す。

「それにしてもあのテイルファンングって何者なんだろうな?」

総二が今テイルギアやエレミアン、それと同じくらいの謎の存在。

「トウアールを締め上げて、知らぬ存ぜぬの一点張りだったしね」

総二はテイルレッドとしてキャッスルドランを間近で見た。

ロボットや作り物の類ではない。呼吸も重量感も本物の生物だった。

あんな生物、この世に存在するとは思えない。

「やっぱりテイルファンクも異世界からやってきたのかしら？」

「まあ、そんなことはどうでもいい。けど俺はあの人の横に立つてわかったことがある」
総二が真面目な口調になり、自分の拳を強く握る。

そんな総二を見て愛香は少し真剣な顔になった。

「何？」

「見事なツインテールだった……いで」

「何デレデレしてんのよ！」

天井を眺めて恍惚としている総二を嫉妬した愛香は耳を引っ張り現実へ戻す。

「でも、また会いたい」

まるで聖夜の晩、サンタクロース本人からプレゼントを貰った子供みたいにその時の
総二の瞳は純粹に敬愛の念が込められていた。

「ちよつとそーじ、敵かどうかもわかんないのよ。胸だつてあんなデカイし！」

「そんな敵視すんなよ」

「そーじ、トウアールの時もそうだけど、あんたつてば少しは疑うことを……」

「あのお、観東君だっけ？」

総二と愛香の会話を遮るように声がかかる。

「誰？」

突如として話しかけてきた第三者に二人は異口同音と答える。

そこには弁当を食べ終えた紅響輔がいた。

「何で俺の事を？」

「いやあ、だつて入学早々あんな目立ち方されたら、ね？」

隣にいる愛香に同意を求めると同時に視線を泳がせる。

「ああ、うんまあ、そりゃあねえ……」

愛香も弁當に困るようには答える。

ガーンというオノマトペが聞こえてきそうな表情をする総二。

響輔も総二の様子を見てアタフタとするが、愛香は「気にすることはない」と短く言う。

「はじめまして、僕は紅響輔。よろしくね」

「観束総二だ。よろしく」

「あだし、津辺愛香」

「よろしく」

互いに自己紹介が終わったところで響輔は総二の机に肘をついて、視線を合わせる形で話しかける。

「観束君はツインテール好きなの？」

「大好き——ハッ!!」

ほぼ条件反射みたいに返されて苦笑いの響輔、本人も失言の後でハツとなり、横にいた愛香は小さく、バカと呟いてこめかみを抑える。

「じゃあ、観束君はテイルレッド——」

その言葉を聞いて総二と愛香は心臓が止まりそうになるも、

「——のファンなの？」

最後の言葉でホツと安堵の息を吹いた。

「何でそう思うの？」

総二の代わりに愛香が答える。

響輔は不思議に思うも。

「だって、観束君ツインテールが好きみたいだし、好きじゃないのかな？ って思っ」

「ま、まあ好きだよ。それが？」

自画自賛するような言い方だが、こう答えるのが妥当だと総二は答える。

「集会の時だって観束君、なんか血の気が引いて青ざめた表情してたと思うんだけど、あ

れは——」

「はえっ!!? 見てたの!!?」

「あ、あれはその……——」

まさか目撃者がいるとは知らず、総二も愛香も言い訳を模索していると。

「やっぱり小さい女の子が戦うのは危ないって思ったんだよね?」

「え?」

「見た感じ二桁に行くか行かないかの年齢だったし、観束君はテイルレッドが怪我をしないか不安だったんだよね?」

「え?あ、ああ、まあ…そうだよ」

肩透かしな気分だったが、総二はテイルレッドのファンとして響輔に認定されてしまったことに複雑に思う。

「ちなみに、テイルファンングは観束君的にどう思うの?」

「すごく素敵なツインテールだった!!」

「え?集会で見たあんな断片的な映像で?」

「あっ!!」

またしても反射返答。

横にいた愛香も頭痛を覚える様に頭を抱える。

「まつ、まあ…:実は俺たちもあの場にいたんだよ。マクシム宙果にそこでテイルファンングを見て」

嘘は言っていない。

「あ、そっか。じゃあ、テイルファングはどんなところが素敵なの？」

「テイルファングは俺、じゃなくて……テイルレッドのツインテールに比べて色は深みのあるワインレッドのツインテールなのが彼女のアイデンティティになって、戦闘員をなぎ払うと同時に流動するみたいに動くあのツインテールは本当に美しかった。きつと宝石のルビーがふわりふわりと絹みたいに柔らかくなればあんな——ハッ!!」

そこまで流暢に語ったところで総二は我に返る。

今までの経験で友人にツインテールを熱く語った結果、総二はいつも不審な目で見られ距離を置かれた。

恐らくこのクラスメイトも今までと同じような結果に、と響輔に視線を移すと——

「すいん」

不審な目とは程遠い尊敬を込めた眼差しだった。

「入学式の時から観束君を見て思ってたんだ。どうしてそんなに真っ直ぐな眼をしてツインテールに熱中できるのかって」

「えーほ、ホントか!?!」

総二は意外と言わんばかりの表情をする。

それは隣に座っていた愛香も同じことだった。

「観束君はどうしてそんなにツインテールが好きなの？」

「そ、そりやあ…ツインテールを好きなのに理由なんてない。ただ、俺が本気で好きだと
思ったモノのを好きでいて何が悪いんだよ」

「(まただ……)」

その時の響輔は総二の心の音楽に聞き惚れていた。

ツインテールをここまで愛でる少年。

周囲の音色とは比べ物にならない壮大で昂然たる音楽に俄然興味がわいた。

「ねえ、観束君、もし本当にツインテール部を設立することになったら、僕も入部してい
い？」

「本当か!?!いいぞ」

「ちよつ、ちよつと！まあ、いいか…」

ツインテール部入部に愛香が何か言おうとしたが、やめた。

「それと、俺のことは総二でいいぜ。響輔って俺も呼ぶからさ」

「改めてよろしく、総二君」

「あたしも愛香でいいわよ」

「よろしく愛香さん」

しかし、紅響輔と観束総二は知らない。

互がこちらから共に戦っていくツインテールの戦士だということに。

その正体を知るのはまだ先の話。

チューニング／同調のための特訓

——キヤツスルドラン

キヤツスルドラン内部は変幻自在である。

内部に貯蔵している魂^{フシユケイ} Ⅱ 属性力^{エレメーラ}を使って内部の構造を変える事はおろか、幾つもの部屋を作り出し、そのキヤツスルドランの内部面積以上の大きさに変える事も可能である。

そして今響輔達がいる所はキヤツスルドランの訓練場。

「はあっ！」

「やあっ！」

「たあああ!!」

次郎から剣術、ラモンから射撃、力^{リキ}から格闘術を学ぶ響輔。しかし、全く身につかない。

次郎からは木刀で分らないくらい叩かれ、射撃の的は外しまくり、力^{リキ}からも投げられ、殴られる。

「も、もう…無理……」

今の響輔は魂フシユケと生命フネウマそのものが響輔の姿に具現化された、いわゆる幽霊の様なもので痛覚はないのだが想像以上にハードな特訓にダウンしていた。

「それは冗談か？今の貴様は幽霊そのものだ。疲労や痛覚などあるはずがなからう」

テナーは呆れ気味に言った。

「と言うか、お前体力なさすぎだろ」

「よくいままで生きてこれたね」

「弱、いな」

「まあ、努力など数日そこらで身につくものではないからな。気長に頑張るしかない」

上から次狼、ラモン、力リキ、テナーの容赦ない言葉が響輔の背中に突き刺さる。

何故こんな特訓をしているかというマルシル曰く、響輔とテナーの心は今うまく共存できていないらしい。

ならばと、響輔にも戦い方を覚えてテナーの戦いについてこれる様にしようというのだ。

しかし、連日この調子で特訓をしているのだが――

「うええええ…」

「吐こうとしても無駄だぞ。全く、便利な体だな。いや、今は身体ないが」

「しかしここ連日、この調子で大丈夫か？」

「うん、この効率がいいとは思えないし……」

「間ち、がって、るのか？方法が」

「何を言うか。小僧自身が戦いのイメージを掴めれば、テイルフアングの強さに繋がるはずだ。多分」

響輔の特訓に皆は疑問を持ち始めた。

「こんなやり方で本当に合っているんだらうか？」

「でもどうしてイメージが強さに繋がるの？」

「前にも教えたが、鎧の戦闘に生身の筋力はあまり関係ない。身に纏うルシファーマタル魔金属の重さは主にファンガイアであるテナーの心の有り様によつて、その重量、硬度を自在に変える性質を持っている。修行を積んでルシファーマタル魔金属と命の色ライフエナジーを通わせたり、強い意志や信念を持つことで、装着者にとつては羽根より軽く感じるようになる。鎧を纏うテナーが戦闘を行い、キバットがアクティフフォース魔皇力のコントロールを行う。内面にいる響輔に求められるのは——イメージで求められるのは——えーと、何だ？ルシファーマタル魔金属のコントロールはテナーが担っているし……」

「え？」

「だからな、小僧は戦いのイメージを掴んで、それからな…あれ？」

フオローしようとした次狼やテナーにすら言葉に詰まり、疑問に思われてしまう始末。

「え？じゃあつまり、響輔にいちやんつて足手纏あしぢまいつて事？」

「ぐはあっ!!」

ラモンの純粹で容赦ない致命的な一言で響輔は膝から崩れ落ちた。幽霊でも膝はあ
る。

だれも否定しなかった。

つまり、全員同感しているということだ。

床に手を付き、涙を零す響輔。

「僕、どうしたらいいんでしようか？」

そんな響輔に掛かる不意の声。

「全く、何やってんのさ」

入口の方へ皆は一斉に振り返る。

そこには片手に新聞を携えたマルシルが呆れ顔で立っていた。

「あーマルちゃん」

「よっ、おつかれちゃん」

「ヴェディ、は、どう、していい、る？」

力がマルシルに対して疑問を口にする。

ここ最近ヴェディ、それにキバットの姿が見当たらない。

普段ならいつの間にか現れて冷やかしに来るのだが。

「キバットと一緒に工房へ籠っているよ。おそらくフェッスルの調律だろうね」

ヴェディの仕事は魔道具の作成。

マルシルのエルフィン族、ヴェディのシーケット族はファンガイア族、ウルフェン族と比べて戦闘力は低い。代わりに長命なエルフィン族は魔術や学問、器用なシーケット族は魔道具の作成に特化した一族である。

『キバの鎧』の作成にはこの二つの種族が関与しており、ヴェディは時折キバの鎧やキャッスルドランの調整をしているのである。

最近は鎧の調整ではなく、フェッスルの調整の方に力を入れているらしい。

「ところで、今日のエレメリアンは？」

「テイルレッドがもう倒したよ」

「そうか」

テナーがマルシルを訪ね、いつも通り新聞や最近創刊された雑誌を差し出す。

その一面や表紙にはでかでかとテイルレッドが掲載されていた。

回想 

「疲れた……」

高校生活一日目の放課後、総二はぐったりとした様子で下校していた。

「そんなにハードな授業だったのかなあ？ねえ、愛香さん」

「まあ、そーじにもいろいろあるのよ。色々とね」

愛香は総二の心境を読み取っている風であり、総二の肩を叩き元気づけている。

「そういうえばあのテイルレッドやテイルフアングが戦っていた怪人達、敵討ちにでもまた来るのかな？」

響輔はふと気になっていた。

「まっさかー、昨日の今日で……」

愛香さんは響輔の言葉に苦笑しながら、角を曲がる。

そして……

『この世界に住まう全ての人類に告ぐ!』

突然、特大の音声が流れたと思うと総二、愛香、響輔は呆然と一斉にカバンを落とし、落とした。

『我らは異世界より参った選ばれし神の徒、アルティメギル!』

聞き覚えのある名前に嫌な予感がし、空を仰げば、空中に巨大スクリーンが浮かび上がり、竜の姿をした怪物が偉そうに足を組みながら玉座に座っていた。

『我らは諸君らに危害を加えるつもりはない!ただ各々の持つ心の輝きを欲しているだけなのだ!抵抗は無駄である!そして抵抗をしなければ、命は保証する!!』

町中にあるテレビやラジオ、電子機器類から同じような声や映像が聞こえてくる。総二も携帯のワンセグを起動させると、どのチャンネルを回しても空のスクリーンと同じ映像が流れていた。

『だが、どうやら我らに弓引く者がいるようだ…。抵抗は無駄である!それでもあえてするならば…:思うさま受けてたとう!存分に挑んでくるがよい!!』

『これ、世界中にむけて発信しているのか!』

『まさか電波ジャック!?!放送電波全てに介入しているの!?!』

『あの怪人達、本当に地球をマルごと侵略するの!?!』

総二も愛香も響輔もこの宣戦布告と言わしめる奴らの所業に足をすくませた。

『ふはは!!ド派手な連中よな!これはしてやられたわ。ふははははははははは!!』

そんな響輔の心境を知ってか知らずか、テナーの方はアルティメギルらの宣戦布告に愉快そうに高笑いをする。

「ヒソヒソ(何嬉しそうにしてんの?)」

『これでやつらは正体不明の生物から、ただの害悪な侵略者——この世界における悪党へと成り下がった。私の任務はあくまで調査であり、例えファンガイアにも超えてはならん掟の一線が存在する——他の世界の秩序を乱す事はなど以ての外。だが、外来の侵略者が来たとなれば話は別だ。これでおおっぴらに奴らを叩き潰せる大義名分ができた!ふははははははははは!!』

テナーの高笑いの中、偉そうにしていた怪人から亀のような外見の怪人へと映像が変わった。

『我が名はタトルギルデイ!ドラッグルデイ様のおっしやる通り、抵抗は無駄である!綺麗星と光る青春の輝き:体操服ブルマの属性を頂く!!』

だが申し訳なさそうに一人の戦闘員が現れ、そつと耳打ちをする。

『……何、この世界では、今はほとんど存在せぬだと!おのれおろかなる人類よ、自ら滅びの道を進むかああああああああ!!』

絶叫する怪人と、白けた目で絶叫する人類。

亀怪人がいったい何を言いたかったのか最後まで分かることは無く、ぐだぐだのまま
プツンと映像は途切れた。

「「……」」

3人は顔を見合わせ、あははと力なく笑っていると――

~~~~~♪!!      ~~~~~♪♪♪!!      ~~~~~♪!!

「ツ!!」

突如として、聴き覚えのある重低音を響輔は頭の中で感知した。

咄嗟に音源と考えられる方へ顔を向ける。

「ごめん、二人共。僕ちよつと急用を思い出したから」

「あれ? 響輔!」

響輔は総二と愛香の返事を聞く間もなく、二人の視界から離れることにした。

「テナー、今いい?」

『どうした急に?』

「あつちの方向に何かが起こっている。たぶん昨日の怪人かも」

『何? 少し代われ』

周囲に誰もいない事を確認し、響輔はテナーと入れ替わる。

ページユ色の陽月学園の制服は漆黒のコートと赤のインナーへと変わり、髪も深い赤

色の長髪に、鎖で繋がれた枷のような髪留めを使ったジグザグのツイントールへと変わった。

「マルシル、マルシル聞こえるか？」

『何やってるの？』

「私の念波をキャツスルドランへと送信しているのだ。いわば、受話器のない電話の様なもの。マルシル聞こえるか？」

「ああ！ちようど良かった。いま連絡しようと思つてたところなんだ」

「どうかしたのか？」

「今いる位置から南南西4キロ、QR高校つてところにまた次元震が発生したよ」

南南西といえばいま響輔が指した方向だ。隣町か。

「(まだまだ。まさか本当に感知しているのか？昨日も一昨日も怪人の出現場所を特定していたが、まさか本当にマルシルの言う通り、——)」

と、テナーは思考を巡らせていると。

『テナー、またエレメリアンって怪人が現れたの？』

「そのようだ」

エレメリアンの出現を聞くと響輔は当然の如く慌てる。

『じゃあ、早く行かないと』

「待て——マルシル、テイルレッドは到着しているか？」

「ああ、ちようど今来た所。どうするの？テナーも行く？」

「苦戦しているか？」

「いや、優勢っぽい。怪人は「ぶるま」がどうだと言っているけど」  
「劣勢でなければ良いか」

テナーは今回テイルレッドに任せる事にした。

『行かないの!?!何で!?!』

「今の私は全力を出せん。訳はキャツスルドランに帰ってからだ。それに、しばらくはテイルレッドに任せることになるかもしれんしな」



それでテナーは自分の能力が低下していることを響輔に説明し、響輔は戦闘の勘を少しでも身に付けようと特訓を開始して数日。

「戦いはテイルレッドちゃん全部戦ってるけど、大丈夫かな？」

ラモンは新聞を広げて呟く。

「今じゃ日本だけじゃない。世界中がテイルレッド、テイルファングの話題でもちきりだ」

「でも、テ、イル、ファング、は、あんまりな、い、ぞ」

「初日のみの活躍だしね」

次狼、<sup>リキ</sup>力、響輔も雑誌『月刊ツインテール』を見る。

ちなみにアルティメギルは世界中に出現するので、世界中の新聞、雑誌にもテイルレッドのことで持ちきりである。

「なるほどなるほど、テイルレッドの活躍を事細かに記事にしているな。ほうほうほう。ええい、<sup>アントローポス</sup>人間共め！私とテイルレッドの太鼓持ちか！アルティメギルやエレメリアンに関する記事が一切書かれていないではないか！！それに見ろ、この記事！『テイルファングはどこへ消えたのか！』だど！？私のことではなくアルティメギルの根城を突き止めんか！！たわけ共め！」

「それに関しちゃあ全くの同意見だね」

人間の書く駄文記事に怒りを露わにし、床に新聞を叩きつけるテナー。

マルシルの方も呆れ、叩きつけた新聞を拾い上げる。

「こやつらはいま自分の世界が危機に瀕しているのがわからんのか！」

おそらくわからないと、響輔はテナーの叫びを聞いて同情する。

人間の響輔から見れば異世界からの侵略者なんて殆ど漫画や創作の中の出来事だけであり、しかもツインテールのみを狙う怪物など誰が想像できようか。

「むう…次狼、マルシル、ラモン、力。貴様らの目から見た敵はどう考える」

実質、サブリーダーたる存在の次狼とマルシル、そしてラモンと力にエレメリアンの見解を聞いた。

「はい、デザインがすつごくカッコイイ!!」

「言う、事、すべて、理解、できな、い……」

「たわけ！見たまんまの感想を述べよと誰が言った!!次！」

残るは次狼とマルシル。

「マルシルの水晶で見えていたが、奴らは生物とは言い難いな」

「生物じゃない?」

「それってどういう事なの?」

次狼の見解に首をかしげるテナー。

響輔がマルシルが訊く。

「つまりエレメリアンには肉体ソーマが無いんだよ。魂プシユアーと生命ブネウマが剥き出しの状態だつて事

だ。やつらは倒されれば死体を残さず消える精神のみ生命体と形容したほうがいいだ

ろうね」

「つまり今の小僧と同じような存在ということなのか？」

「いや、それすら同じとは言い難い。密度が違うんだよ。響輔君はあくまでキャツスルドランの濃い魂フシユケの補助によって具現化しているみたいなものだからさ」

つまりジュースに例えるなら、響輔は果汁を水で薄めた飲料水に対し、エレメリアンは100%果汁といった具合に余計な物がない純粹な状態の生命体という事だ。

それに——と、今度は次狼が続いた。

「初日倒した奴や今出撃しているエレメリアンはただの下つ端、雑魚だ。恐らく遠くない内にテイルレッドでも手に負えなり奴が来るだろうな」

敵の戦力がわからない以上、正直次狼やラモンの助力も欲しい所だったが、人間から見れば、次狼達魔ダイモの者もエレメリアンと同じ異形である。

不用意に乱入したらエレメリアンと誤認されて、テイルレッドや民間人に混乱をもたらす可能性がある為、極力避ける必要がある。

「ならば早いところ十分に戦える様にしなければな——でだ、マルシル。貴様、特訓の一部始終を見ていただろう。この様なやり方で本当に良いと思うか？」

「良いわけないよ」

『——はっ!』



マルシル以外の全員が目を点にして素っ頓な声を発する。

「響輔君の身体は今無いんだから、いくら戦闘技術を鍛えても鍛えられるはずないじゃないか。イメージを掴めたとしても響輔君が戦う訳じゃないんだし」

『テナー様あ〜?』

テナー以外の全員がマルシルのその言葉にあっさりとな得して、ジト目でテナーを睨む。

テナーは皆から視線を外し、こほんと咳払いをすると――

「マルシル、何故黙っていた。この数日の時間を無駄にしたぞ!」

責任転嫁。最低である。

「いや〜、つつい皆で青春していて楽しんでそうだったから――ってゴメンゴメン!! 皆そう殺気立たないでくれ」

このアマ――と、全員の目が一斉に据わったのを見て慌てふためくマルシル。

「ならば、どうすれば良いよ」

「んー、やっぱり響輔君の意識がある状態でテナーが戦うしかないね。つまり実戦形式」

「うむー、そういえば初戦の時、小僧の意識はなかったな」

「強さの有無は関係ないのか?」

「そうだね。それに――」



『素敵です！お姉さまと呼ばせてください!!』

『妹に決まってるでしょ！　ハアハア、一緒に着替えっこしましょう!!』

『わーっ帰るうっ道あけてえっ!!』

大勢の女生徒にもみくちやにされるツインテールの幼女の映像。

涙目になっているティルレッドの姿があった。

ほのぼのと狂気の混じったその映像は朝のニュースには不相応なものであった。だが、ここ数日はこの映像がテレビでは当たり前のように流れている。

「何で動画まで撮られてるんだよう……」

当人であるティルレッド——総二がこの映像を見て清々しい朝にも関わらず、絶叫の後、一瞬で気を失い、亡霊みたいに落ち込んでいた。

世間からティルレッドの注目は減るどころかますます増え、新聞の一面を飾ったり、動画のミリオン再生は当たり前、うなぎのぼり真っ只中。

愛香の方とは言うと——

「そーじ、昨日あんた、あんなコトされて他の……女生徒のおっぱいに顔埋めて……全然抵抗しないし……喜んでたのね……!!」

と、顔の険を深くしていた。

『警察はこの少女の情報を引き続き求めていく方針です。一方、ティルファングの出

現情報は一切なく、——』

「なんでだよ！ほっとけよ！アルティメギルの方調べろよ!!」

「かわいいわねえ、総ちゃん♪」

「やかましい!!」

ソファーでは総二の母——未春がのほほんとお茶をすすりながら我が息子であると同時に、娘の晴れ姿を見てまんざらでもない様子で和んでいた。

「総二様総二様、見てください。ブログ、wiki、考察サイトなどネットでも持ちきりです」

ティルギアの開発者であり、異世界からやってきた科学者——トウアールが、ノートパソコンを片手に嬉しそうにリビングへ駆け込んできた。

これ以上情報が広まったら、俺もう戦えなくなるぞ。

「俺、心が壊れそうだよ…」

総二たちの意志とは裏腹に世界レベルで祭り上げられていくレッド

もう戻れない所まで来てしまった気がして、改めてとんでもないことに首を突っ込んでしまったということが総二の心にひしひしと伝わってくる。

「ティルファンングあれから姿現さないし、あの場限りの登場だったのかよ…」

もう一つ総二の悩みの種。

それは、ティルファングがあれから姿を現さなくなったのが原因だった。彼女のツインテールを見たかった。

彼女もアルティメギルと戦う戦士ではないのか？

世界の平ツインテール和を守るついでに、そんなご褒美があつてもいいじゃないか。

そんな淡い期待をホンの、ホンの少しでも期待して出陣しているのに。

これじゃあ割に合わない。

「そうそう、総二様。ティルファングのデータ、解析終わりました」

「何?! ホントか?」

吉報——

その言葉が似合う様な知らせに目を光らせる総二。

ティルファングを密かに想う総二にはさつきまでの凶報が帳消しとなった。そんな晴れ晴れとした総二の顔を面白くない様に横目で見ている愛香。

「説明には特殊な機材が必要なので、秘密基地の特殊仕様な部屋で——」今、この場でしなさいね〜♡学校があるんだから…」うひいえあああああああつ!!」

つねり——頬とか耳たぶや乳房にくらえば地味に痛い技。

愛香のつねりの痛みから立ち直ったトゥアールはパソコンの画像を見せる。

「画像のブレや動画での砂嵐状態は何とか修正出来ました、おそらくティルファングも

正体を隠蔽する為のテイルギアのフォトンサークルと同等の能力を所持しておりますね。テイルギアとは似て全く異なる別の仕組みですが——」

修正されたテイルファングの画像や映像を見てほっこりとなる総二。

隣では愛香がちやんと聴けと耳をつねり、正気に戻した。

「——そして、テイルファングの両手から出した黒い影のような短剣。アレは私も解析して初めて目を見張りました。言葉にして形容するならば、あれは『エレメーラ属性力の具現化』です」

「エレメーラ属性力の具現化？」

「エレメーラ属性力は熱や電気と同じエネルギーなのはご存知のはず、しかしテイルファングはそれが目に見える程に高濃度なエレメーラ属性力で物質を具現化する事が可能なのです」

「つまり、テイルファングもすごいツインテール属性の持ち主だったって事なのか？」

「あの城みたいなのドラゴンや夜になったのはどうなの？」

「戦いの終わりに見せたドラゴンはまだ解析中ですが、最後の笛の音色と共に夜になった現象。あれは彼女自身が創り出したその場のみの夜——それ程まで大きくエレメーラ属性力を具現化した物。つまり固有の結界を展開し、右脚の属性力を大きく上昇させたと思われる。そして、テイルファングの鎧は総二様が纏うテイルギアとは違い、武装していると言うより自分の身体の一部と化し、その戦い方はどちらかといえばエレメリアンに近

「戦い方です」

「つまりなんだ？ テイルフアングはトウアールやエレミアンとは違う異世界から来たのか？」

「その可能性が高いでしょうね。初めて見る現象ばかりで私から何とも言えないのですが、彼女はエレミアンの類とは考えづらいですね。かと言って、事前調査をしていた私があれば高いツインテール属性を今まで見落としていたとは……どうも腑に落ちない」

## 組曲／意地ある信念

## ——響輔の自室

ごくごく当たり前の子ども部屋。

一応、一族の重鎮に君臨しているテナーからすると、まるで囚人の牢獄にも見えるちっぽけな部屋——平均的な日本の自室としては普通の部屋。

~~~~~♪!!    ~~~~~♪♪♪!!    ~~~~~♪!!

「ツ!!」

『来たのか？奴らが』

「うん、来たよ」

『そうか』

中間テストに向けて勉強をしている響輔が何かに反応し立ち上がったのをテナーは感じ、アルティメギルがやってきたと確信する。

あれから毎日のようにアルティメギルのエレミアンは襲来している——しかも律儀に一体ずつ。

響輔は幼い頃から疑問だった。

アニメや特撮の怪人も怪獣も、なぜ毎週一体ずつ出現するのか。

そんなめんどくさい事せず、人海戦術で押しつぶしたほうが早いのに。

アルティメギルにも戦いにおいてのルールがあるのだろうか？

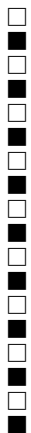
と、そんなせんなきことを考えながら響輔が取り出したのは魔道具『帰城の鍵』。

壁さえあればどこからでもキヤツスルドランへと帰還する事ができる魔道具の一つである。

それを自室の手頃な壁に近づけると鍵穴ができ、それに挿入し、回す。

すると部屋の壁から一人分通れるくらいの大きさで凝った装飾が目立つ木造の扉が、まるで水面から浮上するかの様に出現した。

鍵を回収し、その扉に入る。再び扉が閉ざされるとズブズブ…と壁に沈む様に消滅した。



——キヤツスルドラン・城内

キヤツスルドランは亜空間を拠点とする。

亜空間には青い空に白い雲、浮遊する島が多数存在し、普段はその内の一つにグースカ寝息を立てている。

帰城の鍵はそのキャツスルドランに直接繋がっている。

「マルシルさん、アルティメギルだ」

「んっ！確かに次元震を観測してるね。響輔君かなりが性能いいかも」

響輔とテナーがキャツスルドランの居間に到着した時にマルシルは丁度水晶玉を広げている所だった。

「場所はどこだ？」

「ちよつと待つて…えーと、郊外のハイキングコース」

「あいつら、ホント性懲りも無く出てくるわよねえ…」

「毎日一体つつ来るからな。会社のノルマじゃあるめえし」

ヴェディは面倒といった感じで寝転がり、キバットはマルシルと一緒に嫌々水晶を覗き見る。

「一体何だい？これは…」

マルシルが水晶を覗き込んだと思ったら、みるみるうちにその顔色が悪くなっている。

「どうしたの？」

しているってことになる。

「何やつてるの？コイツ」

「キモ、ち悪い…」

「これが噂に聞く、ダ○チ……」

ラモンや力やヴェデイが嫌悪感を隠す様子もなく、キツネ怪人はなおも妄想劇を繰り広げ、響輔もゾクゾクと寒イボが立つてきた。

幼女の裸体を想定しながら人形相手に意気揚々と話しかけている怪人にもう色々と痛いし気持ち悪すぎて別の意味で恐怖だ。それが第三者視点でもシチュエーションが容易に想像できるところが恐ろしく、おぞましい。

「どうやら今回のエレミアンは肉体的な苦痛ではなく精神的な苦痛で攻めてくるタイプのようだ。これ以上放っておくと、テイルレッドの精神が持ちそうにない」

「何冷静に分析しているんだよ！次狼」

と、あくまで冷静な次狼にマルシルは呆れかえる。

精神面を攻めてくる変態怪人に皆が騒然とし、テナーも今回はスルーするだろうかと響輔は思っている…

「よし！キバット、出陣の準備をしろ。ヴェデイ、鎧の手入れとフェツスルの調律は出来ているだろうな」

「なんでテメエはそんなノリノリなんだよ?!」

「それに完全に調子取り戻したわけじゃないんでしょ?」

士気を高めるみたいにテナーは声を張り上げた。

ノリノリだったのが意外なのかキバットがツツコミ、響輔が心配する。

「ふはは、まあな。だが、万全ではないからと言い、いつまでも引き籠もっては体が鈍るというものだ。心の共存には実戦が良いとマルシルはそう言った。ならば実行するまで!行くぞ」

「それでテイルレットのところにはどうやって行けばいいの?」

「心配いらん、キャツスルドランが発射する」

「発射? 発射って何?」

「ともかく行くぞ」

テナーの何気ないセリフが気になったが、問いただす前に響輔はテナーの中にしまわれ、勢いよく居間から廊下の方へと駆け出した。

遅れてキバットがテナーについて行く。

長い廊下を走る最中、壁の左右にある照明用の松明に篝火が灯り、テナーを導く。

「ガブツ!」

「絵本を読んで差し上げましょう。……おやおや、甘えん坊さんですね」

キツネのエレミアン——フォックスギルデイの精神攻撃はクライマックスを迎える。

女性をとろけさせるような甘声でテイルレッドの人形をあやし、本物のレッドは敵の術中？にまんまとハマってしまっていた。

所詮は紛い物、そう何度自分に言い聞かせてもフォックスギルデイの作り出した人形は紛い物の域を逸脱する一線を画した出来だ。

しかも、レッドはツインテールを守りし者——たとえ出来の悪い作り物でも自分の姿をしていなくても、その人形を壊すことはできなかつたであろう。

「……までか……、俺のツインテールはこんなやつに負けてしまうのか？」

今まで味わったことのない精神攻撃に心がボロボロになり、息を絶え絶え、あと一撃ひとと加われば心の何かが崩壊してしまいそうな心境だった。

「おや？もうおねむですか？では私と一緒に——」

「永眠するのは貴様一人だ！——黒蝙蝠ブラックバット」

フォックスギルデイの言葉を何者がか遮ったかと思うと、無数の蝙蝠の影がフォックスギルデイめがけて飛んできた。

「ぐうおつ！な、なんですか!?!この蝙蝠は!!」

「これって!」

テイルレッドはこの蝙蝠を知っている。

あのベルトの蝙蝠だ。

そしてレッドはツインテール特有の気配を感じ取る。

「全く、見ていられんお遊戯だ。そして貴様もだ、テイルレッド。あの時の生意気な意気込みはどうした?」

無数の蝙蝠の影が地面に染み込むようにして消えたかと思えば、レッドのすぐ傍であのハスキーボイスが頭上から聞こえる。

マクシーム空果で初めてレッドとして戦ったあの日以来の再会。ファングがいつの間にか隣で腕組みをして佇んでいた。

「テイルファング!!」

「あなたが……テイルファングですか!」

「そうだ」

ブラック・バット

黒蝙蝠の攻撃から立ち直ったフォックスギルデイはテイルレッドの人形が傷付いていないかどうか埃を払い、紳士的にお辞儀をして挨拶をする。

「お初目お目にかかりますテイルファング。私の名はフォックスギルデイ。ツインテール

ルを象るに不可欠な髪紐属性に魅せられしエレメリアンです。あなたの噂はつねづね聞かされています。が、リザドギルデイとトードギルデイとの戦い以降その姿を現さずにいたものの、今日漸く戦いの場に赴かれるとは……まさに僥倖と——」

「なるほど、つまり奴のリボンで対象の身体データを測り、人形属性の属性力でその者の人形を作成するといった能力なのだな？」

「ああ、概ねその通りだ」

「なんつー無駄な能力だよ。ぜってー、戦闘用じゃねえな」

『おいテナ、キバット、アイツの話聴かなくていいの？』

テイルファングという予想外のゲストに心踊ったのか向こうでフォックスギルデイが舞台役者みたいに大仰な振る舞いで演説をしているが、ふたりは完全にシカトを決め込んだ。

「しかしな、テイルレッド。あんな人形一つで動きを封じられるとは情けない。人形とはいえツインテールを傷付けないのは立派だが、時と場合は考慮しろ。戦いに負けてしまつては意味がないぞ」

「いやだ」

テイルファングの忠告を真つ向から否定するテイルレッド。

「俺は……ツインテールだけは絶対に手に掛けない！」

「全く、融通の利かないやつだな。それに抵抗があるのは分かるが、その愚直な生き方は苦勞するぞ?」

「だとしても——」

テイルフアングのこの言葉にレッドが力強く反発した。

脅す様に睨みを効かせるもテイルレッドは怯むことなく宣言する。

「ツインテールを傷付けないのは、ツインテールを愛する俺の意地だ」

それを聞いてテイルフアングは呆れた様に、そして嬉しそうに口元を上げて返した。

「……ならば貫けよ」

テイルフアング——テナーもファンガイアの象徴たるツインテールを守る者として

——ファンガイア族のチェックメイトファイブの一人として、決して譲れない矜持がある。

例え逆の立場でもテイルフアングは決してツインテールは傷付けなかつただろう。

テイルレッドを試した結果、いい返答が聴けて彼女は今満悦している。

しかし、あちらの方はだんだんと耳障りになってきたのでテイルフアングはテイルレッドからフォックスギルデイの方へ視線を戻す。

「獣畜生、この私が来た事が僥倖だと?それは断じてない——災難だ。私が来て貴様の敗北は絶対となつた」

「ふふっ、そうですね。それは大層な自信です。それに、テイルレッドがピンチとなって颯爽と現れた——あなたもツインテールを愛するものとして、仲間のテイルレッドを放っておけなかったのでしょうね」

「……もう一つ、勘違いだ——テイルレッドは仲間ではない」

「えっ!!？」

『えっ!!？』

テイルレッドと響輔は同時に驚いた。

「利害一致の共闘だ」

「ほう、そうですね。しかし、私はなんとなくわかりますよ。あなたのその冷徹な仮面の下には『何か』が隠されていることに」

「……………」

テイルレッドは見た。

フォックスギルデイのその言葉にフアングが一瞬目を強ばらせるのを。

「ですが、その前に——我がアルティメギルでも詳細が明らかとなっていないテイルフアング！その人形を是非我が手に!!」

テイルレッドの人形を作り出したフォックスギルデイのリボンがテイルフアング目掛けて放たれた。

「影創造——黒武者」
シヤドウ・ウラフト ブラック・ナイト

後一瞬でリボンがテイルファングへ到達しようとしたその時、地面から黒い影が具現化し、そのリボンを腕に絡ませた。

それはテイルファング全身の影が立体化した分身。テイルファングを墨で真っ黒に塗りつぶしたかのような影そのものの分身だった。

「人形を作ることができるのは、何も貴様だけではない！」

その言葉が終わるのと同時に黒武者は体を回転。ブラック・ナイト自身を糸巻き機代わりにして、フォックスギルデイのリボンを自身の体で一気に巻き取る。

「なんですとっ!?……ぐほあっ!!」

予想外の行動にフォックスギルデイは面をくらう。

リボンにわざと絡まるも、足だけが自由な黒武者はそのままブラック・ナイトフォックスギルデイに回し蹴りをくらわした。

フォックスギルデイは蹴り飛ばされ、黒武者も液状化し、ブラック・ナイト地面に染み込む様に影となつてテイルファングの元へと回収される。

「便利な能力だな」

「私の影創造は変幻自在だ。使い方や訓練次第でいくらでも強くなれる」

テイルレットがテイルファングの能力に感心している間に、テイルファングは両手を

広げ腰を落とした様なファイティングポーズを取るとフォックスギルデイに驚異の瞬間で一気に距離を詰め、手を伸ばした。

「貫ったぞー！」

しかし、フォックスギルデイはテイルファンングの手が届く寸前、咄嗟に体勢を立て直し、テイルレッドの人形をかかえて距離を取る。

「ふふふつ、流石テイルファンング。身持ちが固いですね」

「身持ちが固い言うな」

「人形を抱えているくせに機敏に動くぞコイツ」

再びテイルファンングはフォックスギルデイに向かつて走り出し、再び手を伸ばす。だが、それさえもフォックスギルデイ躲し、またしてもテイルファンングの手は空を切る。

テイルファンングがフォックスギルデイ目掛けて手を伸ばし、フォックスギルデイがそれを避ける、そのイタチゴッコを繰り返す。

テイルレッドもフォックスギルデイもその単調な攻撃に違和感を感じ始めた。

「あなた、さつきから私を攻撃していませんね」

「……………」

テイルファンングは何も答えない。

「やはりツインテールを愛する戦士。あなたもテイルレッドと同じくツインテールを傷

付ける事はせず、まずは私から人形を奪い取るうというわけですね」

「そうなのか？ テイルファング」

「……………」

テイルレッドの問いにも答えない。

「その殊勝な心掛けは大したのですが、それではいつまでたつても決着が付きませんよ」

「ではそれを置く事を勧める。そうすれば今すぐ決着がつくぞ——まさか貴様、ツインテールを盾にしようなどとは考えてはいまいな？ そんな事を一寸ばかりでも考えていようものなら…死ぬ前にいくらか苦しむ事になるぞ？」

脅しなどではない本気の声色。

「愚問ですね。あなた方がツインテールを愛すると同じように、我が人形は私の魂の分身であるも同義！ それを手放すなどあり得ません。ましてやそれを盾にするなど言語道断」

「……………」

フォックスギルデイも本気の言葉で返す。

負けを認めてければいい。戦わずに勝てるならその方がいいのだ。

勝手に自分が不利だと思ひ込んで、精神的に折れてくれたら——紳士な彼としては

そのほうがいい。力比べなどは彼の好むことではないのだ。

テイルファンクもこのままでは埒が明かないとみたのか、しばらく無言の後口のちを開く。

「テイルレッド、業腹だが今の私ではあの人形を無傷で奪う事は難しい、手を貸せ」

まだ本調子ではないテイルファンクはテイルレッドに共戦を持ちかけた。

だがその顔は忌々しさなどは微塵もなく、むしろ楽しみに誘っている。

まるで一緒にTVゲームをしようとコントローラーを差し出す子供みたいで。

「いーぜ」

当然、それを断る理由などない。嬉しそうにテイルファンクの隣に立ち並ぶテイルレッド。

一瞬互いに視線を交わし、互いのツインテールが触れ合うと同時に二人は左右へ交差しながらフォックスギルディへ向けて駆け、一気に距離を詰める。

左右からの同時攻撃かと思いきや、一瞬早くテイルレッドがフォックスギルディ目掛けて剣を振り下ろす。

それをフォックスギルディは後方へ跳び回避した。

しかし、テイルレッドの攻撃はあくまで牽制——本命はその背後に回り込んだテイルファンク。

「頂いた！」

だがテイルファンングの腕が伸び、爪がフォックスギルデイへ炸裂する直前、フォックスギルデイは真横へ直進した。

「むっ!？」

よく見るとフォックスギルデイはいつの間にか手からリボンを射出、離れた場所の地面へと突き刺し、高速で巻き取ることにより急な方向転換を可能としたのだ。

「くっ！ 躲されたか」

「いや、想定内だ。続けるぞ」

今度はフォックスギルデイの周囲を高速で周回し、少しずつ距離を縮めテイルファンングの拳とテイルレッドの剣―ブレイザーブレイドで挟み撃ち。

しかし、その攻撃もまるで人形とワルツを踊るかの如く躲した。

「人形抱えながらも動きに無駄がねえぞコイツ！」

「無駄がなさすぎて逆に腹ただしいわ！」

「おやおや、いきなりおおいかぶさってきて…寝相の悪い子ですねえ……」

「しかも、戦いながら妄想にふけてやがる！」

「マジでやめろよおとおお！頼むからよおとおお！戦いに集中させろよおとおおっ!!」

「おのれえ！戦いの最中にも関わらず、テイルレッドの精神を乱し、集中力と戦意を削ぐ

作戦に出るとは……実に小癪な奴め」

『絶対違うと思う』

フォックスギルデイの妄想劇の前に戦意喪失寸前なのだが、テイルレッドは手前の根性で何とか戦いに集中する。

即席のコンビネーションはガタガタになりやすい。

打ち合わせもなければなおさらだ。

主にテイルレッドがブレイザーブレイドで牽制し、その隙にテイルファンクが手を伸ばし人形を奪い取ろうとする戦法。

テイルレッドもテイルファンクも互の思考を読み合っているような息の合った戦闘スタイル。

「このー」

フォックスギルデイも二人の動きを封じようと、体中に巻かれたリボンを一斉に射出し反撃を試みるも、そのリボンはブレイザーブレイドの斬撃により切り刻まれた。

その隙にテイルファンクが滑り込むようにフォックスギルデイの脇をすり抜け、一瞬の内に後方へ。

正面のテイルレッドはフォックスギルデイがよそ見をしている隙に上空へと跳び、両腰のブースターで加速しながらブレイザーブレイドを振り下ろす。

「まだまだだっ!!」

しかし、フォックスギルデイもまたその場から後ろへと跳び、躲す。

空振ったブレイザーブレイドはそのまま地面を穿ち、砂埃を巻き上げ、視界を奪う。

「くっ!!なんとというコンビネーション。ですが、私の命に代えてもこの人形は——」

すると突然、フォックスギルデイの人形を抱いていない左腕と腹部に黒い帯状のものが絡み付いた。

「ッ、これは!?!」

「これが私のリボンだ」

シャドウ・クラフト ブラック・リボン
影創造——黒髪紐

フォックスギルデイが手からリボンを射出したみたいに、ガントレッドに付いているシール・ブレスレッドの袖から新体操のリボンみたいな影創造シャドウ・クラフトを射出するテイルファング。

「踏ん張りのきかない空中ではどうすることもできまい」

片足のヒールを杭みたいに地面に固定し、それを軸としてテイルファングは遊園地の乗り物の如く回転。遠心力で人形を手放せようとしてもフォックスギルデイはまだ粘

る。

「このキツネ野郎が!!—ガブツ!!」

「あ痛アツ!!」

見かねたキバツトがバツクルを離れ、フォックスギルデイの右腕に噛み付く。

フォックスギルデイはその痛みに悲鳴を上げて、思わずテイルレッドの人形を手放し、宙を舞う。

「黒武者オツ!!」
ブラック・ナイト

先ほどの影分身がまた出現、落下地点でテイルレッド人形を人形をうまくキャッチした。

「とどめは譲るぞ」

仕上げと言わんばかりにテイルレッド目掛けて、フォックスギルデイを放り出す。

「ぬおおあああああああああああ!」

「オーラピラーツ!!」

フォックスギルデイに目掛けて噴出されたその炎はフォックスギルデイの前で爆発し、螺旋状に取り付き、円柱に変化していく。それによってフォックスギルデイは拘束され、身動きが一切できなくなる。

テイルレッドのオーラピラーが空中にいるフォックスギルデイを拘束し、ブレイザー

ブレイドを構える。

「完全開放ッ!!」

テイルレッドの声と共にブレイザーブレイドの力が完全開放され、刀身に炎が弾ける。

「うおおおお!!」

そしてテイルレッドは背中中の噴射口から炎を噴き、フォックスギルデイに向けて突撃する。

剣もそれに応えるかのように、変形、炎を最大限に纏っていく。

そして、フォックスギルデイを捉えている円柱を剣が切り裂いた。

「グランドブレイザーッ!!」

これこそがテイルレッドの奥義『グランドブレイザー』……極大の炎で相手を切り裂く必殺技である。

グランドブレイザーの炎の刃がフォックスギルデイを両断した。

「ぐあああああ………テイルフアングのリボンに絡まれ、テイルレッドのリボンに両断される——私にとってこれ程誉れ高き終わりがありましようか………最後に夢、を………——また、服を着ないで……風邪を引いてしまいま………な、なるほど!リボン

にそのような使い方、がああああああああ!!」

フオックスギルデイは満足げに笑い爆散した。

多分最期まで心の中のテイルレットには服を着せずに。



「ふむ、まずまずだな」

「テイルフアング！」

フオックスギルデイを倒し、ツインテールをかき上げて一息ついているテイルフアングにテイルレットが後ろから声を掛ける。

ふと振り返るとテイルレットがいた。

「ありがとうな……」

「……別に良い」

屈託の無い笑顔でお礼を言うテイルレット、対してテイルフアングは始終無表情だがどこことなく嬉しそうな雰囲気でお礼はいらなと言わんばかりに短く返答し、その場から立ち去ろうとした。

と、その時――

「そこまでよ！変態!!」

「ツ!!?」

新たな声がある場に響き、青い人影が雷の如く、その場に参上してきた。

そこにいたのはテイルレッドと酷似した少々露出度が高めの青いアーマースーツを身に纏った十代半ばの青髪の少女であった。

「また新たな敵か？とりあえず何者だ、貴様——ん？どうした、テイルレッド」

「……………ツ!!」

新たな乱入者に警戒を強めるテイルフアング。

ふと隣にいたテイルレッドを見てみるとその乱入者に警戒しているというより、驚いて目を丸くしているといった感じだった。

「つて、あれ？あの変態怪人は？」

向こうの青い少女も今この事態を把握出来ないみたいだった。

ワイルドブルー／テイルファングVSテイルブルー（前編）

——現時刻より数分前

「あんの馬鹿、いくらツインテールだからって人形相手に!!」

観東家の秘密基地内で愛香は右往左往していた。

今回現れたエレメリアン——フォクスギルデイは髪紐属性と人形属性の2つの属性力を持つ怪人であり、その能力でテイルレッド人形を作りだされ、それを使った妄想劇をテイルレッドに見せつけていた。

画面越しで愛香もその光景は見せつけられていた。

だが対策法はないわけではない。

それは人形そのものを破壊すればいい。

人形を壊せば、総二は戦いに復帰できる。

だがテイルレッドの姿を模したその人形を総二は破壊できない。

たかが人形。だがそれでも、その人形の髪型はツインテールをしており、ツインテールを愛する総二はそれを破壊できないのだ。

『うあああああ……や、やめろおおおせめて服を着させろおおお!!』
(いろんな意味で) 耳を防ぎたくなるような絶叫が、スピーカー越しで木霊する。

「どーしよ、そーじが!! ねえ、こっちから発射できるミサイルとかないの?」
物騒な発言をする愛香。

周囲の被害を考えてないのだろうか?

「……………こうなれば、もう…」

トウアールはコンソールの上で拳を握りしめ、震えていた。

調和に守られた唇からは血がにじみ、苦渋の決断をしている。

そういつた風に愛香は感じ取れた。

「——愛香さん、お願いがあります」

普段の痴女っぷりからは想像できないようなシリアスさで愛香と向き合うトウアール。

そのことからただ事ではないという風を感じる愛香。

「あたしにできること!?! そーじを助けられるなら、あたし何でもするよ!」

「——では、変身してくれませんか?」

「わかったわ、変身すればいいのね!」

咄嗟に返事したものの、その意味を嘸えんげ下するころには、誰が愛香の立場でもそれしか

いえないだろう。ようやく理解した頃には当然のリアクションをしていた。

「は？変身？」

「私は一昨日言いましたよね？テイルギアは2つあって、既にもう一人の候補者がいると」

愛香は頷く。

それは一昨日トウアールが言っていたことだった。

トウアールが元居た世界から持ってきたテイルギアは2つあり、一つは総二の手へと渡り、もう一つのギアの変身候補者は既に決めている。

ただし、その変身者に渡すかどうか迷っている。

「それが愛香さんなのです。この世界でもう一人、テイルギアを使える人間。誰よりも総二様と近いいたあなたこそ、テイルギアを使えるのです」

「……嘘」

「嘘じゃありませんよ」

トウアールは真剣な眼で答える。

いつもに冗談ではなさそうだ。

「同じツインテール属性を持つからこそ導かれ、引かれ合ったとも考えられます」

運命。

愛香はその言葉を初めて信じる気になった。

「……そーじ」

その言葉にどこかロマンチックな気分になるが、愛香は「ちよつと待て」と止める。

「…確かあんた、もう一人の好捕者は蛮族とか地球が滅びるとか」

「え？ 事実じゃないのですか？」

「何言ってるの？ この人」みたいな真顔のトウアールの顔面に問答無用の骨法が炸裂した。

「お(い)い……」

「そうね、確かにあたしは蛮族かもしれない…でも、そーじを助けられる事はできるわ
！」

愛香は拳を握り締め、決然とそう告げる。

「あ、愛香さん…言っていることと行動がバラバラなのはなぜでしょうか？」

「そりゃあ、あたしだってあんな変態軍団と戦うのは嫌よ。でも、戦力は多い方がいいですよ？ それに、どうしてあんたはそんなに変身を明かすのを拒んでいたの!?!」

「それは…愛香さんを、巻き込みたくなかったからです。あなたを戦いに巻き込ませれば、総二様も悲しませてしまいます。それに——この数日何度も殺されかけましたが、あなたはこの世界でできた大切な友達です…そのような争いを知らずに平穩に過ごし

ていてほしかった…」

涙目になりながら悲痛な叫びを訴えるトウアールに愛香は戸惑った。

だが、その隙に白衣のポケットに『目薬』と書かれていた小さな物をそつと隠そうと
しているのを見逃さなかった。

「ハイ、本音」と手を叩くと――

「テイルギアの力を維持するには私の生体データを総二様の体内に取り込む必要がある
とそれっぽい嘘をついて、総二様と如何わしいことをしようと思っていたのですが、愛
香さんにテイルギアを渡してしまうとあなたとも如何わしいことをやらなきゃいけな
くなるからそれは嫌――」

「このド痴女がああああああ!!ど直球に言っているんじゃないやねえええ!!」

「あああ、思ったことを何でも言ってしまうこの体質が憎い!」

「なんであんたは!そういうのもいつもエロいことばかり考えるのよ!」

「メスがオスに発情して何が悪いんですか!!」

ウサギみたくに盛んなトウアール。

その無限の性欲に少子化対策待ったなし。

「開き直るにも言葉を選べあんたはああああ!!」

ドツゴオン!今度はジャーマンスープレックスをかまして、トウアールを沈める。

「まあいいわ！あんたがあたしのこと嫌いなのは十分に分かったわ！でも今はそーじを助けたいの、だからあたしにティルギアを渡して！」

「…嫌いだなんて思っていないよ、あなたは大切な友人だつていうのは本当です。あなたをそれには巻き込みたくなかった」

ゾンビのように何事もなくムクリと起きあがったトウアールは言う。

今までの行動から嘘っぽく聞こえてしまうが、その言葉に少しだけ嬉しくなる愛香。「ただ、覚悟はありますか？一度変身してしまつたら…もうあなたは戦いから逃げ出せなくなります。それでもかまいませんか？」

「はっ！ばかにしないで、承知の上よ！自分の行動に責任が持てないほど私は子供じゃないわ！」

不器用ながら初めての気遣いを感じ、愛香がしっかりと頷いたことを確認したトウアールは青色に光るティルギアを取り出した。

「愛香さん、約束してくださいね。何があつても——」

一蓮托生。ブレスを託すトウアールの覚悟が見て取れる。

まるで自分の子を託すような——

「——総二様の初めての女になるのは、この私に任してもらえると」

「…おい」

前言撤回。

「さあ、時間がありませんよ！いいからはいと言つてください！でなければこれは渡せませんからね！それともあれですか、今からヒーローになるうとしていらっしゃる方が、まさか力づくでブレスを奪おうとでも考えているんじゃないでしょうね！」

「…」

「愛香さんはそんなこと考える人じゃないですよね……」

愛香はニツコリ笑いながら、指の関節を鳴らし――

「さあて、行きましようか…テイル、オン！」

関節がいくつか外れ、床にめり込み転がっているトウアールを放つて、ブレスを装備した愛香は変身機構起動略語を叫び、変身を完了させる。総二の赤色とは対照的な青色の戦士へと変身が完了する。

「待ってて、そーじ！ 今助けに行くから!!」
ヒーローって何？

そんな疑問が薄れゆく意識の中、脳裏に浮かぶトウアール。
愛香にとってそれは、敵と認識したモノを情け容赦なく潰す事に他ならない。



あれ？

意気揚々とやって来たはいいものの周囲を見渡す変身した愛香。

「また新たな敵か？ とりあえず何者だ、貴様——ん？ どうした、テイルレッド」
「……………」ツ!!」

フォックスギルデイを倒し、一息ついたところにまた新たな乱入者が参上した。
その乱入者に警戒を強めるテイルファング。

ふと隣にいたテイルレッドを見てみるとその乱入者に警戒しているというより、驚いて目を丸くしているといった感じだった。

「つて、あれ？あの変態怪人は？——あ！テイルファング!!なんでアンタがここに？」
 「初対面でいきなり呼び捨てとは、無礼な奴め」

テイルファングはいきなり乱入しておきながら呼び捨てる目の前の愛香に僅かながら苛立ちを覚えるも気を取り直して答える。

「それで貴様は何者だ？」

「あたしは、えつとー……そう、テイルブルー。テイルブルーよ！」

「テイルブルー？」

何者かを問われ、咄嗟の間に少し戸惑うも愛香——テイルブルーは名乗る。

「何故この場に参上した？」
なにゆえ

「そーじ——…じゃなくて、テイルレッドがピンチみたいだったから急いできたのよ！

——途中色々あったけど」

「あー…言われてみりゃあ、あのねーちゃんの装甲。レッドちゃんと似てないか？」

「フンツ、増援だったか。まあいい、一足遅かったな。あの畜生は既に倒した。だからもう増援は必要ない」

「倒した!？」

思いつきりの大遅刻。

テイルファングは新たに来たテイルブルーを一瞥すると隣に立つテイルレッドへ視

線を移した。キバットの言う通り、テイルレッドのテイルギアとよく似ているので彼女はテイルレッドの仲間だったと推測する。

テイルレッドもテイルファングと視線を合わせると、テイルブルーへ急いで駆け寄っていく。

「何だよ!!どうしたんだよ、その姿!!」

「あはは、話せば長くなるから……」

「そこそとテイルファングに聞こえないように、テイルレッドとテイルブルーは話をする。」

テイルブルーと名乗った戦士——自分の幼馴染である愛香がなんでテイルギアを装備しているのか、なぜ今頃ここへ来たのか、疑問は山積みだった。

「それと、さつきからトウアールとの通信が途絶えているんだけど、何か知らないか？」

「え…さあ? 昼寝でもしてるんじゃない?」

トウアールを交えてその疑問に答えてもらおうと思ったが、テイルブルーは目を合わせず口笛を吹くそぶりを見せる。

そのテイルブルーを見て、いつか話したもう一人の装着者の話を思い出し、直感的にテイルレッドの脳裏に最悪の予想が頭をよぎった。

今トウアールは無事なのだろうか!?ダラダラと冷や汗を流すテイルレッド。

ちなみに、テイルブルーはあのトウアールとの揉め事があった所為で遅刻してしまっただけだ。

「さあ、そんな事より。ここにはもう用はないのよね?早く退却するわよ」

「あ、ああ…」

モタモタしていると報道陣が来る。

それ以上にトウアールの安否が気になる。

属性玉を回収して、立ち去ろうとした時――

「ではな。私もここいらで凱旋させて貰うでしょう」

テイルファングも退散する準備をしていた。

と、その時――

「ちよつと待て!!」

「なんだ?」

テイルブルーに呼び止められ、苛立ちを含んだ声でテイルファングは振り返る。

「それ、どうするつもり?」

テイルファングの肩に持ち上げられている人形を指摘した。

フォックスギルデイとの戦いでテイルファングが奪ったものであり、フォックスギル

デイが倒された今では顔写真を貼り付けたようなただの人形に戻ったが、それでもさすがエレメリアンが作った作品。人間が作ったものより一線を画す出来栄である。

「これは私の戦利品だ。持ち帰るのに何か申し立てでもあるのか？」

「も、申し立てって……ア、アンタこそ、レッドの人形なんか持ち出して、どうするつもりよー！」

「城の飾りに丁度いいと思つてな。これほど精巧な一級品の人形など、私の知る職人も作れるかどうかわからぬしな」

『それが君の本心かい！』

「然り」

なんとテナーはこの人形をかつぱらうつもりでいたらしい。

今思えば出陣の時、あれ程ノリノリだった事に響輔は何か引っかけかきを覚えていた。

鎧を着たままのテナーが下手に攻撃すれば、あの人形をクツキーみたいに砕いてしまいかねない。完品のまま人形を奪う一心でテイルファンクは手加減したり、テイルレッドとタッグを組んで戦っていたのだった。

テイルファンクは呆れる響輔のみに聞こえるように小声で理由を話した。

「話は以上だ。ではな」

早々に話を切り上げて、この人形を堪能しようと無表情ながらウキウキとした雰囲気

を纏わせて鼻歌の凱歌とともに立ち去ろうとするテイルファング。

「だからちよつと待て！」

「さつきから一体何だ？——貧乳」

「っ！！！！」

いい加減にくどくなつて苛立ちを覚えたテイルファングがその禁句を口にした。^{タブー}

青空の下、さわやかなハイキングコースの真ん中で、その声が響いた途端に世界が停止した。

次の瞬間にはテイルブルーの額には青筋が浮かび、テイルレッドは声にならない悲鳴を上げた。

やつてしまった。

テイルファングはやつてしまった。

凶悪な竜の逆鱗に強烈なアツパーカットをお見舞いしてしまった。

睨みつけるかのごとく、眼は吊り上げ、口元は引きつる彼女。

「え？ごめんさい。よく聴こえなかつたわ。もう一度言ってくれる？」

「そうか、ハッキリと貧乳と言つたつもりだったのだが——ああ、情報処理能力が低いのだな。同情するぞ」

一方、どうして憎悪に満ちた眼差しを向けられているのかテイルファングは皆目見当

がつかなかった。

だが、それでも尚テイルブルーは理性を保ち言葉を放つ。

「レッドの人形に何をやる気い？あたしの眼が黒いうちは許さないわよ」

「だからさつきから貴様は一体何を言ってる？——そもそもこの人形は私があの畜生より奪ったものだ。私の手に収まっている以上、このテイルレッドの人形は紛れもなく私の財であり、私が所有する権利がある」

「あの変態怪人がしたみたいに妄想に耽る気でしょ！」

「は？だから貴様、一体何を言い出す」

「い、一緒にお風呂入ったり、一緒に寝たり、一緒に……あー、もう考えただけでおぞましい、いやらしいっ！」

一人で妄想し、悶えるテイルブルー。

「ブルー、お前は一体何想像しているんだ？テイルファンクがそんな事する筈がないだろ」

「いや、レッド冷静になって！多分、あいつはベッドとかであんたの人形を抱いて寝るのよ!!それでもいいの!?!」

「自意識過剰過ぎだろ。それにテイルファンクと……一緒に……寝る。——……悪くないかもな」

「レッドおおおおおおおっ!!」

ブルーの言い分に呆れているテイルレッドは憧れのテイルファングのツインテールに包まれて寝られる想像をし、顔を赤くし満更でもないご様子。

「無視だ。無視しろ。ファング」

「もういい、貴様の妄言には付き合いきれん！ではな」

キバットとテイルファングはこれ以上相手にしてられないと悟ると足早に離れようとするのだが――

「待ちなさい!!」

ぐわしつと、テイルブルーが電光石火の速さテイルファングが肩に担ぐテイルレッドの人形の頭部を片手で鷲掴みにし、取りあげようと力を込めて一気に引つ張った。

ボキッ!!

「ボキッ?」

まるでどこぞのホラーなバツタ戦士が脊柱を引き抜くが如く、テイルレッドの人形の首をもぎ取られ、その頭部は砂糖菓子みたいにテイルブルーの驚異的な握力で握りつぶされた。

「あ…」

「なあっ?!?!?!」

「うおおっおがああおわあ#&*?%∞^♪☆◎▲◆*土ツ!!!」

その所業は故意にはなかっただろう。ついうっかり壊してしまったといった感じでテイルブルーは声を漏らした。

だが、テイルファンングは首だけなくなったテイルレッドの人形の成れの果てを見ていつもの鉄仮面が崩壊し、口を半開きにして放心。

テイルレッドはというとフォックスギルデイの妄想劇など比ではない。自分自身を模したツインテールが粉々になるというこの世の終焉とも言える悪夢を間近で見せつけられ、ドサツと卒倒してしまった。

ちなみに総二はこの日からしばらくこの悪夢でうなされる事になるのだが、それはまた別の話。

「あ、あ…あ…ああ、ああ…」

膝をつき、首から上がなくなったテイルレッドの人形を見るも、そこにあるのは洋服売り場にあるマネキンみたいな首無しの人形を纏った人形。

それを見てテイルブルーも自分の行いに良心を痛め、罪悪感を感じたのか謝ろうとした。

「(…)(めんなさ—」

ドゴスウツ!!!

しかしテイルブルーのその言葉が最後まで告げられることはなかった。

テイルブルーが反応出来ない速度でテイルファングがテイルブルーの顔面を殴り飛ばしていたからだ。

『何してんのおっ!!』

「貴様あ、この私の手中に収まっている財を穢すとは…中々見上げだ度胸だ。成る程なあ、よほど死にたいと見える——貧乳!!」

内にいる響輔がテイルファングの所業に仰天する。

対するテイルファングは響輔の声など聞こえていない。たとえば、聞こえていたとしても相手にしないだろう。

自分の部屋のソファアームにでも座らして、見栄えのいいインテリアにでもしようかとしていたテイルファング。苦勞して無傷で奪い、あとは持ち帰るだけと思った矢先、どこかの馬の骨とも分からぬ人アントローボス間に破壊されてそれで怒らぬ訳がない。

「また言ったな、コイツ!!」

テイルブルーも自分のコンプレックスを大声で言われてもはや堪忍袋の緒が切れた。

「事実だ——だが、そんなことはどうでもいい！無きに等しい貴様の胸など私は微塵も興味がない！ツインテールを破壊した行為、同じツインテールといえど極刑に値する！

最早貴様は私の敵だ!!」

ツインテールを愛するが故の怒り。

同じツインテールといえどこの様な蛮行を許すほどテイルファング——テナーは寛容でもなく、性格は間違つても温厚ではない。

猛禽類のような金色の瞳が怒りを帯びてテイルブルーを睨む。

『私の敵』？へえ、じゃあ——アンタを存分にぶちのめしてもいいってわけ？』

テイルブルーもテイルファングは気にいらなかった。

自分よりはるかに胸が大きく、スタイル抜群、背も高く、手足もすらつと長い。

何より幼なじみは彼女の話となると目を輝かせ、鼻息を荒げて興奮し、熱く語るのに無性に苛立ちを覚える。

射殺す様な冷徹な瞳が殺気を帯びてテイルファングを捉える。

「ぶちのめす？はっ、驕慢だな。そんな薄っぺらい身体で私をどうにか出来ると思ってるのなら、その思い上がり断じて甚だしい」

「あらそう？だつたら、あんたの胸も削ぎ落としてやるわっ!!」

魔皇力がバチバチと黒い稲妻みたいに具現化し、テイルファングの周囲を囲む。

「全く、貴様のその貧相な胸板を見ていると。実に虫の居所が悪くなる。あの小憎らしいビショップと同じ様な胸をしよって……」

テイルファングとテイルブルー、互いのブレイキの壊れたデッドヒートレースの様な

戦いが今始まろうとしていた。

ワイルドブルー／テイルブルーVSテイルフアング（後編）

「はあああああああああああああああああああああああああああああああつ

!!!

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ
!!!

拳と脚とツインテールの技を互いにぶつける両者。

その攻防は「災害」と形容する他なかった。

滑走するたびに入道雲みたいな土埃を巻き上げ、大地がカップアイスみたいに挟られ、爆撃の様な蹴りや殴打が地盤を砕く。

芝生で生い茂っていたハイキングコースがみるみるうちに更地へと変貌してゆく。

先ほどのフォックスギルディとの戦いなど比ではない。テイルフアングとテイルブルーの戦いは地形を変えてしまう程、本気のせめぎ合いだった。

シャドウ、クワット
「影創造——黒蝙蝠」
フロック、バット

一旦、距離を置いてテイルフアングの影がキバットを模した蝙蝠の大群を作り出し

た。

それらはテイルブルーに嘯み付こうと一斉に襲い掛かるも、彼女は自らの足をを止める事はない。

見た目ゴムボールみたいに柔らかかそうでも実際、ブラック・バット黒蝙蝠は砲丸投げの鉄球ほどの硬度をほこる。自らの拳をマシンガンの如く高速で繰り出し、ブラック・バット黒蝙蝠を水風船みたいに次々と粉砕してゆくテイルブルーは最早異常だった。

「んげえ、ウソだろお!？」

「チイツ、…影創造——ブラック・ドーム黒歯壁」

キバットが驚いている間にもテイルブルーは今度は巨大なブラック・バット黒蝙蝠が地面からトラバサミみたいに自分を丸呑みする様包み、周囲の攻撃を防ぐ影創造。

それを砕こうと拳を振るい上げ、飛びかかるテイルブルーだが、ブラック・ドーム黒歯壁はビクともしない。

「にやろっ!!」

テイルブルーは左右の髪房を纏めるアンテナの様な鋭利なりボン—フォースリヴオンを握りこぶしで弾くと、光が水滴のように空にはじけた。

自前の武器が水飛沫と共に現れる。

地球の青をそのまま凝縮化したような濃密でどこまでも奥深いサファイヤブ

ルー。

海神を彷彿とさせる蒼き三叉の長槍―ウエイブランスがその手に収まった。

大きく跳び、棒高跳びみたいに逆手でウエイブランスを構え、垂直に黒齒壁ブラック・ドームに突き立てる。

黒齒壁ブラック・ドームはガラスみたいに碎けるも、そこにテイルファングの姿はなかった。

背後から殺気を感じ振り返ると、テイルファングの拳がテイルブルーの頬を捉え、その身体を勢い良く空中へと突き飛ばし、地面を転がった勢いで大量の土埃が宙を舞う。

「ダメだ。手ごたえが軽い」

「攻撃の決まる瞬間、腰のブースターを逆噴射して勢いを殺しやがった。いい戦闘センスしてやがるぜ」

「そうか？ ナイトやルークに比べればまだまだだと思いがな」

大量の土埃の中からテイルブルーが大きく跳躍、ウエイブランスを振り上げ、奇襲。

テイルファングも同じく、三日月型の二刀一対の短剣・黒刃刀ブラック・ナイフを即座に具現化し、応戦。

剣戟が小刻みな金属音を奏で、両者の剣筋が閃く。

だが、すぐにテイルファングの黒刃刀ブラック・ナイフがテイルブルーの攻撃に耐え切れず、碎けた。迫り来るウエイブランスを後ろに倒れて回避し、バク転で距離を取る。

「黒刃刀は軽いが、耐久性が低い。受けに回つちや不利だ！」

「分かつている。こちらにも守りに徹するつもりはない。——黒薔薇」

花卉が刃状の黒薔薇が手裏剣みたいに幾つも投擲され、飛ぶ。

水を纏ったウェイブランスが水滴の斬撃を光らせ、唸る。

テイルファンクは手頃にあつた身の丈程の大岩を片手で地面から引っこ抜き、それを枕みたいに軽々と放る。

それを難なく拳で砕き割るテイルブルーに対し、一気に接近して再度黒刃刀で打ち合おうとしたかに思えた。

だが、切っ先がウェイブランスに触れ合い、微かに軌道をずらした次の瞬間、黒刃刀を瞬時に解除し、テイルブルーの手首をそのまま掴んで捻り、足を掛けて、合気道みたいにテイルブルーを転倒させる。

追撃の拳が来る前に即座に腰のブースターを噴かして、その場を脱出する。

「（なかなか機転が利くな。だが、逃がさん！）」

テイルファンクはテイルブルー目掛けて駆け出す。

だが、想定内だとテイルブルーはほくそ笑んだかと思うと急に腰のブースターで浮き上がる。

ワイヤーアクションみたいに宙返りからの錐揉み体制のままテイルファンクの背後

へ。

「むっ!?!」

不意を突かれたテイルファングは急いで背後を向こうとするも、テイルブルーは錐揉み回転しながら槍をプロペラみたいに大きく振るい、ウェイブランスの柄が横薙ぎにテイルファングの顔を捉える。

「ぐおっ!!」

常人がくれば頭蓋骨を簡単に粉碎するほどの威力の攻撃にテイルファングは一瞬怯んだ。テイルブルーが着地と同時に鋭い突きが腹部目掛けて繰り出された。

「えっ!?!」

だが、テイルブルーの目が驚愕に見開かれる。

「へっへー、残念じやんにえんでした」

腹部のベルトのバックルに合身しているキバットがテイルブルーの槍を歯で受け止めていた。

ウェイブランスを掴み返し、力任せにぶん投げる。

「よくやった、キバット」

「顎あごが外れるかと思っただぜ」

デモンズ・ガントレットを装着した手首をスナップさせるテイルファング、ウェイブ

「おーい坊や、起きな。起きなつてほら、起きないとキスするよ？ぶちゆく、なんちやつて♪」

「う、うくん……ハッ！」

「気が付いたかい？」

気を失つた彼をここまで運び、そろそろ頃合を見計らつて冗談交じりに頬を軽くはたき、起こした。

「うおあつ!?エ、エレメリアン！」

総二が自分を起こした者を目の当たりにしたとき、眠気は一気に冷め、飛び上がつて驚いた。

目の前にいたのは人間ではない。

その姿はアルティメギルみたいな異形だったが、どちらかと言えば人間に酷似していた。

お嬢様結びをした絹みたいなベージュがかつた白髪、耳は槍みたいに鋭く、肌も全身がまるで雪みたいにく、無機質で艶のある陶磁器みたいな顔は仮面の様に口な鼻孔が存在せず、一對の目には白目や虹彩はなく全体が緑色に発光していた。緑の外套、黒色の胸当、黄土色の短パンといった動きやすいその服装はエルフを彷彿させる。

「ああ、勘違いしないでくれ。私はアルティメギルの一員でもなければエレメリアン

でもない。私はテイルファングの友達のアルテという者だ」

警戒する総二を宥めるようにアルテは手を翳して落ちるかせる。とりあえず敵意はないらしく、総二も警戒はとく。

「危ないところだったね。どういうわけだか君、あの場に倒れてたんだよ。私が運び込まなければ巻き添えをくらうところだった」

「（そういうえば、気を失ってたんだっけ？）あ、ありがとうございます」

「うん、礼儀正しい。いい子だ——送ってやりたいとこだけど、私は彼女たちを止めに行かないと」

アルテが指差す方を見ると、緑で生い茂っていたそこはまるで焼け野原のように跡形もなく更地となっていた。

「何だ!!?」一体、何が起こったんだ!!」

「テイルファングとテイルブルーが一問着起こしてねえ。この有り様だよ」

最早弁明の余地もない。

総二は大きく頭を抱えた。気絶していたせいで何があったか分からないが、何故こんな事になったのか：俺がもつとしっかりしていたら：総二は人生で一番の自責の念に駆られていた。

「さーて、私は年長者らしく働くとしますか。あ、坊やは気を付けて帰るんだよ」

そう言うのとアルテは一瞬の内に大きく跳躍し、背中から白鳥のような白い翼を出して焼け野原の方へと飛行していった。

総二そのアルテを見ながら思考を巡らす、テイルフアングとは一体何者なのだろうか？アルテからは敵意が全くといっていいほど感じられなかった。彼女の仲間なのは確かだろう。だが、アルティメギルでもない彼女たちのその目的が未だ掴めない。

だが、今はそんなことはどうでもいい。

目の前の惨状をどうにかしないと。

ああ……戦場カメラマンみたいなのがうろつき始めた。

明日の一面どうなってしまうのか。

あと、トゥアールは存命なのか。

さつきから全然応答がないのが心配でたまらない。



戦いは佳境へと突入していた。

「チイツーあの槍に対抗出来る武器はアレしかねえぞ！」

「フンツ、その様だ」

『二人ともいい加減やめてくれ！』

響輔の制止も聞かずに、テイルファングはサイドスロットから青いフェッスルを取り出し、キバットに吹かせる。

「ガルル・セイバーッ！」

笛の音と共に蒼い彫像がやってくる。

彫像はテイルブルーの槍を弾くとテイルファングの右手に収まり、一瞬の内に狼のサーベル『ガルルセイバー』へと変貌した。

「むっ!?!」

——………まただ

テイルファングはガルルセイバーの柄を握り、トードギルデイと戦った時のような違和感を感じ取る。

まるで歯車がかツチリとハマってない、しっくりこない違和感。

そんなことを考える余裕もなく、迫り来る槍を躲し、鏝迫り合い、一気に懐へ飛び込み、横薙ぎにガルルセイバーを振るう。

「あぐっ!?!」

テイルブルーを取り巻くフォトンアブソーバが大きく削られた。

棒きれみたいに軽々と振るうガルルセイバーだが、まるで台風みたいな風と共に振る

われるその攻撃は重く、数合打ち合いウエイブランスを軽々と弾き、まるで自動車に跳ねられたみたいなき感覚を覚え、テイルブルーは大きく吹き飛ばされた。

「きやああっ!!」

「何だ?このパワーは!？」

しかし、その威力は本人——テイルフアングも予想外だったらしく、制御できていない。

剣の力に振り回され、今にも右腕が持つて行かれそうだ。

「オーラピラー!!」

だが、一瞬油断した隙にテイルブルーのオーラピラーがテイルフアングを捉える。

テイルフアングは水柱に拘束され、身動きが取れない。

だがその眼は戦意を喪失してはいなかった。

「キバット!!」

「おう!」

キバットにウエイクアップフェッスルを吹かせる。

「ウエイク・アップ!」

「ブレイクレリース
完全解放」

美しい音色と共に常闇と燦然と輝く三日月が現出、鎖カテナが断ち切られ、拘束具ヘルズゲートが解放される。その深紅の右脚に埋め込まれた三つの魔皇石が輝きを放ち、その衝撃でブルーのオーラピラーを内側からぶち破る。

テイルブルーのウエイブランスもポセイドンの槍の如く三叉へとわかれ、真の力を発揮する姿へと変わる。

テイルファングは常闇に浮かぶ三日月目掛けて高く跳び、テイルブルーはテイルファングに狙いを定め、激流の様なエネルギーが彼女の周囲を取り巻く。

「エグゼキュート……」

「ダークネス……」

「ウエ————イブ!!」

「ムーンブレイク————ッ!!」

互いの必殺技が炸裂!!

次元を貫くようなテイルブルーの刺突と空間を歪ませるテイルファングの飛び蹴りが衝突。

特大の爆発が起こり、嵐みたいなその衝撃で隣の山の大木さえもなぎ倒した。

まあ確かにフォッククスギルデイがやられたあとに登場し、テイルレットを倒して（気絶させ）テイルファンクと交戦したのを見れば、新手の敵とも誤解されなくもない。

愛香はすっかりうなだれていた。

「なんで私ばかり、こんな悪者みたいに取り上げられてんのよ!! ネットでもいじめとしか思えないような罵詈雑言が滝のように流出しているんですけど!! そーじ、ひどいと思わない!!」

ソファーに座る幼馴染に同意を求めるように声をかけるも、総二はムスツと不機嫌そうに目を背けながら。

「つーか、あれは愛香の自業自得だと思うぜ?」

「は?」

あっさりとその言葉は否定された。

「俺のツインテールの人形の首を腕いで、頭部を粉微塵にしやがって。あの時はシヨックこそ大きかったけど、今俺怒ってんだからな」

「何よ、あたしが悪いって言うの!?!」

「うん」

即答で返した。

それは愛香にとって泣きたくなるような返答だった。

顔のわからないどこ誰かが罵倒したのならいい。

たしかにあの時は頭にきて、冷静になった今では自分が悪いと思うところもある。

だが唯一の心のよりどころである総二の否定こそ、一番のショックであった。

「テイルファンクが加勢に来てくれたの見てないのか？愛香がやった事つて殆ど藪蛇だと思っけどな」

「そーじ、何でテイルファンクの肩ばつか持つワケ？あんな胸も背もデカイ女の！あんなどつちの味方なの!？」

「俺はツインテールの味方だ！ごはあ!!」

「もうアンタなんかとは絶交だ、バーカ!!」

「私と仕事どつちが大事なの!？」と言いつつそんな倦怠期の妻みたいな質問に、総二はキメ顔で素直に答えると愛香の鉄拳をくらい、床に転がった

「もう弁明の余地皆無ですわ。愛香さん四面楚歌でかわいそ。あ、でもそういうえば愛香さんブレスを渡す際言いましたよね？『はっ！ばかにしないで、承知の上よ！自分の行動に責任が持てないほど私は子供じゃないわ！』って、例え世界中が敵に回っても戦い続けるヒーローって私カッコイイと思いますし。別にいいですよ。アハハハハハハハ！——あれ？愛香さん目が笑っていませんか？私怪我人ですからね。お手柔らかに——あ、ああーっ!!」

今の状況が本当に面白いのか、痛々しいコルセットを巻いたトウアールは爆笑し、愛香の容赦ない制裁を受ける羽目になるのは言うまでもなかった。

その光景を傍目で見ていた未春は三人を見ながら思考を巡らせる。

「（総ちゃんは今テイルファンクに夢中か。二人にとつては大きな壁かもしれないわね。）」

冷静沈着で頭脳明晰、いわゆるクールビューティ。

大人びて頼りになりそうな、雰囲気には未春から見てもこの少女には見惚れており、あの二人とは全く違うタイプ。

かなり手ごわいライバルが来たにもかかわらず、未春はこれから面白くなりそうだと、ウキウキしながら皆の朝食を準備するのだった。

しかし、女の勘というのだろうか。

未春は何となく気づいていたテイルファンク——テナーの「危うさ」に。

そして、その勘は当たっていた。

テナーがどれほどの寂しさの中戦っているのかを——。

キバットも新聞を見ていたが、少し納得のいかない様な顔をしていた。

「どうして俺様がペット扱いなんだよ！俺はテナーの相棒だぞ！」

どうもキバットは記事によると自分はテイルファンクのペットだと思われているらしく、その事について若干不満を覚えている様子だった。

「全くお気楽な奴らだ。それにテナー、お前も地形を変えるほど暴れることないだろうに」

「まあ、あれはやりすぎたと私も思う。だが早朝から観光スポットとして大勢の人集りができているようだし、あれはあれで今後いい名所になると思うぞ」

「全く……」

次狼もテナーの軽率な行動に呆れ果て、当の本人も自分の短絡的な行為に反省しているみたいだった。

そんな中、ソファアにもたれかかっている響輔はというと「ぶすー」と少しふてくされていた。

「どうしたの？響輔おにいちちゃん」

「ご機嫌、斜め」

「実はね——」

ラモンと力が心配する中今朝、響輔と何があつたのかヴェデイが代わりに説明し始め

「つまりおやつを食べられて怒っているってワケかな？」

「あまりにもくだらんが、テナーが悪いな」

「何ッ!? 私が悪いのか!？」

テナーは自分が攻められるとは思ってもいなかっただのか、マルシルや次狼の言葉に動揺する。

「人のものを勝手に食べるなんて泥棒と同じじゃねえか？」

「うん、テナー、が悪、い」

「テナおねえちゃん、謝んなよー」

「テナー、謝っちゃいなよー」

他の者も便乗してテナーを責め立てる。

「まあその響輔君。あんまり目くじらを立てないでくれ」

不機嫌な響輔を見かねてマルシルが弁明してきた。

「私が説明するとだね。響輔君の精神を内に宿しているお陰でテナーはヘリオスの食料を大量に摂取しなきゃならないんだ。加えて、鎧シヤドウ、クラフトや影創造は多大なエネルギーを消耗するし、つまりだね——」

「そういうことを言ってるんじゃないやなくて……!」

「ではどのようなことだ?」

「もううんざりなの!! 君たちのおかげで僕の生活はめちゃくちゃだーっ!!」

今までの鬱憤をぶちまけるかのようにその大広間に響輔の叫びが木霊する。

「僕の予定を無視したり、僕の頭の中で話しかけたり……これじゃまるで変な人じゃないか!」

「わりいな響輔。俺らもお前の生活を第一に考えてるんだ」

と、キバットがなだめる。

「じゃあ、これからはキヤツスルドラン以外ではずっと僕の体のままでいてちょうだい」
「待て! そんな事できるか!! 奴らとと戦えなくなってしまう——よもや貴様、戦う時のみ私をこき使おうというのか? それこそ、そんな勝手許さんぞ!」

「何言ってるの! 僕の身体を壊した君が悪いんじゃないか!! テイルブルーとも勝手に戦ったりして」

「そ、それは……」

響輔の提案に異議を唱えるテナーだが、責任感の強いテナーは響輔の糾弾に言葉を詰まらせる。

「たしかに響輔の言い分も最もだ」

「次狼！」

同意したのは次狼だった。

「はじめ約束した通り、響輔には響輔の生活を営む権利がある。戦いに巻き込むのはあまりよくない」

「おい待て、だからつと言つて——」

「さすが次狼さん、話が分かる。よし！これで決まりだね」

「何も決まっていけない！」

異議を申し立てるテナー。

「だがな、紅響輔。お前はテナーにもつと心を開け。お前はこれから否が応でもテナーと二心同体の生活を送らねばならんだ。アルティメギルのエレミアンはこれから強い奴が必ず来る。お前の心とテナーの心、互いが共存出来なければテナーは本来の力を出せず、いずれ勝てなくなる」

ここでマルシルも口を挟んできた。

「これから響輔君の能力ちからが必要になってくるかもしれない。そうなつてくるとやはり必要なのは響輔君の心の持ちようだ。戦いに巻き込んでしまったのは本当に本意かどうか、テナーの力になって欲しいんだ」

「でも、マルシルさんの仮定が正しいかどうかもわかりませんし、それに……」

「それに？」

「——不安なんです」

「何だと？私がそれほどまで頼りないのか？」

響輔の言葉に反応したのはテナー。自分が頼りないと言われたと思い、静かにいきり立つ。

「そうじゃなくて——テナー、君は僕に何か隠していることない？」

その言葉を聞くと同時にテナーだけではなく他のメンバーにも緊張が走る。

心の音色にも乱れが生じ、それが響輔に確たる懷疑心が生ずる。

「どうして君や皆はこの世界のために戦っているの？これは僕たち人間とアルティメギルとの戦いで君たち魔の者には全く関係がないじゃないか」

「だろうな」

そこに関してはテナーは肯定する。

「僕の命を助けてくれたことには感謝してる。でも、戦うこととは話が別だ。戦う理由がわかっていない人たちと戦う事なんてできないよ」

「……………」

テナーはしばらく黙った後、口を開く。

「今はまだ言えない。だが時が来たら必ず訳を話す。だから——」

「もういいーそれじゃ僕は学校に行くね」

テナーの話を途中で中断し、憤慨した響輔はテナーの身体に入り、キャスルドランから出て行ってしまった。

あとに残されたメンバーは一言も言葉を発せず、そんな響輔の後ろ姿を黙って見ていた。



その頃、アルティメギル基地では――

一体のエレメリアンが自室でパソコンを操作し、ある作業をしていた。

それはテイルファンクの画像解析だ。

昨日ようやく再登場し、テイルレッドと共闘、フォックスギルデイとテイルブルーを相手にした事はもちろんアルティギルの情報にも入ってきている。

しかし、テイルレッドより年上、深紅のツインテール、冷徹な美貌ぐらいいしか情報がなく、まだ全貌がわかりきっていない彼女にエレメリアンの皆は彼女に対する妄^{シミュレーション}想をすることができないことに不満の声が高まっていた。

これでは戦闘前の士気に関わると危惧し、アルティメギルの隊長——ドラグギルデイはあるエレメリアンを本部からよこすように進言した。

それからしばらく経って一人のエレメリアンがドラグギルデイの元へ遣わされてきた。

「どうだ？進捗状況は？」

「ところどころピンボケに砂嵐、これは故意に自分の正体が公になることを阻害しているねえ。何か特別な装置が働いているよ」

「つまり？」

「これは『この世界』の技術じゃ見られないものだ。もしかしてドラグギルデイ、『前の世界』での生き残りが関わっている可能性が高いかも……」

「やはりな。あの戦士にはテイルブルーと違い下品な乳があつて思い出すのに時間がかかったが、あの装備には少し見覚えがあつた——だが、問題はそこではない。テイルファングの画像解析はできるのか？我が部下達も痺れを切らしている。このままでは士気どころか、テイルレッド組とテイルファング組に分かれての内部分裂にまで発展しかねん。だが、かつて『例の部隊』に所属し、『シークレット・リムーバー真理究明』と謳われたお前ならばこれらの画像を解析できるのではないか？」

「結論から言つて……この画像解析は難しいかも知れないね、悔しいけど。でも、これ

だけの情報があるならそれらを照らして、モニタージュで等身大の蠟人形が作れるよ」
「本当か!？」

「僕のフィギュア制作技術に関しては——ドラグギルデイ、エレメリアンの中でも折り紙付きなことはわかっていてでしょ？」

そのエレメリアンはテイルファンクの画像ファイルを開いていると奇妙な一枚を見つけた。

フードにツインテールを通した少女の写真。

「おや、これは？」

「それは甲冑を装着する直前のテイルファンクの画像だ。その少女に関しても全く情報はない」

「……なるほど、ありがとう。作業を進めたいから、そろそろ席を外してもらえない？ ドラグギルデイ、蠟人形はアンタ出撃前にできるよ」

隊長であるドラグギルデイに対して下手に出ず、対等に接するそのエレメリアンは始終ドラグギルデイに背中を向けた状態でも全く隙なく作業を進めていた。

ドラグギルデイが出て行ったのを見計らうともう一度さっきの少女——テナーの画像を開く。

「へえ、まさかあんたがこんな辺境の地にいるとはねえ……」

次狼たちは聴こえるものの悪意がないのは確かである。

正直戦う理由が明確になっていない者に背中では預けられない。

ふと見ると前方には総二と愛香がいた。

何やら総二が愛香に頭を下げているみたいだった。

「さつきは悪かったって……」

「ふんつ、後で何か奢んなさいよ」

「総二君、愛香さん、おはよう！」

そんな二人に響輔は後ろから挨拶する。

「お！響輔」

「響輔、おはよう」

「今日のニュース見た？」

「今日のニュース？」

「ほら、テイルファンクがまた現れたって」

「ああ、知ってる知ってる！」

「総二君、テイルファンク好きだからどうかかな？と思って」

テイルファンク——テナーの話題を出すのは気が向かなかつたが、友達の総二がどのような思っている方が気になるので響輔は訊いてみた。

「え？まあ、俺的には……うれしいけど、その……」

「？」

総二は歯切れ悪くチラチラと愛香の様子を見ているのに気が付き、響輔も愛香の方を見やると、まるで射殺すみたい総二に睨みをきかせてくれた。

「愛香さんどうしたの？」

「悪い響輔、この話題はまた今度」

「え？う、うん」

小声で訳を聞こうとするも突然総二が話を切り上げ、響輔は何故愛香が不機嫌なのかまるで見当がつかなかった。

「そういえば、何かツインテールの女子生徒が多くないか？」

「言われてみれば……そうだね」

「女の子ばかり見て……」

さらに機嫌を悪くし、ジト目で総二を見る愛香。

「いや、気掛かりなんだ。ツインテールにする子が増えている気がする……」

「テイルレッドとテイルファンクが原因だと思うよ。それと、愛香さん——今何か焦つていない？」

「え？何で!？」

ドキリと動揺を隠しきれてない愛香。

「焦る? どうして?」

総二も不思議そうに尋ねた。

「あ、いや、そんな感じがして…違ったならごめんなさい」

「……何でもないわよ。ただ、このツインテールは私のトレードマークみたいなものだから…その…」

今度は愛香が総二にチラチラと視線を向けている。

「(ああ、なるほど…)」

愛香から流れる熱い音色を聴きながら響輔は何となく察した。

意識しているのかしてないのか、愛香は総二にさつきから髪を弄られて嫌な顔一つしていない。

二人は心を許している間柄なんだなど、愛香の甘酸っぱい音楽を聴き、すこし羨ましく感じた。

「そういうや神童会長も最近ツインテールにしたのかな?」

「何でいきなり会長の話になるのよ!?!」

「(総二君、空気読め)」

「いやだって、あんなすごいツインテールの人なら中学の時とか絶対気づいていたはず

「観束？」

「はい、総二様の少し離れた親戚です」

「は、はあ、これはどうもご丁寧に：僕は紅響輔です」

「総二様のご友人の響輔さんですね。よろしくお願ひします」

「いやあ、意外だなく。総二君にこんな可愛い親戚がいたなんて——外国の人だよね？
日本語うまいね」

「いえいえ、それより本日私も総二様のクラスに編入しますので、響輔さんにはラブコメの主人公の周りにいる影の薄い男友達みたいにクラスの方々に『今日このクラス女子が転入してくるみたいだよ』と噂を流し、私がクラスに入ってきた時、『あ！あなたはあの時の！』と嘯ませっぽいセリフを言っして下さい。私は先生の指示も聞かず総二様の隣の席に座って、『これから学校でも一緒ですね総二様♡』と言います。するとクラスのモブの男子たちは『あ、あいつあの子とどういう関係だー!?』と言ひ始めますので：——」

「家に帰れ、犬畜生が——っ!!」

当たり前のように制服を着て、登校風景に溶け込んでいたトウアールを愛香は思いつきり蹴っ飛ばした。

ぎやああああああああ……!と叫びがドップラー効果で遠ざかる。

「二人共、今の女の人は？」

「響輔、あいつのことは忘れなさい」

「ふ〜ん……………」

愛香は極力響輔と関わらせないようにしていたが、響輔あの少女の事が気になっていた。正確にはその心の音楽が。

「(彼女の音楽は流れている筈なのに、タチエツトみたいに無音だった。五線譜も見えただけど彼女には音符が見えない)」

響輔はツインテールを取られた人を見ている。

その人は音楽、楽譜が消えている筈なのに五線譜のみ消えていなかった。

彼女は何者だったんだ？

「おはよう〜よい朝ですわね」

突然弾んだ声が後ろから聞こえた。

噂をすればなんとやら、満面笑みの神童会長がそこにいた。

「おはようございませす神童会長」

「おはよう会長、なんか機嫌いいですね」

「ええ、ティルファングが再び現れてすごく嬉しいんです。しかも今度は二人で協力してエレミアンを倒したのが王道っぽくて熱くて……」

あー、やっぱりその話題出しちゃう？と思つた矢先、不機嫌オーラ全開な愛香が隣に

いた。

「それと、テイルブルーなのですが……」

今度はテイルブルーの話題が出ようとした時、総二の顔色が悪化した。

愛香の機嫌もさらに悪くなる。

もしかして愛香さん——

「あまり、悪い人じゃないという感じでしたわ」

「え？」

「TVやネットのニュースでアレコレ悪い印象に捉えがちですけれども、何でか悪い人じゃない気がしましたの。なんの確証もないただの勘なのですけれど……」

それを聞いて愛香は一転、あなた分かってるじゃない！と目を輝かせ、擦り寄っていき。

「総二君」

「ん？」

「もしかして愛香さんでテイルブルーのファンなの？」

「え？」

「だって、あの喜びよう……」

「えつと…まあ、そんなところかな？あいつもあいつで苦勞してるんだよ」

「まだテイルファンクとの仲は険悪みたいですが、いずれ分かり合える日が来ますわ」
「……うん、そうですね」

響輔は愛香の心に何か罪悪感的なものが刺さるのを感じ取ったが、気のせいだろうと気に留めなかった。

「会長は本当にツインテイルズを応援しているんですね」

ツインテイルズとはテイルレッドとテイルファンクをまとめて世間ではこう呼ばれている——テイルブルーは察してください。

「この歳で変だと思いかもしれませんが…わたくし、ヒーローに憧れていますの。未だに子供向けの特撮番組を見たり、おもちゃも買ったたり」

「そうなんだ」

「意外ですね」

「あの日もメイド達の目を盗んで足を運んだヒーローイベントで襲われてしまいましたの——だから、運命を感じていますのよ。テイルレッドとテイルファンクに助けられた事」

「運命ね…」

となりで総二がポツリと呟くと、真剣な眼差しで告げる。

「会長、きつとテイルレッドも、ファングも、ブルーも、会長みたいに応援してくれている人がいることを本当にありがたいと思っている。心の支えになっていくはずだよ」

総二の言葉を聞いて響輔は少しばかりの感動を覚えた。

「そうかもしれないね。一人でも支えになつてくれる人がいるのと、いないのとじゃあ……違うと思うよ」

テナーが何のために戦うのか、それはまだわからない。でも、人の心ツインテールを守るために戦い、人に感謝されていることには違いない。

『お前はテナーにもつと心を開け。お前はこれから否が応でもテナーと二心同体の生活を送らねばならぬのだ。アルティメギルのエレミアンはこれから強い奴が必ず来る。お前の心とテナーの心、互いが共存出来なければテナーは本来の力を出せず、いずれ勝てなくなる』

次狼の言っていた事を思い出した。

——この世界の人間でテイルファンクの正体を知る者として、彼女の力になつて上げて欲しい。

暗にそんな意味で口にしていたかもしれない。

「ありがとう。確か、ふたりは……一年A組の観束総二君と紅響輔君——でしたか？」

「ツ！どうして僕達の名前を……？」

「いやですわ、生徒会長として全校生徒の名前と顔はすべて暗記していますのよ。それではまた学校で」

ニツコリと屈託のない笑みを浮かべて、先を急ぐ会長。

しばし見送ったあと響輔たちも急ぐ。

「じゃあ、僕たちも行くか」

と足を運ぼうとした矢先、校門前でテイルレッドとテイルファングのファンと思わしき連中の戯言たわごとが聞こえてきた。

「あ、テイルレッドが俺にほほ笑みかけてくれた」

「ふん、いつまでも次元の低いことを……。俺なんて、トランクスにテイルレッドを念転写してきたぜ！」

「ああ、ファンングお嬢様。あなたはいつ私を迎えに来てくださるの？」

「その鋭い爪の生えた両腕で私を抱いて♡お嬢さま」

「てめえ！レッドのbot作つただろ！俺が先に作つただぞ」

「うるせえ！俺の方がフォロー数多いんだぞ！第一、もう世界中で三千アカウントぐらいテイルレッド・テイルファングのbotは出来てるんだよ！今更だろ！」

「うん！わかった！それじゃあ、放課後一緒に映画館行こうねテイルレッドちゃん♡」

「もう、ファンングお嬢様だったら……。ふふふふ♡」

何だこのカコフォニーみたいな妄想集団は？

男子生徒はテイルレッド、女子生徒はテイルファンクに対しての妄想を膨らましていた。

今テナーは眠っているが、当の本人がこの光景を目の当たりにしたら——僕なら遺書を残して自殺を図るね。

僕がとなりを見ると、総二君が泣いていた。

総二君、君もツイインテイルズが不憫でたまらないんだね。

確かに、テナーや総二君にも心の支えが必要かもしれない。
いざとなったら僕が味方してあげなきや。

決意を新たに学校へ向かう響輔であった。

テイルレッド、テイルブルーの本人がいることにも気づかないで——。

調律／首無し造型師

アルティメギル基地のホールで再び会議が開かれていた。

「……以上、この20日間で撃破された同胞は隊員16名、戦闘員146名に及びます」
「ふうむ」

「これほどのものか、ツインテイルズ……!!」

ペースが落ちることはなく、アルティメギルは次々と戦力を投入。だが、神童慧理那の言葉で愛香が吹っ切れたのも手伝い、戦闘に慣れ始めた総二、テナー達はその全てをものともせず撃退。

「一方、この世界に降りたつてより我らが手に入れた属性力は皆無。一時捕獲した属性力もツインテイルズにより奪還されています」

「いつまでも手をこまねいている訳にもいきませぬぞ」

侵略作戦が始まって20日いいいよ、アルティメギル側に焦りが見え始めていた。

ドラグギルデイが腕組をし、ギリ、と歯を鳴らした。

それだけで全員が喉元に刃を押し当てられたような感覚に陥り、鋭い緊張に包まれる。

「ツインテイルズの実力は本物だ。もはや、なまなかな戦士をぶつけてもいたずらに戦力を削いでいくだけの消耗戦となろう。これより先は勇者のみに許されし聖戦であることと知れい！我こそはと志願する者はおらぬか？」

「はっ！それならば私が！」

若い声がドラグギルデイに答えた。

「おお、看護服属性ナの申し子と呼ばれし神童——スワングルデイ……貴様ならば誰も異論はない！」

冷や汗混じりだったものをはじめ多くのエレメリアンが安堵と賞賛で迎える。

「フッフッフツ、しかし、いきなり貴様ほどの男が行くまでもあるまいて」

「いや、だから隊長が半端な戦士じゃあ無理だつて言つたばかりだろ？」

張り詰めた空気が和らぎ、気運が高まっていく。

ドラグギルデイも頷いた。

「……よかろう——だが、その前にテストを行う。お前がツインテイルズと戦うに値するかどうかをな」

カツ！とドラグギルデイの目が見開かれ、ホールに一陣の風が吹いた。

皆がそうとしか感じられないほどの刹那、ドラグギルデイは自身の剛剣を抜き、スワングルデイの眉間の数ミリ先へ切っ先を翳していた。だが、スワングルデイは微動だに

しない。

「フツ！肝はなかなかのものだ。だがもう少し試そう——あれを」
戦闘員が入室し、黙礼とともにドラッグビルデイにかしづく。

「それは私のパソコン！……なぜここへ!？」

ドラッグビルデイの剣にも臆さなかったスワンギルデイがはつきりと怯えていた。

「静まれ！これもテストの一環である！」

「まさか……あの修羅の試練、エロゲミラ・レイターを……！」

ほかの隊員たちも歯の根が合わずガチガチと鳴っている。

ドラッグビルデイが無言でマウスを動かす。

【はあくい♡ロードしまあくす♡】

甘くとろけるような声が静聴しているエレメリアン達が集うホールに木霊する。

「これはこの世界で数日前に発売されたばかりのゲームであろう。『おまかせナース
エンジェルたん』——もうコンプリートしておるわ……卑しい奴よ」

追い討ちをかける様に見えるようにPC画面が大モニターにも映し出された。

ひっ！と声を上げるスワンギルデイ。

「しかし、そのサブデータ…サムネイルが肌ばかりよのう……」

「お許しを!!どうかお許しを!!」

「だというのに一つだけ頬を赤らめいた少女のサムネイル……このセーブデータは怪しいのう」

「あ……う……」

どうやら主人公の部屋で二人きりのやり取り。

だが、頬こそ赤らめているが、つつがなく普通の会話に終始し、場面が移ってしまっ
た。

「どうやら幼馴染の部屋に遊びに来て、空気が変わった事ですかさずセーブをしたのであろうな。これから二人で睦言を始めるのではないかと。だが、何事もなく終わり、次の日付のロゴが表示され、落胆——」

「あるある」

「あるある」

思わず共感してしまう周囲の面々。

「ぐわああああああああ!!」

とうとうスワングルディは気を失い、倒れてしまった。

戦闘員が肩を貸し、運ばれていく。

「情けないこれしきの事でツイーンテイルズと交えようとするとは、笑止」

だが言葉とは裏腹にその目には慈しみが含まれていた。

「わは！相変わらずスパルタだねえ、ドラッグルディは」

スワンギルディが退席するのを待っていたかの様にそのホールに突如として声が響いてきた。

いきなり介入してきた声にエレメリアンの隊員達はざわめく。

「何者だ！」

「姿を見せよ！」

ドラッグルディ以外の隊員達は辺りを見回す。

するとそこに現れたのは黒い甲冑に青い炎か灯る髑髏のランタンを手に持ち、マントと一体化した赤いフードを深く被ったエレメリアン。

「貴様！何処の者かは知らぬが、今は大事な会議の……！」

「静まれ、お前達！」

突如として会議の最中に割り込んで来たエレメリアンを咎めようとしたが、その隊員はドラッグルディの一喝でピタリと止まった。

「何だ？我が部隊の教育方針に異存でもあるのか？」

「いんや、僕は賛成。昔僕も一度味わったことある辛酸だからね……」

「あれほどの熱気に包まれた若輩は叩いて鍛えるに越したことはない」

「だね。苦い経験は若い内からしとかないとね——最近はストレスにひ弱なゆとり隊

員が多くて多くて……」

「無駄話はやめよ！ 貴様がここへ来たということはついに完成したのだな？」

「渾身の出来だよ。連日徹夜続きで……ほら、こんなに目の下に隈が……」

「お前にはないだろう」

「あつはつはつ、そつかそつか……それ位頑張ったつて事だよ」

呆れて突つ込むドラッグギルデイにそのエレメリアンは明るく笑つて返す。

この会議に参加している者達はこの光景を見て皆啞然としている。

あのドラッグギルデイとまるで友人みたいに話すあのエレメリアンは何者なのだろうか？と。

それを察したそのエレメリアンは皆の方を向いて軽くお辞儀をして挨拶をした。

「やあ皆さん、初めまして。僕はデュラハンギルデイと言います。首領様の命により、こちらの世界へとやってきました。宜しく、お願いします」

そのエレメリアン——デュラハンギルデイが陽気に挨拶をしたのと同時にその場いた隊員達は恐れ慄き、彼の正体を思わず口にする。

「デュラハンギルデイ!?!」

「聞いた事はある “シークレット・リムーバー 真理究明” と呼ばれ、エロゲなどのモザイク等を何のためらい

んだから」

それは長身に深紅のツインテールが特徴なテイルフアングの蠟人形だった。フォックスギルデイの人形属性ドールがないにも関わらず、その質感は本物の肌そのもの。その出来栄はまさに現代の弥勒菩薩、ミロのヴィーナス。

だが、菩薩やヴィーナスの様な慈愛に満ちた表情ではなく、こちらに敵意の眼差しを向け、への字の口。ポーズは左下から見上げる斜角視点、やや右側面からの側面視点、俗に言う『ガワラ立ち』というものであり、それは目を合わせただけでも、並のエレメリアンでは戦意を喪失してしまう程の出来だった。

ドラッグギルデイもこの人形の前では、自分の熱い魂に感動を禁じえない。

デュラハンギルデイの実力の一端を垣間見た。

「これがテイルフアング!？」

「今ようやくその全貌が!」

「実物はこれより凄いのだろうな!」

「まるで吸い込まれそうな瞳、今にも動き出しそうな出来だぞ」

「人形属性が無くても、フォックスギルデイ殿にも劣らない腕を持つ!これが獄パガトリの十戒テイルの実力!」

「流星は魔改造を極めし、デュラハンギルデイ殿か!!」

ホールは一瞬の内に歓声で包まれた。テイルファングのあまりにもリアルな蠟人形を一目見ようとホールにいる全員がカメラを手に取り、小学生みたいに卓を乗り越えていこうとする者が現れ始める。

それに対してデュラハンギルディはあくまで自分のペースを崩さない。

「イヤイヤ、フィギュアの魔改造何てまだまだ修行の身だよ。ガレキの墨入れや剥がし塗装、元がいいほど手を入れづらいのは確かだし。さすがに魔改造する度にブルツちやつてるって。だけど、破壊なくして創造はないからね。原作への愛と想像、原型師への感謝の念を含めて……」

「デュラハンギルディ！無駄話はやめよと言ったハズだ！貴様らもいい加減静まらぬか！！」

デュラハンギルディはドラッグルディの言葉でピタリと演説を止めた。

ホールが静かになり、「ウオホン」と咳払いするとドラッグルディはデュラハンギルディに労いの言葉をかける。

「ご苦労、デュラハンギルディ。これで我が部隊も士気を取り戻せるだろう」

「光栄に存じます——続きまして、次の出陣は僕が立候補するけど、いいかな？」

それを聞いた周囲の面々はドラッグルディも含めて、再び驚愕した。

「デュラハンギルディ殿が!!」

「しかし、あの部隊出身の隊員ならばこれほど心強い味方はおりませんぞ」

「必ずやツインテイルズを制する事ができるやもしれぬ」

皆が賛成しかけたその時、異を唱える者が一人いた。

「待て！いくらヴァンパイアギルデイとの仲とは言え、これは我が指揮する隊の戦いだ。貴様の出る幕ではない」

「じゃあ、誰が？」

「我が行く」

静かにドラグギルデイが宣言すると、ホールがどよめきに包まれた。

「ドラグギルデイ様自らが!？」

「偉大なる首領より実権を預かる我ら統率者ドラグギルデイ様、あなた自ら行かれるな
どー。」

「くどいー。」

マントを翻し、ホールを出ていくドラグギルデイ。

足跡が炎となって浮き出るような幻想を抱かせる。

超絶な威圧感もはや怪物という形容は似合わない。

神獣——と呼ぶに相応しかった。

ホールから出ていき、誰もいない通路の真ん中で――

「ドラッグイルデイ」

後ろからデュラハンギルデイは真面目な声で話しかける。

「もし、ヴァンパイアギルデイ隊長に会えたなら何を話したかった？」

「無論ツインテールのことだ。我と奴は同じ属性を持つ者同士、惹かれ合い、そして我より洗練されたツインテールを持っていた。決して死ぬことはない永遠の親友ともであった……なのに――突如として死んだ。今でも奴の死には納得できん！あれほど強いやつが……何故……」

ドラッグイルデイの背中越しに答えるその声は怒り、悲しみ、悔いそれらが全ての感情が混濁したものだった。

「……………」

デュラハンギルデイは立ち去るそのドラッグイルデイの背を見て、ある一つの決意を固める。



「来たよ、テナー」

『そうか』

今日も相変わらず響輔はエレメリアンを察知していた。

周囲に人がいないことを確かめると響輔はテナーの姿へと変わる。

「マルシル場所は？」

【ここから少し離れた採掘場だよ】

「よし、キバット！」

念波の送信でマルシルに連絡を取ると、キバットを呼ぶ。

「あいさ了解、今日もキバってー……ん？」

『いや、ちよつと待って！逆の方向からも次元震の音が！』

「……確かに、俺様でも嫌な気配を感じるぜ！」

飛来して来たキバットも気配を察知する。

「マルシルどうだ？」

【ああ……確かに、場所は採掘場とは逆方向で、ここからかなり離れた場所——都心湾

岸のコンテナ埠頭だ】

「そうか」

【採掘場はすでにテイルレッドとテイルブルーが到着済みなようだ。そこは彼女達に任

せて、テナーはコンテナ埠頭に直行するのがいいだろう」
「承知した」

いつも通り帰城の鍵でキャツスルドランへと戻ると、テナーはテイルフアングに変身し、目的地のコンテナ埠頭へと射出された。

埠頭沿岸部、コンテナが山積みとなったコンテナ埠頭。海には貨物船が停泊していた。

手頃なコンテナの上に着地し、当たりを見回す。

「本当にここで合っているのか？」

「座標は間違いないぜ」

「しかし、それらしいものはな——」

ふとテイルフアングとその周囲に大きな影が落とされた。

「ッ！」

雲が太陽に隠れたのかと上を向くとそこには巨大なコンテナが頭上から迫ってきていた。

テナーはすぐにその場を脱出し、落下してきたコンテナはさつきいたコンテナに衝突すると轟音を上げて牛乳パックみたいに潰れた。

『テナー、後ろだ！』

着地して一息つく間もなく、響輔の声に即座に振り向くと後ろのコンテナが真つ二つに叩つ斬られ、その間から首無しの馬に騎乗したエレメリアンが突進してきた。馬の首の切断面からは両刃の大鎌、槍、斧を合わせた様な形状の穂先が突き出ており、それはテイルファンングを串刺しにしようとして迫ってきていた。

テイルファンングは身軽に跳躍すると、紙一重でそれを回避した。着地と同時に後ろを向いてそのエレメリアンを確認する。

漆黒の鎧に赤いフード付きマント。フードの中の顔はまるで奈落の底の様な深い闇であり、表情を読む事が出来ず、そこから漂う気配は不気味さを一層と醸し出していた。そのエレメリアンは首無し馬のスピードを落とし、人差し指を上に向けて『ついて来い』と挑発し、馬を走らせた。

「フンツ、まずは馬術で競おうというのか？」

「OK、ならあいつの出番だぜ」

サイドスロットから馬の顔をした黄金色のフェッスルを取り出すと、バックルのキバットに押し込み、キバットはそれを吹く。

『ゴ———デ———ンツ!!』

ファンファーレのような音色は次元の狭間に存在する亜空間——そこに生息するキャツスルドランにも響き渡る。

「あら？この音色——久しぶりね」

「號電か……」

「めず、らしい……な」

ヴェディ、次狼、力がそれぞれ声を漏らす中その大広間にいた小さな影が音色に反応し、むくりと起き上がる。

一目散に大広間を後にし、キャツスルドランの喉に繋がる通路へと飛び出す。

「いつてらっしやーい♪」

ダダダダダツと小刻みに走るその体が金色に光り輝き、バツカラバツカラバツカラバツカラと蹄の音を奏でて、みるみるうちに全長が3 m以上の巨体へと変貌を遂げ、キャツスルドランから射出された。

光が埠頭のアスファルトへ着地した瞬間、その巨体を支える蹄がアスファルトに積つた雪の様にめり込んだかと思えば、蹄を中心に放射線状に枝分かれした亀裂と破片を飛び散らし、周囲のコンテナもその衝撃でほんの一瞬だけ持ち上がった。

立派な深紅の鬘、黄金色の金属製パーツ、額の三つ目みたいな魔皇石から組み立てら

れたボディが美しい馬型のゴーレム——その名は號電ゴウデンが声高に嘶いた。

「よく来た、號電」

ティルファンクが號電の頭を軽く撫でると、その背中に掛かる鞍くらへ跨る。

『ちよつ。ちよつと待つて！罾なまかもしれないよ！』

「ならば、どの様な罾が待つているか…それもまた一興！しつかり奴の居所を追跡しろ、小僧」

高層ビルの屋上を次々と飛び越える首無し馬。そして、その後を追走するティルファンクと號電。次は高速道路に降りる両者。

次々と行き交う車を追い抜き、エレメリアンと距離を縮めていく。追い越した車からは何だ、何だ？とガヤが聞こえてくる。追走中では周囲の被害も考慮し、下手に攻撃できない。

疾走するエレメリアンにティルファンクも何もせず、ただただ追走劇が繰り返される。

いつの間にか街を抜け、到着したのはだだっ広い荒野。

周囲には人つ子ひとりおらず、山が見えることからどこかの山岳地帯なのは確かなのだらう。

そしてエレメリアンは首無し馬を急にUターンさせるとティルファンク目掛けて突

進し、突き出た大鎌の刃が目の前に迫ってきていた。

急な強襲に驚くティルファングだが、素早く手綱を引き號電をしゃがませて滑り込ませ、ティルファング自身は宙返りをして大鎌の刃を躲し、曲芸の様な身軽さで再び號電の背中へと跨り、やり過ぎした。

「戦いの場を選んだのか？」

そして両者は距離を置いて向かい合うと、まるでエンジンを蒸かすみたいに號電と首無し馬は蹄で砂利を蹴り、それを跨る双方は睨みあう。

しばらくの静寂の後、二人同時に馬を走らせた。

ティルファングとエレメリアンは互いに同じタイミングで跳躍すると全く同じ跳び蹴りを放つ。

地上の方では號電と首無し馬が正面衝突し、上空ではティルファングのデモンズ・ヒールとエレメリアンの鋼鉄ブーツが衝突した。

「うおあつ!？」

「ツツ!!」

両者の力は互角。

その凄まじい衝撃に耐え切れなくなり、お互い吹き飛ばされ、ティルファングとエレメリアンのもとに互の馬は駆け寄る。

「これは!!」

號電の額をよく見ると僅かに亀裂が入っており、これにはテイルフアングも驚きを隠せなかった。

號電の素材は強度があまりにも高いが故に加工が非常に難しいグレートワイバーンの骨を何年もかけて加工し、それを魔の者ダイモーンの世界——セレーネで最も硬い特別な純金で何重にもコーティングされた部品を使い、作成された最高の硬度を誇る馬型ゴールム。

さらに鎧の魔皇力の恩恵もあって、テナーの知る限りの武器で傷付くなどありえない。

このエレメリアンは今までとは違う。

テナーは目の前のエレメリアンの力量に対して警戒レベルを引き上げていると、首無しの馬は一瞬で大鎌、斧、槍が合わさった形状のハルバードへと変化し、エレメリアンの手に収まるとテイルフアングと改めて対峙した。

テイルフアングの方も號電を退がらせる。

「影創造——黒刃刀」
シャドウ・クラフト
ブラック・ナイフ

三日月型の二刀一振りの短剣を構え、一気にエレメリアンの元へ駆け出した。

「はあっ!!」

相手はハルバードをテッキブラシみたいに軽々と振るい、上から斧で振り下ろしと袈裟斬り、下からの振り上げと横薙ぎには大鎌、突きには槍の穂先を使い、黒刃刀のリーチが届かない範囲から攻撃を繰り返す。

テイルファンングは防戦に追い込まれ、ハルバードを変幻自在に操るエレメリアンは接近戦を許させない。

「影創造——黒毒蛇」

シャドウ・クラフト
ブラック・リボン
ブラック・ナイフ
シャドウ・クラフト

これは黒髪紐の先に黒刃刀を連結した影創造。リボンの部位を操り、遠隔操作することも可能で、テイルファンングは両手でそれを蛇みたいに操ることが出来る。

「今までのエレメリアンと違って饒舌ではないのだな」

軽く百合以上の剣戟を交えるも、相手のエレメリアンはテイルファンングの影創造に掠りさえもする事がなく、無傷な上に疲れた様子もなく、余裕とばかりにハルバードを手元で回転させる。

『このエレメリアン——強い！』

先日戦ったテイルブルーの槍術はかなり粗削りなものだったが、このエレメリアンの長物の技はかなり洗練され、目を見張るものがあつた。

「普段なら貴様らアルティメギルは名乗りを上げてからが戦闘の合図だと思っていたが、お前はそうでないのか？」

ティルファングは黒刃刀の切っ先を相手に向ける。

「戦いの前に己の名と属性を明すが良い。それとも貴様には名がないのか？名乗る口がないのか？理性がないのか？——答えろ！」

そのエレメリアンは「クフツ」つと吹きだすと。

「クヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒツ……」

不気味な笑い声を突然上げはじめた。

「まともに名乗っていないのはそっちの方じゃないのかな？」

「何だと？」

軽薄そうな、どこか無邪気そうな口調でそのエレメリアンは言葉を返してきた。

「まあ……、名乗れと言うなら名乗ろうかな。僕は頭巾属性のエレメリアン——デユラハンギルデイ」

黒い甲冑、大鎌のハルバードと青い炎が灯る髑髏のランタンを手に持ち、空洞であり、底のない奈落の暗闇のような頭巾を被ったエレメリアン——デユラハンギルデイが名乗る。

「デユラハンギルデイ……」

「とりあえず言ったほうがいいのかなく？ 久しぶりく……ですネ——

——ヴァンパイアギルデイ…隊長」

『ヴァンパイアギルデイ？』

「……………」

その言葉を聞いた響輔は突然の単語に衝撃を受け戸惑い、テイルフアングは怪訝そうな表情をした。

オブリガード／テナーの真相

『ヴァンパイア……ギルディ?』

目の前のエレメリアンはたしかにそう言った。

『どういう事なんだ、テナー!!』

これがテイルファング——テナーの言っていた秘密というのか?

そうしている間にデュラハンギルディはハルバードを振り上げこちらに迫ってきていた。

その大鎌がテイルファングの首を狩ろうと斬撃が横薙ぎにきたのに対し、テイルファングはそれを屈んで回避。

続いて斧による振り下ろしがくる。

二刀の黒刃ブラックナイフで受け止めるも、思ったように力が入らない。それどころかすぐにヒビが入り、砕けてしまった。

「ぐっ……!」

斧の刃はテイルファングの肩を直撃した。

幸い肩のアーマーで防ぎ、大事には至らなかったが明らかに自分の力が弱まってい

る。

シャドウクラフト

影創造もまるでガラス細工のように脆い。

響輔との心の調和が取れていない——共存できていない証拠である。

「くっ……小僧、今は目の前の敵に集中しろ！」

『答えてよ、テナー！　今まで僕を騙していたのか!？』

テナーは響輔を叱咤するも、響輔は最早聞く耳を持っていない。あまつさえ響輔はテナーに対して敵愾心をむき出しにしている。

「違う！　私も奴が何を言っているのか理解できん！」

絶え間なく繰り出される斬撃、刺突を回避しながらテイルファングはデュラハンギルデイに問いを投げかける。

「デュラハンギルデイと言ったな貴様、この私は貴様の事など知らぬ、ヴァンパイアギルデイという名前にも身に覚えがない。お前は何をもって、私を貴様らアルティメギルの仲間と見受けている！　答える！」

それを聞いてデュラハンギルデイは攻撃を止め、ハルバードを下ろすとテイルファングを指さした。

「お前じゃないよ〜」

「何?？」

「お前だよ。お前〜」

デュラハンギルデイの指の先はテイルフアングの下腹部。

『まさか!』

「いつまでも黙りこくっているんだい? ヴアンパイアギルデイ隊長殿〜?」

響輔も漸く気付いた。

ヴアンパイアギルデイはテナーの事を言っているんじゃない。

「懐かしいねえ〜、オレ様の1番最初の名前。もう変えちまったけど…」

テイルフアングのベルトのバックルに留まっていたキバットは真つ赤な目を細め、口元を切れ込みを入れた西瓜みたいにニイっとニヒルに上げるとバックルから分離し、飛翔する。



フードはカジジュアルな衣服だ。

部屋でくつろぎたい時や外でちよつと肌寒い日は気軽に羽織れる。

アラビアでも女はフードの一種——ヒシヤブが普段着だ。

コーディネート次第で、可愛くもカジジュアルにもなる万能アイテム——それが頭巾だ。

だけど、それら頭を覆い隠しちまう頭巾はツインテールの妨げになる。

アルティメギルでは僕は肩身の狭い思いをしていたよ。

「だけど、あんたは僕にフードとツインテールの共存の可能性を教えてください」

『デュラハンギルデイという新参者は貴様か?』

『フードに穴を空けて、そこからツインテールを通してしまえば良いのではないか?』

『貴様は中々見所がある。我が部隊でその力を存分に振るうが良い』

「僕が長年悩んでいたコンプレックスをあんたは一瞬で吹き飛ばしちまったんだ。その女が、フードからツインテールを通しているからまさかとは思ったよ。それだけじゃない。ティルファンングが使う二刀流の剣捌きもあんたの戦い方にソックリだった。

彼女はアンタの弟子かな?」

断片的な映像からテイルフアングの戦い方がヴァンパイアギルデイの戦い方によく似ている事に気づいていた。

伊達に精鋭部隊の隊員はない。

「そういう思い出話はアルバムにでもしまつとくんだな——よく覚えているよ。あの頃のお前はまだまだ青二才だったが——成る程、よくもまあ出世したな、デュラハンギルデイ」

「親しげだな。 どういう事だ？ キバット」

昔話に興じるキバットとデュラハンギルデイの会話にテイルフアングは我慢できず割って入ってきた。

「キバット、お前は奴を知っているのか？」

「アイツは——デュラハンギルデイは俺の部下だったエレメリアンだ」

「初耳だぞ」

言うべきタイミングはいつでもあつたはずだ。

テイルフアングも響輔も突然の告白に内心戸惑いを隠せない。

「実はこの蝙蝠の姿は本来の俺の姿じゃねえ。この身体は作り物でキバの鎧を制御す

るための中核コアなんだ。その中核コアに俺様の魂ソウルと生命ライフが内蔵インサートされている状態だつてわけだよ」

「何故、何も言わなかった」

「だって混乱するだろ？俺の正体言ったら余計に。俺は元々は奴等と同じエレメリアエレメリアンで、アルティメギルの精鋭部隊——獄バスターの十戒アルクの隊長だったよ」

『キバツトが……エレメリアン？』

「あーもう！ だから、あいつらとは関係ないつて！俺は足を洗ったんだ20年以上も前に」

キバツトが落ち着けと言わんばかりに混乱する響輔とティルフアングに懇切丁寧に説明していると今度はデュラハンギルデイが会話に口を挟んで来た。

「隊長、戻つて来なよアルティメギルに——獄バスターの十戒アルクに！」

突然、デュラハンギルデイがキバツトを誘つてきた。

「勿論、その娘こも一緒に！——その娘このツインテールは見逃してあげるからさ！な？」
デュラハンギルデイがこちらに手を差し伸べる。

だがキバツトは真つ赤なめを細め、「ハッ！」自笑気味に笑うと

「そいつあ無理な相談だ。俺もティルフアングツも人間のツインテールを奪うお前等の

味方にはならねえ」

「どうしてだ？隊長。 どうして人間の味方をしているだよ？」

デュラハンギルデイが咎めるような口調で言う。

「別に俺あ、人間の味方をしているわけじゃねえよ」

一瞬、テイルファンングを見やりデュラハンギルデイに視線を向ける。

「ただ俺は…『紅音也』って人間に出会って、人間も捨てたもんじゃねえなって思っただけだ」

「キバットツ!!」

『ツ!!? どうして父さんの名前を!!』

この時、テイルファンングと響輔——特に響輔は今までで一番の衝撃を受けた。

何故、自分が口にしてもいない父親の名前をキバットは知っている!?

「紅音也? そいつは一体何者かな? 隊長」

「俺様の知る中で…最も偉大な人間だ! そして、テイルファンングの……」

「キバット!!」

テイルファンングはキバットの眼前に黒刃刀を翳し、話を中断した。

「戯れが過ぎるぞ。 戦いの最中、雑談は不要だ。今すぐベルトへと戻れ!」

「——ああ、了解」

するとキバットは口答えする事をせず、テイルフアングのバックルへ留まる。

「(余計な事を……)」

『テナー、どういう事なんだ!? キバットはどうして父さんのことを知っているの?』

それに、テナーにも関係があるみたいだし……』

「知らん! お前の父親の事など……私は知らない! キバットの出任せだ!」

「何をブツブツ独り言を……まともに話す気がないなら——」

デュラハンギルデイがハルバードを持ち上げ、もう片方の手に下げている髑髏の形をしたランタンが煉獄の炎みたいに激しく灯る。

「潰しちゃうよ?」

細い腕からは想像がつかないくらい強い力で振り下ろされたハルバード。

しかし、テナーはそれをバックステップで回避する。

プロペラみたいに高速回転するハルバードはさつきまでの小手調べな動きではなく、段違いのスピードだった。

もう片方の手に収まっているランタンからは灼熱の青い炎がバスケットボール程の大きさの火球となって発射。

着弾した場所はナパーム弾みたいに爆発と炎上。

辺り一面火の海となって、徐々に徐々にテイルフアングは追い詰められていく。

號電が嘶き、デュラハンギルデイ目掛けて突進するもハルバードで蹄を弾かれ蹴り飛ばされる。

「鬱陶しいー！」



キャツスルドラン大広間

「どうとう、強い奴が来たんじゃない？コレ」

デュラハンギルデイの猛攻に苦戦し始めたテイルファングにヴェデイが慌てる。

「まだ、響輔君と共存ができていない。このままじゃ——」

「何とかならないの?」

マルシルやラモンも今のテイルファングの旗色の悪さを見て、自分たちに何か出来ることはないかと焦る。

「助けに、行こう！」

力が拳を握り、立ち上がる。

「待て、力。たとえ今回助けに入ったとしても結局はその場しのぎだ。第一テナーは納得しない」

次狼の言うとおりに、たとえ勝てたとしても次も更に強い敵が現れる。その度に次狼たちの手を借りてはテナーのためにはならない。さらに言えばプライドの高いテナーはそれを許さないだろう。やはりこの戦いの勝利の鍵はいかにしてテナーと響輔の心の共存できるかにかかっているだろう。



「成長したじゃないか、デュラハンギルデイ」

「くっ！ キバット、このままでは勝ない」

相手の火力と槍術に翻弄されるテイルファング。

「ファング、響輔に音也とお前の過去を話そう」

「……………」

口を閉ざすテイルファング。

「逃げてんじゃねえ！ 響輔にはいずれ話さなきゃなんねえ事だ!!」

唇を噛み、観念したかのように口を開いた。

「——響輔、聞いているか？」

『……』

「私はお前の父親を知っている」

響輔はテナーの独白に無言で耳を傾ける。



私と音也が出会ったのは15年前の事だ——いや、正確には拾われたと言うのだろうか。

音也は私の育ての親だ。事情は知らないがその時、人間であるお前の父がその世界に滞在していた。

私はファンガイアの世界では貧困な生活を送っていた。

「おいおい、俺様のブラッディローズに手を出そうとしたから、どんな奴かと思ってみれば——何だ？ 随分可愛いお嬢ちゃんじゃないの！ どこから来た？」

偶然あいつの荷物を置き引きしようとして出会った。

その出会いから私は音也に拾われ、他二人のファンガイアと共に私は世話になった。

私は幸せだった——音也の死んだあの日までは。

私が音也に拾われ7年の歳月が流れた頃、ファンガイアの世界では戦争が始まっていた。

すべての種族を統治しようとする当時のチェックメイトファイブが他の魔ダイモーンの者と争っていたのだ。

当時の『クイーン』はそれを反対し、音也はそれを止めるべくクイーンに力を貸して共に戦っていた。

【テナー、お前は今日は一日家の中にいろ】

しかし私は言いつけを守らず、音也を心配して外へ飛び出して行ってしまった。

【テナー！ こんなところで何してる!! 逃げろ!!】

突然、音也の声が聞こえたかと思えば、視界が暗転した。

私の命はそこで尽きた。

『……………』

「響輔！」

テナーの言葉に響輔はようやく返す。

だが、響輔の発した言葉は実に意外なものだった。

アンサンブル／ブレード・オブ・ウルフ

『初めて名前で呼んでくれたね、テナー』

「何？」

テナーは響輔に父親を死なせてしまった自分の罪を糾弾されると思っていた。だが響輔の口から出た言葉は全く予想だにできなかったものだった。

『ずっと疑問に思っていたんだ。もうすぐテナーと二心同体になってひと月になる。なのにどうして、僕と一定の距離を置いてあまり心を開いてくれないんだろうって——ただ僕がなんの力にもなれてないから疎ましく思ってるんじゃないかなって……そう思ってた。でも違った』

「……………」

テナーは響輔の話に嫌な顔を全くせず聞き入っていた。

一句一句、彼の想いを受け止めて、どんな心境なのか確かめる様子だった。

『僕には……父さんとの思い出なんてない。一体どんな人だったのか。母さんに訊いてもよくわからなかった。でも、ようやくわかった気がする』

「……………」

テナーにとって響輔の父——音也はは敬愛する育ての親であり、同時に命の恩人だった。

響輔を助けたのは音也を死なせてしまった自責の念と、過去の恩義からであり、その負い目から響輔との間に壁を作ってしまったのだ。

「響輔、お前は恨まないのか？私の事を——私はお前の父の命を奪ったも同然なんだぞ」
『自分の事を、そんな悪く言うなよ。テナー』

怒りを含んだ、窘める口調で響輔は言った。

『その命は僕の父さんがくれたものなんだろう？君のことが自分の命より大事な存在だったんだから……君には自分よりたくさん生きて欲しいから——そう思ったから父さんは

自分の命を差し出したんだ。そんな…父さんの行為を無下にするような言い方はやめなよ、テナー』

「……」

響輔にとってテナーは今は亡き父・音也の忘れ形見であり、生きていたことへの証。

それを否定することは音也への侮辱に他ならない。

さつき自分が言った迂闊な言葉を省み、テナーは心の内で忸怩たる思いをした。

『でも…ありがとうテナー、本当のことを話してくれて。初めて君の本当の心がわかった気がする』

たとえファンガイアのクイーンであり、高慢な振る舞いが目立つテナーだが、その実心には弱さと孤独を抱えていた。

それに響輔はマルシルから前々から聞いていた。

テナーは危険を伴い、響輔の魂ソウルをその身に宿していることを――

「響輔、音也の息子であるお前にもこれから迷惑をかけるかもしれない。だが……私とこの世界を……この世界のツイントールを守る為に力を貸して欲しい!——頼む」

『逆だよ。むしろ頼むのはこっちの方だよ。これからもよろしくねテナー』

テナーも響輔の寛大さに触れ、自分も響輔と肩を並べて共に戦っていけると不思議にもそう思えてきた。

「ああ、私は戦う。我が恩人とその恩人が愛したツイントールのために!」

『父さん、本当にツイントール好きだったのかよ!!?』

テナーのその言葉から音也の意外な一面を聞いて、驚愕する響輔だった。

このツイントールはかつて音也が最も愛した髪であり、この髪を結うとテナーは音也と共に過ごした日々を今でも思い出す。

テナーの口元からは笑みがこぼれ、心は高揚とし始める。

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

「はあああああああああつ!!」

デュラハンギルデイの連撃を掻い潜るも、今度は回避できない攻撃が襲いかかってくる

る。

「おい！ファング！聞いているのか！？来たぞ！！」

ブラック・ナイフ
「——黒刃刀……」

そう呟くと同時にテイルファングの両手に短剣が具現化し、デュラハンギルデイのハルバードを軽々と弾いた。

即座にデュラハンギルデイの懐に搔い潜ると同時に無防備な胴体にローリングソバットを叩き込み、テイルファングを上回る巨体を蹴り飛ばした。

「(い)ふ(あ)つ……」

その威力は今までと段違いであり、デュラハンギルデイを軽く百メートル離れた。

「悪いな、キバット。しばし、響輔と雑談をしていた」

「え？話してたって……お前ら三秒くらいしか口閉ざしていなかったぞ……？」

「——そうか、精神での会話による時間の経過は現実の時間にあまり作用しないのだな」

キバットはそんなテイルファンクを見てフツと嬉しそうに口元を釣り上げる。

「何話してたか知んねえけど——いい顔になったじゃねえの、テイルファンク！」

「…かもしれないな」

傍から見てはわからないだろうが、付き合いの長いキバットはテナーの顔つきが変わっている事に気付いていた。

まるで憑き物が落ちたような清々しいその表情に——

前を見るとデュラハンギルディはハルバードを杖に起き上がってくる。

「そんじゃ…今度こそ成功するかな？」

「ふははは、しなければ困る。奴を——いや、奴らを倒すために…これからの戦いに勝利するために！」

テイルファンクはベルトの左右のスロットホルダーに収納されているガルルフエツスルを引き抜くとそれをキバットの口に押し込む。

「ガルルセイバーッ!!」

ホイッスルのような甲高い音が辺りに響く。



その音色はキャツスルドランにも届く。

「出番か……」

次狼は飲みかけのコーヒーを一気に仰ぐと、次狼の双眸がまるで獣みたいに一段と鋭くなり、虹彩は血のように爛々と赤くきらめき、タキシードのネクタイを少し緩めて身を屈める。

そして爪とぎをするみたいに床を引っ搔くと蒼炎の火花が音を立て弾け、次狼の真の

姿——蒼き人狼・ウルフェン族の戦士『ガルル』の面影がちらついた。

「ウオウウウウツ……!!」

狼の遠吠えと共に次狼は蒼い彫像へと変化し、キャツスルドランから射出された。

次狼達はファンガイアの重鎮であるテナーと『闇の契約』をすることによってキバの鎧が使用する武器へと変化。

彼らを『アームズモンスター』と言い、フェツスルの音でキャツスルドランから呼び出すことが可能なのだ。



キャツスルドランから射出されたガルルの彫像はウルフェンの顔を模したサーベル——ガルルセイバーへとその姿を変え、テイルファンングはその柄を左手で受け止める。

すると——

「うっ、うぐぐっ……っ!!」

ガルルセイバーを握ったのと同時にテイルフアングの左腕に激痛が走り、銀色の鎖カテナがガルルセイバーから伸び、それはテイルフアングの左腕から肩にかけて覆うように巻き付かれていく。



——時は遡り、キャツスルドランでの特訓の時。

「音楽が聴こえる?」

「はい、実は僕は昔から、人の……心境といいますか……その……感情といいますか……聴こえるんです。それらが……音楽になって……。それに……その人の心の……音楽の五線譜と音符が見えるんです」

響輔はテナーの質問にしどろもどろとしながら答える。

その場で聞いていた次狼とマルシルも興味深そうに頷く。

かつて響輔は他の人に自分の能力について話した事があつたが、その時は全く相手にされないか、もしくは馬鹿にされたりした経験があつた。

今回もテナーからどの様な目で見られるのか、それが怖かつた。

だが響輔の予想に反してテナーは納得したかのように、その能力を考察し始めた。

「心の感情を受信しているということか？」

「その理由は不明だが、もし響輔が聴き取る事の出来るその心の音楽がプシユケ（属性力）によつてもたらされるものだとしたら……—」

「なるほど、その作用によつて起こされた次元震を感知したという事か」

次狼の考察にテナーは頷く。

「充分ありえることだね。2度も都合よくエレメリアンが出現する場所を察知できる訳がないし、その現象を偶然や勘として片付けるにはむりがある。あと、ちよつと検査してみたんだけど響輔君の魂は少し変異的なものだった」

「変異的なもの？」

マルシルの言葉を次狼が聞き返した。

「響輔君の魂フシユケにファンガイアのようなツインテールの属性は含まれてなかったようだ」
 「なに!?!」

「それどころか、どの属性も含まないものだった。まるで透き通った水晶のような…無色透明な、それでいて何も無いわけじゃない。私も響輔君の様な魂フシユケは初めてみる——
 実に興味深い」

どの属性も含まない。

マルシルのその言葉にテナーは驚いた。

人間は魔ダイモーンの者よりも精神力が大きく発達している。

それだけ高度な属性力を内に宿し、必ず自分が好む属性を一つは所持している。
 全くない、ということとは絶対にありえない。

「そうだよね。まあでも、問題はそこじゃない。その変異的な魂フシユケだからこそ代わりに響輔君は極めて特殊な体質を持つてる。テナー、それこそが、あなたをさらに強くする大きな鍵だ」



響輔の特殊な体質——それはテナーと武器状のアームズモンスター達との心の音楽の周波数を合わせて、共鳴効果をもたらす事。

キバの鎧は展開するとファンガイアであるテナーの防具になると同時にテナーの身体の一部として一体化している。

以前まで、武器化したアームズモンスター達はあくまでテイルファングの武器として孤立し、キバの鎧とは別々にテナーによって使役されている状態なのである。

だが、感情を受信しやすい響輔を仲介役とする事でテイルファングは異なる種族を半ば融合状態にすることが可能であるとエルフィン族呪術学者のマルシルはそう理論を導き出した。

つまり響輔をとり込んでいるテナーはファンガイアの鎧と魔ダイモーンの者の武器——異なる種族同士でそれらを一体化さ、異なる種族の特性を取り込む事が可能であるというらしい。

「グッ……、これは……」

『うっ！特訓の時より……激し……』

訓練の際何度か試したがテナーと響輔はどちらも互を心底信頼できず、心の共存がうまくいっていなかった。

まだこの理論は一度も実現していない。

しかし、今回互いに心の内をさらけ出した両者。

必ず成功させてみせる。

ガルの力にさらに強力な魔皇力が鎧に循環される。

テナーの身体ソーマ、生命ブネウマ、魂フシユケが軋みを上げ、激痛が走る。

「……大丈夫だ、きつとやる。お前らは俺の親友の——音也の子だ」

キバットも二人の絆を信じ、力の奔流を押し止め、属性力のコントロールに専念する。

ガールセイバーを掴む左腕。

それを覆う鎖カテナは一気に碎け、はじけ飛び、そこにあった腕はテイルファンクの物ではない。

ガールセイバーを握る左手、敵を切り裂く恐るべき左手の戦闘爪——ウルフエンクロー。

ガルルの力を得たことで、手枷に埋め込まれた魔皇石も青く染まり、ガルルの牙が変化した肘の打撃牙——ワイルドエルボー。

腕の装甲板——ガルルシールドに覆われた左腕——ワイルドアーム。

外見はあまり変化していないが、ガルルの影響を受け、ノーマル状態を超越する脚力による機動力を発揮する——ワイルドレッグ。

ガルルの影響をうけ、強靱かつ柔軟なガルルの獣毛性質を受け継いで変化した肩アーマー——ウルフェンシヨルダー。

さらにテイルファンングの胸部・ブラツテイラングも鎖に覆われ、はじけ飛び、姿を見せたのはガルルの力の影響で変質した胸部——ウルフェンラング。

そしてキバットの眼も、テイルファンングの虹彩、髪留め——キバペルソナもガルルの力の影響を受けてコバルトブルーに変色した。

——テイルファンング・ガルルチエイン

「姿が変わった?」

デュラハンギルデイもテイルファングの鎧が赤から蒼へ変貌したことに戸惑う。何より驚いたのはテイルファングの姿が変わったことではなく、その纏う空気。

まるで魔獣の様に凶暴なのにそよ風みたいに静かなような、氷みみたいに冷たい炎のよ
うな、対照的な雰囲気がかげ合わさったような空気だった。

ハルバードとランタンを構えなおすと臨戦体勢を取る。

鋭き蒼の眼光は目の前のデュラハンギルデイを睥睨し、口内は先の尖った牙がいくつ
も生え並び、唸り声を静かに上げると腰を屈め、今にも走り出しそうな体勢をとる。

デュラハンギルデイは目の前のテイルファングに少しも目を逸らしていなかった。

なのに——いつの間にか目の前から突然テイルファングが消え失せ、次の瞬間には脇
腹に斬撃が叩き込まれていた。

「がはっ!!」

自慢の鎧は紙のように切り裂かれ、体制を崩した。

後ろを向くとそこにテイルファングがガルルセイバーを振り抜いた姿で存在してい
た。

——速い!!

デュラハンギルデイは全くもって見えない高速移動に戦慄を禁じえない。テイルフアングはそのまま地面を蹴り上げると、再び姿を消した。

今度は見失わなかった。

上を仰ぐとそこにはガルルセイバーを振り上げるテイルフアングの姿が。

軽くビルの5、6階の高さまで上昇している。

驚異的なジャンプ力に喫驚するも空中では身動きが取れないと内心ほくそ笑み、ランタンを頭上に掲げ、火球を上空にいるテイルフアングに繰り出した。

それを見てテイルフアングはなんと空中で跳んだ。

飛んだのではない、跳んだのだ。

何もない空中で透明な足場があるみたいに跳ね、火球を回避したのだ。

「何っ!!?」

完全に物理的法則を無視した不規則な現象。

そしてそのまま文字通り滑空するみたいに空中を滑り降りて、デュラハンギルデイの背後に回ると、一閃。

デュラハンギルデイを斬り飛ばす。

「いっはあっ!!」

ノーマル状態では百合以上打ち合おうと、全く刃が届かなかったデュラハンギルデイ

をいとも簡単に捉え、斬り裂く。

ガルルセイバーのガルルの牙が変化した刃——ウルフエンブレード。

分厚い鉄板であつても、まるで抵抗を感じることもなく切り裂いてしまう鋭い切れ味をもつこの刃は周りの空気を震動させ、ソニックムーブのような現象を起こし、刃状の風をウルフエンブレードに取り巻き、回転させる事により、チェーンソーみたいに離れた相手に斬撃を繰り出すことが可能なのだ。

それを抜いても、ガルル Cheney の恐るべき機動力の前に圧倒されるデウラハンギル
 デイ。



魔の者・ウルフエン族。
ダイモーン

ファンガイアと同盟を結ぶ狩猟民族である。

集団で狩りをする彼らは仲間意識が高い。

彼らはポニーテールとはまた違った一つ結を誇りとしており、それは一人前の戦士として認められた証である。
ワンダイ

そしてウルフエンは驚異的な脚力の持ち主で、脚で獲物を追跡、両手の爪と牙で捉え

るのがスタイルである。

その脚力は大気を蹴り上げ、ホバー走行も可能なほど。

平野でウルフェン族の集団に囲まれれば、魔の者最強と謳われるファンガイアでも生存率は低い。

ただ——チエックメイトファイブという例外は除いて。



「はああああああああつ!!!」

「うぐああああああつ!!!」

デュラハンギルデイは自身に刃を向けるテイルファングを捉えようとするが、その姿は視認すらままならない。

相手を探す間に、あらゆる方向から疾風の如き斬撃が繰り出される。

目にも止まらぬ速さでデュラハンギルデイを中心に駆け廻り、それを繰り出すテイルファングは姿すら見えない。

「今だ！テイルフアング！」

『トドメだ！』

キバットと響輔の激励にテイルフアングはガルルセイバーのウルフエンブレードをバックルに留まっているキバットへ囁み付かせた。

「ガルル・バイト!!」

キバットの牙を通して魔皇力がガルルセイバー全体に流動し、さらにグリップを掴むウルフエンアームを通してテイルフアングの全身へ流れ渡る。

すると、世界は漆黒の常闇へ変化した。

大きな満月の月明かりをバックライトにしてテイルフアングはガルルセイバーのグリップを口にくわえ、身を屈める。

頭部のツインテールも青く光り、尻尾のように逆立ち、鋭く、鋭利な刃物みたいに硬質化した。

全身をバネとして跳躍し、テイルフアングの影が満月を背後に錐揉みしながら風車みたい回転。

「な、なめるなよ〜っ!!」

デュラハンギルデイはよろけながらもテイルファンクが頭上から回転しながら、向かってくることに気が付き、ハルバードを振りかぶり、受け止めようとした。

だがデュラハンギルデイは知らなかった。

ガルルセイバーは満月の夜にその切れ味を何十倍にも引き上げることができるとに。

「ガルル・ハウリングスラッシュッ!!!」

ハルバードはガルルセイバーを受け止める事に成功した。

ほんの一瞬のみの間だが——

「ぐああああああああっ!!!」

ハルバードは両腕ごと大根みたいに細切れにされ、ガルルセイバー、ツインテールの合計3太刀から繰り出される連続剣撃を食らい、鎧は紙屑のように役に立たず、身体は

あつさりとは斬り捨てられる。

ガルルの顔の幻影が浮かび、デュラハンギルデイはその場に膝から崩れる。

「バ、バカな…。こんなアツサリと…どうして僕が…：…負ける？」

『まだ生きているの？』

「いや、もう決着だ」

「ああ、既に倒している」

アルティメギルの精鋭部隊であるにもかかわらず、ガルルチエインの猛攻に手も足も出なかつたことに驚愕を禁じ得ないデュラハンギルデイ。

彼はもはや、気力のみで自身の身体の崩壊を押し留めている状態だった。

自分の命が残り僅かなのは自分自身もテイルファンングの目から見ても明白だった。

「隊長、強いね…、その娘」

「まあな。手前味噌だが、俺手ずから戦い方を教えたんだ。強いに決まっている」

テイルファンングの強さに舌を巻き、称賛を送る満身創痕のデュラハンギルデイ。

キバットもベルトから外れ、かつての部下ながらよく戦ったと心の中でか褒め称えた。

キバットのかつての同志の仲として、テイルフアングはキバットとデュラハンギルデイの二人の会話にあえて口は挟まず、側で見守る。

「ところで、俺様がヴァンパイアギルデイだつてこと知っているのはお前だけか？」

キバットが尋ねる。

「ははっ……こんな飛びつきりの情報……簡単に漏らさないよ。ましてや、ドラグギルデイ……隊長なんかには特に……」

「この作戦の指揮をとっているのはドラグギルデイだったのか」

キバットは大して驚いていない。

おおよそ想像通り、解かっていたみたいなお様子だった。

「今回の僕は……ただの独断先行。本来は……ドラグギルデイ隊長のみ……出陣する……」

ハズだったからね。でも——」

デュラハンギルデイは気楽な口調から一転、声を低く、真面目に続けた。

「かつての親友と……戦わせるなんて……そんな酷なこと……僕には……出来なかったよ。ましてや……僕の尊敬している……隊長だ。落とし前だけは……どうしても自分の手で付けたかったよ」

「相変わらず甘えな。お前は。俺なら、相手の事をよく知る者同士、例えば誰であろうと全力でぶつけたぜ。心境はともかく、相性がいいなら合理的に倒せると思うしな」

「ドラグビルデイ隊長とは……正反対だね。かつて降り立つ世界に……絶滅を撒き散らす……常闇のように……冷酷非道な、あのヴァンパイアビルデイ……隊長が……」

「案外自分でも優しくなっちゃったと思うよ。音也に出会ってから特に……」

「今更ながら……会ってみたいなあ。その音也という……人間に……」

懐かし様に語るキバツト。

デュラハンギルデイも音也に興味を持つ。

「——ところでサキユバギルデイは元気か？」

キバットは新たなエレメリアンの名前を出した。

「…ああ、副隊長……ですか？ええ、健在ですよ。今は……ボスの所にいますけどね」

それを聞いてキバットは目を不快そうに細め、眉を上げる。

どこかぞつとする様な、普段のおちやらけた目付きではない、理知的で伶俐な目付きだ。

ドラグギルデイの目論見もデュラハンギルデイによつて暴露された。

ツインテイルズの活躍を世界に魅せる事により、ツインテールを増やし、ツインテール属性を奪うと。

それを聞いてテイルフアングは——

「成る程、魔女は子供を食べる際、丸々と肥やし食べると聞くが正にその通りか。だが所詮はただの皮算用。狸を討たなければ意味がない。もつとも、この世界の狸を討ち取るのは難しいと思うがな」

しれつとして答えるその表情は冷たく、瞳の奥には熱い決意の炎が燃えていた。

「ハハハツ……そうか、テイルファング。お前は……中々に……手強……かつたよ」

デュラハンギルデイもそれを見て敵ながら十全を尽くすに値した敵だったと、後悔なく、満足しながらガラスの様に碎けて散った。

デュラハンギルデイの魂たる頭巾ヘッド属性エレメントの属性タイプ玉は空へと上がっていき、飛来してきたキヤツスルドランに捕食された。

登場人物・裏設定・用語解説（1巻までのネタバレあり）

〔テナー・オレンジジュース／テイルファンク〕

種族・ファンガイア族（チエックメイトファイブ・クイーン）

真名・空腹な廃墟は黒曜色の雷鳴を鳴らす

年齢・19歳

（人間に換算しての年齢・16歳ちよつと）

身長174cm（ハイヒール＋7cm・181cm）

B94cm／W65cm／H92cm

好きな物・酒、甘味、響輔の料理

嫌いな物・匂いの強い食べ物

趣味・自己鍛錬、湯浴み、歌、旅行

髪色・ワインレッド。

ツインテールの特徴（獣の牙みたいなジグザグの分け目、鎖で繋がれた枷のような髪留め、伊勢海老みたくにやや後方の上向き結び、日本刀みたくな房）

服装・丈の長い漆黒のロングコートとショートパンツとフード付きのケープ、イン

ナーは血のように赤いタンクトップ、レザー製のフィンガーレスグローブ、編み上げたヒールのブーツ。普段はフードを目深く被り、そこにある二つの穴から深紅のツインテールを流す。

頭脳明晰、冷静沈着、ストイックでプライドが高く、高慢な振る舞いが目立つも情には厚い、根は優しい性格。言葉遣いは古風で非常に流麗かつ格調高い。興味のない物には全く興味を示さないが美しい物や一度興味を持ったものは見極めようとする子供っぽい探究心がある。一族の重鎮として規律や掟は基本守るが自分が定めた事は決して曲げない強い信念を持つ。

幼少の頃より鍛錬を積んでいるので戦いは非常に洗練されており、徒手空拳を基本とした格闘戦、短剣による二刀流、ファンガイア特有の影シャドウ・クラフト創造を得意とする（戦闘スタイルは元ヴァンパイアギルデイのキバットに学んでいるので、二刀流の剣捌きなど戦い方がヴァンパイアギルデイに似通っているとされている）。

幼少期は貧困な暮らしを営んでおり、5歳の時響輔の父・紅音也の荷物を置き引きしようとした際に拾われる。12歳の時詳細は不明だが、音也は死にかけて自分の命を繋ぐ為に自分の魂ソウルを渡して亡くなる。それから丸7年キバットから戦い方を学び、チエックメイトファイブの紋章に選ばれ、クイーンクイーンの座に就く。

くれない きょうすけ
【紅響輔】

種族・人間 アントローボス

年齢・15歳

誕生日・11月11日

身長・168cm

一人称・僕

好きな物・焼き飯系、餡たつぷりの和菓子

嫌いな物・奈良漬け、酒饅頭

趣味・料理、掃除、楽器の演奏（何でもできる）

髪色・赤茶色。

争いを好まない心優しい人間の少年。人の心を音楽として聞く事が出来る特異な能力を持つが、その能力のおかげで人の心に敏感となるあまり、人と仲良く出来ないでいた。しかしおかげで空気を読んだりする事は得意。ツインテールを真摯に好む総二には尊敬の念を持っており、彼にもっと近付こうとツインテール部へ自ら入部しようと考えている。身体の弱い母・真夜がいるため掃除好きで、料理も得意としている。

トードギルデイの攻撃からテナーを庇い、肉体が破損し、一時死亡するが呪術研究者・

マルシルの技術により身体の修復までの間響輔とテナーは二心同体となる（『二心同体』の言葉が象徴する通り、テナーの肉体に響輔の人格および記憶（魂フシネケおよび生命フネウマ）を移植する形で二心同体を実現している。この移植の影響により、テナーは常に身体へ負荷がかかった状態であるため、ただでさえ大喰らいである彼女の燃費が更に悪くなった。一方響輔は、眼鏡なしでは日常生活に支障を生じるほどの近視が治った）。

容姿および服装は自由に切り替えつつティルファングとしての二重生活を送ることになるも、肉体を共有しているため外見は響輔のまま、テナーの意志で自由に動かす事もできる。その際にはファンガイア族の特徴である金色の瞳の色に変化する。ただし、響輔の姿でテナーの運動能力を発揮するには限界がある上に響輔はそれを好ましく思わない。感覚などは、視覚はテナーと完全共有し、聴覚も共有しているが響輔だけが聴こえる『心の音楽』は響輔のみ聞き取ることが可能。声や味覚はテナーの意思で切り替えられ、痛覚は表に出ている人格のみ感じ取る。人格・記憶については互いに独立しており、片方だけが知っている知識については基本的に発話によるコミュニケーションを介してでしか伝達されない。表に出ていない方の人格から、表に出ている方の人格への意思の伝達は思考によって行われるが、その逆は口頭で行われる。そのため、妙な独り言を喋っていると、周囲からおかしな目で見られることがしばしばある。

【キバット・バット三世】

自称「名門・バット家三代目伯爵」

軽薄で軟派で軽口が目立つ性格だが、音也が亡くなってからはテナーを支え、戦い方や生きる術を教えてきたテナーにとつて兄貴分的存在。その正体は10体のアルティメギル討伐精鋭部隊・獄ハイ・ガトリ・アルクの十戒の隊長にして、反逆のエレミアン・ヴァンパイアギル・デイ・ツインテール属性（本人曰く、エレミアンの頃は八頭身でかつこよかつたらしい）。現在はツインテール属性と命をゴーレムへ内蔵させ、キバの鎧の制御装置になって、戦いでテナーをサポートしている。音也とは20年前に出会い、14年前音也と共にテナーと出会う。

【藍沢 次狼／ガルル】

人間時身長・175cm

種族・ウルフェン族

人間に換算しての年齢・約20歳

好きな物・珈琲、肉

趣味・テナーと自己鍛錬、イラスト制作

人間態の容姿は若く、精悍な顔つきのイケメン。義理堅く、思慮深い性格。城内ではタキシード、外出時は毛皮付きのレザージャケットを愛用し、マルシルと共にテナーを支えるサブリーダー的存在。元々ウルフェンの世界で徒党を組み、ファンガイア相手に盗賊まがいの所業をしていたが偶然クイーンとなつて初めてテナーが異世界調査に来訪してきた際、返り討ちに会う。その後色々あつて仲間に入った経緯を持つ。

【緑ヶ浜 ラモン／バツシャー】

種族・マーマン族

人間時身長・145cm

人間に換算しての年齢・約13歳

好きな物・魚介類全般（特に秋刀魚）

趣味・力とバイト、ナンパ

人間態の容姿は小柄な身体に中性的な童顔、城内ではショートパンツのセーラー服、外出時は長袖短パンにベレー帽を愛用している。顔つきから声を聞かなければ女と勘違いされる事もしばしばあり、その事をコンプレックスにしている。人畜無害で無邪気、人懐っこい性格からキャツスルドランの中ではムードメーカー的存在。人の名前を呼ぶ時は君、ちゃん、さんを付ける（テナー↓テナおねえちゃん、響輔↓響輔おにい

ちゃん、マルシル↓マルちゃん、ヴェディ↓ヴェディちゃん、キバットと次狼と力↓呼び捨て)。ラモンは一族の中でも小柄であり、群れから離れて独りだった所をテナーに拾われた経緯を持つ。

【藤咲 力/ドツガ】

種族・フランケン族

人間時身長・190cm

人間に換算しての年齢・約30歳

好きな物・響輔の料理

趣味・料理、ラモンとバイト

筋骨隆々なオールバックの大男。城内での服装は燕尾服で外出時はタンクトップにジーンズなラフな格好をよくしている。言葉は拙く無口だが意外と表情は豊か、気は優しく、意外と気が利く性格。図体に似合わず手先はなかなか器用。ラモンとは気が合っている、屋台、マッサージ、飲食店のバイトで小遣いを稼いだり、よく一緒にいる事が多い。過去にファンガイアに奴隷として売買される最中、テナーによって救われ、そのまま付いていく事になった。

【マルシル・ホウエイトルブ／アルテ】

種族・エルフィン族

人間時身長・171cm（ヒール+5cm・176cm）

人間に換算しての年齢・約24歳

好きな物・白米、煮込み料理

趣味・読書、研究

城内での服装は黒いローブを羽織って、外出時は露出が控えめなカジュアルな服装でいることが多い。唯一、音也の知人の一人で、キャツスルドランの中では実際の年齢が最年長の古株。頭が良く、元々は故郷で若くして大学の教授を勤める呪術研究者。音也が亡くなった際にはキバットと同じくテナーの面倒をみていた。テナーとは母姉というより教師と教え子に近い存在であり、テナーの戦いや鎧を研究し、互いに切磋琢磨する仲である。

【ヴェディアルイク・イエロード・スフィールズ・モンタルク

（通称・ヴェディ）／シュレイディ】

人間時身長・120cm

人間に換算しての年齢・約28歳

好きな物・魚介類全般、鰹出汁の味噌汁

趣味・キバの鎧のメンテ、薬草栽培、ゴスロリ服とぬいぐるみ集め

見た目は10歳ほどの幼女だが立派な成人。その為性格は大人びており、達観している。だが、ゴスロリなど子供っぽい服装を好み、魔女みたいな三角帽子をいつも被っている。故郷では腕利きの魔道具職人であり、普段テナーが身に付けている魔道具もヴェイのお手製。実は既婚で、故郷には夫に3男3女の大家族がいる。

・用語解説

【魔の者】ダイモーン

セレーネに存在する種族でファンガイアを除いた魔の者は人間態と戦闘態の二つの姿を持ち合わせている。

【人間】

魔の者からは『アントローポス』と呼ばれ、大多数の世界にその存在が確認されている。人間は自分の魂フシユケイを自力で力に転換できない故、力や寿命は魔の者ダイモーンに及ばない

ながらも、その愛や勇氣、ブシユケイ魂の濃度は魔の者ダイモーンに比べてはるかに高い。

【ファンガイア族】

ダイモーン魔の者最強種であり、ツインテールを愛する一族。

『チエツクメイトファイブ』という重鎮を中心にセレーネを仕切り、ヘリオスを監視し、すべての世界の均衡を守る一族。『キバの鎧』という秘宝を所持し、闘争本能が刺激されると瞳が金色になり、下顎にステンドグラスの模様が浮かぶ。各自が社会での名前や一族の勲章の他に、固有の詩的な真名を持つ者もいる。上位の力を持つ者は影シャドゥ創造クラフトという固有の能力を持ち、自身の魂ブシユケイを泥の様な流動体へ変化させ、武器へ整形コントロールする事が可能。しかし。運用は困難を極め、魂ブシユケイを糧シヤドゥ・クラフトにそれをコントロールするためにも体力と精神力を大きく削る上に、一度に使用できる影シヤドゥ・クラフト創造の量にも個人差がある。ちなみにキバの鎧を着用できる者になれば、その応用で固有の結界を作り出し、自身の力をさらに高める事ができる。人間に比べてファンガイアは寿命が長く、15歳まで人間と同じ成長速度だが、15を境に成長速度が3分の1程低下する。

【ウルフェン族】

集団で狩りをする狩猟民族であり、仲間意識が高い。ポニーテールの亜種ワンタイ、一つ結タイいを愛する一族であり、その一つ結タイいは一人前の戦士としての証である。脚力が非常に高く、瞬足で、空中を跳ねたり、文字通り滑空することができる。

【マーマン族】

短^{ショートカット}髪を愛する長命種族であり、人間の約10倍は長生きする。主に湿地帯や人里離れた水域に生息し、非常に視力が良く、水中活動にも陸上活動にも長けている。また、他の魔族と比べて非常に長命な種族であり、中には1000歳に届こうかという個体も存在した。この種族には男しかいない種族でもあり、女性しかいないマーメイ族とつがいを成す。ちなみにラモンはマーマン族の中では小柄な方。

【フランケン族】

300年前誕生した最も歴史の浅い種族。1700年代に生まれたフランケンシュタイン博士が作り出した人造人間フランケンシュタインの怪物を始祖とする。知能は高くないが、純粹無垢で性格は穏やか、仲間に対しては恩義を尽くし、額^{オウルパツク}出を好む。全ての魔^{ダイモン}の者の中で最も腕力に長けた種族で、その剛腕はファンガイアでさえ脅威に感じたほど。極寒の地を住処とし、どんな環境でも生きていける頑強な体を持つ。その為、奴隸として売買されることも少なくない。

【エルフィン族】

マーマンと同じく長命種族。半端^{ハーフアツツ}結俗に言う『お嬢様結び』を好む種族で、大木生い茂る森の中、木の上に住み家とし、背中の翼による飛行、高い知能、ファンガイアよりも高度な超能力と魔術を操る種族であり、シーケツト族と共にレジエンドルガに対抗す

るためキバの鎧の製作に貢献した種族として有名である。ヘリオスではエルフや天使のモデルになった種族とされている。

【シーケット族】

ウルフェン族の近縁種とされ、物づくりの技術に長けた二側結ツィサイドアツプを好む一族。唯一、ドララン族を飼い慣らす種族で、キャツスルドランやキバの鎧を実際に生成した一族でもある。寿命は約200年。成人の平均身長は約130cm前後、人間の子供の様な矮躯な体型である。ヘリオスではケットシーのモデルになった種族とされている。

【ドララン族】

グレートワイバーン、ガオーラドララン、エルドラゴン、ファブアルニル、ラタンクス等様々種類が存在する。性質は非常に凶暴で、その強固な皮膚はシーケット族によって度々武器や鎧の素材にされたり、戦闘用の魔獣や移動要塞として使われた。キャツスルドランがそれにあたり、ファンガイアのキバの鎧の一部やゴウデン等のゴーレムに使われているのがドララン族の皮膚や骨である。基本凶暴な魔獣の種族であるが、シーケット族はうまく彼らを飼い慣らす事に成功した。

【レジエンドルガ族】

本編では未登場のポニーテールを神格化していた絶滅種。ファンガイアとは宿敵関係にあった。どの種族とも違う形態と種族間の統一性のない外見を持ち世界中に残る

様々なモンスター伝承を残す異形の種族。ファンガイアは他の種族の魂フシユケーと生命を食フネウマらつていたのに対し、レジエンドルガは他の種族にポニーテールを寄生させる事により洗脳、奴隷化して同族へ転化させて数を増やす特性を持っていた。ファンガイアよりも更に高次の存在だと自負し、この世の支配者となろうと目論んで太古の昔にファンガイアと大戦争を繰り広げたが、最後にはレジエンドルガに対抗するために開発された『サガの鎧』と5つの『キバの鎧』、当時のチェックメイトファイブの前に絶滅した。

【チェックメイトファイブ】

ファンガイアの世界を統括する5人の重鎮。それらになるためには紋章自体に選ばれる必要がある（選定にはチェックメイトファイブ自身を含む個々の意思ではなく、紋章自体に意思があり、これから先ファンガイアの運命を見通して選定しているらしい）。キングから実力を認められ、候補の証である「ポーン」の紋章を授与された後、「キング」「クイーン」「ナイト」「ビショップ」「ルーク」のどれかの席が空席ならば候補者であるポーンから成り上がる（空席になるのは死亡・資格剥奪の場合が主な理由。時として紋章自体から見限られる例もある）。

【サガの鎧、キバの鎧】

基本チェックメイトファイブの紋章を受け継ぐ者に賜わすファンガイア族の秘宝。その昔、ファンガイアを含む他の種族を侵略しようと活動していたレジエンドルガに対

抗する為、エルフィン族とシーケツト族の協力の元に作成された鎧である。行方不明の「暗黒のキバ」を除いてキングに「運命のサガ」、ナイトに「白銀のキバ」、ビシヨップに「赤銅のキバ」、ルークに「青銅のキバ」、クイーンであるテナーには「黄金のキバ」が賜わされた。

【心の音楽】

響輔のみ聴き取り、取り巻く五線譜を視認する事ができ、詳細は不明だが人間やエレメリアンの魂（フシユケ）が旋律する特殊な音楽。感情によつて音量、音程、音階を変化させ、エレメリアンが出現する際にも発生するらしく、出現の際の音楽は地球の反対側からでも可聴範囲内である。響輔はテナーと次狼達・アームズモンスター達の仲介役になる事により、キバの鎧をさらに強化する事ができる。

【セレーネ】

ダイモーン
魔の者が住む世界。

【ヘリオス】

アントローボス
人間が住む世界。

【魂、生命、身体】

生物を構成する三つの要素。ソーマ 身体の中に生命、ブネウマ 生命の中に魂フシユケが存在する。魂は他の世界では属性力、エレメーラ 命の色と称されることもある。ソーマ 生命、ブネウマ 生命の中に魂フシユケが存在する。魂は他

2章／

デイスカツション／動き出す戦いの水面下

『しかし人アントローボス間の学業も面白いものだな。暇つぶしに聞いていて飽きん』

「そんなに面白いものなの？」

『ああ、特に化学や数学の様なパズルみたく答えを導き出す学問には終わりが無い。永遠と続けられる』

「まさかあれ全部、聴取しているだけで頭に入っているの？」

『ふはは、当然だ。ファンガイアの世界にも試験は存在する。ましてや私は一族の重鎮——他の世界を見て回る為には戦闘能力だけではなく、勉強にも励んでいる。それにこの程度の授業、キバットやマルシルの教えに比べれば兎戯にも等しい』

「は、はあ……」

得意げに頭の中で語る声に少年・響輔は適当に相槌を打ちながら聞き流した。

——陽月学園の教室。

放課後のチャイムが鳴る中帰り支度を済ませ、カバンを肩に掛ける響輔。

あまり聞こえない音量でブツブツと独り言をつぶやいている。

——それは周囲の目からだ。

響輔は同じ体にいる同居人と対話している。

事のあらましを説明するとそれはひと月前、高校入学の前夜——響輔は死んだ。

いや、死ぬはずだった。

響輔は偶然その場に居合わせた『テナー・オランジュス』という異世界からやって来たファンガイアの女性を助けた代償に生命活動ができなくなる程肉体が破損し、代わりに彼女の体に自分の人格と記憶を収納させる事により、『二心同体』という状態になっているのだ。

さらに、同じく異世界からの侵略集団——アルティメギルが自分たちの世界へと侵略を開始した。

目的は自分達の世界にあるツインテールの強奪。

それを阻止すべくテナーと共に響輔は『キバの鎧』を身に纏い、『ティルフアング』という戦士となってアルティメギルの強豪なエレミアンを相手に戦いに勤しんでいた。

そしてテナーと二心同体となって約ひと月が経とうとしていたある日、響輔はとある教室へと向かっている。

小中高大一貫エスカレーター式の私立陽月学園その高等部。

そこに新しい部活が加わることになる。

ツインテール部——響輔の友人、観束総二を部長とした新しい部活だ。

響輔は未だに不思議な興味を抱いている。

彼はツインテールを愛するが決してツインテールフェチというわけではない。

ツインテールを真摯に愛する心——それが音楽となつて響輔の心に響いてきている。

それは何よりも炎みたいに熱く、こちらの心も闘志が湧き上がるようなそのような音楽。

部活を通じて彼とはもつと友人として解り合いたいと思ひながら、扉を開いた。

「きゃっ♡総二様のエッチい♡」

「あつーご、ごめんなさい!」

扉の先には着替え途中の半裸の女性があざとらしく体をくねらせ、響輔は赤面し慌てて扉を閉めた。

「——つて!あなた誰ですか!総二様だと思つてたのに!!もう」

「それはこつちのセリフ……つてイヤ、どつかで見たことあるような?」

響輔は扉の向こうにいた女性の顔に見覚えがあり、記憶をまさぐる。

「あ!あなた確か観束トウアールさん……でしたっけ?」

「え?どちら様でしたっけ?」

「どこかでお会いしましたか?と、真面目な声で返された。

素で忘却されているらしく、響輔はちよつと傷ついた。

「この前会ったでしょ!紅響輔です!」

「クレナイキョウスケ……?キョウスケくん?キョウスケくん?——あー、そういえば
総二様のお友達の方でしたっけ?」

扉越しからわざとらしく考え込む声色で受け答えをするトウアール。

響輔はさらに傷ついた。

「それより、ノックくらいしてくださいよ、もう!」

「すいません……」

「せっかく総二様が扉を開けた瞬間、脱ぎかけの制服からブラとパンツがチラ見える
角度で振り返って『きやっ』とか媚び媚びな声を出したのに!もう一回やり直し
じゃないですかー!響輔くん、総二様が来たら何も言わず中へ入れてくださいよ!あ、
愛香さんはうまいこと言って追い返してくださいね♡」

『なんて淫乱で自己中な女だ、全く……』

そこはテナーに同感する響輔。

総二にぞつこんで他の男に対しては無関心なのか?

しばらくして総二と愛香が一緒にやってきた。

トウアールが中で着替えをしている事を二人にチクると愛香は般若の如き形相で部屋へと飛び込んで、ドタバタと扉越しでもわかるくらい激しいキャットファイトを繰り広げ始めた。

そんな文字通りの修羅の暴れ狂う修羅場と化している部室の外で響輔は総二に尋ねる。

「ねえ、総二君」

「ん？」

「あのトウアールさんって…一体なんなの？」

「え!？」

「総二君の親戚って、聞いているんだけど…」

「まあ、そうだな。親戚だよ! 遠い国から来た…」

総二は口ごもる様に答える。半分は嘘ではない。

「ふうん…」

響輔もこれ以上追及する事なく、会話を終える。

実は彼女に興味がないと言えば嘘になる。

彼女——トウアールからは響輔のみ聴き取る事ができる心の音楽が全く聴こえないのだ。

一体、彼女は何者なのだろう？

「それにしてもよく部活の申請が通ったね」

響輔もまさか『ツインテール部』なんてよく意味のわからない部活相手に部室を提供してくれるなんて思ってもみなかったからだ。

「ああ、ここのな、いままで閉鎖されてて、幽霊の目撃情報が絶えなくてな。大昔に女子生徒が自殺したとかいろいろと噂はあるみたいだし」

「曰く付きの教室だったの!?!それってただ単に厄介物件を押し付けられただけじゃ……」

「いや、部員に愛香がいるって言ったら、先生、『じゃあ大丈夫ですね』って使用を許可してくれたんだぞ」

「へ、へえ……」

本当に愛香が気の毒になってくる響輔。

「響輔は幽霊とか平気か?」

「え?ま、まあ…平気といいますが、何といいますが……その……」

実を言うと今の響輔も幽霊と言って差し支えない状態である。

加えて、吸血鬼、狼男、半魚人、人造人間の子孫、エルフ、猫女、ドラゴンの知り合いとなつてそれらを間近で見ているので。

今更幽霊が目の前に現れたとしても驚きもしない。

すんなり受け入れられる自信がある。

「そうそう！そーいや、昼休みにこれ作つたんだ。見てくれよ！」

総二はカバンからツインテール部と書かれたプレートを取り出し、感慨深く見せびらかした。

「え？これって？」

「入口のルームプレートだ」

「随分と凝つたものを作つたね」

響輔の口からは自然と苦笑いが溢れる。

「こういう活動はとことん極めなきゃな！」

「こんな達筆な明朝体よりもっと可愛らしい感じにした方が良かったんじゃない？ツインテールは女の子のための髪型だよ」

「ああ、でもこれでいいんだ。見ているだけで厭かな、見ているだけで背筋を正してしましそうな、無言の迫力があるだろう！」

総二の演説を聴きながら響輔は総二の心の音楽を聴いていた力強く、燃え上がるような旋律、響輔の胸にも熱い感動を禁じえない。

心の音楽には共振作用があるのかと考える。

アニメや特撮の熱いビートの音楽を聴いていると自分の心も高ぶるみたいに、総二といると改めて思うようになる。

もし、僕がティールファンクと一緒に戦っているとその事実を教えたらどんな反応を示すか少し気になる響輔だった。

「はい、こっちは片付いたわよ二人共」

するとひよっこり教室から顔を出した愛香。

「いやいや、片付いたよって…」

「愛香さん、これ以上曰く付きを増やさないでくださいね」

「何の話？」

「それより早く早く教室はいろいろぜ」

「うん」

総二と響輔が入室しようとした時。

「ああつと！響輔の方は……ちよつと帰ってくれないかな？」

「え！どうして!?!」

愛香は響輔のみ止め立てた。

「ちよつとね。今日だけあたしとそーじとトウアールだけで大事な話があるの」

「同じ部員だよね!？」

「ホント、ゴメン!」

納得のいかない響輔を愛香は説得し、響輔は渋々と帰宅していった。

「おい、愛香」

響輔の後ろ姿を見ながら総二は愛香に少し抗議するみたい呼びかける。

響輔には自分たちの正体を明かしても良かったのではないだろうか?と。

「仕方ないでしょ? 響輔は何にも知らない一般人だし、あたし達がツインテイルズだって事は言わないでおいた方が無難よ」



—— 異世界の侵略者・アルティメギルの秘密基地。

ツインテール属性の強奪を目論むこの前線基地では数多の怪人の隊員——エレメリアンによる大混乱見舞われていた。

「報告いたします。タイガギルデイ殿がツインテイルズに破れました!」

「くっ……やはりか……」

巨大なホールの会議室で沈鬱な表情で部下の報告を受けるエレミアンがいた。

雀のような外見をしながらも、どこか老いを感じる空気を発している戦士・スパロウギルデイ。

ついこの間まで、ただの側近でしかなかったスパロウギルデイは、今は地球侵略を企てる侵略部隊の長に出世していた。

いや、少し違う。

つい前日、自分たちをまとめ上げていた屈強な戦士にして、本来の隊長であるドラッグイルデイが殉職し、古株である彼が実質的なまとめ役になったからだ。

本来、最強の属性力であるツインテール属性をドラッグイルデイ隊長は同じツインテール属性を持つ最強の幼女——ティルレットに破れた。

その事実はこの秘密基地にいる全員に大きな衝撃を与えた。

それだけではない。

ホールに飾られる威風堂々たる蠟人形。

——ティルファング

彼女もまた、頭を悩ませる要因であった。

僅か10人である『アルティメット四頂軍』のいち部隊に匹敵する強さを誇る伝説の

エレメリアン精銳掃討部隊・獄パー・ガトリ・アルクの十戒の一人——デュラハンギルデイが倒された。

その強さはドラグギルデイと対等に接することができるほど——つまり、ドラグギルデイと同じレベルであり、彼が製作したテイルファンクの蠟人形の出来から彼が歴戦の戦士であったことは火を見るより明らかだった。

だが結果は敗北。

デュラハンギルデイが命の間際残した写真とメッセージ——デュラハンギルデイの遺言だ。

『テイルファンクは蒼く、姿を変える。その速さは僕にも捉えることは不可能だった』

その写真——今までに比べれば写りは良い方だが——そこには左腕に剣を振りかざし、蒼き鎧を身にまとうテイルファンクが写っていた。

(そして、残る戦士は……)

そして、スパロウギルデイはタイガギルデイの戦闘映像を再生する。

ここに、最後のツインテール戦士の映像が収められている。

画面の中で四肢を広げ、腹をおっぴろげているタイガギルデイ。

気味悪そうに後ずさるテイルレッド。

『な、何だよお前……腹だして寝転がって……』

『素晴らしきスク水を纏う幼女よ！後生だ！我が腹を大海原だと見立て、元氣よく泳いでくれい!!』

『ぎゃあああああああああ！変態だあああああああああああ!!』

『氣を確かに持て、テイルレッド！情けないぞ！この程度の心理攻撃に惑わされるなど！』

『そのセパレートなお姉さんでも構わんぞ』

『痴れ者があつ!!これは水着ではない!』

お腹を出し、服従のポーズで横たわるタイガギルデイと絶叫するテイルレッド、不愉快となるテイルファンゲ。

タイガギルデイが持つ属性力は スクールスイム 学校水着。

テイルレッドが纏うアンダースーツがスクール水着を連想させるような形状であったため、このような凶行へと出てしまったのだろう。

さらにテイルファンゲのアンダースーツ——ブラッド・シングレットも最近流行りのセパレート型スクール水着に酷似しているからテイルファンゲも守備範囲に入っていたらしい。

『全く、こんなのいつものことですよ?』

と、ここで現れるは最後の戦士——テイルブルー。

凶器の槍をバトンのようにクルクルと回しながら、見慣れた光景だと言わんばかりに呆れ、落ち着いている。

だがテイルブルーの登場はタイガギルデイを苛立たせた。

露出多めな出で立ちを見るやいなや、不快感を露わにしたような怒号を上げる。

『失せろ、汚らわしい！そのような布面積が少ない水着など、尻を拭く紙も同然！その二人に誠心誠意謝るが良い』

八の字に眉を歪ませ、ウェイブランスを振り上げるテイルブルーのドアップ…映像はここで、途切れた。

「……この後、タイガギルデイ様に無言でトドメを……。相変わらず冷徹にて恐ろしき戦士です」

部下からの報告を聞き終えて、スパロウギルデイは頭を抱える。

もう確認したくもない。

とても恐ろしくなり、その映像の記憶をスパロウギルデイは頭の奥深くに押し込んだ。

「なんと恐ろしいのだ。そして、何と強いのだ…」

最強のツインテール属性を持ち、剣を振りかざす幼女、テイルレッド。

謎は多いものの、高い潜在能力ポテンシャルを併せ持つ、テイルファンク。

悪鬼羅刹の如く、情け容赦、手加減を微塵も見せない戦いを繰り広げる少女、テイルブルー。

この3人が戦う映像を見ながら、半分諦観しながら、そう呟く。

戦いを通し、彼女たちは今以上に成長している。戦いを始めてから一月、動きのキレも以前とは見違えるほど良くなっていくのが誰の目から見ても分かる。

部下たちは次々と亡くなっていく同胞に「弔い合戦だ!」と士気を上げながら出撃していくが、全て返り討ちに合っている。

「次は誰が行く?」「殿が行きますか?」「俺が行こう」などと息巻いている部下たちがちらほらいるが、このままでは間違いなく消耗戦となり、この部隊は壊滅する。

ドラグギルデイやデュラハンギルデイのような豪傑はほとんど残っていない、どれも弱卒な部下ばかりが残ってしまった。

「……ここにきて、部下共の育成をロクにしてこなかったツケが回ってきたのか」

戦闘面に関して、この部隊はドラグギルデイにほとんど丸投げしていたようなものだっただけだ。

(…もはや、これまでか?)

長として、スパロウギルデイは決断しなければならぬ。

悪戯に犠牲者が増えるこの状況下で、このまま侵略活動を続けるのか。
(…それとも意気込む部下たちをなだめ、この世界から撤退するか)

そんな考えに支配されそうになった時だった。

先ほど報告しにきた部下が再び駆けこんできた。

「ス、スパロウギルデイ様！」

「なんだ？」

「あ、あの…あのあのあの…あのお方から…お…お…お、お電話が…!!」

その部下は蒼白な顔色で狼狽しながら受話器を差し出してきた。

「誰からだ？」

「サ、サキユバギルデイ様からです!!」

「何い!!」

思わずスパロウギルデイは立ち上がった。

そのホールにいた大勢のエレミアンはいつの間にか忽然と姿を消していた。

サキユバギルデイ——それは星の数程いるエレミアンでもアルティメギルの中では知らない者はいないとされるほど有名なエレミアンであり、かつてはあの獄の十戒の副隊長を務め、ドラグギルデイの進言により、デュラハンギルデイを送り込んだエレミアンである。

今はアルティメギルの首領の側近に置かれ、謎多き首領に近いエレミアンだと言われている。

その上司の中の上司が連絡を寄越してくるなどただ事ではない。

受話器を差し出すと、部下はそそくさと逃げるように退室していった。

「もしもしー」

『おつそーい！こちとら忙しいんだから、もつと早く出なさいよね』

「ははっ、申し訳ございませんー！尤もー」

受話器を取り、謝罪宜しく頭を下げるスパロウギルデイ。

一方、サキュバギルデイの方はまるで女子高生が友達と会話するみたいに軽やかな口調でスパロウギルデイを叱責してきた。

「そ、それでサキュバギルデイ様、突然のご連絡どうかなさいましたか？」

『おかしなことを訊くわねえ。デュラハンギルデイをそつちに送った私が——その状況確認の連絡を取るのがそんなに不思議なことかしら？』

「いえいえ、とんでもない。えー…、この度の侵略作戦の…えーと、進捗状況についてなのですか…——」

『そこまで。事情はおおよそ把握できるわ』

狼狽えながら報告するスパロウギルデイを遮る。

『部隊長のドラグギルデイや直属の部下のデユラハンギルデイが私の電話を無視する訳ないし——もうやられちゃったんでしょ？ 違う？』

「はっ！お察しの通り……」

『全く、一体何やってんだか、と言いたいとこだけど……世の中何が起きるかわからないわねえ』

サキュバギルデイは電話越しに愉快そうに呟く。

「え？今、何か？」

『いや、何でも。でも、興味あるわね。その二人は一体誰にやられたの？』

「ツインテイルズです」

『ツインテイルズ？』

聞きなれない単語を耳にするサキュバギルデイ。

「ええ、こちらの世界を守護する三人のツインテールの戦士です」

『三人？ たった三人にあなた達の部隊が手も足も出ないわけ？』

眉をひそめ、情け無い。と、言わんばかりに落胆するサキュバギルデイ。

「も、申し訳ありません。しかし、ドラグギルデイ様とデユラハンギルデイ様がそのツインテイルズに倒されたのは事実。他の隊員達の士気もすっかり下がり、状況は芳しくない有様です。サキュバギルデイ様、どうか貴方の力添えを——」

『調子に乗んじゃないわよ』

さっきまでの軽やか声から一転——無機質な低い声。

電話越しに豹変した異様な雰囲気、スパロウギルデイは戦慄する。

受話器のスピーカーは今のスパロウギルデイにとつては銃口よりも恐ろしく、自分が毛ほども逆らつてはいけない相手だということを一瞬で再認識させられた。

『たかが上司二人やられた程度でさらに上の上司に泣き付くなんて、あなたにはプライドつてモノがないの?』

「め、滅相ありません。それにサキユバギルデイ様、お言葉ですが……たかかとは少し言い過ぎです。善戦なさつたお二人に少し冷酷な発言かと……」

『自然の摂理に忠実と言いなさい』

ドラグギルデイとデュラハンギルデイの死を軽んじるような言い方に対し、おずおずと口答えるも、サキユバギルデイはしれつと答える。

『力無い者は力有る者には敵わない。だから生物は常に力を付ける為に学び、進歩のない者は次々に遅れていく——人でもエレメリアンでも。そうは思わない? スパロウギルデイ隊長お?』

「ぐう……」

暗に部下の育成を怠つた事を叱責するサキユバギルデイ。

スパロウギルデイもサキユバギルデイの正論にぐうの音もでなかった。

『まあ、そっちの戦力はみそつかすみたいだし、一朝一夕で力を付けろなんて無理な話だし、ある部隊をそっちに送ったわ』

「ある部隊？」

『リヴァイアギルデイの部隊よ』

「リヴァイアギルデイ様の部隊ですか!？」

海竜の戦士、リヴァイアギルデイ。

ドラグギルデイと同期の桜であり、その実力も彼と匹敵していると讃えられている。援軍としてはこれほど心強いものはない。

微かな希望を見出したスパロウギルデイだったが、サキユバギルデイが更に報告した。

『それともう一つ、クラーケギルデイの部隊もそっちに合流するわ』

「何い!?!クラーケギルデイ様もですか!？」

海洋の戦士、クラーケギルデイ。

長の身でありながらも自らも前線に立ち、戦うことで有名な戦士であり、その影響もあつてか、クラーケギルデイの部隊はアルティメギルきつての武闘派集団でも有名だった。

だがスパロウギルデイはそのことで驚いていてのではない。

この2つの部隊が合流するというこの事態に驚いているのだ。

リヴァイアギルデイとクラークギルデイ。

この2人の仲の悪さは有名であり、互いに対抗意識を燃やしていることは誰もが承知の事実であつた。

「あの犬猿の仲の2人が…我が部隊に合流するなど…！」

何か一波乱が起きる。

間違いなく起きる。

…そのような予感がスパロウギルデイにはあつた。

『本当は私の部下も送ってやりたいところなんだけど、どいつもこいつも食いつきの悪い連中だね。高級な餌じゃないと中々満足しないのよ。それに——』

ひと呼吸置いて。

『ダークグラスパーの視察も近いし』

□□□□□□□□□□□□□□□□

電話を切るサキユバギルデイ。

「やーほー、隊長終わったよー」

「この世界も呆気なかつたな。たつた三人で片付いた」

「ふむう、ここまで脆弱極まれば、あつて無きが如し……ですな」

まるで太陽の地表にでもいるかのように、地平線の彼方まで一面炎上した大地の上で受話器をしまい、この世界に連れてきた三人の部下へ向かい直る。

バー・ガトリ・アルク
獄の十戒の仕事は『絶滅』。

ツインテール属性が生まれる可能性のない世界を圧倒的な強さで間引くことを仕事とし、そこにいる人間や生物など虫けらのように蹴散らしてしまう。

武人のような誇りあるエレミアンとは違い、用心深い上に残忍で血も涙もない十体のエレミアン集団である。

20年前、隊長の脱退を皮切りに活動を停止していたが、副隊長が隊長代理となり、再び始動しはじめた。

今サキユバギルデイの目の前に集合しているのはマンティコアギルデイ、キリムギルデイ、スキュラギルデイの三体。

「何か電話してたけど、ニヤンの電話？」

「ドラグギルデイとその救援に向かったデュラハンギルデイがやられたわ」

「「えッ!!」」

その場にいた全員が目を見開く。

「あの二人が、やられたっていうのか!？」

「特にデュラハンギルデイ殿の実力は知っています。そう安々とやられる筈がありません。して、一体誰がその二人を……?」

『ツインテイルズ』って言うツインテールの三人の戦士……みたいだわ」

「熱血でキレイなお姉さん?」

それを聞いてマンティコアギルデイが目を輝かせる。

「俺は美味そうに飯を頬張ってくれる女だったらいいなー」

くつくつくつ、とキリムギルデイも妄想を膨らませる。

「さあ? 詳細は訊いていないわ」

「しかし、あの二人——特にデュラハンギルデイ殿がやられたとならば、我々も動かぬわけには行きますまい」

スキュラギルデイも珍しくやる気を出す。

「まあ待ちなさい、まずはカウンターパンチに程よい援軍を寄越したし、ダークグラスパーも近々あっちに行くから、私たちは高みの見物を決めときましょ。動くのはそれか

ら♪——その方が盛り上がるってもんよ」

そう言つて、サキユバギルデイは周囲を飛翔する生物を片腕に止まらせる。

タチエツト・デイズ／うなじと蟹

人ごみでごった返している屋外駐車場。

ゴールデンウィーク直前の週末になると、玩具メーカーはここぞとばかりに需要を見越して新商品を投入してくる。

輝見市の大型ショッピングモールの玩具店。今回新発売の玩具はショッピングモール内での混雑を避けるためにテントを張り、外で販売されることになった。その販売用テントの前には整理券を持った多くの客が長蛇の列となつて並んでいた。

その中には神堂慧理那と神堂家メイド長・桜川尊の姿があつた。

「お嬢様、買い物なら私に任せて頂ければ……」

尊は主の身を気遣い、心配そうにこう言うのだが、決まつてこう返されてしまう。

「自分で買うからこそ、玩具は愛着が湧くのですわ。私はあれを買うまではここを離れるつもりはありません」

慧理那はそれだけを言うと、前へと向きなおる。

そんな慧理那を複雑そうな顔で尊は見た。

今、慧理那が言ったセリフは何回も聞いたお約束のセリフだが、今日は一段ときつく

聞こえる。

何かの使命を背負っているといったような顔を慧理那はしていた。

「(：何せ、今日の慧理那のお目当ては、自分が愛してやまないツイントイルズの玩具なのだから)」

尊は慧理那の小さな手に握られている整理券をちらりと見た。

——アイムド・ガール・ツイントイルズ
完全可動・AGTシリーズ・テイルレット

今日発売するテイルレットのフィギュア。

ツイントイルズを愛する慧理那だからこそ、商品を購入してレジを離れる最後までしっかりとやり遂げなければならないという使命感にでも駆られているのかもしれない。

だがそのことを尊は心配しているのではない。尊が心配する最大の理由は、こういった外出の度に現れるアルティメギルのことだ。

危ない目に逢っても、慧理那が応援しているツイントイルズが必ず助けに来てくれるが、それでも仕える身としては複雑だ。

ずっと屋敷にいてくれとまではいかないけれども、こういった買い物くらいなら使用人たちに任せてもらいたいなのに。

しかし慧理那が頑として聞いてくれない。

「お嬢様は……もしや……ツインテイルズに会う為に、わざわざ危険な状況を望んでいるのでは……？」

尊は片時も目を離さないでいる中、疑うような視線を混ぜながら慧理那を見る。

そう懸念を抱いていると隣りから声が掛かってきた。

「すみませーん、整理券番号何番ですか？」

ベレー帽にスカーフ、ラフなストライプのTシャツ、癖つ毛のない髪が特徴な慧理那に比べ一回り大きい少年が飄々と話しかけてきた。

傍らにはペットと思しき少し大型のカピバラを引き連れている。

「えつと……102番です」

「あーじゃあ、後ろですね」

えへへ、とそう言つてその少年は後ろに割り込んでくる。

「（この子もツインテイルズのファンなのでしょう？それにしても可愛いですわね。一瞬女の子かと思いましたわ）」

ウキウキ気分のその少年は顔は可愛らしく中性的に整っており、体もきやしゃで声さえ聞かなければ女の子と勘違いされなくもない少年だった。

尊もまじまじと観察しているとその少年も慧理那を凝視してきた。

「ねえねえ、きみ名前は？」

「え？わたくしですか？わたくし、神堂 慧理那と申しますわ」

「へえ、慧理那ちゃんって言うんだ。僕、緑ヶ浜 ラモンよろしくね」

「え、ええ…よろしく」

子犬みたいに人懐っこく慧理那に擦り寄ってくるラモン。

「ねえねえ、慧理那ちゃんって可愛いね」

「あ、ありがとうございます…」

「もし良かったら僕と結婚しない？」

「へ？」

「なっ!!？」

突然、ラモンは慧理那の手を取り、澆刺と求婚してきたのだ。

された方の慧理那は目を点にして思考を停止し、主に対する無礼極まる発言に尊は驚愕を禁じえない。

二人が言葉を発しようとした矢先にラモンの脳天に拳骨が降ってきた。

「あいたつ！——あつ！次狼！」

「何が結婚しない？だ」

ラモンが上を見上げると、そこには革ジャンを羽織った次狼とタンクトップ姿の力がそこにいた。

「わりいなお嬢ちゃん、コイツの『結婚しない?』は可愛い子には皆言うんだ。気を悪くしないでくれ」

「ごめん、ね…」

ラモンの発言にフォローを入れつつ謝る次狼と力。

はあ…と、呆然としながら相槌を打つ慧理那。

「でもでもお…僕と結婚したらゴードン、モフリ放題だよ?」

そう言つてラモンは引き連れてきたカピバラ・ゴードンをわしわしと撫でる。ゴードンは凶太いのか全く嫌な素振りを見せない。

「まあ、かわいいい♡」

流石の慧理那も女の子である故、このカピバラを可愛いと思わないわけがない。興味深々にハグしたり、頭を撫でたりする。

「おい君! いい加減にしないか! さっきさっからお嬢様に対して何を色目使っている!!」

「そうだぞ、ラモン」

ラモンの行動が目に残ったのか、尊が身を乗り出して止めに入ってきた。ついでに次狼も制止に加わる。

「色目を使うなら私にしないか！」

「「は？」」

今度は次狼、ラモン、力が気の抜けたような声を出して呆然と返事を返す。

先程までダンマリを決め込んでいた尊だったが、それはこの三人の男たちを見定めていたからだ。

ライフスタイルが変化し、結婚適齢期という言葉が薄れて久しい昨今だが、それでも誰もが一度は、年齢と共に結婚を焦る時期がある。

28歳、桜川 尊、三十路手前最終決戦の予感。

一刻も早く結婚したいと願う彼女にとって、人間観察は婚活に等しい。隙さえあれば、未来の旦那探しだ。

目の前の男はというと……

ひとりはアイドルグループに所属していそうな弟タイプの可愛らしい男子。

ひとりは昨今の特撮で主役を飾れそうなくらい顔立ちがいい精悍のイケメン。

ひとりは格闘家と思しき筋骨隆々、長身で端正な顔の男。

三人とも悪くない、むしろいい！

「結婚を所望するならば、私が代わりに結婚してあげよう」

自信満々にっこり笑い、歩みでた。

さらつとナチュラルに——どこから取り出したのか分からないが、婚姻届なるものを差し出す。

その一方でラモンは目端に移すようにジト目で尊を品定めすると、

「——ちっちゃい子が好きなんだ、僕」

慧理那の時とは打って変わってピシヤリと冷ややかに返した。

その瞬間次郎と力が鼻で笑い、慧理那が苦笑いをこぼす。

「おい何だ、貴様！ 年上のどこが不満だ！！このロリコン！」

なんたる屈辱！

傍目も気にせず、オバサン扱いされて顔を真っ赤にし、怒鳴り散らす桜川 尊 28

歳 独身。

足元のゴーデンがその様子を見ながら口を大きく開けて欠伸した。

そんな時、尊の耳につけたレシーバーから受信を受け取る際に生じるノイズが聞こえた。

「！」

その一瞬で、尊はメイドではなく、プロの護衛の顔へとなる。

慧理那が丁度、商品を購入しておつりを貰っている所を視界に入れつつ、受信に応じる。

そのあとに並ぶ男三人が何やら揉めているみたいだが。
「どうした？」

『い、今すぐお嬢様をお連れして逃げてください！』

「お嬢様！」

「尊？」

監視に回していた部下からの叫びを受け、手を取る。

この一月、このやり取りだけで状況を察することができるほど、慣れてしまっているからだ。

尊はきよとんとしてゐる慧理那の手を引き、脇目も振らずに駐車場を駆けだそうとしたが…尊の足が止まった。

「(…くそ、遅かったか！)」

歯噛みする思いで、前方を見る。

そこには、これまでに何度も目にしたあの黒ずくめの戦闘員がいたのだ。

「モケー！」

すると、その後ろから悠然と歩いてきた怪物は、直立した蟹のような姿をしていた。

「ほう、これはなかなかどうしてハイポテンシヤルな幼女……。これだけの強力なツインテール属性を持つ以上、*“あれ”*もさぞかし素晴らしいのだろうな！」

「またかー！化け物め!!」

思わず怪人にそう吐き捨てる尊。

いつもそうだ、お嬢様に会うたびにこの怪人らはツインテール属性がどうだこうだと
言ってくる。

理屈は分からないが、どうやらこいつらはお嬢様のツインテールを狙って襲い掛かっ
てくるのは明白。

蟹の怪人が突然名乗りを上げた。

「わが名はクラブギルデイ！ツインテール属性と共にある麗しき属性、^{ネーブ}項後属性を愛で
る探査者である！」

「ネーブ…え!? うなじ!?」

またこれだ。化け物でありながら、いつもいつも俗なことを口走る

外で待機していた部下たちが、尊の元へ駆け寄ってきた。

「慧理那お嬢様を早く!」

部下に慧理那を託し、尊は果敢にもクラブギルデイの前へと立ちふさがる。

「ほう、妙齢の女性、お主もツインテールを嗜む身か!」

「妙齢だ?!化け物が!!」

尊はツインテールである。ウエーブのかかったもこもこの髪を、頭頂近くから背中に

落とすようにまとめている。首もとまでの長さで自己主張をするそれは、活発さを象徴するかのようなツインテールだった。怪物の言うとおり、今年28歳になる尊にはいろいろ思うこともあるのだが、この髪は神堂家にに使える誓を立てたその日から一度も変わらぬ。尊の誇りの一つだった。

それを馬鹿にされたのだから、黙ってはいない。

「化け物め！貴様ごときに品定めされてたまるか！」

怒りをみなぎらせ、蹴りを振るい上げる。

「くっえ、化け物！」

尊の纏うメイド服はこういった格闘戦をも前提に作られた特注品であり、回し蹴りを余裕にできるほどの可動範囲を誇っている。鍛え上げられた脚力で放たれた蹴りは一流の格闘家と比べて遜色ない熟練された動きである。

しかし、その蹴りを食らってもクラブギルデイは何ともないように突っ立っていた。逆に攻撃を放った尊が足を押さえて蹲る。

「なんだ、コイツの身体の固さは!? 身体中金属のようだ！」

大の男をも吹き飛ばす威力を持った蹴りでも、こいつらにはまるでびくともしない。

「きゃー！」

慧理那を庇っていたメイドから、戦闘員が強引に慧理那を引き剥がした。

「お嬢様、お逃げください!!」

尊も戦闘員に取り押さえられ、羽交い締めになされ、慧理那もまた、戦闘員に拘束された。

「く、こいつら、こんなヒョロヒョロの身体で何て力だ!お、お嬢様……っ!!」

「大丈夫ですわ、尊!きつと彼女たちが……」

決して強がりなどではなく、なんのう疑いも無く信頼に満ちたその瞳をみて尊は確信する。

「(ああ、お嬢様はやはりこの状況を——)」

「よし、後ろを向かせい!」

クラブギルデイはそう戦闘員に命令すると、左右にいた戦闘員が慧理那の背中が自分に見えるように調節させる。

戦闘員が左右から慧理那の肩を掴み、よちよちと180度回転させる。

クラブギルデイはハサミの腕を組みうんと満足そうに頷く。

「な、何を見ていますの、あなたは!」

「うなじだ!」

不気味に思った慧理那は毅然と問う。

そして即答される。

「よいか、ツインテールをする以上、うなじができるのは世の理ことわり。美は相乗され、輝きを増す！この素晴らしいウインウインの関係を、俺はもつと多くの仲間に伝えたいのだ！！」

「そんな俗説、あなたに教わられる必要はありませんわ！」

大声で腐った世迷言を慧理那はバツサリと切り捨てる。

「たわけ！男は背中で、女はうなじで語る！この常識すら分からないとは、見た目だけでなく知性も幼いようだな、幼女よ！！」

「なっ…私が…幼い!?」

初めて慧理那が動揺した表情を浮かべた。

「おのれ、お嬢様への侮辱は許さんぞ!!」

「年増の項に興味はない!!家に帰ってほうれい線対策に躍起になるがいい!!」

「私はまだ28だぞ!!まだ20代だ!!年増と呼ぶな、殺すぞ!!」

ピンポイントな罵倒を受け、尊は顔を真っ赤にして抗議する。

その怒りの度合いは主を貶められた時よりも激しく見えるのは、何故なのだろうか？

「さて幼女よ、貴様のツインテール属性をいただくとしよう」

クラブギルデイが威圧的に慧理那へと近づいてくる。

「お嬢様！……うっ！」

「尊!?!」

尊は戦闘員に首筋を軽く叩かれ、ぐったりと気を失った。

これで慧理那は一人ぼっちになってしまった。

だが、そんな状況下でも慧理那は凜とした空気を崩さなかった。

泣きたいのを我慢して、クラブギルデイに背中を向けて必死に耐えた。

ヒーローはいる。

彼女は、それを知っている。

一陣の風が吹いた。

「ガルルセイバー!!」

笛の音が聞こえると同時に、周囲の戦闘員の首や胴体がブツ切りにされ、地面に転がる。

「なっ!?!」

完全に不意を突かれ、クラブギルデイが周囲の戦闘員に何が起きたのか理解不能なまま狼狽していると、慧理那との間に高速で滑り込んできたその少女は、サーベルにある狼の口——ワイルドジョーをクラブギルデイに向けてきた。

「ハウリングショック!!」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!

「うぐおああああああつ?!」

その狼の口から暴風のような音波砲——ハウリングショックが放出され、クラブギルデイの巨体を大きく吹き飛ばした。

ようやく解放された慧理那が後ろを振り向くとそこには——

「大丈夫ですか? ツインテールが美しいお嬢さん、お怪我はありませんか?」

——コウモリに似た生物。

「へっ?」

「何呑気にナンパしている。たわけ者」

「あう!」

深紅のツインテールをはためかせ、青い鎧を着た戦士——テイルファング・ガール Cheney がその生物——キバットの脳天にチョップをくらわす。

「ああ、やっぱり…やっぱり来てくれたましたのね」

慧理那がうつとりと蕩けた声で呟くとキバットが思い出したように声を上げる。

「おっ！お嬢ちゃん、どっかで見たことあるかと思えば、あの時のお嬢ちゃんか？」

「ああ、そういえば見覚えのあるツインテールだと思っただが、なるほどあの蝦蟇畜生の時の——」

テイルファングは登場回数が少ないので、これが慧理那との再会となる。

「あーテイルファング!？」

今度は違う方向から声が掛かってきた。

少年のように力強く、声色は澄みわたる様なソプラノボイス。

赤いツインテールをはためかしてやって来たのはツインテイルズ——テイルレッド。

「テイルレッドお前も来たか」

「つて、あれ？何か鎧が違うぞ」

「私の新たな力だ。それより——」

初めてガルル Cheney を目の当たりにして驚嘆の声を上げるテイルレッド。

テイルファングは得意気にガルルセイバーを振るう。

テイルレッドもリボンを叩いてブレイザーブレイドを出現させ、攻撃から立ち直ったクラブギルデイの眼前に突きつける。

「現れたなテイルファング！テイルレッド！ふはは、素晴らしい！お主らの強さはすで

に世界を超えて知れ渡っている」

「そいつは光栄だな！じやあなるべく大声で宣伝してくれよ！この世界には俺たちツインティルズがいるから……侵略を諦めたほうがいい、つてな」

「休日の早朝からの侵略活動、ご苦労だな。お前達その気概は買おう……だが、このまま戦いを続ける事はあまり賢明とは言えんな」

『それに凄くメンドくさくなってきたし。帰ってくれた方がホント助かる』

「何を言う！タイガギルデイ様の仇、撃たずしてどう生きながらえようか！」

「……タイガギルデイって、この前倒したトラみたいな奴か……？」

「私の鎧を水着と愚弄した奴か……」

ティルファングは顔を顰めて苛立つ、ティルレッドは大して気にしてない風だ。

そんなこんなで戦闘開始。

「食らえっ!!」

クラブギルデイの脳天目掛けてグラウンドブレイザーを振り下ろす。

「ふっ……残像だ」

「何っ!？」

「ほう、あのカニ速いな……」

ティルレッドが驚いて振り向くとそこにはクラブギルデイの姿が。

「ティルフアングは即座にティルレッドの背後に回り込んだクラブギルデイの俊敏さに舌を巻く。」

「当然よ。俺は相手の後ろをとることにかけては隊長達をも上回ると自負している」「やるな、あのカニ畜生。相手の頭上背後を取る事は戦いにおいて上策。それによつて勝敗が決することもある」

「あー…せつかくの解説なんだけど、戦闘のための回り込みじゃないと思うよ。アイツの——」

ティルフアングが解説している最中、クラブギルデイはずいっと首筋に顔を近づけてきた。

「素晴らしい！陰ながら美を支える土壌！母なる大地に生命を恵む海！最強のツインテール属性はここまでに美しいうなじをもたらすのか!!」

「超スピードの変態じゃねーかー!!」

涙を流し歓喜するクラブギルデイ目掛けて剣を振り上げるが、その姿が消える。

『今度はこちらに来る!』

「承知」

響輔のアドバイスを聞き入れ、咄嗟に技を繰り出す。

「……ブレード・テイル」

ぼそりと静かに呟くと同時にテイルファンクのツインテールが後方に向けて高速かつ、直線に伸びた。

まるで本物の直刀みたいに伸びたそれは予想通り背後に回り込んだ直後のクラブギルデイの腹を穿つ。

「うぐっ!!」

それだけではない、ふた房のツインテールがプロペラみたいに高速回転。クラブギルデイのボディを八の字に切り裂いた。

テイルファンク・ガルルチエインはそのツインテールすら刃と化す。

「うぐおああああっ!!」

苦悶の声を上げ、斬り飛ばされるクラブギルデイ。

「生憎、今の私にとつて背中では攻撃範囲内だ。死角はない」

得意そうにツインテールの房をかきあげるテイルファンク。クラブギルデイは仰向けに倒れ伏したまま動かない。

「——にしても貴様、今の攻撃躲せたらう? 何故躲さなかつた?」

テイルファンクは違和感を覚えていた。あの時、クラブギルデイはわざと攻撃を受けた様に思えたからだ。ふとクラブギルデイが仰向けに倒れたまま不遜な笑みを浮かべる。

「ふははっ、素晴らしい！素晴らしいぞ、ティルフアングー！」

ビデオの逆再生みたいにムクリと起き上がると嬉しそうに両手の鉄を鳴らす。

「深紅のツインテールに獣の歯茎の様なジグザグの分け目、蠟ロウのような半透明な肌の細首からなるうなじを引き立たせる。まさしく神がこの地に賜わされた神秘。ティルレッドにも引けを取らぬうなじだった!!」

よくもまあコメディアンみたいに歯の浮くようなセリフを流麗に語れるものだとティルフアングは呆れ半ば感心する。

「ほうほう、うなじを属性とするなんざ目の付け所が違うね、あのクラブギルデイという奴。俺様の尊敬する画家——モデイリアーニの代表作、あのながい首筋がなんとも言えねえ『おさげ髪の少女』がツインテールとうなじのハーモニーを——」

「やかましいい！」

「おぐっ！」

便乗してうなじの有り難みを尊ぶキバットだったが、ティルフアングのデコピンを食らって黙った。

「つまり貴様、私のうなじに見とれて回避をしなかったのか？」

「その通り！」

ティルフアングの質問に臆面もなく答えた。

「呆れたな。肉を切らせてうなじを見る——か、お前達エレメリアンは戦いの場においても雑念を持つてくる輩が多いが、いずれその戦い方は返って足元をすくわれるぞ」

「いらぬ世話だ、テイルファング！私のこの驚異の速さの回り込みはうなじを見るためだけに日々鍛錬し、編み出されたものだ。私はどれほどの傷を負おうと、どの様な状況に直面しよう！私は少女のうなじを見る！それこそが私の信念だ！」

たしかにその速さを手に入れるには生半可な努力で身につけることはできないだろう。

だがそれだけにテイルファングは余計に腹が立つ。

自分もこのキバの鎧を着こなすのにどれだけの修練を積み重なったことか。

未だに『黄金のキバ』の黄金の輝きすら取り戻せていないが、影創シャドウクラフト造を使いこなす、ファンガイアのチェックメイトファイブとなった。

たかがつまらぬ些事のために得た力に劣ることなど絶対にあってはならない。

「お前の信念大したものだ。だが、このうなじで見納めだ。私の背に二度と回り込めると思うな。カニ畜生」

ガルルセイバーのグリップを口に啣えて、大きく跳躍する。

「エアロ・ホッパー!!」

ウルフェンの脚力を最大限に生かし、空中を蹴り、ピンボールのごとく連続で空中を

飛び跳ね、クラブギルデイを翻弄する。

「うお！これではうなじが見えん！」

さすがのクラブギルデイも空を仰ぎ見るばかりで、その場で立ち往生するしかない。

「ウルフェンズ・スクラッチ!!」

空いた左腕・ウルフェンズアームの爪——ウルフェンクロー。その指先は硬度を増し、敵を切り裂く恐るべき戦闘爪になる。手刀を繰り出すことで厚さ30cmの鉄板をも突き通す。

そこに真空の刃やいばを形成し、斬撃を飛ばす鎌鼬の様な技——ウルフェンズス・クラッチを繰り出した。

「残像だ」

「何ッ!?!」

しかしその攻撃は躲されアスファルトに五つの爪痕を残した。

そこでテイルファングは一旦着地する。

すると一瞬でクラブギルデイはテイルファングの背後に回り込んできた。

「貴様!」

「残像だ」

慌てて爪を振るうも、今度はテイルレッドの背後に来た。

「うなじを見るなー!」

「残像だ!」

ちよこまかちよこまか動き、二人を翻弄するクラブギルデイ。

咄嗟にテイルファンングは身をかがめ、テイルレッドと背中合わせとなった。

「どうすんだ? テイルファンング」

「まいったな、ガルルチェインと同等のスピードでは容易には捉えきれん——だが、案ずるな」

正直バツシャーチェインか、アルテチェインになるか?と、考えたが、バツシャーチェインはともかくアルテチェインは扱いが難しい。それにフォームチェンジは基本変身一度につき一回でなければ、身体への負担が大きくなる。

そしてテイルファンングは、たった今いい方法を思いついた。

再びガルルセイバーのグリップを今度は噴射口ワイルドジョーが後ろに向くよう口に咥えると駐車場の見晴らしのいい場所でかんだ。

「テイルファンング! 何してんだ! そんなとこでかんだら……」

テイルレッドの制止も聞かず、クラブギルデイは予想通りその背後に回ってきた。

「ふははは! ついに観念したか、テイルファンング! もう二度とお前の背に回り込めぬのではなかったのか?」

まるで鬼の首うなじでも取ったかのように得意げにハサミを鳴らすクラブギルデイ。

「恥ずかしながら私の言葉を撤回させてもらう。だが、今度こそ見納めだ!!」

ガルルセイバーのワイルドジョーから音波衝撃が放出、それがジェットエンジンみたいな推進力を生み、ヒールの踵を軸として独楽のように旋回。

頭部のツインテール、ガルルセイバーが羽の役割を果たし、大きなプロペラとなつて竜巻を起こした。

「ハウリング・トルネードツ!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!?」

傍にいたクラブギルデイは上空へと放り出される。!!」

「オーラピラー!!」

すかさずテイルレッドがオーラピラーによる拘束で、クラブギルデイを空中に固定、拘束した。

「うおおおおお!!うなじっ!うなじが見えぬうううっ!!」

「行くぞ、テイルレッド」

「おう!」

必殺技を放つ体勢に入る。

「完全開放ツ!!」

「ガルル・バイトツ!!」

ブレイザーブレイドの刀身が姿を変える。ガルルセイバーの刀身をキバットに噛ませ、周囲が満月の闇夜に変わると二人は同時に跳ぶ。

「グランドブレイザーアアーツ!!」

「ガルル・ハウリングスラッシュユ!!」

二つの刃がクラブギルデイに炸裂すると同時にクラブギルデイは爆散した。



項ネー属性ブの属性エレメーラオーブ 玉はキャツスルドランに捕食された。

エレメリアンの属性玉は何故かドランのエネルギー源となるらしい。

「凄ごかった! ツインテールを極めるとツインテールで敵を斬る事ができるんですか!?!」

「お前もいずれできるようになる。にしてもお前も見事な太刀筋だったぞ、テイルレツド。また腕を上げたのではないか?」

「あ、イヤ……そんなこと……」

「なになに？ 照れちゃっているワケ？」

テイルファンングに賞賛の言葉を送られ、テイルレッドは顔を赤くし頬をかいて謙遜し、キバツトがそれを見てニヨニヨとからかう。

「おっとー！」

「え？」

突然、テイルファンングはテイルレッドの腕を弾いた。

「私のツインテールに触ろうとしたな？」

テイルレッドは無意識のうちにテイルファンングのツインテールへと手を伸ばしていたらしい。

その顔は少し、怒っている風に見受けられる。

「ああーごめんなさいー！」

おどおどと頭を下げるテイルレッドを見て、微笑ましく口元を上げるテイルファンング。

「そうだ。もしこのあと時間があれば——我が城にて休んではいかぬか？」

エスコートするようにテイルファンングは手を差し出してくる。

「え？ いや、俺は……」

「ふははっ、この前の続きか？ 私は一向に構わんぞ？」

二匹の青い獣は鋭き眼光をギラつかせる。

互いの武器が鏝迫り合いとなって、足元のアスファルトがビキビキツと音を立てて亀裂が入っていく。

「やめろ！ お前ら、やめろって！」

それを見かねたキバットとテイルレッドが割って入る。

「ブルー、やめろって！ ここのじやまずいって!!」

「怒りを鎮めろ！ お前ら喧嘩犬か!! それにテイルファング、お前には帰ってからのお楽しみがあるんじゃないのか？」

澁々と武器を下ろす両者。

「フンツ、これではどちらが年上かわからんな」

「行くわよ、レッド」

仕方なくといった表情をテイルファングとテイルブルーは浮かべる。

テイルレッドの手を無理やり引きながらテイルファングとすれ違うが、テイルブルーはぶいっと顔を背けテイルレッドと一緒にどこかへ行ってしまった。



「なにいい!!購入出来なかった!?!」

戦いが終わってキヤツスルドラン城内の大広間ではテナーの驚愕の大声が響いていた。

キバットが言っていた帰ってからののお楽しみとはテイルレッドの可動フィギュア——『AGT《アームド・ガール・ツインテイルズ》シリーズ・テイルレッド』が本日発売日で手に入る筈だった。

しかし、帰城した次狼、ラモン、力は購^{リキ}入できなかったと信じられない報告がテナーの耳に入ってきた。

「整理券は取れた筈だろう! 貴様ら大の男三人そろって何たるザマだ!! 何故だ!?! 理由を言え!!」

お使いを頼まれた三人は申し訳なさそうに口を揃えて言う。

「財布を忘れました」

「バカツ!!!」

「だって、僕は力が持つてるとばっかりに……」

「俺は、次狼、が……」

「俺はラモンが握つてると思つてよ」

「この間抜け共がああぁーっ!!!」

「あつても、売れ残つていた。テイルブルーのフィギュアならあつたよ!」

キャスルドランから財布を取りに戻つて、何故か整理券がなくても買えたフィギュアを差し出すラモン。

「何が悲しくて奴の人形など!」

「じゃあ、僕がもらうよ」

「いや、私が貰う!」

響輔がラモンから受け取ろうとする前に苦虫を噛み締めた様な顔をして、とりあえず受け取るテナー。



「忌々しい。何故テイルレッドではなく奴の人形など！」

ファイギュアの作りはテイルレッドと相違ない出来だが、実に面白くない。

思い返せばフォックスギルデイが作製したテイルレッドの人形を壊し、いつも自分につつかかかってきやがって、と睨むようにテイルブルーのファイギュアを弄りながら、自室の部屋の机にドツカリ座り込んでいた。

「貧乳の女には碌なやつがないな。まあ……あのビショップよりは遥かにマシだが——ああ、もうヤツの事を考えただけで余計腹ただしくなってきた！この人形の胸を彫刻刀で抉ってやろうか？」

ジリリリリリリリッ!!

自室に備え付けられている電話が突如として鳴る。

誰からだと思いながら受話器を取るテナー。

『やあ、やっと出たね。テナーちゃん』

噂をすれば何とやら、あの嫌な女からだった。

テナーは受話器を取ったこと少し後悔した。

「ビシヨップか……何の用だ？」

電話越しからでもわかる位険悪な声色でテナーは答えた。

『^アビシヨップ^タの役目は監視、連絡、通達——それが主な任。こまめに連絡はよこしてつて言っているのだよね？それと称号じゃなくつて、『デュレット』と呼んでよ、ねえ？』

「……デュレット、定期連絡は寄越している筈だが？」

『文章じゃなくつて、通話の連絡を寄越してよ。それに貴方を心配しているのは確かなのだよ。幼馴染の仲として——』

舐めるような口調にイラつくも平静を装ってテナーは話を早々に切り上げる為に話を進める。

「今は音也の故郷、ヘリオスで変態の異形と戦っている事は報告して分かっているだろう。今日はうなじが好きな蟹だ。その上、世間は私の事を無駄に持て囃す。こう連日だと疲れる。性悪な貴様の声など聞きたくもない」

「ハツ、ハハハハハハハ。疲れる？」

音^ねを上げる様なテナーの発言にビシヨップ・デュレットは吹き出すように電話の向こうで笑い出す。

「それでもあなたキングの義妹なのかな？クイーン——そんなことじゃあ…あなたの中にいる音也さんのツインテールも浮かばれないよ？」

その言葉と同時にテナーは目を大きく見開き、手に持つ受話器について握力がかかって亀裂が入った。

痴女とメイド／ポリフォニー

セレーネとヘリオス、ダイモーン魔の者と人、アントローボス間の生きる世界は次元を挟んで乖離している。チエックメイドファイブ・クイーンであるテナーの使命は異世界を巡回し、その世界の秩序を保つ事である。

そしてキャツスルドランの天守閣にある特殊な電話はキャツスルドランが次元の狭間にいる時、セレーネのファンガイアと通話する事が可能である。

主な内容はセレーネからの緊急事態、ヘリオスの異常事態とそれらの調査報告。

「私が…音也ツインテールの想いを継げぬとでも？ そう言いたいのか？——デュレット……!!」

今テナーは、セレーネからの電話相手の言葉に感情をむき出しにし、本気で激昂していた。

「クククツ、おやおやあ？ 本気でムカついちゃったのお？ やだあテナーちゃんったら、こおんな軽口に本気で噛みついちゃってえ…かわいい、な☒うふっ♡」

テナーのクソ真面目な反応が余程面白かったのか電話の相手、ファンガイア・チエツクメイトファイブの一人——ビショップであり、赤銅のキバの所持者——デュレット・オルゲンはクスクス笑いを零しながらテナーをからかい続ける。

「アルティメギルであろうと何であろうと。我が恩人の地を……ツイントールを……踏み荒らす者は誰であろうと潰す。ファンガイアクイーンとして……紅音也の娘として……」

「ま、音也さんはアタシ達にとって親でもあり、大恩人だからねえ。でも一人で大丈夫う？よかつたら、アタシかナイトがそっちに行つて力を貸そうかしらん？」

「いい。ルークはともかく、貴様は好かんし、ナイトは一緒にいると調子が狂う。私と次狼達だけで十分だ！」

「うっははははは！ええ、ええ、こつちとしてもそれを期待しているのだね。でもお、わかつてるのお？テナー」

「……何だ？」

「——もう君以外の他のキバは本来の色を取り戻しているんだよ？」

くだらない軽口に焚き付けられたテナーだったが、そのデュレットの言葉に冷静さを

取り戻し、口を閉ざす。

「テナーがクイーンの紋章に選ばれてから何年経つかなく？♪……早くテナーの鎧が黄金に輝く様を見たいなあ〜♪」

期待しているとは言いつつもデュレットは痛いところばかりクリティカルに攻めて来る。この女はいつもこの調子だ。

だが、この言葉は事実。

チエツクメイドファイブでキバの鎧の輝きを取り戻せていないのはテナーだけだった。

まだまだ自分は未熟。

自分の不甲斐なき、デュレットからの屈辱に歯噛みしていると電話の向こうで何やらデュレットと誰かが揉めている。

『コラ、デュレット！折角テナちゃんに繋がったのに怒らせてどうする。私にも貸してくれ！』

『ちよ、ちよつと待って！メゾンヌー！ちよつ…』

『……もしもし、テナちゃんか!? そうデュレット相手に目くじら立てないでくれ!』
「ナイト——メゾンヌか……!」

続いて電話に出たのは同じくチェックメイトファイブのナイト・白銀のキバの所持者——メゾンヌ・リチュカール。

彼女もデュレットと同じテナーの幼馴染であるも、蠱惑的なデュレットとは打つて変わり体育会系を髣髴させる澁刺とした元気の良い喋りをするハスキーな声が電話に出た。

『いやあ、テナちゃん! ひと月ぶり——長い付き合いだからわかるだろう? デュレットはな、テナちゃんが可愛いからついつい苛めてしまうんだ。私やデュレットにとつて君は妹みたいなモノだ。デュレットの言い分が気に入らなかつたら注意させるからさ、ね? ね? テナちゃんのキバの鎧だつてきつといつか輝きを取り戻せる日がくる。だからまた……』

「……メゾンヌ、デュレットに伝えておけ」

メゾンヌの話の聞いてか聞かずか、話の途中で冷え切ったテナーの声が割り込む。

メゾン又はそんなデュレットを困った風に見ていた。

しばらくして笑いから立ち直るとテナーから送られたこのひと月の報告書をペラペラと手にとって、冷静に眺める。

「さて、報告書によると……ヘリオスで協力者になる人 アントローボス 間がいるみたいなのだけど……ああしまった、そのことを訊くの忘れた。そつうつなつれつぱっ！アタシもヘリオスに出向こうかな？あのファザコン拗らせた不良幼馴染の顔を見に！」

あまりにもワザとらしい一人芝居を見てメゾン又は一言。

「口実をつくるためにワザと忘れたのではないか？」

「……………さあね？」

「テナちゃんの嫌がる事を大喜びするのがデュレットだからな」

はあくやれやれと頭痛を感じ、溜息交じりに心配そうな顔になるメゾンであった。



通話を終えたテナーは左手の紋章を見るテナー。

「クイーンズの紋章に選ばれ、キバの鎧も授かった。今や私に勝てるファンガイアはチエツクメイドフォー以外に存在しない——なのに、何故我が鎧は光り輝かぬ」

こみ上げる悔しさにテナーは齒噛みするしかなかった。



そんなことも露も知らぬ、春の連休に入る直前のとある朝。ある一つの噂が校内を駆け巡っていた。

「転校生が来るんだってよ」

「英語ペラペラらしいぜ」

「外人らしいって話よ」

いつもはツインテイルズの話題でもちきりのクラスも今日だけは違った。

教室中にそんな噂が飛び交っている。

「総二君、今日転入してくる外国人って……」

「ああ、お前もよく知ってるヤツだよ」

総二も学校が始まったばかりだというのに、疲れたように机に突っ伏していた。

チャイムが鳴り、HRの時間が始まると担任気だるげな声でいつも通り淡々とHRは進んで話題が変わる。

「え〜と、今日は〜転校生を紹介します〜」

噂の転校生、そしてそれが自分のクラスに来る。

クラスの全員がザワザワと騒ぎ出す中、一人の女子生徒が入ってくる。

一歩一歩教室を進むその生徒に思わず、皆が見惚れた。

白みがかかった銀髪に抜群のスタイル。

しやなりしやなりと淑やかに教卓の隣に歩いてくると、チョークを持って、カリカリと自分の名前を黒板に達筆で書いた。

『観東トウアール』

「「「「え!?!」」」」

当然、皆の視線は一斉に同じ苗字を持つ総二へと向けられる。

そして転校生——トウアールはウンザリとする総二を他所にそんな光景を凄く嬉しそうな表情で見ている。

うへっ、と嬉しすぎて口から涎が垂れて、危ない顔になっている。

その表情は年頃の女子高生が人前では決してしてはならないモノである。

響輔のみジツとトウアールに集中していた。

「(あれだけ淫らな感情をさらけ出しているのに——彼女の心の音楽が一切聴こえない

なんて、おかしい」

響輔はトウアールを取り巻く五線譜は視認できる。しかし、音とそれに音符が見えない。

「トウアールさんは、観東君の親戚で、海外から引越して今は一緒に住んでいるそうですね。……では、次の要件に移りま〜す」

転校生の紹介を必要最小限程度で終わると、トウアールは驚いて担任に訴えた。

「ちよ、ちよつと待つてください！ 私の自己紹介ここで終わりですか!? まだ総二様との関係性も皆さんから問われていませんのに!？」

「ですから、さつき私が言ったじゃないですか、総二君とは親戚同士だつて〜」

「それだけじゃ何も始まらないですよ!! 『一緒に住んでいます』の所から話を大きく広げて盛り上げさせた後、色々と誤解を招くような爆弾発言を2、3個投下する予定だったのに、何なんですかあの詫び寂もない説明は!？」

「え〜と、実はもうおひと方紹介する人がいるので、トウアールさんばかりに時間を割

けないんですよ〜」

「え!？」

さつきまでの優等生っぷりはどこへやら。

響輔は初対面ではないからさほど気にしなかったが、トウアールさんの美人としての評価がどんどん下がっていく。

担任は全く悪びれず、HRは進行する。

『もう少し取り繕え。メツキがボロボロと剥がれかけているどころか、企みまでも公言するとは——…』

「『残念美人』って彼女のためにある言葉だと思うよ」

テナーと響輔も呆れた様子で言い放つ。

と、トウアールがまだ往生際悪く担任に抗議していると教室のドアが再び開き、今度は一人のメイドが堂々とした足取りで入室してきた。

「本日から陽月学園の体育教師として赴任した、桜川尊先生です〜」

「うむ、よろしくー！」

その声と共にメイド服のスカートがフワリと舞い、彼女の髪型であるツインテールも揺れる。

「……」

教卓に立っているツインテールのメイドさんを見ながら、全員が口をポカンと開け、静まり返った。

この人はどうしてメイド服着ているんだとか、神聖な職場を何だと思っているんだとか、ツツコミどころを探せばキリがなかった。

「あゝ、先生……。これは一体……」

「私は知りません、何にも知りませんから」

これはどういうことなんだと聞きたげな女子生徒を笑顔で完全無視する担任。空気を読まない上に事なかれ主義、担任の本性が少しだけ見えた気がする。

「ちよ、ええ!?何なんですかこれは、どうすればいいんですか私!?こんなはずじゃなかったのに!」

そして尊の登場で、完全に霞んでしまった転校生のトウアールは激しく狼狽していた。

さつきまで圧倒的な実力差で勝っていたが、慢心していたせいで逆転されてしまった小悪党のテンプレのように慌てふためいていた。

「あの人って会長の隣にいつもいるメイドさん?」

『毎日手入れは欠かしてないな。いいツインテールだ……』

響輔もそのメイドには見覚えがあった。

慧理那の側近と思しきメイド。

テナーはツインテールの方にしか目がいつていなかったみたいだが。

「皆も見たことがあると思うが、私はこの学園の生徒会長である神堂慧理那様のメイド

兼護衛を担当している者だ。しかし、ただ護衛として校内に居るだけではお嬢様が気を遣われるのでな。理事長と相談して非常勤の体育教師を担当することになった。ちゃんと、教員免許は所持している」

メイド服姿の教師など前代未聞である。

この学校の理事長は何を考えているのだろうか。

そしてこの学園はいつたいどこへ向かうのだろうか。

子供だけでなく、大人も毒されていつている事態に頭を抱えたくなってきた。

「それにしても、君たちは大人しいな。普通、美人の先生が赴任してきたら騒ぎ立て、リーサイズがどうかとか彼氏はあるのかどうかあれこれ質問するところだろう？
今そういう体験をしつかりこなさなければ将来苦労することになるぞ？」

「ちよつと待つて下さい！後から来て何を仕切っているんですか!?!ここはまだ私のステージですよ!?!」

「まあそう言うな、君はまだ若い。質問される機会なんてこれから先まだまだあるだろう。ここからは私のステージだ、君は譲りたまえ」

「いえ、それは譲れません!?!この『転校生の質問』というステージは、今日が唯一無二の

「戦場なんです！」

「…ほう、そうか！ その意気込みやよし！ 君のような肉食系の女子は嫌いじゃないぞ！ ではここは公平に、交互で質問タイムをしようではないか！ さあ生徒諸君、誰か質問はないか!？」

そう促されても、なお無言の状態が続く。

『おい響輔、このコントはいつまで続く?』

「知らないし、早く終わって欲しいよ」

『全く、ここは学問を培う場だぞ。彼奴らは遊びにここへ来たのか?』

テナーはこの戦場の場にいないからそんな他人行儀な態度が取れるのだ。

表になっている響輔は代われるものなら代わって欲しいと胃がキリキリ痛むのを感じる。

それにこのメイド、いやトウアールさんにもできれば関わりたくない一心で目を合わせないようにする。

「む……？ おお、誰かと思えば、君はツインテール部部長の観東君ではないか！」
「え!？」

そして憐れにも一人目の犠牲者が決まった。

どうせツインテールをガン見していたんだらう。と、そう考える響輔。

「どうしたんだ、私のことを熱い視線で見つめて！ あれか、君はあの時、部室で『ツインテールを愛するのに理由はない』といったな。つまりそれは、私の髪型であるツインテールも愛してくれると受け取っていいのかな？」

「（総二君、僕が知らない間に何があつたんだ!?!）」

友人が知らない間に言い放っていた恥ずかしいセリフを公衆の面前で言い放つ尊。

総二が羞恥で顔を真っ赤にし泣きそうだ。

一方、愛香は爆発数秒前の爆弾のような状態で尊を睨みつけている。

心の音楽からして、愛香さんは僅かな理性でなんとか感情を抑えているみたいだが、それも時間の問題だ。

これは心臓と胃に悪すぎる。

「そうかそうか！遠慮する必要なんかないのに、奥手な少年だなあ君は！ならば君にこれをあげよう！私からのささやかなプレゼントだ」

総二君の席まで歩いて、尊先生は何やら封筒を総二に手渡した。

季節はずれのサンタではあるまいに総二君はガサガサと開けると、折り畳まれた紙が出てきた。

「どうだ、嬉しいか？」

「いや…これ、婚姻届って書いていますけど、気のせいですか」

「気のせいではないぞ。君は高校生にもなってその程度の漢字も読めないのか？」

「…既に妻の欄に先生の名前が書いてあるんですけれど、それは？」

「当たり前だろう、夫と妻の名前が書かれて婚姻届は初めて成立するんだ、白紙のままでは渡さんよ。相手に失礼だからな」

「相手って!？」

「君に決まっているだろうっ!!」

おかしい。何か凄くおかしい。言葉のキャッチボールはうまくできているのだろう

か？

尊先生は何の迷いもないまま教壇に戻ってジツと構えている。

「君はツイントールが好きなのだろうか？ならば私と婚約しても何の問題もないはずだ！君は私のツイントールを好き勝手できる、私は君と結婚したい！何の問題がある」

自分のツイントールを摘み、尊先生は超理論を熱弁する。

そんな先生——いや、彼の場合ツイントールに総二君はときめいてしまっているが、待って待って総二君。ここで流されてしまつてはいけない踏みとどまれ！そこにハッピーエンドはない!!あるのは終焉と悔恨だけだ。

「成立する訳ないでしょうこの年増！総二様は既に売約済みなんです！」

ここでトウアールさんが乱入してくる。

…もう彼女からは教室に入ってきた時に見せた優等生の空気は微塵も感じられなくなっていた。

「総二様、そんなものさっさと破り捨ててください！誰の許可を取って求婚しているんですかこの年増！総二様と私はねえ、前世からの婚約者なんですよお!!」

そう言つてトウアールさんは得意げにクラス全体を見渡すが…皆、全くのノーリアクシヨンド。

「な、何で反応してくれないんですかあ…普通はもつと騒いだり、黄色い声を出したりするじゃないですか…漫画やラノベではお約束じゃないですか…私の夢見てた学園ラブコメと違うううう。」

ヒックヒックと涙目になるトウアール。…だつて、皆この異種格闘戦の空気とペースに巻き込まれたくないんだよ。だから反応しないんだよ。

「若いな…転校生君。君が若いのは大変羨ましく憎ましいが、それよりも考えが古い！前世がどうだろうと今恋人がしようと、それは求婚するには何の関係もないんだ!!なぜなら…結婚というゴールは恋人がいとまいが、全ての人に平等にあるからだ!!」

バーン！ という効果音とその言葉と共に聞こえてくるような錯覚がする。

「こ、これが婚期を逃した女の思考回路なんですか…?」

トゥアールさんの動揺で、周りの女子がザワザワとざわめきだす。私もあぁなつてしまうのか、と心配になっているのかもしれない。

そして尊先生は更に語りだした。

「…かつて私もそうだった。恋人がいて、人よりも上だと自負していた時期があった。結婚なんてできて当たり前、そう思っていた…。だがな、恋人に振られ、私には仕事しかないのだと仕事に打ち込み…あつという間に時が過ぎた。私ももう気がつくともう28だ。30という大台まであと2年しか残っていないんだ! いいのか君たちは? こんな三十路射程内にまで結婚できない女、売れ残りの女になってしまっていないのか!？」

「いやー!!」

「どうしよう、私彼氏なんていないのに!？」

「い、今いる彼氏と結婚しなきゃ…あ、でも半年もまだある…」

女子たちの悲鳴が響き渡る。

いやいや、君たちまだ社会人にもなっていないのに結婚とか短絡的すぎるでしょ。その前に卒業や就活があるんじゃないの？

どうしてこんな結婚観についての話を聞かなきゃならないんだろうか…？

『結婚か……私もそろそろ考えねばならんのかな？』

「えっ！テナーも？」

内にいるテナーも結婚という単語に反応した。

響輔は少しドキリとした。

『義姉^{あねうえ}上^えが早く相手を見つけれど何だとうるさくてな』

「お、お姉さん？テナー、お姉さんなんていたんだ」

「義理のな——チェツクメイドファイブ、歴代唯一の女のキングだ。クイーンの私は彼女と血縁を結んでいる」

テナーのまた新たな真実が明るみになった。

ちなみにテナーのファミリーネームの『オランジュス』はキングの家名であるそうなの。

「(でも結婚か……)」

響輔はちよつと想像した。

もしテナーと夫婦になったら……。



朝、仕事の際見送る時――

「ふははっ！ 響輔、今日は早く帰れそうだよ。そんな捨てられた子犬の様な眼差しを向けてくれるな」

休日、どこ行こうか？と提案すると――

「案ずる事はない。貴様は黙って私について来い！」

服、何着るか悩んでいると――

「ならば、私とペアルックだ！なに、恥ずかしがる必要など皆無！お前ならばにあう」
このままでは男として立つ瀬がないので押し倒そうとしたら――

「くつくつくつ…、がめつい奴め。私の方からキスしてやろうか？――人生は短い、だが夜は長い。今宵は寝かさぬぞ♡」

逆にひねり倒されて、唇を――



『どうした？突然黙って…。何を想像している』

「――な、なんでもないよ！」

何か、淑やかな主婦や、色っぽい人妻というより、頼れる旦那さんって感じかな？

「———そうだ、私を反面に君たちにも結婚という問題に真剣に考えて欲しかったのだ!!」

そして側から聞いていたが、なんて嫌な教育なんだ。

ここに居る女子の大多数が先生に賛同している。

尊のターゲットが再び、総二へと戻った。

「さて観束君！ もう婚姻届は書き終ったかな!? 書き終ったのなら私の前に持ってきてくれ!! 大丈夫だ安心してくれ、君がこの学園を卒業し、結婚できる年齢になるまでしっかりと私が責任を持って保管しておくから!!!」

何一つ安心できない!

この飢えた婚活メイドは本気だ。

「狂気すら感じる尊の行動にいよいよ逃げ出したくなる。」

「させるかあああああああああ!」

ついに愛香が我慢の限界と言わんばかりに尊に拳を放つ。しかし、それを尊は両腕をクロスすることで防御した。

「うおっ！あの愛香さんの攻撃を防いだ！」

「先生！流石にこれはジョークの域を超えています！」

臨戦体勢を崩さず、愛香は抗議する。

だが、そんな抗議、このメイド飢婚者教師には届かない。

「何が冗談か！ 私がこれまで配ってきた婚姻届五二六枚、全て本気だ！ ただ相手の都合がちよつと悪かったただけなんだ！」

「(いやいや、色々だめでしょうが……)」

というか、会って数分しか経っていないのにいきなり婚姻届を出される女を結婚したいと思う男がはたしてこの世に存在するかどうか……。いたとしたら相当な変わり者か、結婚詐欺を目論む輩だろう。

響輔やテナーの目から見ても目の前の教師の異常な婚活には呆れを感じずにはいられない。

「…さて、男子諸君？ 観束君のように婚姻届が欲しいものはいないか？ なあに遠慮はいらない、この学校の男子生徒全員分の婚姻届を私は持ち歩いているからな、枚数の心配はしなくてもいいぞ！」

男子生徒全員、受験当日かと言わんばかりに教科書と筆記用具を机に広げ、真面目に授業を聞く体制に入る。

自分は結婚なんかには興味ありませんと猛烈にアピールしている…勿論響輔もその一人だ。

「ふむ…真面目だな。教師として嬉しいが…女としては少し悲しいな」

どうでもいいから早く帰ってくれ！

クラス男子全員の願いが一つになった瞬間であろう。

しかし、そんな時トウアールが申し出た。

「だったらこのクラスにもう一人ツインテール部に所属している男子ならどうでしょうか？」

ん？何か嫌な予感が…。

響輔は背中に冷や汗が伝わるのを感じ取る。

「紅響輔くんという部員でしてね。その男子なら別にOKですよ」

「(トウアールさんめ！僕を生贄にしやがったな!!)」

「…おおそうだ、確かこのクラスにはもう一人ツインテール部に所属している男子生徒がいたな！」

尊のその発言が聞こえた瞬間、響輔の心臓が跳ね上がった。

爆弾がこつちに回ってきた！

クラス全員の視線が一齐に響輔の方へ向いた。

響輔は熊に遭遇したみたいに、机の上うつ伏せとなって狸寝入りをはじめた。

「紅 響輔の席はここです」

生徒の一人がチクリやがった。

どこのどいつだ！こんちきしょう！

コツコツと、あのメイドの足音が聞こえる。

そしてすぐ真上から声が掛けられた。

響輔は死神に肩を叩かれた気分だった。

「やあ紅君、先日ツインテール部に顔を出した際、君だけはまだ挨拶が済んでいないんだ。そう畏まらなくてもよい、頭を上げてくれ、私はただ君に婚姻届を渡したいだけなんだから！」

皆の視線が早く顔を上げろよ！と訴えて来ていると思うが、響輔は全力でうつ伏せとなりシカトを決め込んだ。

ここで気負けしてはいけない。

響輔はあと少しで終わるHRを逃げ切るつもりだった。

尊は中々顔を上げてこない響輔に少しだけ寂しそうに呟く。

「ふむ…シヤイなのか。いまだき流行りの草食系男子なのか、紅君は…」

「(あんたから見れば誰だつて草食系だ!)」

『いや、この女は肉食というより雑食だ。見境がない』

と、丁度その時、チャイムが鳴り響きHRの終わりを告げた。

「おお、HRが終わってしまったな…」

「終わってしまったな、じゃないですよ!どーしてくれるんですか、年増メイドおお!!」

トウアールがこの世の終わりのような声色で絶叫していた。

「きっとそれは転校生らしく新天地でやるべきことが滅茶苦茶にされての絶叫なんだろう。」

「ふむ…まあいいだろう…また会ったときにでも渡せばいいからな。…ではさらばだ、観東君、紅君!!」

そう言うのと、かつこ良く教室を後にしていった。

『嵐の様に現れて、嵐の様に去っていった。何というメイドだ』

「テナー、どうしよう。僕、完全に目をつけられたよ」

『ふははっ、考えてみてはどうだ？それも殿御の甲斐性というものだぞ？』

不安がる響輔をテナーはクツクツクツ……と笑って楽しんでいた。



「ああ……!!」

スパロウギルデイは冷や汗をダラダラと流しながら、並行世界の移動に使われる艇が置かれているテッキに立ち尽くしていた。

側近として連れてきた白鳥型の怪人、スワンギルデイも同じような顔をしており、先日ドラグイルデイが倒されたことよってすっかり覇気を失い、救援のリヴァイアギルデイが来ることよって彼の心に再び炎を灯してくれるのをスパロウギルデイは密かに期待していた。

が、目の前の移動艇の着艦した搬入口は、猛烈な殺気に包まれていた。

既に二軍は到着するやいなや真つ向からにらみ合い、火花をちらしていた。

大将たるの二体はその最もたるモノだった。

「(ス、スパロウギルデイ様：これは、止めた方がいいのでは?)」

「(ま、待てもう少し様子を見よう。ともかくあのお二人が手を取り合ってくださいれば、鬼に金棒なのだ)」

ヒソヒソと話し合いながら、スワンギルデイとスパロウギルデイは危険物を取り扱つかのような目で、目の前で繰り広げられている事態を静観する。

片や海竜の戦士が率いる軍団、もう一つは海洋の戦士が率いる軍団。

後ろに控えている部下たちも同じように睨み合っている。

それがデツキ全体を支配しており、スパロウギルデイとスワンギルデイはどうすればいいのか分からずに、ただ立ち尽くしているのが精一杯だった。

互いの軍の大将がその最たるものだ。今にも戦いが始まりそうなほど、緊迫した状況が展開されている。

細身な身体つきで精悍な顔つきとは裏腹に、全身から無数の触手を生やしているのは貧乳属性を持つ海洋の戦士——クラーケギルデイ。

対するはまるで人魚みたいに股間から巨大な一本の触手を生やし、身体は筋肉質で顔

が厳つい海竜型の怪人——リヴァイアギルデイ。彼は貧乳属性スモールバストと相反する属性、
巨乳属性ラージバストを所持していた。

巨乳と貧乳、水と油のように相反するこの2人。

流石にこれ以上静観するのはマズイと感じたのか、スパロウギルデイが火中に飛び込むような覚悟で、二人の間に入る。

「クラーケギルデイ様にリヴァイアギルデイ様！双方の部隊がこの世界に来てくれるとは……大変光栄であります!!」

これ以上ないという程、美しい敬礼で歓迎するスパロウギルデイであったが、両の大將の反応は薄い。辛うじて 反応したのはリヴァイアギルデイであったが、不機嫌そうに顔を滲ませる。

「…首領様の命令は絶対だからな。まあ、この増援にかこつけて、どこぞの能なしな軍団がいるらしいが…まあ、やり遂げてみせようさ」

誰がとは言わないがな、とクラーケギルデイをチラリと見るリヴァイアギルデイ。

言葉こそ交わしてはいないが、その発言は誰に向けて言い放ったかは言うまでもないだろう。

「言ってくれるな、それはこちらの台詞だ！侵略する世界では何度も情けをかけ、属性力エレメントの完全奪取を遂行せず見逃した中途半端者が」

「お前こそ時代錯誤の騎士かぶれが一段と増したみたいだな。部下にマントをはおらせるそのセンスがもう古くさいぞ」

「お言葉ですがリヴァイアギルデイ様！このマントは我々が——……」

リヴァイアギルデイの挑発に、クラークギルデイ側の部下が反論しようとするも。

その部下を手で制し、クラークギルデイはぎろりとリヴァイアギルデイを睨みつけた。

「……とにかくだ。私の部下達が妙な影響を受けぬようでしやばりは慎んでもらいたいのだ……巨乳属性ラージバストなどいう下品な属性を崇拜する貴様らにはな！」

「何を!!」

今度はリヴァイアギルデイが怒鳴り声をあげる部下を黙らせた。

「時代遅れとはまさにこのことだな。ツインテールに似合う胸囲は既に貧乳ではない：巨乳だ！ 石器時代のような刷り込みに支配されている貴様らこそ、憐れとしか言いようがないな！」

「……！」

海竜と海洋の戦士は互いに目を見開き、叫ぶ。

「巨^{キョ}オオオ！」

「貧^{ヒン}ツツツ！」

ビリビリビリイイツ！！！！

互いの叫びはぶつかり合い、強烈な炸裂音と衝撃が走る。

その激突で大気は震え、周囲の壁が軋みを上げる。

そしてデッキの上にある照明がパリンと割れた。

「…ふん、実力は衰えてはいないようだな」

「…ああ、貴様こそな」

今の一瞬の間で、二人にしか分からない激突があつたらしい。

「まあいい、下品な貴様らがどれだけでいいのか…この目で見定めてやる」
「…ぬかすなよ、クラーケギルディ。俺たちの部下はそう弱くはないぞ？」

その光景にスパロウギルディは震えた。

これはいけるかもしれない、と。

打倒、ツインテイルズも不可能ではないかもしれない、と。

ラージバスト スモールバスト
巨乳属性と貧乳属性。

今、胸を愛する者たちによる、新たな侵略が始まろうとしていた。

「さて、もう歯止めは効かないわね。ドラグギルデイ、タイガギルデイの部下達も、もう自由に挑んでいいわよ」

『な、何を言っているのですか!?!消費戦になってしまいますよ』

特に気にする様子もなく、サキユバギルデイは戦わせる事を促す。

ドラグギルデイとデュラハンギルデイが倒されたことに覇気を失っている今、二人を倒したツインテイルズに無闇に挑むなど自殺行為に等しいとスパロウギルデイは言う。

「逆に考えればツインテイルズはいい『フィルター』だからあ。いくら奴らが相手でも怖気付いたり、そう簡単にあしらわれるようじゃあ困るしい、正直そういう部下は——」

そしてひと呼吸おくと、血の通わない冷酷な低い声で答える。

「要らないな——せめて善戦くらいしてくれないと」

スパロウギルデイはサキユバギルデイのこの声を聞くと、心臓が止まりそうになる。
——マジだ。

役に立たない部下が目の前にいたらこのエレメリアンは容赦なく、顔色一つ変えることなく殺すだろう。

ゴクリツと飲み込む唾が石ころと錯覚するほどの緊張が全身に走る。

「ま、吉報を待つことにするわ。報告ご苦労様、スパロウギルデイ隊長殿」

それだけ言って、電話を切ると自室のソファア—に寝転がる。

「ま、デユラハンギルデイは獄パー・ガトリ・ナルクの十戒のなかでも最も甘く、弱いやつだから——もし、あの海産物共がやられたら本格的に動くか。新副隊長に三獄将の出番かもね♡」

ゲネラルパウゼ／一縷の希望

「うむ、絶景！」

トウアールの高校デビューに失敗したその放課後、グラビアアイドルのオープンコンテスト会場にエレメリアンは出現した。

「晴天と呼ぶに相応しい青空の下、揺れ動くさまはまさに宙を横断する洗濯紐に吊り下げられた真つ白な洗濯物が如く。眺めうるだけで心洗われるというものだ、そうは思わぬか？二人とも」

「あ……ああ、まあな」

「上機嫌だねえ、二人は……」

その時のティルファングとティルレッドは傍目のキバットからでもわかるように上機嫌だった。

「何が揺れ動くって？」

「あの、ブルーちゃん。顔怖いよ」

キバットが言うようにティルブルーは、絶賛不機嫌真つ只中だ。

その怒りは会場にいる女性の胸に集約している。

「ツインテールの事だろ？」

「無論、ツインテールだ？それ以外に何かがある？」

「……………チツ」

全然悪気なく、あつけらかなと答えるティルレッドと不思議そうに聞き返すティルファングに釈然としないティルブルー。こつそり顔を歪め二人には聞こえない音量で舌打ちした。

『(そうなんだよな、テナーはツインテールが好き「人間モドキ」ってだけで、人間とは全く違う生物なんだよな)』

例えば、人間に猿や動物のどこに性的欲求リビドを感じるのか？と問うようなものなのだ。

テナーも他人のツインテールには興味深々だった。

「待ちわびたぞ！ツインテイルズ」

華やかな会場に似つかわしくないそのエレメリアンは重戦車みたいな巨体をフワリと浮かし、ズシンツと広場に降り立った。

「やつが今日の相手か…………」

「フハハ、まずはティルファング！貴様から我と戦え！」

「ヌツ、私か？」

そのエレメリアンは「し」の字に曲がった大きな角にトードギルデイに負けず劣らずの重量級の体、鬪牛を連想させるエレメリアンは突然人差し指を向けて、テイルファングを指名してきた。

「テイルファング、ご指名入りしました〜：」

「ほう、私と戦いたいとは……貴様は勇敢だな。特別に名を聞こうか？」

キバットが茶化すも不敵な笑いをこぼし、一步前へ出るテイルファング。

「我が名はバツファローギルデイ。偉大なる巨乳属性を世に広めんとするリヴァイアギルデイ様の懐刀なり！」

「(リヴァイアギルデイ：確か奴はドラグギルデイとは親友の仲だったな。こりや有名になるのもよし悪しだぜ)」

「何故私と戦いたがる？」

「それは勿論、貴様が巨乳だからだ!!」

「「は？」」

単純明快。臆面もなく、大声で答えた。

三人とも気の抜けたような声を出す。ただ、テイルブルーの眉間のシワががさつきにも増まして寄った。

「我が眼力からして貴様のスリーサイズは上から94・68・90！Eの73センチだ！美しきツインテールにまごう事なき巨乳！貴様の属性力を持ち帰れば我が隊長リヴァイアギルデイ様も大層お喜びになられる！」

「貴様にはいろいろ口を出したい所があるが取りあえず一つ言わせろ——」

テイルファングは両目をつむつてため息をこぼし、露骨に困つたような表情をしたあと、真面目な表情で宣言する。

「私のウエストは65センチだ！」

「——いや、68センチで合ってるよ。ベルトのオレ様が断言する」

「キバット！貴様はどちらの味方だ！」

相棒の意外な裏切り。

「お前ちよつと太つたんだよ」

「太つ……！」

無遠慮な指摘に言葉を詰まらせる。

「だからお菓子や紅茶に入れる砂糖は控えろと……」

「や、やかましいぞ、コウモリ！差し出がましいわ！」

どんな強敵や変態を目の当たりにしてもうるたえないテイルファングが初めて動じた瞬間だった。

そう、テナーは愛香が胸のないことを気にしていると同じように日々変動する体重に一喜一憂しているのだ。

特に人アントローポス間の甘味は気に入っており、響輔と一体化し燃費が悪くなつても菓子に洋

菓子など、よく響輔の秘蔵の菓子をつまみ食いしている。

「え？ テイルファングって、体重が気になる方なの？」

ププツとテイルブルーがテイルファングの弱みを握つたとばかりに小馬鹿にする。

「——ああ、削ぎ落とす脂肪がまるでない流線的な貴様が実に羨ましいぞ」

売り言葉に買い言葉、テイルファングが応酬する。

「あ？」

「あ？」

両者張り付いた笑みを向かい合わせる。

テイルレッドはその一発触発の空気に一步後ずさった。

「我は胸の脂肪には興味があるが、腹の脂肪はどうでも良い」

「どうでも良くないわ、たわけ者!! 私にとつては死活に匹敵する問題だ!」

バツファアローギルデイのその言葉にコホンと咳払いし、向き直るテイルファング。

「牛の畜生——貴様、わからん様なので教えてやる。女にとつて体重に関する話はたとえ地獄の釜に突き落とされても文句の言えぬ大罪と知れ! まあ、私に挑んだ時点で貴様

の命運は尽きたがな」

『あ、怒って事を誤魔化したな』

それにこれは殆ど八つ当たり等に等しい。

響輔はそんな中、テナーやテイルブルーが普段口にしてる個々人の意見を総括すると、それは矛盾だらけだと思った。

テナーは事あるごとに、大きな胸に不満を漏らしていた。肩こりが酷い、うつ伏せに寝ると苦しい、邪魔だといつも言っている。

大きな胸をしたテナーはそれを不用なモノとして扱っているのにどうして胸の小さなテイルブルーとか愛香さんは、そんな無用の長物を求めてやまないんだろうか？

テナーは体重が減少することに喜びを感じ、増加することに悲しみを感じているみたいだけれど、乳房の大部分を占めるのは脂肪に他ならない。

胸を大きくしようする行為は脂肪の増加に繋がっている。つまり脂肪が増えるということはその分体重も増加する。女性は常にこの相反する行為を同時に行おうとしている。

とても合理的とは思えない。腹の脂肪を減少させ、胸の脂肪を増長する。この二つを同時に達成しようなんて、到底虫が良すぎる。

食べた脂肪は胸にいくと漫画の台詞で聞いた事があるも、人間でもファンガイアでも

こんな都合の良い新陳代謝にはならない。

——と、そんな事を考えているうちに、相対する二人の戦士は既に戦闘態勢に入っている。

「巨乳属性ラージバストつて…そんな俗な属性なんてあるのかよ」

「そういえば言っていたわね。巨乳属性ラージバストつて」

げんなりするテイルレッドとは真逆にギラリと目を光らせるテイルブルー。

そんな二人——特にテイルブルーの様子に響輔以外気づく様子もなく、今戦いの火蓋が切つて落とされようとしていた。

『テナー、テイルブルーが……』

「さあ！戦おうぞ！テイルファンク！我の巨乳属性と貴様のツインテール属性どちらが上かはつきりとさせようぞ！」

「ふはははっ！ならば貴様の命をもってして思い知るが——

「オーラピラー！！んで、エグゼキュートウェーブ！！」

「——良い…わ……」

「ひでえ……」

突然の不意打ちにテイルフアングも呆然とするしかなかった。

バツファローギルデイは何が起きたかも分からぬまま爆散した。

敵とは言え、思わず同情する。

もはやどちらが敵かわからない。

「お、おい…」

テイルフアングもいつものからかう様な素振りもなく、なんて声をかけようか迷うしかなかった。

テイルブルーはそんなこの場にいる者の視線など気にすることもなく、爆炎を手で掻き分け、ほどなくして敵の属性玉を拾い上げ、お宝を見つけたみたいに大きく上に掲げた。

「やったわ！レッド！巨乳属性ラージバストゲットよ」

「私利私欲のために敵を血祭ってんじやねーよ！」

「無残すぎるな」

『僕、本気でバツファローギルデイが可哀想だと思つたよ』

「これで…これであたしは…ふ、ふふつ、うふふふふふ、へへへっ？♥」

ヒロインとして越えてはならない一線を超えようとしてしまいかねない、邪神のような笑みだった。

「テイルファングーツ!!もう巨乳はあんただけのモンじゃないわよーっ!!ざまあみろーっ!!」

「あれ、お前の仲間だぞ?」

「なんだかな…自信なくなってくるよ」

「アイツ、アルティメギル討滅したら後ろから刺した方がよくね?」

『悪魔は召喚したら封印がセオリーだからね』

その後ろでキャツスルドランが属性玉を狙って接近しようにも、勝ち誇るテイルブルーに恐れをなして完全に腰が引けている。

「あ、あの〜」

「ん?」

そんな二人の後ろからツインテールのグラビアアイドルのこの何人かが駆け寄ってきた。

「ツインテール、さわって貰えますか?」

「へ?」

「む?」

「今、噂になっっているんですよ〜!テイルレッドちゃんとテイルファングさんにツインテールをさわってもらおうと、幸せになるって」

「是非、さわって下さい！」

ティルレッドはあまり邪険にできない性格なのか若干遠慮しがちになりながらも、そつとツインテールをさわる。

「そ、それじゃあ……」

「ティルファングさんもさわって頂けませんか？」

「何？」

「ティルファングさん。さわって〜！」

「いや待て、私は……」

「さわってさわって〜！」

目の前で振るわれるツインテール。

それを思わず、目で追ってゴクリッと、固唾を呑む。

ピシピシと頬と首筋にステンドグラスの模様が浮かび上がって、瞳が金貨みたいに鋭く光る。

スツと片手を持ち上げ、指先がツインテールに触れようとした瞬間――

——それを制するように自らの拳を『グッ』と握った。

「(ダメだ)」

目を伏せ、隠そうとするかのよう顔を背ける。

「はいはい！お姉さんたちいっ！テイルファンクは、えー…先の戦いでちよつと疲れちゃったみたいなのでまた今度ねっ！あ！もし良かったら俺が——」

「邪魔よ！」

「ぐえっ!!」

ベルトから離れたキバットも弾き飛ばされた。

「行くわよレッド！」

「あいたたたた！ツインテールを引っ張るな！」

そんな時、テイルブルーが空を飛んでテイルレッドを回収し、去って行った。

「行くぞキバット、来いドラァン！」

「ギャアアアオオオオオオオオオオオオンツツツ!!」

皆の注意が逸れたのを見逃さず、咄嗟に地面に墜落したキバットを拾い上げると

の通りだ。ギアはうんともすんとも言わず、愛香の身体も何も変わらない。

ちなみに属性玉エレメンタリーシジョン変換機構とは、テイルギアに標準装備されている武装の名前だ。

ここに属性玉をセツトすることで様々な能力を付加させることができるのだ。例えば兎耳属性ラビッツをセツトすると脚力強化、といった具合だ。

愛香は巨乳属性ラージュバストの属性玉をこの機能で使えば巨乳になれると思ったのだろうか……だが現実は非情であった。

「使えない……」

愛香はこの世の終わりのような顔をしていた。その表情は数時間前の輝きに満ちていた顔と対極のものだった。

「お前、仮に使えたとしても、今まで名目通りの効果だったことがあるか？　兎耳ラビッツだってウサギ耳が生えてきたりはしなかっただろ？」

「それでもねえ、それでもあたしには最後の希望だったのよおおお!!」

愛香はおいおいと泣き始めた。まるであの邪神つぶりが嘘のようである。

ここで愛香が言っていた『使えない』という意味は能力が役に立たないという意味ではない。『使用できない』のだ。

トウアール曰く、これは純度の問題らしい。これはエレミアンたちの身体構造のせいで起きる問題なんだとか。

人間の趣味嗜好が一つではないように、エレミアンも生きていれば人間と同じように多数の趣味や思い入れを持つようになり、それが時間と共に本来自分が持つ属性力とは違う属性力を備えてしまうケースがあるのだというのだ。

以前戦ったフォクスギルデイは自分の核となる髪紐属性リボンと後付けの人形属性ドール、2つの属性力を所持していた。あれがいい例かもしれない。

後から得た属性力が大きければ大きいほど、本来自分が持っている属性力の純度が下がっていつてしまうというのだ。今日倒したバツファローギルデイはもしかしたら他にも属性力を備えていたのかもしれない。だから手に入った巨乳属性ラージバストも純度が低い属性玉となつてしまったのだ。

「濃いドリンクを水で割るといのが分かりやすい例えかもしれませんね」

トウアールはテーブルに置かれているジュースと水を手に取った。『本来の属性力』をジュースで例え、『後付けの属性力』を水と説明しながらテキパキと2つのドリンクを作っていく。

そしてテーブルの上には白さが濃く出ているドリンクと水っぽいドリンクの2つが出来上がる。

「おお、分かりやすい！じゃあ今日手に入れた属性玉は…」

「そうです総二様、この水っぼいドリンクが該当しますね」

そしてテイルギアもある程度の純度の属性玉でないと、発動しないようになって
らしい。

そして今日得た巨乳属性ラージバストの属性玉はそのレベルを超えていなかったらしい。

「じゃあ、これどうすればいいのよ…」

愛香は宝の持ち腐れとなつた属性玉を床へと転がした。

「そのことについて、私から案があるわ！」

するとどこからともなく声が聞こえたが、皆騒がなかった。もう声色で誰か分かつて
いるからだ。

「お義母様!？」

唯一反応するのはトウアールだが、もうこの2人の悪の幹部ごっこにリアクションす
るものは誰もいない。これも慣れてしまったからだ。

「そのコアを使って、新たなテイルギアを作ればいいのよ！」

その言葉と共に入ってきた母親の恰好に、総二は思いつき噴き出した。

「あら？何を驚いているの総ちゃん？」

「実の母親が平然と悪の秘密結社みたいなコスチュームで入ってきたら誰だって驚くわ

!!
」

そう…総二の母、未春は悪の幹部が身に纏うような黒いマントと髪飾りを着けて、地下基地に現れたのだ。

中二病に關しては半分諦めていたようなものだが、もうここまでのレベルに達してしまっただか…と総二はがっくりと肩を落とす。

衣装もどこで作ったんだ、と言わんばかりのクオリティに仕上がっている。

この恰好に黒いフルフェイスヘルメットを被ったら、もう完全に某宇宙戦争の暗黒卿だ。

「——で、さっき言っていた新たなギアって何だよ？まさか自分が変身するとか……」
諦めたようにテーブルの席に座り、母親に問う総二。

「心配しなくても母さんにはツインテール属性がないじゃない。この間総ちゃんが入れたツインテール属性と今日手に入れたコアを組み合わせての新しいギアを作ったかどうかしらってこと。ここらでもう一人追加戦士をテコ入れしてもいいかなって話よ」

ツインテールの属性力を力としていたドラグギルディとの戦いを制した総二は、ツインテール属性の属性玉を持っている。

だが、それを属性玉変換機構エレメントタリーションで使うことはトウアールから固く禁じられていた。

ギアに内蔵されているツインテールの属性力と合わさると暴走の危険があるからだという理由でだ。

結局、それは日の目を見ることもなく、総二のギアの中でそのまま保管されている。未春はその使っていないツインテールの属性玉を使ってもう一つギアを作ってみないかと提案してきたのだ。

「いけません総二様！これ以上誰かを戦いに巻き込むのは！」

さらに部屋の隅で未練がましく巨乳属性の属性玉と格闘していた。ティルブルーまでもがずかずか歩み寄ってきた。

「そうよそーじ、あんな変態達とどこぞの女の子を戦わせるっていうの!？」

「それはそうだけど、この先の事を考えたらもう一人くらい…。あのティルファンングが正式に俺たちの仲間になってくれさえすれば——」

「絶対ダメ（です）!!!」

「は、はい…」

二人に気圧される総二。

特にティルファンングの名前を出した途端に二人は力強く否定した。

ティルファングに憧れに近い感情を抱いている総二に対し、愛香はもちろんトウアールもティルファングをライバル視していた。

「ま、まあこれ以上新しい戦士はどうかと思いますが、少なくともこちら辺で予備のギアを開発したいかならうって思っていたんです。で、そのギアに属性力のハイブリット技術を組み込んでみましょうか」

前方の電子パネルにハイブリット技術の概要が現れた。

難解すぎてちんぷんかんぷんだが、その中に2つの属性玉が存在することは辛うじて分かった。

「要は総二様が変身した時に起こる幼女化現象の逆を意図的に行うんです。さっきの使えない巨乳ラージバスト属性の属性玉を上手く利用すれば、属性玉の本来の性能を発揮できなくても身体変化くらいのを発揮させることができるかもしれない」

耳ざとく反応する愛香。見る見るうちに顔に輝きが戻ってくる。

「じゃあ…じゃあそのギアを使えば巨乳に変身できるの!？」

「まあ、あくまでも可能性の話ですけれど…」

「じゃあお願いトウアール!それ私にちょうだい!」

愛香は一瞬のうちに変身を解除し、トウアールの前で頭を下げた。

なんとという無駄のない無駄な動き。

「愛香さんには私があげたギアが既にあるじゃないですか」

「新しいのがあるのならこれと交換して！このギア、起動する時ガリガリ音するし、温度はやたら上がるし、いきなりフリーズしたりする時があるんだから！」

もはや末期のパソコンのような症状だ。

開発者を目の前にあれこれ好き放題言つて、トウアールに失礼だろう…と思つていたら、トウアールは意外にも笑顔だった。

「そうですかあゝ、どうしても欲しいんですかゝ」

しかしその笑みは、大変意地が悪い笑みだった。

「じゃあ愛香さんには今までの詫びをしてもらわなければなりませんねゝ、とりあえずは土下座と私に様付けで敬つて貰わなければ新しいギアは渡せま…」

「トウアール様！今まで数々の無礼、誠に申し訳ありませんでした!!」

その間、僅かコンマ一秒。

謝罪の言葉と共に見せた土下座は美しく、優雅にさえ見えるほどだった。

「ひいひいひいあの畜族が平身低頭!!」

どうやらトウアールは土下座と巨乳の究極の選択で苦悩する愛香を眺めていたかつたらしいが、そのリアクションから、全くの予想外の行動であつたらしい。

「乳が手に入るのならねえ、巨乳になれるのならねえ…プライドなんて捨ててやるわ

よおおお!!」

ゆっくりと頭を上げた愛香の頬には、血涙が流れていた。

それは魂の叫び、決して頭を下げたくない相手に下げてまで手に入れたい。

その覚悟がひしひしと伝わってきた。

「あたしはの欠点は胸がない事！ずつと胸が欲しかった…その可能性が、希望が！今、目の前にあるのよ！だったら飛びつくしかないじゃない!!」

「愛香お前、そこまで……」

「総二様、私は基本的に愛香さんのいうことは全否定して生きていたのですが、こればかりは別です。胸がどうでもいい女の女なんじゃないんです。これは人生の命題なんですよ。ノースリーブのシャツの袖がどんなに伸びても長袖にならないように、貧乳はどんなに頑張っても谷間というものができないんです。だから寄せて上げるブラっていうのがあれだけ売れたんです」

深い。トウアールのその言葉に、女の世界の奥深さを一つ知った総二であった。

「私はね、胸が手に入るのなら神にだって、悪魔にだって魂を売り渡していいわ!!」

そんな理由で売り渡されたら神様も悪魔も困るんじゃないかなあ？

「ああ、胸が、胸が欲しい……」

その悲痛な叫びは、まるで水を求めて砂漠を歩く、遭難者のようであった。そしてそ

んな愛香に救いの女神の手が差し伸べられる。

「…分かりました、愛香さん！その願い、聞き届けましょう」

「トウ、トウ、トウアール様!!」

愛香は感極まったのか、トウアールに抱きつき、泣いた。

その抱きついた部分が胸ではなく、腰というポイントに愛香の巨乳に対する恨みがひしひしと伝わってくる気がする。

「普段は敵ですが、今回ばかりは別です。つかの間の握手って奴ですよ」

「ありがとう、本当にありがとう！」

「いいんですよ、だって私たち…友達じゃないですか」

「あらあらいいわね、青春って奴ねえ〜」

女同士の美しい友情物語が目の前で繰り広げられているその中で、総二だけがあることに気付いた。

腰に縫り付いている愛香を慰めているトウアールの顔が、かつてないほどの邪悪さで満ちていたことを。

そしてある一つの言葉が総二の頭に浮かんだ。

…人は可能性に救われることもあるが、その可能性によって殺されることもある、と。

ゴールドデンウィーク／閑話休日

ついに大型連休、ゴールドデンウィークが訪れた。世間はこの長い休みを利用して、遠出や旅行などに出かける人が後を絶たない。テレビではレジャー施設の1日の入場者数を今までより大きく更新したとか、テイルレッドとテイルフアングが市場に与えた経済効果はいくらかとかそんな話題ばかりをやっている。

「ふはははっ！待ちに待ったぞ！この時を!!」

「テナー様あり、テンション高くな〜い？」

「へえー、アントローボスここが人間の集合市場——ショッピングモールか」

ワインレッドツインテールの黒いコートにパンツルックのテナー（響輔）、白髪カジュアルな服装のマルシル、金髪に魔女のような三角帽子、大きめのブーツを履いたヴェデイの三人は先日、クラブギルデイの出現したショッピングモールに来ていた。

ちなみになぜテナーが表に出ているのかというと、自分の手で購入したいと本人が言うこともあったし、普段戦闘ばかりでたまの休日には身体を譲ってもいいと響輔は快く

代わってくれた。

この日、圧倒的人気を誇っていた「超可動A・G・Tシリーズ、ティルレット」が再販したのだ。

響輔はその整理券を取ることに成功。

今度は本人とマルシルとヴェディを連れて、ショッピングモールへ赴いたというわけである。

休日に加えて本日は晴天なせいか、建物は家族連れで暖かい喧噪にぎわっている。

「はい、6,980円です。再入荷限定特典の台座もお付けいたします」

「ふははっ……良い、献上を許す」

順調に商品を受け取ってお金を支払う。

「よし、これにて目的は果たされた。ヴェディはどこだ?」

「ぬいぐるみのコーナーにいると思うよ」

服装からしてすぐに分かった。

ものすつごく浮いている。

「ヴェディ、そろそろ行くぞ」

「ちよつと待って、この人形買ったらすぐに行くわ」

ヴェディが手に取って見ていたのは、「ハラワタアニマル」というシリーズだった。

「何だこゝは？動物の死骸が山積みとなつたこの惨憺さんたんたる場所は。死体置き場モルグか？」
 そのぬいぐるみは名前の通り「はらわた」が腹から飛び出ているというキモ可愛い、グロ可愛いで話題となつているヴェディお気に入りゴシックな動物のぬいぐるみシリーズである。

だが、こうして棚や籠に積まれたりしているのをみるとまるで動物の死体置き場に見えなくもない。

そのうちの一個を手にとるとマルシルと一緒にレジへ向かつて足早に向かつていく。
 あんなぬいぐるみの何が良いのか理解出来ないテナーはそんなヴェディの背中を見ているとふとある物に目がいった。

「む？響輔、これは何をやる道具だ？」

ヴェティが買い物をしている間に、テナーは近くにあつた妙な棒の商品を持つて頭に疑問符を浮かべていた。

片手で持てる程の大きさにその棒の先端にはマジックハンドみたいに人の手みたいなのが摘むようについている。

「響輔、わかるか？」

『えーと、これは『ポテチテーブル君』つて言つて…この間コンビニで買ったポテトチップス。覚えてる？』

「ああ、ぱりぱりしていて美味^{びみ}なああの揚げ菓子か。特に九州しようゆが最強だな」

『テナーの中でのランキングは置いといて、これはそのお菓子を食^くべる際手が汚れないようにこれでポテチを掴んで食^くべるものなんだ』

すると響輔はそれを持つテナーの右手のみ意識を切り替え、手元のスイッチを押して先端の指を動かした。おおっとやたら感心した声を出す。響輔はつくづく思う。なんとも平和な道具だなと。

「うむっ！響輔、この道具は素晴らしい！是非とも購入すべきだ」
『ええ？』

テナーがこんなに食^くい付くとは予想外だった。

『そりやちよつと興味引くけど、別にポテチくらい手でも食^くべられるじゃん』

「それでは手が汚れる。これを使^{つか}えば、影^{シャドウ・クラフト}創造せず、ぼてちを摘み、ソファーに寝転がってテレビを見てたらだら出来る。うむ！完璧な布陣だ」

『どこがだよ！そんなごろごろしてたらまた体重が増えるよ』

満足気に怠惰フォーメーションを語るテナーに響輔は激しく突っ込む。

響輔のその言葉を聞くと、むぐつと口を閉ざす。

「そうだな。よくよく考えればこれはかえって面倒くさい道具かもしれぬな。ぼてちを摘むくらい箸で事足りることだ」

『いや、まずポテチ食べる事を控えた方がいいんじゃないのかな?』

先日のバツファローギルデイの戦い以来テナーは体重に関して一層に敏感になったようだ。

『(女の子ってそんなに体重が気になるのかな? テナーなんて太っているようにはあんまり見えなかつただけだ)』

響輔は一度姿見でテナーの全裸を見てしまった時や、またテナーの入浴時、(テナーは入浴好きなのか自宅の風呂場で響輔と入れ替わって、テナーが浴槽浸かることがよくある) 響輔はあまり気にしていないがテナーはそれほど悪いプロポジションではなかった——と思う。うる覚えなので。

しかし響輔は普段素っ気ないテナーにもこういった人間らしい部分があるのだなど、意外にも安堵している。

「はーい、テナー。お待たせ〜」

「待ちくたびれたぞ。マルシル、ヴェディよ」

「いや〜、ちよつと会計が混んでてね」

「ん? 何だい、そのオモチャ」

「うむ、これはポテチタバール君と言ってな…」

雑談を交える三人を他所に響輔は周囲の視線を気にしていた。

『(それにしても目立つな)』

元々美形の三人に髪の色は日本人離れたワインレッドの髪と白髪と金髪、特にヴェイデイは季節はずれのハロウィンみたいなコスチューム。

これで注目を浴びないわけがない。

「時間もあつし、もう少しシヨツピングモールを見て回るかい？」

マルシルの提案に二人は反対せず、色々なフロアを見て回ることにした。



「……………」

「……………」

「……………」

『それ』を見つめ、三人は凍りついたように固まっていた。

普段動じないテナーさえ、魂を手放しやかのように呆然としている。

「コレは……何かしら？」

「虫か、動物の玩具？全くわからないね」

「響輔、この丸蓋のような物体は一体何だ？」

テナーが響輔に訊く。

『ああ、見た目からは想像できなけど、これはロボット掃除機なんだ。ほら、よく僕が休日自宅でガーガー音がする筒と管くだと箱の機械見たことあるでしょ？これは手で持たなくても自動で徘徊してゴミを吸い込んでくれるものなんだ』

「ロボット？……ああ、人アントローボス間が手掛けるゴーレムの事か」

「何て言ったの？響輔君」

「これは自動で掃除をするためのゴーレムらしい」

「へえ、凄じじゃない！こんな小さいのが魔力ピュシスもなしに動くなんて、人アントローボス間の技術もバカ

にはできないわ」

家電売り場の一角にあるロボット掃除機。その実演を目の当たりにして混乱する三人に響輔はなるべく噛み砕いて説明した。

特に魔道具の製作やキバの鎧のメンテナンスを行うヴェディは大いに感嘆の声を上げる。今まで気に止めていなかったが、この三人から見て人間の生活用品は凄く斬新な物らしい。

この後、テナーがスマホのお試しコーナーでアプリのゲームに夢中になっていたり、ヴェディが会話するロボットにあれこれ話しかけていたり、マルシルが休憩所のマッ

『テナー、食べながらでいいから聞いてくれる?』

「何だ?」

『ツインテイルズ達とは共闘はするけど協力はしないよね。彼女達の事はわからないことだらけだけど、そろそろお互いに正体さらけ出して本格的に協力してみたらどうかかな?』

「だめだ」

にべもなく即答し、一蹴される。

「どうしたの?」

「響輔君、何か話しているの?」

気になったヴェディとマルシルもテナーを通して話に加わる。

ちなみに響輔とはテナーと、ベルトと一体化しているキバットは口頭で話す事が出来るが、それ以外の者とはテナーを介してか、マルシルが魔術を施した特別な鏡を用いることでしか話す事が出来ないのである。

テナーは早速二つ折りの手鏡を取り出すと、鏡面が相手の方を向くよう胸ポケットに差し込んだ。するとその鏡面に響輔の顔が映りこむ。

『テナーもあのテイルブルーが苦手だつて事は分かるよ。けど、やつぱり信頼を得てお互い仲間になれば、作戦だつて練りやすくなるし、戦い方だつて合わせやすくなる。テ

ナーの負担だつて確実に減らせると思う」

ファーストフード店の安っぽいテーブルとイスで話すには、ちよつと重過ぎる話題なのかもしれない。

客の目の届かない隅の席だからこそ話せると思つたのだろう。

「それもまた一考したんだけどねえ」

マルシルは注文したドリンクを飲みながら困惑した表情を浮かべる。

「我々は異世界から来た魔の者だ。アルティメギルなどといった同じ異世界から来た輩が侵略活動をしている今、不用意な接触は誤解を招きやすい。それに私達はこの異世界の住人。人間にはできる限りの接触は禁止されている」

テナーは注文したサラダをフォークで刺し、口へかき込む。

「でも、彼女達の鎧には純粹に興味があるわね。人間の戦闘能力をあそこまで向上させる技術なんて聞いた事がないし。おほらくあれはヘナーとほんなじ、ヒバの鎧に精通しているものだとい察する……うんまうい」

ヴェデイもビッグなハンバーガーにかぶりつきながら答えた。

ぴよこんとヴェデイから猫耳が生え、ぴこぴこ動く。感情が昂っているサインだ。

「猫耳しまつて！」

マルシルが慌ててヴェデイの耳を抑え、周りを見回す。

『そいえば今、テイルファンングのフェッスルは何種類ぐらいあるの?』

響輔は話題を変えて今度はテイルファンングの鎧に関して聞いてみることにした。

「サポート系フェッスルは必殺技発動の『ウェイクアップフェッスル』、號電を呼ぶ『號電フェッスル』、キャッスルドランを呼ぶ『ドランフェッスル』、ブロンブースターを呼ぶ『ブロンフェッスル』の4種類。フォームチェンジ系フェッスルは『ガルルフエッスル』、『バツシャーフエッスル』、『ドツガフェッスル』、『アルテフェッスル』の4種類。合計8種類よ」

以前のテナーは武器単体としてアームズモンスターを使用していた。

しかし、内にいる響輔がアームズモンスター達の仲介役になることでキバの鎧を大きく変化させ、チェイン形態とすることができる。チェイン形態は手にするアームズモンスター達の影響を受け、ツインテール属性のテイルファンングにその種族の属性力を加えた所謂ハイブリッド形態である。

まだノーマル状態とガルルチェインしか実践で使用していないが、テイルファンングのフォームチェンジには「バツシャーチェイン」「ドツガチェイン」「アルテチェイン」の3つがまだ残っている。

フォームチェンジは強力な切り札の反面、これは非常に危険な行為であり、この姿は通常では考えられない形態なのだ。

原則、アームズモンスターはテイルファンクの制御下にあるが、ファンガイアの魂^{フシユケイ}の吸収能力と相まって、時として意識に反して暴走する危険性もはらんでいる。所謂「侵食」であり、テイルファンクのフォームチェンジは下手をすると全身をアームズモンスターに乗っ取られる可能性があるのだ。

その危険性を緩和し、全身をアームズモンスターに取り込まれずチェイン形態を保持していられるのは…ひとえに内にいる響輔の仲介役に加えて、キバツトが魔皇^{マクテイフオリス}力の制御を完璧にこなしている恩恵である。

と、ここまで説明した後、ヴェディはハンバーガーの最後の一口を頬張り、新しいハンバーガーを手取る。

「もう、どんだけ食べるのよ」

「おのれえ…私を差し置いて美味そうだな。その矮小な肉体にどれほどの胃袋が内蔵されている」

マルシルは呆れたようにつぶやき、テナーは恨めしそうにヴェディのハンバーガーを欲しがる。

すでにハンバーガー3つ、ドリンク2杯、ポテト2つをヴェディ1人で平らげていた。

「中々ハイカラな味だわ、故郷の家族にも食べさせてあげたい」

『親思いだね。ヴェディちゃん』

美味しそうにハンバーガーを頬張り、噛み締めるヴェディを響輔はテナーの内で眺めながら微笑ましそうに感心する。

「?何を勘違いしている。ヴェディは既婚の身だぞ」

『え?』

既婚?つまり——

『結婚しているの!?ヴェディちゃん!』

響輔が驚いている事をテナーが伝えると「そうよ」とあつさり肯定した。

「こう見えてアタシ、もう成人よ。夫に加えて3男3女の大家族」

取り出したのはヴェディを含めた家族の集合写真。

皆、ヴェディとそれ程変わらない身長に若さなので一見兄弟かと思った。

「隣が夫で、前列の5人と抱いているのが子供達。ここへ来る前に末っ子が生まれたばかりでねえ」

ほっこりした顔でヴェディは写真に写ってる家族を自慢した。

鏡面に映る響輔は未だに信じられない様に目を見開いた表情をしている。

「良い所だったぞ、ヴェディの故郷は。狭いながらも楽しく賑やかな場所です」

「ヴェデイの種族……シーケツトは人アントローボス 間よりも長命で、成人の平均身長は約130センチだよ。響輔君達から見ればシーケツトは子供にしかみえないから無理もないけど」

『な、なるほどね。でも、ぬいぐるみとか……、ロリイタ服とか……』

ヴェデイが可愛いぬいぐるみやロリイタ服をよく集めているので響輔は子供なのかなと思いい違いをしていた。

「なつ……いつ、いいでしょ、別に……これはアタシの趣味なのよ！」

「響輔はまだ何も言つてはいないぞ……」

子供っぽいと思われたのか、ヴェデイは小さな頬を膨らませて否定する。

その様子にテナーは何とも言えない表情で宥めた。

マルシルもそんな和む風景に頬杖ほほづえをつきながら苦笑する。

そのあともショツピングモールでいろんな店を冷やかして回った。

服屋では綺麗な容姿を持つ3人に店員さんが目を輝かせて張り切り、あらゆるタイプの服を着せては、店内中の注目を引いていた。特にファッションにあんまりこだわりの見せていないテナーは着せ替え人形にされて最初は困惑していたが、可愛い服を着て、うつつらと楽しそうに微笑み——その様子はどこにでもいそうな人間の女性そのままに見えた。

ペットショップでは、子犬を抱っこして撫でるのに夢中なテナーに『かわいい?』と響輔が訊いたら、ハツとして「さあな」と途端に手放してしまった。——テイルレッド、カピバラのゴードン、子犬。テナーは小さくて可愛いにモノに目がないようである。すぐ近くではヴェディがショーケースの中の猫にニヤアニヤアと話しかけられて、ヴェディはそれに対してコクコクと頷いていた。「ヴェディ、お前猫の言っていることが分かるのか?」と、テナーが訊いたところ「? そんなわけないじゃん。テナーつて馬鹿?」などと真顔で返したヴェディはテナーに頬を仕返しとばかりに両手の人差し指でぶつと挟まれた。店内にいた人の何人かに笑われた。

一通りショッピングモールを回った後、そろそろ帰る時刻になった。

『で、どうだった、三人とも?人間のショッピングモールにきた感想は?』

「んん、とつても楽しい所だわ」

「市場のお城つて感じかしら?」

「キヤッスルドランで電子機器は使用可能だが、セレーネでは基本魔力ピュシスに頼る。ここに
あるものは珍しいモノばかりだ」

ウキウキと上機嫌に三人は言った。

響輔もこんな三人の反応をみれてとても良かったと思っていた。

「やはり改めて思うが、人間アントローボスの進化は目覚ましいな」

『どういう事?』

テナーの言葉の意味に疑問符を浮かべて続きを語り始める。

「人間はとても無力な存在だ。魂フシユケから魔力ビュンスを抽出することができない。——だが同時に、自分たちの想いを現実にする能力を持っている。ウルフェンみたいな空中を跳ねる走力もなければ、マーマンみたいな遊泳能力もフランケンみたいな発電能力もない。しかし、それを成す道具を作り上げてしまう」

テナーの表情こそあまり変わらないが、その声音こわねは、本気で人間に敬意を感じている様だった。

「この時代のれーぞうこもでんわもてれびもその願いの結晶だ。こういうものがあつてほしいという概念があつてこそ、それがいくつも実現している」

『ファンガイアの愛するツインテールも——?』

不意に響輔がそんな疑問を口にするのと5、6秒沈黙した後「そうだ」と肯定した。

「ツインテールはなぜ誕生したのか…なぜあれほどのパワーを秘めているのか、それは未だ解明されていない」

『そうなんだ』

「だが、ツインテールはファンガイアにも人間アントローボスにも愛されているのは確かであり、ツインテールはその二つの種族に必要とされたからこそ誕生した——のだと、私は思う」

テナーの口にする魔力ビュシスという言葉は、これまでの言葉の経緯から察するに、ツインテールへの想い、つまり魂ブシユルから生じる不思議エネルギーの両方を指すのだろう。魔の者のファンガイアはそれらツインテールの魔力ビュシスを糧とし、力の源とし、愛でる種族らであるということか。

などど響輔が考えていると、シヨツピングモールを出た所で向こうから女の子のすすり泣く声が聞こえてきた。

「ん?」

3人はそれに気づきそちらへ顔を向ける。



キャツスルドランへ帰城したテナー、マルシル、ヴェディ。

テナーは最高級の革張りソファアーにうつ伏せに顔をうずめて、不機嫌に寝転がっていた。

「どうしたんだ？テナーの奴」

そんなテナーを見かねて次狼がマルシルとヴェデイに訊いた。

「実はね——」

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

テナー達が帰ろうとシヨツピングモールを出た所、小さな女の子がで父親と思わしき男性にあやされながら泣いていた。

聞き耳を立てていると、どうやら今日購入したテイルレッドのフィギュアを無くしてしまったらしい。

テナーはそれが分かると小走りに駆け寄り、「探し物はコレか？」と、なんの躊躇いもなく購入したテイルレッドのフィギュアを渡したのだった。

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

またしてもテイルレッドのフィギュアを購入できずに、ふて寝していたのだ。

「へえ〜！ テナおねえちゃん、いい事したじゃん！」

「テナー、は、やさ、しい…」

「音也さんだつて…ホラ、きつと褒めてくれるわ」

その話を聞いていたラモンと力が拍手しながらテナーを褒めた。

「お前は小さい子には優しいからな。お礼言つてたか？ その子」

「ああ…」

「今度ゾン・アマで販売していないか検索してみるからさ。ね？」

「ああ…」

次狼もマルシルも慰めようとしたが、テナーは力なく相槌を打つばかりだった。

最後は響輔が厨房からでてきた。

「そう気を落とさないで。今夜はテナーの好きな月見ハンバーグだよ」

「え！ 本当!? やつたー！」

「私卵2個ね！」

「響輔君、私にも！」

ラモンは飛び跳ね、さり気なく卵の追加をするヴェデイとマルシル。

皆が大喜びする中、テナーもこちらをチラリと視線を向ける。

「——ワインも開けておけよ」
「ハイハイ……」

クレッシェンド／禁じられた称賛

アルティメギルの秘密基地

ゴールドデンウィーク

G Wの頃、エレメリアンは侵略活動を停止していた。

何故ならリヴァイアギルデイとクラークギルデイの部隊が合流し、元いた部隊と統一

——よそから集まってきた者たちを交え、新たな部隊を再編成する。

その際の地位や役割を決める時にその問題が起こったのだ。

現在、各部隊の要人、代表者達を集結させて大会議室で熱い討論を繰り広げていた。

その議論の論題こそ、問題の原因であった。

ラッシュバースト スモールバースト

巨乳属性と貧乳属性。

この対極の属性ゆえに主張は平行線を辿り、対立に次ぐ対立で部隊は真つ二つに割れてしまったのだ。

どちらが上でどちらが下なのか。

皆、やれ自分たちが上だやれお前らが下だと互いの主張を繰り返している。

その勢いは今や元いた部隊のメンバーをも巻き込む事態となっている。

そのせいでこのGW期間、出撃すらままならなかったほどだ。

「お主たちもいい加減あきれ果てていよう。この世界の巨乳属性ラージバストの少なさに呆れ果てているであろう！自らの身体に刃やいばを入れ、偽りの胸で満足しようとする浅はかさな女子がこの世界は多すぎる！そんな付け焼き刃だからこそ、巨乳属性ラージバストが生まれぬのだ!!」

「だが貧乳属性スモールバストは違う！小さいからこそ誇りが生まれるのではないか!?!」

「ならばそれはこちらも同じだ！偽りがはびこるからこそ、本物の存在とその価値が希少になる！美しくなれる！若かりし頃にしか見せれない、一瞬の火花のような煌めきが巨乳属性ラージバストにはある！」

「偽物のはびこるからこそ、荒地に咲く一輪の花のように、自然な純粹ナチュラルたる巨乳属性ラージバストのほろが可憐に映えるのではないか!?!」

一歩も譲らぬ両者の対立。

厳つい顔をした怪人たちが男子中学生のレベルの話題でここまで論じ合う光景を見たら、はたして侵略される側の人間はどう思うのだろうか？

「ここに巨乳属性ラージバストの素晴らしさを示した一枚の写真がある！これを見よ！」

リヴァイアギルデイの部下が大型モニターに一枚の写真を写した。

写真には登校中の女子大学生が映っていた。

その胸元はたわわに実った乳房が淫らにある。

「おおっ……！」

「なんと下品な乳をしている女だ！」

何人かのエレメリアンは感嘆の声を上げ、クラーケギルデイの部下のひとりがヤジを飛ばした。

「ふん……馬鹿の一つ覚えのようにただ胸の大きさのことで語る前に、これを見たまえ！」

すると写真のある部分の拡大を行った。アップされたのは、女子学生のたすき掛けにしていた鞆のベルト部分だった。そこにはベルトがたすき掛けとなり、胸に食い込んだせいで巨乳が沈み、女子学生の胸の大きさが一層強調されている。

「どうだ、この食い込みは！ 貧乳ではあり得ぬ谷間は！ 左右に別れた乳の有り様：これぞ天地の創造、古代大陸を隔てたスーパーブルームともいえる素晴らしき光景！
巨乳属性は進化の証。世界開闢は巨乳属性にあるのだ!!」

「そしてこの左右の胸の美しさこそ、左右に分かれるツインテールの根源と同じではないのか?!」

一気に貧乳属性を畳みかけようとする巨乳属性軍団。

「笑止、何が進化の証だ。くだらん」

「ならば貧乳属性スモールバストは時代遅れと言いたいのか!？」

「胸にぶら下げた駄肉など年老いれば干し肉同然となるのが必定だろうに!」

クラーケギルデイの部下も負けじと一枚の写真をモニターに表示させた。そこには笑顔でスクール水着を纏う少女の姿が映った。

「どうだこの密着具合は!?!スク水との調和は!?!下品な巨乳属性ラージバストには決して出来ん、貧乳属性スモールバストだからこそその魅力は!?!」

「貧乳だからこそ、このようにスク水が映えるのだ!スク水だけではない、メイド服、学生服…スレンダーだからこそ、貧しいからこそ、それらが美しく見えるのではないか!?!」

「貧乳属性スモールバストこそ、幼き日を忘れぬ永遠の美学であり、幼い可愛さの象徴であるツインテールとベストマッチするのだ!」

その主張は、数多の服装フェチの属性力を持つ怪人たちの目の色を変えた。

「貴様あ!そう言つてドラッグギルデイやタイガギルデイの部隊の者をこちら側に引き込もうという魂胆か!意地汚し!誠に意地汚し!!」

「馬鹿め!貴様の頭と胸には豆腐が詰まっているのか!私はいかなる属性力も最後は貧乳属性スモールバストに結実するのだと伝えたいのだ!大地が平らなもの、大空がどこまでも広がっているのも、水平線の彼方があれだけ平坦なもの、全ては平面を…すなわち貧乳を表し

ているからではないのか!!空を飛ぶ小鳥も死ぬときは大地へと還る——つまり貧乳とは、どんな万物すらも還す、最終地点のことを言う!!」

「そんなたわ言、このデュラハンギルデイの遺作であるティルファングの蠟人形を前にしてもほざけるのか!!」

「ティルファングこそツインテールと巨乳の象徴であり、巨乳ラージバスト属性の美の化身である!!」

「はん!解せんな。そんな邪教の偶像の何が良い」

「そんな置物にありがたがるくらいなら古びた埴輪の方がまだマシだ」

「誰だ!今埴輪の方がマシだといった奴ア!!ブチ殺してやる!!」

両者の怒りは遂に爆発し、一部で卓を乗り越え、武器を持ち、暴徒となり果てる者まで出始めた。

それを皮切りに巨乳だ貧乳だと、もはやただの喧嘩となり、会議は荒れに荒れる。

「静まれい!!」

硬質のテーブルに叩き割り、一喝するクラークギルデイ。

途端、水を打ったように静まり返る一同、取っ組み合いをしていた者は気まずそうに離れる。

「このままでは拉致が明かぬ。一体何日、こうやって終わりのない言い争いをすれば気が済むのだ?昨日に至ってはエロゲのキャラを会議に持ち出して、双方醜い罵り合いを

した挙句、その内の一人が男の娘キャラだったではないか!! もはや巨乳貧乳の問題ではない、貴様らは異性の乳すら見抜けない程愚かで未熟なのか!」

クラーケギルデイの触手の一本一本が怒りのあまりピンと張りつめていた。

騎士道を重んじるクラーケギルデイが感情を露わにして叫ばなければならないほど、事態は深刻だった。

「……このままでは侵略もままならぬぞ。やむをえんが、部隊の統一は一度白紙に戻し、個々での侵略を行うしかないな」

ここでリヴァイアギルデイが割って入った。

それは云わば苦渋の決断であり、そのすることではしかこの争いを終わらせる方法が無かったのも事実である。このままではツインテイルズと戦う前に内輪もめで部隊が壊滅してしまう。だからそれを防ぐためにもこの争いを無理矢理にでも止めなければならなかった。

断腸の思いであったが一部隊の長として、リヴァイアギルデイはそれを決断はしなくてはならなかった。

「しかし、リヴァイアギルデイ様……お言葉ですが、2つの部隊の総力を結集しなければツインテイルズを倒せません! 多少時間がかかっても話し合いで解決を……」

「だが、このまま座していても事態は何も変わらぬのも事実。リヴァイアギルデイ、その

案を呑もう。貴様の言う通り、侵略は個々で行うものとする」

「ク、クラーケギルデイ様……」

クラーケギルデイが部下の発言を遮り、リヴァイアギルデイの意見を取り入れた。

「俺の腹心たるバッファローギルデイがああも惨たらしくやられたのだ。ツインテイルズの実力はとうに承知済みだ。皆、足がすぐくんでも仕方あるまい……もつとも、あ奴がそこまで腑抜けだったことに俺は苛立ちを隠せないがな!!」

辛辣にバッファローギルデイを冒瀆するリヴァイアギルデイであったが、本心は違うということも誰かが理解している。その証拠に、彼の股間から伸びる一本の触手が悲しみに震え、濡れていた。

普段はいがみ合うクラーケギルデイもその部下も、惨殺された猛牛の戦士を思い、目を伏せた。

と、ここで――

「た、大変です!」

会場内に一体のエレメリアンが血相を変えて駆け込んで来た。

「何事だ? ただ今会議中であることは承知の上で……」

「そ、それどころではないのです!!ダ、ダークグラスパー様が、近々この部隊の視察に来られるとの連絡が……!!」

「何だと!？」

真つ先に反応したのはリヴァイアギルデイだった。

悲しみに暮れていた顔から戦士の顔へと戻る。そして遅れて、他の面子や部下たちも反応する。

その反応は明らかに怯えと畏怖が混じっていた。

「…到着はいつになると?」

「ち、近々伺うとしか…」

「そうか」

クラーケギルデイは冷静に振る舞うが、それでも焦りの色は隠せなかった。

「ぬう…奴が来るとはな…度重なる失態について我々も見咎められたか…」

「ええ、地獄の処刑人…噂には聞いていましたが…」

リヴァイアギルデイとクラーケギルデイの顔に苦渋の表情が浮かぶ。

——ダークグラスパー。

アルティメギルに所属する者ならば誰もが噂だけでも一度は聞いたことのある人物の名だ。

部隊を持たず、アルティメギルでは異例ともいえる単独行動を認められている。首領の勅命を受け並行世界を渡る闇の戦士。

その使命は組織の反逆者の処刑。

本名は誰も知らず、いつしかその戦士を示すコードネームだけが広まっていった。

「通称、地獄の処刑人。ダークグラスパー……」

そう呟いたクラークゲイルデイだが、彼はダークグラスパーという存在をその異名のよ
うな物騒な存在ではないという風に考えていた。

アルティメギル内に処刑人などといったそんな物騒な存在があるとは思えない。

ダークグラスパーという存在は精々、慣れあいや緩みがちな部隊の気を引き締める為
の監視役な存在ではないかというのがクラークゲイルデイの認識であった。

処刑人などという物騒な肩書きも云わば我々への威嚇。

物騒な肩書きで周りが勝手に怯えてくれるのを狙ってなのだろう、きつと。

しかし、そんな処刑人様がこちらに何うという事実はあまりいい状況ではない。首領
が地球侵略に拱いている我々のことを好ましく思っていないのは確実だ。

「……俺たちにのんびりと構えていられる時間はない、か。クラークゲイルデイよ、ここは
我々でのみ出向き、直接ツインテイルズの手の内を見てみるか？」

「ほう？　貴様にしては良い案だなりヴアイアギルデイ。小手調べという訳か…異論はない」

巨乳と貧乳、どちらか上でどちらが下か。決着はつかずに遺恨だけが残る結果となったが、ダークグラスパーの来日を前に、いがみ合いを続けるのは得策ではないだろう。会議は部隊の長2人が協力して出陣する、ということで一応の解決となった。



アルティメギルは時空移動の際、移動艇を用いる。

そして今、現在進行形で移動をしている一団がいた。

「なんだこの声優…：棒読みにも程があるな」

この一室でパソコンに向かい合ってぶつぶつと呟く一人の少女。

パソコンに繋がれているヘッドホンからは淫らかな喘ぎ声とBGMが漏れている。

「だけど…：フヒヒ、や、やっぱりこのメーカーのエロゲは何回やってもいい…」

薄笑いを浮かべながら、少女はマウスをクリックする作業に戻った。

地獄の処刑人、ダークグラスパー。

しか眼中になく、総二の声は届かなかった。

「さあ愛香さん。どうぞ、これが第3のテイルブレスです！」

愛香は嬉々として自分の腕にある青色のブレスを外し、真新しい、黄色のブレスをつけた。

「変身の方法は前使っていたブレスと同じですから安心してください」

「分かったわ…いくわよ！」

「あ、ああ…」

「あたしは巨乳に変わるわよ！」

「わかったよ！」

ちよつとくどくどかったが総二はこんなにはしゃいでいる愛香の姿を見るのは久しぶりだったが、それと同時に嫌な予感が胸を走った。『可能性に殺される』…嫌な言葉が頭に浮かぶ。

「テイルオンツ!!」

力強く発したその言葉に反応して、愛香の体はを光で包まれ——なかった。

「あれ…?」

当の愛香は目をしばたたかせている。その反応を見ると、ますます嫌な予感が広がる。

「テ、テイルオン！テイルオン！」

愛香は何度も変身する時と同じように叫ぶがブレスはうんともすんとも言わない。失敗しているというより、ブレスその物が反応していないみたいだった。

「どうなっているの!!これ!!何で変身できないの!?!トウアール……このギア失敗作じゃないの!?!」

遂に愛香は痙攣を起こし、腕のブレスを振ったり壁に叩きつけたりしたが無論反応はなし。

製作者の前でよくもまああんな乱暴に……と、総二は内心漏らす。

「いえ、そんなはずはありません。変身はできるはずです！」

「じゃあ何でできないのよお……!!」

巨乳になれると希望を抱いていた愛香。

その希望が理不尽にも奪われてしまい、落ち込んだ愛香は泣きながら蹲った。

まさしく愛香は『可能性に殺された』のだ。

……ああ、とうとう、とうとう恐れていたことが起こってしまった。

愛香が落ち着きを取り戻し、この製作期間中目の前の憎き敵にやられてきた屈辱の数々を思い出した時、ここは凄惨な殺戮現場に変わる。

総二は常人の0.7倍くらい詰まっている自分の脳味噌をフル回転させ、愛香が心の

底から納得できる理由を早急に弁護する。

「なあ…トウアール。もしかして、最初に使ったブレス以外は使えないってオチじゃないよな？」

「いえ、それはありませんよ！確かに敵に奪われて悪用されないようにセーフティは組み込んであります。が、そもそもテイルギアは世界最高峰クラスのツインテール属性がなければ使えない装備なんです。本人以外使えなくするような機能はつけていませんよ」

「それ本当なんでしょうねえトウアール!?もし嘘だったら…!」

愛香の眼が蛇のように下から睨み上げてくる。

「私がこの状況で嘘を言うと思いますか!?!そんなことしたら私、愛香さんに殺されちゃいますよ!」

至極もつともである。

「あ、そうだ。総二様も使ってみますか?巨乳ブレス」

もうその呼び名で定着しているのな。

総二は少しだけ迷い、自分の右腕にある、真紅に輝くブレスをしばらく見つめる。

「俺は…いいや。こいつでいい」

総二はトウアールに自分のブレスを見せる。総二は愛香が何故変身できない理由に

思い当たった気がした。

「……いいんですか?」

「ああ。俺のブレスは、最初からこれだからさ。今更替えるなんてできないよ」

総二の脳裏には幾度となく助けにくれた、あの憧れの女性の姿がよぎった。

そして彼女の腰からセコンドみたいにアドバイスし、時にはその周りを飛び回り、冗談をかましたりするコウモリ。

そしてこれはそんな彼女の隣で初めてテイルレッドとして戦った証となるブレス。

「愛香、お前が変身できない理由がなんとなく分かる気がする」

「え?」

「お前はさ、きつと無意識の内に新しいギアじゃなくて、テイルブルーのギアじゃなきや駄目だっと思ってっているんだよ。だから、その新しいギアを使えないんじゃないか?」

このひと月、数々の戦いの中で総二と愛香はこのブレスと共に戦い、その中で総二の中には不思議な愛着を抱いていた。

いまさら手放そうだなんて考えたこともない。

「——相棒だ。こいつの代わりはないし、ただの変身道具でもない。テイルファングといつもベルトにぶら下がっているキバットの仲みたいに、そう感じる何かがあったんだ。そしてそれはきつと愛香も同じじゃないか?」

例え、憎き敵トウアールが開発したプレスでも、総二たちはそれでここまで戦って来れた。

世界を守りたい、そうトウアールの一途な思いが赤と青色のギアには備わっていると総二は伝えた。

「だからさ、そのプレスは本当に託すべき人物に使わせるべきなんじゃないかって思うんだ」

「総二様……でも愛香さんは、それを使わないと巨乳になれないんですよ……?」

すると愛香は納得したのか、涙を拭いて立ち上がった。

「ううん、もういいわトウアール。多分ね、最初っからあたしは間違えていたのよ。新しいプレスにくら替えしてしまえば、簡単に巨乳になれるとか……そう思うのがそもそも浅はかだったのよね」

総二の言う通りだ、そう言わんばかりに愛香は晴れやかな顔をしていた。

「気軽に着せ替えできるような、そんな軽いもんじゃないのよね、ティルギアって。あんたが言う通り、コイツは意志を乗せて動くデバイス……心に嘘をつけて動かせるものじゃないのよ、きつと」

黄色のプレスを外し、テーブルに置く。けど、愛香には未練はなさそうだった。そん

な愛香にトウアールは意を決したように告白する。

「愛香さん…私、あなたに復讐するつもりだったんです。本当は身体変化の属性力とのハイブリット機能を備えたギアなんて、机上の理論でした。意気揚々と使って全然胸が大きくならない愛香さんを指さして笑おうと思ってました…!」

「それはあたしも同じよトウアール。目的のものさえいただいてしまえば、散々こき使っていた仕返しに致死ギリギリまで延々血祭りにあげようって思っていたんだから…」

「愛香さん…」

「トウアール…」

総二は悟った。

——人生って何が起こるかわからないな。

——ほんの少し道筋がズレていたら、驚くほど残酷なトゥルー・エンディングがあったことに。

総二が何も言えなくなってしまうその時、けたたましいアラートが鳴り響いた。そして、このタイミングで出現してくれたアルティメギルに感謝したくなった。

「敵か!？」

すぐさまトウアールはモニターを確認し、スイッチを切り替え顔が険しくなる。

「ええ! 都心にエレメリアン2体出現です! しかも…もの凄い力の属性力です!!」

「なに!？」

「ええ、総二様が戦ったドラグギルデイと同格か…あるいはそれ以上の反応を示しています!」

それはあの死闘を思い出せば絶望的な報告のはずだった。…けれど、何故か今の総二は負ける気がしなかった。

「そうか! なら尚更、ほっとくわけにはいかない!」

「ええ、そうね総二!」

「「テイルオン!!」」

総二と愛香はトウアールに見守られながら、基地の通路を走る。

——そうさ、これが俺たちなんだ。

新たなテイルブレスは残念ながら戦力にはならず、愛香の胸は大きくしてくれなかったけど、俺たちの決意は大きくしてくれた。今日確かめあったその思いは、間違いなくかけがえのない、得る価値があったものだ。

身体の奥底からほとばしるような思いを感じながら、光のゲートに飛び込み、現場へ

と駆けつけ…。

「この摩天楼を颯爽と闊歩する、ツイントールで巨乳の女子はおらぬか！」
「違う！ 我らはツイントールで貧乳の女子を求めなければならぬのだ！」

…盛大にずっこけた。



「今日の体脂肪率は？」

「えっと…——26%」

「ふはははははっ！このGゴールドエンウィークW、ご飯、パン、麺類を全て糸コンニャクに代用した甲斐があつたものよな」

「つて言うかテナお姉ちゃん、あんま太つてないと思うんだけど」

目標の体脂肪率になってすつかりご満悦なテナー様。

♪♪!! ♪♪♪♪!! ♪♪!!

『来たよ！エレメリアんだ』

「よおし、キバット！」

「おつしやあ！キバっていくぜ！」

絶好調に駆け出すテナー。

「ガブツ」

「テイル・アツプ!!」

キヤツスルドランから射出され、着地したテイルファンク。

そのすぐ隣でテイルレッドとテイルブルーはヘッドスライディングするかのよう
にずっこけていた。

「ん？どうした？着地失敗したか？」

テイルファンクはずっこけた二人を心配そうに見やる。

「…何よ、なんなのよ。何で最近のあいづら、乳ばっかりこだわっているの!？」

道路にめり込んだ顔を上げながら、テイルブルーはテイルファンクに向かってそう叫
んだ。

「はあく……あのような奴等の戯言にいちいち動揺するとは……まだまだよな。いい加

滅慣れろ」

「慣れてたまるかあ！あたしは乳を力に変えて戦う全ての存在が許せないのよおおおとおおお!!」

「別に乳がデカいのはその本人の意思では……——」

『テナー、もうやめよう。これ以上はブルーさんの火に油を注ぐようなもんだから』
「フツ、たしかに」

テイルブルーは余裕綽々なテイルファングの胸をキツ！ と睨むと不機嫌そうに倒れているテイルレッドを起こして敵の前に立った。

「ふっ……ついに現れたな、ツインテイルズ!!」

そして2体のエレメリアンはツインテイルズの登場に気付いたのか、正面から向かい合った。海竜型の怪人に海洋型の怪人。

『テナー、アイツらすごく強い音響だ。デュラハンギルデイと同じかそれ以上かもしれない』

「そうか、だが関係ない。いつも通り速攻で倒しにくぞ」

「（あれはリヴァイアギルデイとクラーケギルデイ。ドラグギルデイにデュラハンギルデイが相次いで倒されたとなつちやあ当然だが、犬猿の仲の二人が同時出動なんて…）」

戦いの舞台は都心ビル群の大型プラザホール前。

大勢の人がまだ周りにいる。大規模な攻撃は避けたいところだ。

「……これが噂に聞くテイルレッド、テイルファング。実物のテイルファングはあの蠟人形とは比べ物にならないツインテールに巨乳、そしてテイルレッドもなんとという素晴らしいツインテールを持っているのだ……!!惜しい、実に惜しい!後数年遅ければ、2人のたわわに実った果実が揺れる光景が見れたもの……!」

海竜型の怪人はテイルレッドとテイルファングを見ながら全身のヒレを震わせ、べた褒めする。

すると横にいたイカのエレメリアンが怒号を上げた。

「妄言はそこまでにしろ!テイルレッドの美しさは既に完成されている!髪造形に手を加えよう等、それは破壊をいもたらす傲慢!それに残りの一人のツインテイ、ル、ズ……も……」

何故かイカの怪物のようなエレメリアンは急に口を閉ざしてしまった。その視線はツインテイルズ最後の刺客、テイルブルーへと向けられている。

ブルーはこめかみに青筋を浮かべながらも、そういうことねといったリアクションを取っている。

「はいはい分かっているわよ、分かっているのよ。テイルレッドテイルレッド、テイルファンングテイルファンングね。あたしだって分かるんだからね。あたしは——」

だが次の瞬間、そのエレメリアンは音もなく自暴自棄なテイルブルーの眼前へと接近してきた。

「ブルーっ!!!」

「!?!」

テイルブルーが見せたほんの一瞬の隙について接近、いきなりテイルブルーの目の前で跪き、まるで王に忠誠を誓う騎士のような態度で片膝をついて礼をした。

「…なんと、なんと……美しい……」

「は?」

テイルレッド、テイルファンングが呆れた声を出す、イカの怪人は続ける。

「美しい……なんと美しいのだ!麗しき貴方と敵として出会ってしまうとは……何という悲劇か!ああ神よ、何故こうもあなたは運命を弄ぶのですか!?!」

だ。よし、貴様の戒名を教えろ。丁重に葬り、墓標に刻んでくれる」

「黙れ！貴様のような脂身など、彼女の美しさの前では大いに霞む。私は彼女の——テイルブルーの美しさに魅せられてしまった。テイルブルー、どうか私の愛を受け取ってくれませんか？」

「ええええ!!」

流石のテイルブルーも困惑していた。テイルフアングを押しつけての急な告白に、ささか戸惑う様子であった。

だが、それも仕方ないだろう。何しろテイルブルーに対するエレメリアンの反応は大体2つのパターンに限られるからだ。『怯えられるか』『馬鹿にされるか』のどちらかしかない。そしてそのどちらかの反応を見せた奴は惨たらしく惨殺されるか、殺される一歩手前まで追い込まれる。

だがこのひと月で判明しかけていた法則が今、目の前で崩れたのだ。目の前のエレメリアンはテイルフアングを蔑み、テイルブルーを敬い、剣を差し出した。これぞまさに忠誠を誓うポーズ、騎士が守るべき主に向けるポーズではないか。

「さあ、愛しの姫プリンセス！わが想いを受け取ってください！」

「ちよ、ちよつと待って！いきなり、そんなの、困る…私たち、敵同士だし……」

テイルブルーは普段俺に見せるような不機嫌で恐ろしいな顔をどこかに吹き飛ばし

てしまったかのように狼狽しきっている。テイルレッドにはトウアールからの通信が大音量でながれてくる。

「見ましたか総二様、これが女です！女の本性です！口でどんなに綺麗事を抜かそうが、他の男にちよつと甘い言葉をかけられればそつちにくろつといく！愛香さんこそまさしくビッチなんです、さあ、元氣よく幻滅しましょう!!」

公然の場での告白に最初は戸惑っていたが、テイルブルーも花も恥らう乙女に違いない。好きだの美しいだの言われて嬉しくないわけがない。その恥ずかしさで顔が茹でダコのように真っ赤になってしまっている。だがこの反応を見て、クラーケギルデイは照れているのだと誤解したのか、駄目だしの一打をかました。

「私は心奪われたのです……！最高の貧スモールバスト乳を持つ、麗しき姫プリンセス、あなたに!!!」

「は?」

テイルブルーは完全に虚を突かれた反応をし、茹でダコのように真っ赤だった顔がスツと元に戻った。

「ツインテールは貧乳こそ相応しい……生涯をかけた私の想いが今成就したのです！最大のツインテール属性を持つ貴方が、よもやこれほどまで美しく光り輝く貧乳をも備えて

いらっしやるとは！歓喜にて身体が震えておりまする！！」

遠巻きに大勢のギャラリーに見守られている中この公開処刑はあんまりだとテイルレットは思った。

そしてちらつとテイルフアングの方を見る。

「ううっ……ううう……あううううっ……」

口元に手をやり、泣いていた。

サブトラック／秘密暴露

リヴァイアギルデイ、クラークケギルデイの襲来により、出勤したツインテイルズしかし戦闘開始の前にクラークケギルデイが膝を付き、テイルブルーを口説き始めた。

はじめはテイルブルーも満更ではない様子だったが、この一言を皮切りに虚を疲れた。

「最高の貧乳を持つ、麗しのプリンセスよ!!」

遠巻きに大勢のギャラリーに見守られる中、この公開処刑はいたたまれない。

そんな中テイルファングは大粒の涙を流していた。

「うぐつ、ひつぐ…」

「テイルファング、どうして泣いているんだ?」

テイルレッドが恐る恐る尋ねる。

「私はこの様にして、第三者の視点から見ることであろうやく気づかされた。私は本当に酷い事をしていたのだなと」

どうやらテイルファングはテイルブルーと喧嘩をするたびに胸の大きさを時折指摘してきたが、このクラークケギルデイのやり取りに今までの自分を重ね合わせ、さっきの

怒りもどこへやら、慚愧の念に堪えないでいた。

『だけど、流石にコレはマズくない？ テイルブルーの火に油を注ぐような発言ばかりしているよ』

響輔の言うとおり「美しく光り輝く貧乳」とか「ツインテールにはあなたのような完全なる貧乳が似合う」とか完全にテイルブルーに喧嘩を売っているとしたか思えない口説き文句をベラベラと垂れ流しているクラークゲイルデイ。

「だな。被害が奴らだけならともかく、オレらやテイルレッドちゃん、特にパンピーに被害が出たシャレにならん」

「仕方ない……」

涙を拭き、気持ちを整理するとまだ口説き文句をクラークゲイルデイに向けて
シャドウ・クラフト ブラックマンバ
 影創造・黒毒蛇を放つ。

いち早く察知したクラークゲイルデイはさっと跳び退き、躲す。

「フン、無粋だな！ テイルファンクよ。我が騎士としての義を邪魔立てするとは！」

「無粋なのは貴様の方だ。敵を目の前におきながら饒舌に振る舞い、ナンパとはな。

お前、田舎はどこだ？」

「？——何故そんなことを聞く？」

「私の経験談だが、貧乳にはろくな女がない。そんなこともわからんとはよほど最果ての地より参った田舎者の辺境貴族なのだろうな。とつとと田舎へ帰れ」

「馬鹿め！貴様ごとき講釈される謂れはない。貧乳こそがツインテールとベストマッチし、すべての属性に通ずる万能であり至高の属性なのだ！」

「何が万能であり至高の属性だ、くだらん！それに私は貧乳だ、巨乳だと、そんなものに私は全つ然まったく興味がない。戦いの最中、戦闘に関係性のみられない胸の大きさに気を取られるとは貴様の底が知れるな——テイルブルー、奴のたわ言に耳を傾ける必要などない！」

「はん！やはり胸の太った女には理解できんか！貧乳の良さというものが」

「興味がないだけだ。特にテイルブルーに色目を使っているが、この女だけはやめておけ！」

「何だ！嫉妬か？バツファローギルデイの時のように貴様になびかぬことに嫉妬しているのか？」

「たわけ！貧乳以前の問題だと言っているのだ！」

クラーケギルデイと口喧嘩を始めるテイルファング。

テイルファングは暗に後ろにいるテイルブルーを擁護しているつもりだったが、逆に

火に爆薬を注いでいるのに気付かないでいた。

「こんなものよね、エレメリアンなんて…あー、もうなんかどうでもいいわ、思いつきり暴れたい気分。正体不明のテイルファンクも——事故つてことで片付くかしら？」

『テナー！何か後ろから禍々しい怒りの音楽が聴こえてくるんだけど!!』

早く避難してと言わんばかりに響輔がテイルファンクに警告する。

どさくさに紛れてテイルファンクも抹殺対象に入れて勘定している。

テイルレッドも誰かと通信しながら、完全におびえきっている。

「ツインテイルズブーツ!!がんばってくださいましー!!」

さらにギャラリーからツインテイルズを応援する声が聞こえてきた。

『会長っ!!』

「ありやま?えりなちゃん?」

向こうを見るとギャラリーに混じって神堂会長がいた。

「まずいわ、会長の存在に気づかれたらこの騎士バカに狙われちゃう会長はあたしよりも胸が小さいわ……あたしよりも……」

「何を言つとるのだコイツは？」

『あれ？テイルブルーって会長の知り合いなの？』

テイルブルーの発言に呆れているテイルファング、その内面響輔は会長とも知っている仲かと思つたが。

『ああ、応援によく来る少女だからか』

と、勝手に解釈した。

「むう！あちらにもなかなかのツイントール属性だが、巨乳ではないか……」

リヴァイアギルデイはぼそりつと残念そうに呟いたのに対し、クラーケギルデイは――

「確かによきツイントール属性だが、貧乳属性を芽吹かせる可能性は万に一つもない」
スモールバスト

「なんだ貴様！お嬢様に向かって何を!？」

クラーケギルデイの発言に対して反応したのは傍に控えていた尊の批難に気にもせず、クラーケギルデイは迷いなく言い放つ。

「幼き少女は胸が小さくて当たり前前なのだときめくどうりはない」

「(男らしいなコイツ)」

『(男らしいなコイツ)』

クラーケギルデイの信念にテイルファング、響輔は感心した。

「なるほど、あたしは当たり前じゃないってことね……ハハハハ……ハハハハハ!!」

さっきのテイルファンングみたいな狂気じみた乾いた笑いを漏らすテイルブルー。

羅刹もかくやという形相で飛びかかろうという矢先、クラーケギルデイに変化が起きた。

「さあ、ご覧あれプリンセスよ……これで私が本気だとわかっていただけたはず!!」

クラーケギルデイは両の手を八の字に広げて、身にまとっていた甲冑がはじけた。

いや、それは鎧ではなかった。折りたたまれて、鎧のように奴の身体に収納されていた数えきれないほどの触手。

その無数の触手は摩天楼に彩られた空を完全に覆い尽くした。

「あれがあいつの戦闘形態なのか!?!」

テイルレットも驚愕の声を上げた。

『なんか……カツコイイ』

「はくん、赤銅のキバみたいなきみツクだな」

「そういえばビショツプも胸は控えめな方だったな、あのスルメのお眼鏡に叶うかな?」

響輔、キバツト、テイルファンングは呑気に思いふけていたが、すぐに臨戦体制にはいる。

「しっかし、あの無数の触手の間を掻い潜るにはいささか困難だろうな」
「ああ、だが丁度試したいフォームがあった」

「おッ！今日はなんだなんだ？」

「アルテチエインでいく！」

「了解だぜ！」

テイルファンングはスロットホルダーにある白いフェッスルを手を取った。

だが、キバットに吹かせるその直前。

「い、いやあああああああああああああああああ!?!」

「何だ?」

「ブルー?」

突如、テイルブルーの絹を裂くような叫び声が上がった。

テイルファンングは振り向き、テイルレッドも訳が分からずに近寄る。

「どうした、ブルー!?!」

「何が起きた?」

「触手…触手ううううう!?!」

「ひ、姫!?!」

「いやあ——!!触手やだ——!!やだやだやだ——つ!!」

悪鬼羅刹と恐れられているテイルブルーがこんなにも怯えるのを見たことがなかった。

多分、今なら赤子の手を捻るが如く簡単に倒せるはずだ。

「おいスルメ！その触手、貴様一体何をした!?!」

「これは我が求婚の儀！テイルブルーへの溢れん限りの愛を表した、愛の証明なのだ」

「オイイイイツ、戦う為じゃないんかい!!」

キバットの渾身のツツコミ。

「いやああああああ触手に告白されたああああああああああああ!!」

クラークケギルデイが広げた無数の触手が1本1本うねうねと動く光景に、テイルブルーはとうとう泡を吹き、白目をむいて気絶してしまった。

「…ちっ!!」

そして殆ど傍観していたリヴァイアギルデイはわざとらしい素振りや舌打ちをした後、踵を返す。

「…興奮ぎめだ！これでは勝負どころではないではないか!」

リヴァイアギルデイは一飛びでクラークケギルデイに近づき、肩を掴んで退却を促す。

「テイルレッド、そしてテイルフアング、今日の所は勝負を預けよう！次の戦いまで不甲

「あ、危なかった……！」

人気の少ない路地裏に駆け込み、ブラインド代わりに展開していたオーラピラーを解除する。

案の定、オーラピラーの中には変身が解除され、元の姿に戻って気絶している愛香の姿があつた。

ゼーゼーとテイルレッドは息をしながら壁に寄りかかり、乱れたツインテールを整える。もちろん愛香のもの。

『次からは気絶しても変身が解けないように、ブレスを改良しますね』

トウアールの申し訳なきような声が通信で聞こえてくる。

「そうしてくれた方がありがたいよ、トウアール。流石に今回は肝が冷えた」

テイルレッドはそんな軽い口調を叩きながら元の姿、観束総二へと戻ろうとする。

（やつぱりテイルファンングは凄いな。あんなメチャクチャな空気の中でもシリアスに敵と戦えているんだから……俺も見習ってツインテールを鍛えて……！）

『総二様、変身を解除しては駄目です!!』

「え」

だがトゥアールの警告もむなしく、ティルレッドは観束総二の姿へと戻ってしまつた。

瞬間、総二の眉間に電流が走る感覚がした。

…それは鮮烈までのツインテールの感覚。

あの美しき金髪の、舞踏会に現れた姫のようなツインテールの感覚。

そして背後から自分の身体に影が入り込んだ瞬間、総二は息を呑んだ。

「…観束…君？」

後ろを振り返り、路地裏の入り口を見るとそこには…。

「生徒…会長…？」

そこには肩で息をしながら、呆然と総二と愛香を見つめている、神堂慧理那の姿があつた…。

ストレツタ／来訪者

「全く、今日も調子の狂う敵だったな……」

「お疲れ様」

キヤツスルドランの廊下。

テイルフアングは変身を解除し、テナーへと戻るとぶつくさ文句をボヤいていた。隣りでは実体化した響輔がテナーの心労をねぎらう。

「特にあのスルメは許せん。私に向かって胸デブというあの暴言、最早ヤツには死あるのみだ」

「テナーはスタイルいいと思うよ」

「だろう?」

冷静になつて思い出し、再び怒るテナーを響輔はなだめる。

「帰つたぞ。ヴェデイ、そんな所で何をしている」

居間へのドアの前に立ち、きき耳を立てているヴェデイがいた。

「テナー、アンタにお客さんよ」

「誰だ？」

『『幼馴染』って言えばわかる？』

「ッ!!」

「テナーの幼馴染？」

響輔はテナーの幼馴染だと聞いて不思議そうにしているのに対し、テナーの顔が一気に強張った。

エレメリアンと対峙する時でさえ冷静なテナーからは想像がつかないくらいに。

「——っ!? (何だ!? この音楽は……)」

そして響輔はすぐに察知した。

禍々しさはないものの、部屋の中からさっきのエレメリアン以上に強い音楽を感じる。

「テナッ……!!」

「しっ!分かつている。響輔、お前は私の内に隠れている」

心配する響輔を自分の内へ避難させ、ゆっくりとドアを開いた。

そこには——

「あーそこそこ。リキ君って言ったかい？君、マツサージ上手ではないか」

「んっ、あり…が…とう」

「はい、お茶です」

「おう！ラモン君と言ったかい？気が利くではないか。ありがとう」

そこには二人の見知らぬ少女がいた。

ひとり——服装は袖口の広い黒コートに同色のフード付きケープ、インナーは藤色。髪は真ん中分けの董色、短めのショートボブを側頭部でツインテールにした少女は力に肩もみされ、ラモンから出された茶を飲んでいた。

そしてもうひとり——教会のシスターみたいな黒い修道服に白いケープ。髪の色は灰色、右目を前髪で隠し、後頭部に存在する薔薇のデザインをあしらったヘッドドレスの様な大きい赤銅の髪留め、左右の穴から二つの髪房を流した様なツインテール、丸いレンズのメガネがいかにも知的な雰囲気醸し出し、少女は高そうなワインボトルを何本か空けて、グラスを仰いでいた。

次狼とマルシルはその二人と距離を置いて控えていた。

「はあ、いい、テナー。久しぶりね。来ちゃた」

「おおっ！テナちゃん！おかえりーっ会いたかったよーっ!!」

「ぐえっ、やめろ鬱陶しい!」

入室してきたテナーに灰色ツインテールの少女は不敵に笑いながら挨拶をし、力に肩揉みされている菫色ツインテールの少女は立ち上がって、テナーに抱きついてきた。

抱きつかれたテナーはうんざりしたような、諦めたような表情を隠すことなく、その少女を引き剥がそうとする。

「ひと月ぶりね、テナー。お元気そうで何より。ヘリオスの視察の方は順調そうかしら？」

「はっはっはっ！すまない、テナちゃん。勝手に上がり込んでんじやって」

「でも、いいわよね。このキャツスルドランはアタシ達、チエックメイトファイブの共有財産なのだから」

ソファーにどっさり座り込んだ灰色ツインテールの少女はグラスに入ったワインを揺らしながら、流し目で挨拶をし、菫色ツインテールの少女は気さくにテナーに語り掛ける。

いきなりの来訪に戸惑いはしたものの、テナーは心を落ち着かせ、

「これはまた急な来訪だなデュレット、メゾンヌ——来るなら来ると連絡の一つでも寄越してくればそれなりにもてなしたものを」

『あれがテナーの幼馴染なのか?』

ワインを仰つていた灰色ツインテールの少女——デュレット、肩もみをしてもらつていた董色ツインテールの少女——メゾンヌに対して言い放つ。

響輔はテナーに訊いてみたが、テナーは答えずに唇を指で撫でる。

「今は会話できない」という合図だ。

「それじゃあ、アタシ達が来た意味がないのだね。何事もいつもどおり、クイーンとして任務を全うしているかを見ておかなくっちゃ」

「わざわざご苦労な事だな。それで、私の秘蔵のワインを勝手に空けて待つていたのか?」

「んもう、堅いこと言わないの。百ある内の一つや二つでガタガタと……」

テナーの事など意に介さず、空になったグラスに再びワインを注いで香りを楽しみながらグラスを仰ぐ。

「んん、本当に美味しい。蔵の中で寝かせておくには実に勿体ない」

中でもより極上のワインを目ざとく引つ張り出して来たことに、顔をしかめずにはいられない。

「それで……本当の目的は何だ。只の監察ではないのだろうか。セレーネからヘリオスまでわざわざ足を運んで来て……」

「まさか、アタシ達もそんなに暇じゃないのだね」

「では何の為に——」

デュレットはパスツと新聞や雑誌をテーブルに放った。

その雑誌にはテイルレッドやテイルブルーがデカデカと載っている。

「報告書に記載されていたヘリオスの協力者がどんな人物か気になってね。ひと眼見ておこうと思って来たわけなのだよ」

本当に腹の底が読めない女だとテナーはつくづく思う。

協力者云々は口実だ。一体この女は何が狙いだ？と思考を巡らせる。報告書には響輔の事を書いたつもりだったが、それをツインテイルズのことだと勘違いしているらしい。

それならそれでありがたい。

もし、自分の中に響アントローポス輔を生かしていること、そして響輔が音也の息子だということがわかった瞬間、この女は鬼の首でも獲ったかのようにテナーを責め立て、追求してく事は容易に想像できるからだ。

「にしても、なかなか可愛い仲間がいるではないか。特にこのテイルレッドちゃん！今

度私にも紹介してくれないか？」

「メゾンヌ、テナーは遊びで戦っているんじゃないのよ」

「……」

目をキラキラとさせてテイルレッドを指差すメゾンヌをデュレットがたしなめる。

「まさかまさかのひよつとして。そいつらにアタシ達ファンガイアや鎧について話してないでしょうね」

「それは絶対あり得ん。出来る限りの接触は控えている」

そこはキツパリと否定しておく、キバの鎧はファンガイアの間でも存在自体が秘密事項である。

とりあえず、響輔の事には気付かれてはいない。

「じゃあ彼女らとは利害一致の共闘関係にあるというの？」

「そうだ。ツインテイルズは大きな戦力となる」

「ふくん」

デュレットはマジマジとテナーと瞬きはおろか、視線のひとつすら逸らさず交わし合っている、両者は一步も引かない。

「まあまあデュレット、テナちゃんにもさあ。色々考えがあるのでないだろうか？」

そんな緊迫な空気の中、メゾンヌが間に割り入って話を中断させた。

納得した様に言葉を返すと二人はそのまま扉を開けて出て行った。

二人のコートの背中——デュレットには薔薇とチエスの駒のビショップの紋章が、メゾンヌには薔薇とチエスの駒のナイト（ユニコーン）の紋章がテナーの視界を通して響輔の視界に入ってきた。

『あの紋章って……まさか……』

「ああ、あの二人はチエツクメイトファイブ、ビショップ・赤銅のキバの所有者——デュレット・オルゲン、ナイト・白銀キバの所有者——メゾンヌ・リチュカール。幼年時代、音也の下で同じ釜の飯を食った仲だ」